

全国の共産主義者は、マルクス・レーニン主義の旗の下に団結せよ

マルクス主義

共産主義者同盟全国委員会(ボルシェビキ)政治理論機関誌

資本主義批判と唯物史観について

組織論確立の為に(II)

第一部 マルクス・レーニン主義と組織思想

第二部 党組織と全国政治新聞

新たな革命的學生運動の創出へ向け共学同を建設せよ

プロレタリア独裁と女性解放(序説)下

沖縄解放の前進へ向けて

インシナ革命の勝利万歳

2

75年9月20日

(通巻17号)

マルクス主義

1975年9月20日
第2号

「……党内闘争こそが、党に力と生命をあたえる。党が、あいまいであり、はっきり区別のある相違点をぼかすということは、その党の弱さの最大の証明である。党は、自身を純化することによってつよまる。……」

(一八五二年六月二十四日付ラッサ
ールからマルクスへの手紙の「節」)

《戦旗社取扱い書》

マルクス主義

共産主義者同盟全国委員会(ボルシェビキ)
政治理論機関誌
創刊号 1000円

プロレタリアの旗

共産主義者同盟全国委員会(ボルシェビキ)
政治機関紙 一部 100円
月二回(10日・25日)発行

労働者通信

全国労働者政治委員会(準)機関紙

共学同通信

共産主義学生同盟(準)機関紙

沖縄通信

沖縄通信編集委員会

共産主義 14・15号

狭山差別裁判糾弾闘争勝利に向けて

共産主義者同盟全国委員会

地下水道

関西救援会機関紙

目次

沖繩解放の前進へむけて

第一部 激動の七日間——燃ゆる沖繩

沖繩七月の熱い島と化す……………

本田篤紀……………

1頁
5頁

第二部 資料編……………

一、同盟の沖繩闘争の総括……………

加納英二……………

21頁

二、沖繩終焉論を粉碎し、沖繩闘争の革命的発展をかちとれ……………

田中央書記局……………

21頁

三、海洋博粉碎へ前進せよ……………

田中央書記局……………

37頁

四、『中央書記局通達』(七四年No.7)の補……………

加納英二……………

43頁

12・18路線の経済主義を克服する為に

資本主義批判と唯物史観について……………

本田篤紀……………

53頁

組織論確立の為に(Ⅱ)

マルクス・レーニン主義と党組織理論……………

—— 共産同の歴史的弱点を克服し鉄のボルシエビキ党を建設せよ……………

本田篤紀・編……………

73頁

第一部 マルクス・レーニン主義と組織思想……………

第一章 党建設は壮大な事業である……………

マルクス主義編集委……………

77頁

第二章 経済主義に全面戦争を布告せよ……………

本田篤紀……………

95頁

第三章 関西ブントの歴史的日和見主義を根絶せよ……………

本田篤紀……………

117頁

第二部 党組織論と全国政治新聞……………

第四章 全国政治新聞をめぐる同盟組織活動の総括……………

本田篤紀……………

129頁

第五章 全面的政治暴露と全国政治新聞……………

仲村武史……………

171頁

第六章 北原イズム批判と組織テーゼ……………

187頁

新たな革命的學生運動の創出へ向け
共産主義學生同盟を建設せよ……………

中央學生組織委……………

195頁

プロレタリア独裁と女性解放(序説)

—— 党の綱領的基礎と女性解放——(下)……………

生田民生……………

205頁

第一章 永井自己批判にあらわれた俗流唯物論……………

第二章 永井の女性解放理論にみるマルクス・レーニン主義の日和見主義的偽造……………

第三章 「国家—暴力論」による革命的プロレタリア独裁の否定と女権論への転落……………

第四章 階級の廃絶による経済的・社会的平等とプロレタリアートの革命的独裁……………

資料編……………

251頁

インドシナ革命の勝利万歳……………

ベトナム「停戦協定」とわれわれの任務……………

285頁

「停戦協定」と三ヶ月後のインドシナ……………

295頁

沖繩解放の前進へむけて

第一部

激動の七日間

燃ゆる沖繩

沖繩七月の熱い島と化す

今や沖繩解放とプロレタリアートの未来は、我が同盟と共にある。我々こそが、三百年余の沖繩人民の怒りを、プロレタリアートの解放に組織できる確信を握りしめている。日帝の先遣隊、皇太子の上陸糾弾に決起した沖繩青年の献身性こそ、革命党の思想に体现されねばならない事を、はっきりと我が任務の中軸に据えよう！

日帝は、皇太子上陸に続き、三木を筆頭とするブルジョア官僚共の海洋博開催式への列席をもって沖繩人民へ宣戦布告を行い、十月韓国デーへの朴来沖、再度の皇太子上陸の野望を貫徹せんとしている。我々は、総力あげ、海洋博粉砕の連続闘争を組織し、我が同盟が築きあげた沖繩解放—プロレタリア独裁の立場を一層強固に打ち固めねばならない。それは、海洋博粉砕闘争が、沖繩—「本土」を貫くプロレタリア階級の試金石となり、今や、「返還—奪還」派の急進民主主義の立場の反動性が明白になり、一切、沖繩解放を勝利に導くものでないという実証を、プロレタリアートの闘いの前進が示しているが故に、我々が、その先頭に立ちきり、沖繩解放—プロレタリア独裁への水路をこじあげねばならないという確信である。復帰協が博物館行きの運命を辿り、新たな沖繩—プロレタリアートの革命的登場が歴史のページを開こうとしている今、何よりも、首尾一貫したマルクス—レーニン主義に基づく革命党の建設を、沖繩—「本土」プロの共同の事業として遂行する事が問われているのである。

大胆に、更に大胆に、革命の大道を切り拓け！排外主義、社会排外主義の反動攻撃を打ち碎り、熱い沖繩解放の息吹きを、全戦線に叩きこめ！

闘いの火ブタは、一六日夕刻、楚辺交番に炸裂した火炎ビンの炎によって切つて落とされた。皇太子上陸阻止・海洋博粉砕の固い決意に燃えた我が部隊は、権力の蔽戒体制を突破し、皇太子宿泊所ハーパービューホテル直下、那覇刑務所の面前という権力の蔽戒網の只中に怒りの炎を炸裂させたのだ。権力の詰所が赤い炎をあげて焼けおちるのを見届け、我が戦士達はうろたえる権力を尻目に全員悠々無事帰還した。

この闘いは、同時に貫徹されたボルシェボキの同志を司会とする三百名の前段決起集会とともに、五日間の激闘の火ブタを切つて落としたのである。この七・一六の烽火は、更に翌日、沖繩強行上陸した皇太子に対する決死的な糾弾の炎となって燃えあがった。

沖解同(準)を中軸とする沖繩青年と革命的「本土」青年は、皇太子の行列が通過する糸満の白銀病院三階から、そして空涙を流してひめゆりの塔に参拝し、沖繩戦の「聖戦」化と戦没者の「英霊」化をなさんとしたアキヒト・ミチコの面前で火炎ビンを炸裂させ、沖繩戦三〇年の怒りをこめた糾弾を叩きつけたのである。この日のために、壕内で遺骨と共に十日間以上を過ごした戦士達は、皇太子の到着と同時に地下十メートルの壕から躍り出、爆竹を炸裂させ、火炎ビンを皇太子の面前一メートルで炸裂させ、炎を浴びせた。顔面瘡白となって腰を抜かすアキヒト、なすすべもなく立ちすくむ権力、殲滅されて崖からころげ落ちる皇宮警察官、後藤国雄。遂に、史上初めて、皇太子に対する直接の糾弾が叩きつけられたのだ。

この報せは、直ちにその日早朝から糸満から那覇への十キロのデモを三百名の部隊で貫徹し、待期している現地共闘本隊に伝えられた。一瞬歓声にわく部隊。彼らに続き、更に今後の闘いへの決意を打ち固め、進撃すべしとの意気ごみは、全部隊をおおいつくす。その熱気も醒めぬまま、我々は夕刻と儀へと進撃を続ける。一切の部分が逃亡と裏切りを決めこみ、なだれを打つて転落して行く中で、我が現地共闘は唯一ダラ幹と対決しつつ決起した電通労働者との革命的合流をかちとった。

県労協、原水協の裏切りの中で独自集会をかちとった電通の戦闘的労働者達は、「集会を打ち切る。デモはさせない」なるダラ幹の恫喝に実力で反撃しつつ、断乎として全軍労働者の有志と共に二五〇名のデモを唯一かちとったのだ。そして、この電通労働者との合流をかちとった歴史的な闘いこそ、支部決定で「海洋博粉砕」を決

議し、沖繩派遣をかちとった「本土」電通労働者を先頭に切り拓かれ、沖繩解放闘争の進むべき方向をはっきりとさし示したのである。

そして、この一六〜一七日の闘いの成果を更に打ち固めるべく、我が三百名の部隊は一六日名護、十九日備瀬へと進撃し、半年以上に亘る現闘団の闘いによって結合してきた北部住民の歓呼を受けつつ、海洋博と皇太子の開会式臨席を糾弾し抜いた。更に二〇日、一般公開の開始に際しても、会場を包囲糾弾する闘いを「県」警、渡久地警察の弾圧をはねのけて闘い抜いたのである。同時に買春観光糾弾の闘いに沖繩女性解放会議と共に決起したのだ。

我が同盟を先頭とし、沖解同を中軸とする海洋博粉砕現地共闘の切り拓いた巨大な地平は、沖繩解放「プロレタリア解放の未来を、はつきりと全人民の前に指し示した。

我が同盟は、六・一六摩文仁ヶ丘糾弾闘争を受け、「日の丸慰霊祭粉砕！」「皇太子上陸阻止！」を掲げた六・二二「沖繩戦を考える討論集会」、六・二三、糸満サンティンモウから摩文仁ヶ丘までの大デモンストレーションを貫徹し七月戦闘の突破口を切り拓いてきた。その闘争は、いまや、沖繩解放の主体が沖繩人民であり、それを牽引するプロレタリアートの最先頭に、マルクス・レーニン主義で固められた革命党が立ちきり、国際階級闘争の最前線に日本階級闘争を押しあげる我々の任務をかってなく鮮明に示した。海洋博粉砕・沖繩解放の闘いは、日本民族主義を支柱とするブルジョア権力を暴き、それに代わるプロレタリア権力の萌芽を突き出し、我々は、それを圧倒的に系統的、持続的な煽動・宣伝により七月戦闘の水路を導いてきた。

七・一六楚辺交番に放たれた火炎ビンの炸裂は、この様な首尾一貫した全人民の怒りの組織化を方向づけた上で、一年有余の海洋博粉砕闘争の爆発力を示し、今夏、今秋闘争の水路を切り拓いた。そして、あの死をも恐れぬ沖繩青年と、革命的「本土」青年の手でなす遂げられた七・一七白銀病院、ひめゆりの塔における皇太子実力糾弾にひきつがれた。

この闘いを受けた、電通労働者を先頭とする沖繩の革命的労働者が、社会排外主義の制動を打ち破つて、我が同盟を先頭とする海洋博粉砕天皇・皇太子・沖繩上陸阻止沖繩「本土」現地共闘と固く結合する礎を築いた事、これが、復帰協や、社民の枠内で呻吟する県労協、原水協指導部の日和見主義を反動に転落させ、唯一、我々と結合する労働者のみが、沖繩解放の牽引者である事を示したのである。

日共は、「トロツキストの方針を押しつけるな」と弱々しく叫び、亀甲、蜂原右派の「本土」総評ダラ幹の意を受けた闘争庄殺、更に原水協仲吉の「テロより大衆運動を」等々の言いわけは、七・一七を前に逃亡を決めたんだ反省もなく、沖縄青年の革命的行動を「テロ」として葬り去らんとしている。もはや、ダラ幹の裏切りを「つきあげ」たり、「方針」を出させる時代は終った。沖縄人民の未来をこれ以上彼らに託してはならない。革命的青年労働者と沖縄人民は、自らの手で、自らの未来を切り拓いてゆく力と展望がある事を、そして沖縄解放の未来はその双肩にかかっている事を七・一七闘争は示している。米軍実弾演習阻止が築いた闘いの地平をはるかに越えた位置に我々は立っている。今こそ日共、社民を打倒し、沖縄「本土」を貫く単一のプロ独へ向け、沖縄解放の闘いを飛躍せしめよ。

一切の闘いが、革命と反革命、日和見主義の分岐を一層鋭く突き出し、今や、かつてない革命的激動に、沖縄「本土」の階級攻防は、突入しているのである！我々は最先頭で闘い抜く決意である！

(『プロレタリアの旗』第四号)

沖縄戦の今日的把握と七・一七

沖縄同の決死糾弾に応え

天皇制侵略イデオロギイ攻撃爆砕を

本田篤紀

第一章 七・一七皇太子実力糾弾

戒厳令は粉碎された

七月一七日午後一時半。恥知らずにも、ひめゆりの塔の前にぬかずく皇太子アキヒトの頭上に、満身の憎悪と怒りを込めて投げつけられた沖縄解放同盟の戦士が握る一発の火炎ビンのさく裂音と燃え盛る炎が沖縄解放闘争を全く新たな局面に押しあげたのである。

全国の労働者・人民の諸君は目撃したにちがいない。皇太子アキヒトの動転しきったさまを。そして何よりも見たにちがいない。

物物しい皇宮警察官やら侍従やら、閣僚やらが、その瞬間、先を争ってまっ先に逃げ出し、皇太子アキヒトとミチコだけがぼう然自失で取り残されたそのさまを。天皇家を取り巻く国家官僚共のその真実の姿を、それは何よりも鮮明に暴露した。奴らは誰一人として天皇家の「高貴さ」など信じてはいないのである。それはただ「政治的」に利用しているだけにすぎない。「その時殿下は少しもあわてず、美智子様の背に手をまわしておかばいになり」……「美智子妃は、去られる時犯人達を見て、大丈夫ですかとにっこりと笑って声をおかけになり、何事もなかったかのように次の目的地へむかわれました。」この様なその現場を見たものにとって笑うべきとつくりくろいを為さねばならぬ程、彼らの「高貴性」はもろいのである。

だがこの「一発の火炎ビン」の意味する「重さ」について、誰も隠すことはできないであろう。それは丁度三十年前に、沖繩人民が為さねばならなかった事を、今ようやくにして、全くききやかながらも、一沖繩青年が為したのである。三十年の年月の隔りをはきみながらも、一切の天皇制と軍国主義に対する憎しみは消え去らず、しいたげられ、はずかしめられ、虐殺された沖繩人民の怒りは、尚赤々と燃え盛っていることについて銘記すべきである。三十年前、沖繩人民は、皇軍日本軍にこそその決死の抵抗と解放の刃を向けるべきであった。そして日本軍の中の労働者・人民は、他ならぬ皇軍官僚と天皇制国家、この帝国主義的侵略国家にその反乱の銃口をむけるべきであった。帝国主義侵略戦争から労働者が解放される道は、それ以外になかったのである。

だが我々の父母の世代は敗北し、天皇制国家と帝国主義に屈服し、何百万人という我同胞は、侵略の手先に動員せられ、その命までも奪われたのである。沖繩においては、「本土防衛の捨て石」としての沖繩戦の為に、二十万人の沖繩人民の生命と共に、全ゆるものが破壊され奪われ尽した。「天皇」の名の下に。

沖繩人民は、一九四五年六月二三日以降、新たな支配者米帝国主義に対する解放闘争を担わねばならなかった。そして戦後の土地闘争の敗北以降、米軍政の庄政下、極東の侵略と反革命の要石としての任務を負わされ、一人、巨大な米軍基地の重圧に耐えざるを余儀なくされた。日本プロレタリア人民もまた、戦後の革命的激動期の敗北以降、再建日本帝国主義の重圧下に、全ゆる反抗の牙を抜かれ、帝国主義への屈服を強要され、買収された労働貴

た時、彼らの黒い野望は半分成就したかにみえた。忠君愛国の戦士達の霊が、皇太子の頭上になみなみと侵略の聖水を注ぐかにみえた。帝国主義者、右翼天皇主義者は、顔面に喜色をたえ、してやったりと有頂点であった。

だが彼らは、「六・一八摩文仁闘争」の位置について完全に誤りを犯していた。六月十八日以降、すでに「摩文仁」は、天皇制イデオロギーと皇軍の「聖地」ではなくなったことについて、彼らはその持ち前の不尊さ故に、全く気づきえなかったのである。彼らは、新聞報道で、正直に語ったように「天皇制イデオロギーと皇軍の聖地」が汚されたと思ったのであるが、そうではなかった。「聖地」は汚されただけではなく、占領され解放されたのだ。摩文仁を占領した戦士が公然と次のように語っているのを、天皇主義者よ、余りに戦々恐々とする余りに見ない振りをしてしまっただのか。「摩文仁は天皇制・天皇制イデオロギー攻撃に対する闘いが、血で血を洗う激烈で壮大な怒りの闘いとして皇太子沖繩上陸決死阻止闘争の火蓋を切る舞台と化していくだろう。かつて沖繩戦は、沖繩人民を虫けらのように、殺した血の舞台であった。阿鼻叫喚の地獄であった摩文仁ヶ丘は、今、姿を変えようとして「聖地」になったのだ。

三〇年前の忠君愛国の戦士達は、あるいはまた、姫百合の少女達は、今、その本質に立ちかえり、自己をかかる悲惨に導いたその張本人共をしつかりとみすえていたのである。だから、ぬかずいた皇太子アキヒトの頭上に注がれたものは、侵略の聖水ではな

族共の排外主義の沼地に沈められんとしてきた。

そして、沖繩人民と「本土」プロレタリア人民は、七〇年以後、二度の出合いをなしたのである。その第一の出合いは、一九七二年五月十五日であった。ニクソンと佐藤、そして、天皇主義者屋良に象徴される如くに、それは沖繩人民にとつて、差別的・抑圧的なものであった。沖繩人民のこめた全ゆる願いは棄て去られ、より一層、侵略反革命基地のくびきに縛りつけられるものでしかなかった。

その第二の出合いは、他ならぬ七月十七日、ひめゆりの塔における沖繩解放の戦士と、共に闘かう日本革命の戦士と共に皇太子を攻撃する点においてなした出合いに象徴される。三〇年を経て、天皇と沖繩人民と「本土」人民は、全く新たな出合いをなした。帝国主義者、天皇主義者共は、七五年七月十七日を、三〇年前を再現することを望み、そのように演出した。かつて、天皇ヒロヒトは、皇太子時代、海軍記念日の七月二〇日に始めて軍艦に乗り込み、海外雄飛の志を固めたように、その子アキヒトもまた、隠された海軍記念日七二〇海洋博を射程において、天皇制イデオロギーの「聖地」摩文仁ヶ丘から、血ぬられた侵略のイデオロギーを再度くみあげる為に、そしてその侵略の聖水を、高々と日本帝国主義者に奉げるためにやってきたのである。そして、帝国主義者共は、七〇年代の深まりゆく自己の危機をなんとか打開するために、その侵略の聖水を「本土」人民と沖繩人民の頭上にふりかけることを望んでいるのであった。皇太子アキヒトが、四千名の警官による一日戒厳令下にしろ、ひめゆりの塔の前に無事ぬかずい

く、他ならぬ怒りと糾弾と復讐、そして解放の炎であったことはあまりにも当然なのである。父母の世代がなさねばならなかったこと、なしたいと願って尚、なしえなかったことが三〇年という積霜を超克して、新しい世代の手によって、それはなされたにすぎないのである。沖繩人民の幾重霜の怨念は、今、解放の叫喚となつて踊りでたのである。一発の火炎びんは、それ故、あまりにささやかである。帝国主義者、右翼天皇主義者共よ、天皇一家よ、自分たちの積年の罪過の海よりも深きを知らぬ訳でもあるまい。だから、全沖繩人民の全歴史過程を込めるには、一発の火炎ビンでは、余りにつましすぎることを知らぬ訳でもあるまい。七・一七は宣言した。沖繩人民と「本土」労働者人民は、未来永劫、侵略と反革命の敵であることを。一切の差別分断を許さず、その利害は完全に一致していることを。これが第二の出合いのその本質である。

第二章 皇太子上陸を巡る分岐と

県労協・原水協の破産

今、沖繩人民はもとより、全ての労働者人民は問われている。即ち、「七・一七を支持するの否か」と。そして、我々は、き

つぱりと応えなければならぬのである。「七・一七を完全に支持する」と。全ゆる動搖を粉砕せよ。

七・一七皇太子沖繩上陸を巡って走った沖繩社会の様々な亀裂は、決して右翼天皇主義者と左翼陣営の分裂という単純なものではなかつた。それは何よりも沖繩における左翼陣営の中にこそ、根本的な亀裂が存在することを明らかにし、さらに旧復帰協指導部は、もはやこれ以上沖繩の解放闘争を指導することは出来ず、ますます反動化せざるをえないこと。今や、決定的に新たな指導勢力の登場が要求されていることを鮮明にしたのである。

海洋博にかこつけて、皇太子を沖繩に上陸させる方針が決定されて以降、復帰協指導部の象徴、屋良県知事は、繰り返し、「皇太子来沖歓迎」を宣伝し、「県民感情はわかるが、国民感情に対しても理解を持たねばならない。」「いつまでも沖繩が国民感情とかけ離れているが如きの印象を与えるのはよくない」と主張し、自己が台湾人民に対し、皇民化教育の尖兵であった面目をいかになく発揮した。県上層部の、あるいは、旧復帰協上層部の示すこのような卑屈な態度は、他ならぬ戦前において、自分達が忠実な皇民化教育の手先であり、多数の沖繩青年男女を皇軍の轍に屍せしめたことに対する根本的な切開と自己批判を全くうやむやにして、沖繩人民の指導部に返り咲いている暗い過去と密接に結合しているのである。

沖繩人民は、七・一七が近づくにつれて、来沖反対の態度表明をますます鮮明にしつあつた。五月原水協を皮切りに、県労協を構成するもつとも主要な単産が統々と来沖反対の方針をうち出

い、②従って、皇太子来沖問題を議題にした幹事会は開かない、③県労協としての反対行動は一切取り組まない、④青年協の独自行動も認めない」という声明を一方的に発表し、七・一六―一七県民集会へと燃え上がらんとした「皇太子来沖反対・海洋博反対」の闘争を一挙的に庄殺せんとしたのであつた。しかも、これらの一切は、極めて計画的になされ、十四日の朝刊が、休刊日であることを計画に入れたうえで、沖繩タイムスを利用して十三日の朝刊で一挙的に県労協の正式態度として「反対行動は一切取り組まない」「青年協の闘争も認めぬ」（見出しは原文のまま）と大々的に報じたのであつた。しかも、今だ正式態度の決定していない原水協にまで「抗議大会見送りか」として、見込み宣伝をなしたのであつた。そして、亀甲―峰原は、それ以後全く雲隠れしてしまつたのである。

政府―県当局、右翼天皇主義者、県労協右派執行部、一部反動マスコミを総動員し、相互協力の下になされた「七・一三の一斉攻撃」は、更に、息つく暇もなく、十四日の早朝の「六ヶ所ガサ入れ攻撃」によって、沖解同・我が同盟（二ヶ所）、戦旗派に集中弾圧の手が伸ばされたのであつた。政府中枢は、この「七・一三―一四攻撃」で、皇太子上陸阻止闘争の先制的な攻撃・解体を目論んだのであつた。だが、反撃は、直ちに組織された。まず、十三日、権力の全ゆるる包囲集中攻撃、白色テロ攻撃を粉砕して、沖繩女性解放会議の結成集会と、それに続き、沖繩人民救援会の結成が、市民会館において断固としてかちとられ、上陸阻止の戦列は一層強化された。

し始めた。七月十日、その最大の指導勢力である沖教組は、第七回定期大会の最終日に、福地書記長による日和見主義提案「来沖は歓迎しない。従って一切の行事に協力しない」という提案を蹴つて、「皇太子来沖反対」を決議した。更に翌日、中部地区労も「来沖反対」を決議した。政府―県当局は、従来の弾圧をより一層強めはじめた。総評・社会党・共産党中央への恫喝と懐柔を更に強めると共に、「過激派の行動に巻き込まれず、冷静に対処せよ」と我々と沖繩人民を分断する政策をより一層強め始め、白色テロルを行使し始めた。更に、十三日には、計画的に三つの攻撃を加えてきた。

第一には、「警備の予行演習」という名目をもって、十三日早朝から沖繩全土を完全な警察支配・戒厳令下におき、県労協指導部・各界指導層に、明らかに恫喝をつきつけた。更に右翼笹川良一を使って、「皇太子・美智子妃歓迎日の丸行進」なる官製のデモンストレーションを組織し、右翼日思会を登場させた。もつともこのデモは、五千人を結集させるという豪語にも拘らず、子供や赤ん坊まで動員してわずか二百名たらずの消沈デモとあいつたが、このような東京検察庁直轄の戒厳令下の中で、更に県労協右派指導部と沖繩タイムスの一部手先を利用して、戦いの隊列に分断をもち込んだのが、十三日の県労協三役声明の陰謀である。十日の沖教組の「来沖反対決定」によって、危機にたたされた県労協右派指導部、亀甲議長―峰原事務局長ラインは、七月十二日、県労協幹事会を開くこともせず、三役会議の決定をでつちあげて「皇太子来沖問題では、最後まで何らの意思表示もしな

更に友寄県協副議長を委員長とする全軍労は、十三日、極めて強い調子で、「来沖反対」を組織決定した。更に、全ゆるる単産、職場で、県労協中枢への公然たる批判が集中し、青年労働者と幹部間には、暴力的対峙も引きおこされた。下部労働者は反乱を開始しつあつた。中でも戦闘的な沖繩電通の青年労働者は、県民集会へとひるまぬ進撃を押し進めた。「上陸実力阻止」を唯一鮮明にかかげる我が現地共闘の部隊もまた、統々と「本土」から結集する勢いを得て、「七・一六―一七断固」として県民集会を！県労協三役打倒！」を宣伝煽動していったのである。『プロレタリアの旗』『沖繩通信』を更に精神的に持ち込み、連日、那覇市街でのピラマキ情宣活動を白色テロに抗しつ貫徹し、更に全ゆるる労組へのオルグを進行させていったのであつた。そして一六日権力の完全包囲下で前段総決起集会をかちとると共に、ハーバリーホテル、くろしお会館のそばである那覇署楚辺警察官派出所への公然たる武装襲撃でもって、我々ほどのような戒厳令をも打ち破るであろうこと、七・一七は、平和裏に終わるはずのない事を宣伝すると共に、七・一七県民集会へ断固として決起することを呼びかけたのであつた。四千の武装警官による戒厳令下の重包囲の中で、今や政府中枢権力がとがふり四つに組んで、一步もひかぬ闘争を繰り広げているのは誰れか。沖繩人民を再び侵略の先兵とする為に全ゆるる攻撃を開始した帝国主義に對し、闘いの牙を抜きとられ反動的補完の位置に転落したものは誰れか。それらは、もはや沖繩人民にとってあまりにもあからさまな事実となつてしまつた。

もはや指導部はとつてかえられねばならない。沖繩解放同盟は、最も権威ある指導部として沖繩人民の闘かいの先頭に立たなければならぬ。わずか数日間の「皇太子上陸」をめぐるドラマステイックな展開は、明日の沖繩を瞬間的であれ、垣間見せたのである。沖繩人民は日本帝国主義、米帝国主義によって奪われた一切のものを奪いかえす為に、沖繩解放同盟の旗の下に結集しなければならぬ。

このように「皇太子上陸阻止」を巡る沖繩人民の闘争に対し、終止一貫妨害者として立ちあらわれたのは、かつての「反動復帰」の旗手、屋良であり、また海洋博・OTS反対をいち早くかかげた県労協指導部右派であった。そしていわゆる「既成」革新はその左右を問わず、県労協三役声明に象徴される如く、完全にその指導破産を露呈したのであった。それは指導部の諸個人の裏切りであるとか、また日和見主義にその責任が帰せられるのではなくて、全く指導イデオロギーそのものの歴史的破産により根拠を持つものであった。それは沖繩人民の復帰運動以来の指導体制の歴史的破産なのであり、沖繩独特の戦闘的組合主義の最後の終焉の姿であった。歴史の歯車は否応なく施回したのである。

かつて二・四ゼネストを巡る敗北がそうであったように、戦闘的組合主義を中心とした合法運動は、決して軍事的警察的戒厳令下の重包囲を突破する力を持たない。沖繩解放闘争が勝利する為には、沖繩人民の中に深々と根をおろした「武装せる革命組織」が今日では是非共不可欠となっている事に、戦闘的な沖繩人民は標準を定めねばならない。今日ではもはや、県労協指導部を左か

ら批判するだけでは不十分である。反対派運動を算し、独自の政治主張を為す解放組織建設、革命党、ボルシェビキ主義建設の道を歩まねばならない。

更に又、県労協左派指導部が最後に至るまで見せつづけた根本的な動揺と破産は、何よりも「沖繩はどのようにして解放されるのか」という事に對する根本的な動揺の故であった。彼らは何よりもその大枠において、屋良県政路線、反動復帰路線を基底で支え続けてきた支持基盤である。本土一体化路線を基本的には支持したうえにたつて、その中で引き起こされる「ひずみ」を左からは正してゆく路線が、彼らの意図する解放路線であり、それらは全体として、本土における「革新連合政権」の成立の可否に収練されてゆくものではない。この屋良路線は果たして沖繩の完全解放を保証するものであるのか？左翼を自称する多くの戦闘的組合主義指導部は、この問いに今に至るも結論を出しえないでいるのである。他ならぬ海洋博は、この屋良路線の積極的推進の一つの帰結ではなかったのか。そして又屋良路線を首尾一貫して得られる政治的結論こそ他ならぬ「皇太子来沖歓迎」の結論ではなかったのか。

屋良が「皇太子来沖歓迎」を打ち出したのは、単に彼が戦前以来の天皇主義者である事に原因があるのではなく、即ち屋良個人のイデオロギー的信条に何ら関係なく、他ならぬ屋良路線そのものから合理的、必然的に導き出された政治的結論なのであった。

「本土」一体化路線の延長に沖繩の繁栄を夢見る屋良路線は、必然的に海洋博を生み出し、又「皇太子来沖歓迎」を生み出すので

ある。「県民感情よりも国民感情を優先しなければならぬ。」という屋良の発言は、単に、個人のイデオロギーの為せるわざなのではなくて、屋良の推進する政治経済路線そのものの、イデオロギー的反映にすぎないのであり、その意味ではすぐれて今日のな発言なのである。ここに、県労協三役声明が、翼下の戦闘的気運を裏切つてまで提出されざるを得なかった必然的根拠が存するのであり、又県労協左派指導部、県原水協指導部が、結局の所、県民集会の流産・庄殺の前に反撃力を喪失し屈服していった根本的な理由が存在するのである。「天皇の戦争責任の追及」が結局の所、沖繩解放の基本路線に結合していない時、それは現実政治の抵抗の中では急速に敗退してゆかざるを得ず、「一言謝るべきではないか」という全く感情レベルの抗議に切りちぢめられてしまふのである。

つまり「皇太子上陸反対」の陣営の基本的弱点とは、自然発生的反対気運の高揚の予想に非難し、それが、沖繩解放闘争の政治経済路線にまで深められてはいなかった事であり、イデオロギー的空まわりを許したことであり、従つて又、沖繩戦の原体験の苛烈さのみに依拠しようとしたことであった。これが、県原水協（仲吉理事長）の、あるいは県労協左派の、屋良県当局及び亀甲（峰原ブロック）にみごとなまでに敗北した根本的理由なのである。

彼らは、屋良路線＝本土一体化路線を左から支える以外に独自の政治経済路線を持たないのである。七二年「返還」以降、同化路線をひた走る屋良県政の末路こそ「七・一七皇太子来沖歓迎」であったのだ。「皇太子上陸」を巡つて革命的沖繩人民に問われた

ことは、屋良同化屈服県政との明確な訣別であり、その革命的打倒と新たな解放勢力としての指導的登場以外ではなかった。

数日間の激闘を通して、電通青年部を始めとする最つとも革命的な青年労働者が、我が現地共闘との合流を追及し、あまつさえ我が、ボルシェビキとの共闘を強く追及した事の本質的な意味は、一切の同化屈服路線と鮮明に訣別しうる確固とした沖繩解放の思想的・路線的武装の必要を本能的に痛感しはじめた姿であることであつた。

海洋博及びその関連事業を通して、沖繩経済はほぼ「本土」政府（＝沖繩開発庁）と「本土」独占資本の自由支配へと帰しつつある。

日本帝国主義は、米帝国主義との結託協力の下に、近代的な装いをこらしつつも、その本質上植民地的な支配を打ちたてんと画策してきた。そして経済上は政府直轄の大規模公共事業（＝海洋博、道路、港湾）をてこに、「本土」独占の手に沖繩経済の支配権を与え、沖繩地場産業をほとんど独占系列支配下に再編してあり、その過程で多くの中小企業が倒産に遭遇させられた。政治上は沖繩開発庁という政府直轄機関の手に実質上その支配権を与え、屋良県当局はそのかいらいにまで位置を低めてしまつてゐる。更には今回の、海洋博＝皇太子警備に名を借りて一挙に沖繩全土を警察支配下に置く策略を稼動させ、内乱鎮圧の予行演習を行せしめると共に、遅れていた沖繩県警の直轄支配と共に、その治安警察公安警察を一挙的に遂行し「返還」以降の自衛隊西部方面指揮下の第一混成団の沖繩上陸とあいまって、その軍事的＝警察的支

配体制の増々の強化を図ったのであった。

そしてその仕上げの攻撃として天皇制イデオロギー、この血ぬられたアジア侵略のイデオロギーの意識的な持ち込みを図り策略したのが、過去二度にわたる天皇ヒロヒトの来沖策動であり、今回の皇太子上陸攻撃のその本質であった。だが「皇太子上陸攻撃」は、決して成功しなかったのみならず、それは本質上みじめに破産したのだ。なる程、県民集会は遂に組織されはしなかった。県労協指導部は恥ずべき裏切りをなした。全ては政府当局の思惑通りに進んでゆくかみえた。だが「七・一七決死糾弾」はそれらの全ゆるる攻撃をその本質上爆砕した。

口

県原水協理事長仲吉氏は「七・一七皇太子上陸阻止」の実力闘争について、次の様に語ったという。即ち「六・一八摩文仁事件が突きつけたものは良くわかる。それは沖繩が三〇年間、ふれようとしてふれられなかったものにふれたからだ。だが七・一七の沖解同の直接行動は疑問だ。大衆的な反対行動があくまでも軸でなければならぬ。」と。

だが、そうであろうか。そう問う前に、仲吉氏は、主体的な責任をかけて、ではなぜその肝心の大衆的な来沖反対行動が、他ならぬ君達の指導下で挫折してしまったのかを総括せねばなるまい。我々も、又、沖解同の諸君も「大衆的な来沖阻止行動こそ重要」である事を決して否定はしなかった。だからこそ、その為、全

ゆる手段を駆使して情宣・煽動を行ったではないか。だが、県労協中央が意図的に県民集会の組織化を放棄したのみならず、その庄殺に乗り出したのは、「大衆的な来沖阻止行動の不可避の爆発力を恐れたが為ではなかったか。「県民集会をやると何がおこるか判らない。とにかく県民集会だけは許すな。」それが、県当局・警備当局・県労協中央の偽らぬ本音であったのであり、だからこそ、「一三日の黒い隠謀が為されたのではなかったか。

皇太子アキヒトは、四千の武装警官による沖繩の一次的占領と戒厳令の頂点で上陸した。諸君は見ただろう。百数十台の装甲車がずらりと岸壁に陸揚げされる様を。南部沖繩のありとあらゆる辻が、武装警官の群によって占拠された様を。沖解同の戦士がささやかな一本の火炎ビンで決起した時に、一斉に引き抜かれたピストルの銃口の群れを。そして肝心の沖繩人民の隊列にのみ、全ゆるる武器と武装がなかったその余りに奇妙な対照を。それでもまだ諸君は、沖繩人民が自らの意志を貫く為のささやかな武装すら認めようとはしないのか。沖繩には、恐らく、全世界中の全ゆるる武器の見本が存在するだろう。沖繩を抑圧するまさに全ゆるる武器がある。にも拘らず一つとして沖繩人民の所有する武器はないのだ。沖繩人民は、皇太子アキヒトの頭上で炸裂した一本の火炎ビンを恥じるべきではない。恥じるべきはそれが一本の火炎ビンであったことである。武器を持ったことではなく、余りに武器を持ちすぎなかったことをもし恥じるなら恥じるべきなのである。沖繩人民こそ、その全歴史過程よりみて、ただ自身の為のみ武装することを保証されるべき人民である。武装する権利は、沖繩人

民にこそ存在する。武装すること抜きに自己解放を考えるとしたり、それこそ永遠の夢物語語りであろう。恥じるとしたら米軍の残虐行為に思わず突き出した石のこぶしに武器を握るのではなく、目の丸の小旗を握ったことこそ恥じるべきなのだ。仲吉氏は、沖解同の戦士を批判する前に、なによりもそのことをこそ沖繩人民に訴えるべきではなかったであろうか。暴力こそ、沖繩人民の最大の味方である。告発が何の力になるであろう。帝国主義者はその苛烈な暴力支配を通して「基地の存在こそが、沖繩人民の死活を握っている」と宣伝する。だが事実とは全く逆である。「沖繩人民こそが、基地の死活を握っている」のである。仲吉氏よ、革命とは暴力であって、理性ではない。沖繩解放とは、暴力の勝利であって、理性の勝利によってもたらされるものではない。

第三章 天皇制—沖繩戦とは何か、

その今日的把握について

摩文仁ヶ丘—姫百合の塔。それは沖繩からその二十万人の生命と共に一切を奪い去った沖繩戦の象徴である。だが沖繩戦とは、日本—沖繩人民が共同して米帝国主義の沖繩上陸に抵抗し敗北した皇軍と大和魂の象徴ではなく、何よりもそれは帝国主義戦争の最後のいけにえに沖繩人民六〇万人の三分の一にあたる二〇万人を無差別虐殺した、天皇の軍隊—皇軍の沖繩人民に為した歴史的犯罪の象徴なのである。にもかかわらず、沖繩戦を皇軍の聖戦と

化し、ひめゆり部隊の犠牲者をも聖戦に没した霊として英霊化せんとし、南部戦跡一帯を今日に至るまで、天皇制イデオロギーの聖地として化しめた事に対する攻撃こそ「六・一八」の最大の意義であり、「死せる日本軍の占拠せる摩文仁丘」(摩文仁解放戦士・赤土三号)の三〇年ぶりの解放闘争であったのである。

沖繩戦—それは、日本帝国主義の敗北をわずかり延期させる為に、沖繩全島を舞台にし、全沖繩人民を巻き込んだ玉砕戦であった。それは、一九四四年一〇・一〇爆撃から始まり、一九四五年四月一日米軍の沖繩本島上陸によって本格化し、同年六月二三日完全占領されるまでの戦いであった。それは、米軍一万余日本軍九万余、そして沖繩住民は十六万余の大量の犠牲者を生んだ。「本土」における非戦闘員の死者総数は三〇万人である)

日本軍は、老人・子供を除き、十四才以上の戦闘可能な全ての沖繩人民を戦争へと強制的に狩りたてた。なおその上に、日本軍が沖繩人民に為した犯罪は数限りがない。渡嘉敷島においてなした赤松大尉の島民への集団自決の強要に象徴される如く、沖繩人民は、その老若男女を問わず、皇軍と天皇の名の下に、全く無差別に、虫けら同然の如くに殺されていったのであった。

(注1)「あれ程自分の口で玉砕を叫びながら、みずからは壕の中に避難して、住民には集団自決を命令、あるいはスパイのぬれぎぬを着せて斬殺、暴虐の限りをつくした彼、赤松大尉は今や平然として降状文書に調印し、恥じる色もなく住民の前にその大きな面を現わしたのだ。……」(山川泰邦「秘録沖繩戦史」)

「命令は実行された。轟音が、つぎつぎに谷間にこだました。瞬時にして、老幼男女の肉は四散し、死にそなつたものは、棒片で頭を打ちあい、カミソリで頸部をきり、斧、鋏、鎌を用いて親しい者同志が、頭をたたき割り、首をかききった。恐ろしい情景が、恩納河原というところで繰り広げられたのである。こうして三百二十九人の住民が自ら命を絶った。」(沖繩タイムス社編「鉄の暴風」)

この沖繩戦の遂行は、だが、それ以前の沖繩人民に対する徹底した皇民化教育の遂行によつてのみ可能であつた。今、屋良「県」知事が、「皇太子来沖」を巡つて、「いつまでも沖繩が、国民感情とかけ離れているが如き印象を与えるのはよくない」と主張する時、この沖繩戦に帰結するに至る沖繩の皇民化強制教育の過程を想起させるに充分である。

沖繩近代史は、天皇制政府による専制支配と差別・収奪の連続であつた。明治の「琉球処分」は、伊波普猷の述べる如くの「奴隷解放」ではなくて、「旧慣温存」せしめたまま、沖繩を天皇制支配・収奪の対象にしたのであつた。沖繩解放闘争は、この「旧慣温存」に対する闘争として開始され、一八九〇年代における人头税廃止運動から更に発展して、二〇世紀に入ると謝花昇を中心とした自由民権運動が展開され、天皇制官僚・奈良原県政との死闘が繰り広げられた。だが、二〇世紀初頭の天皇制権力の強化の中で圧殺されていった。奈良原県政下の沖繩人民の政治的無権利と経済的疲弊の状態を明らかにし民権の獲得をめざした謝花の

運動が圧殺された後、沖繩人民の解放を、天皇制支配とそのイデオロギーに対する闘争の中に、即ち解放闘争の中に求めるのではなくて、「現実をちがった風に解釈する」伊波の歴史理論(いわゆる沖繩学)が台頭し、これに依拠した沖繩有識階級によつて、日露戦争以降の全国的な皇民化教育の中で、沖繩においても一部買弁階級を中心として、積極的に天皇制支配に迎合し、「国民的精神」(県民としての自覚)等の宣伝が推し進められていったのであつた。

(注)伊波の歴史論の基礎は「沖繩人は元来日本人である。それが異民族扱いされたのは三百年間の島津支配の結果である。」という立場に立ち、それは主として、島津支配の所産である有識階級の奴隷根性を清算し、民族的自覚を覚醒させる事を目的としていたのであつた。

伊波普猷、比嘉春潮等を先駆者とするこのイデオロギーは、その後、沖繩有識階級の意識の奥深くにまで浸透し、今日に至るまで沖繩有産知識階級の支配イデオロギーとなつていっているのである。この思想は、いわゆる人類館事件(一九一四年)の把え方の中に、その本質が露呈されている。当時の「琉球新報」は、この沖繩有識階級を代表する新聞であつたが、そこでは「……これわれを生蕃アイヌ視したるものなり。われに対する侮辱これより大なるものあらんや」と述べられており、天皇制専制支配における差別攻撃に対する批判の観点はなく、全き排外主義に屈服してしまつていたのであつた。

沖繩の指導層の、このような反動的な混乱の中で、労働者人民

は後年ようやくにして、社会主義思想に接近しつつも、天皇制権力の前に集中弾圧を受け、三〇年代以降は、集中した皇民化教育の洗礼を強制されてゆくのである。

戦時体制が強化され、日本帝国主義が中国侵略を開始して以降、皇民化教育は、全面的に強化されたが、とくに次の二つの事例にそれは顕著であつた。第一は、「方言廃止―撲滅運動」の推進である。「それは特に昭和十四年からは、国民精神総動員運動の一翼としてそれは一層強化された。太平洋戦争開戦になると、県知事が『国民的一致の爲には、沖繩の地方的特色は一切抹殺されねばならぬ』と公言した。」(太田昌秀、『近代沖繩の政治構造』)当時の「沖繩朝日新聞」は、「一言にしていえば、国語の普及によつて国体を明徴し、祖国意識を高揚するにあり」と論じている。更には、警察の指導を受けた演劇改善運動や、「改姓運動」等へと果てしなく続けられた。それらの本質は、次に比嘉春潮が述べる通りであつた。「沖繩に対するこうした差別的な扱い、固有の伝統文化に対する蔑視や抑圧は、言語に限らず、日常生活の全ゆるる風習にわたつて政策として行われたのであつた。生活改善運動と称して県の労務部が学校や青年会を指導し、琉球の風俗の絶滅を期したのである。それは、朝鮮や台湾における皇民化運動と全く同じであつた。」

第二には、日本帝国主義の「南侵」の尖兵とするべく、沖繩人民の歴史を改作し、あるいはのっかり、皇民の尖兵として、「祖先の雄大な魂を受けついで、沖繩を再び南進、北進の基地たらしめ」んとした煽動と教育であつた。

日本帝国主義は、中国侵略の開始と共に、「満州」への「分村計画」及び南侵政策を国策として、国民の間に侵略イデオロギーを注入して行つたのであるが、特に沖繩に関しては、「古来よりの南方との経済的交流」の歴史的事実を利用して、意識的に侵略の尖兵へと動員して行こうとしたのであつた。

県当局は、皇紀二千六百年記念事業として、中世沖繩の南方開発史の刊行計画等を通して「沖繩県民は、わが南進国策の第一戦士として、戦線勇士にも劣らぬ気持ちで進出せよ。」「沖繩は南方共栄圏確立の爲の前線基地として新たな重要使命を帯びることになつた。……われわれの祖先は、わが南進の先駆をなして進取敢闘の気性が、われわれの血の中に流れている。今こそ県民は、郷土魂をふるいおこし進んで南方へ進出すべきだ」等の煽動をなしていったのである。

首相東条が、一九四三年来沖した時には、東亜次官が「……この伝統の精神と体験を決戦国家の要請に応じて、高度に發揮し、南方進出について船大工などの労働者をどしどし送つてもらいたい。」と煽動し、沖繩戦前夜は、まさにこのような皇民化の教育が支配者の手によつて巧妙に仕組まれていたのであつた。彼らは、郷土史家、文化人、教育者等、全ゆるイデオログを総動員して、「日本への同化政策」を推進し、しかも、それは侵略のイデオロギーと同義のもの、一体のものとして、推進されていったところに、天皇制支配のその本質があつた。

ちなみに、「分村計画」においては、一九四〇年以降数次の「満州建設勤労奉仕隊」が送り出され、一九四三年の県会において

は、「皇国農村建設の国家要請に即応」すべく、第一次農家移設計画として五万戸を県外へ出すことが明らかにされた。三万戸を大陸へ、二万戸を阪神間の軍需工場への労務供出として）

一九三〇年代、四〇年代のこのような上からの意識的な皇民化教育の推進こそ、沖繩戦を準備したものであることは、今日では鮮明であるが、だがこの当時の皇民化政策は、今日姿を変えてはつきりと日本帝国主義の沖繩支配の中に導入されつつある事を見抜かなければならない。海洋博を開催するにあたって、政府・県当局は、海洋基地としての沖繩開発を宣伝しなかつたか。長谷川芳相は、沖繩において大量に発生する海洋博後の失業者対策と称して、「海外移住の覚悟で、本土への集団移住を」と宣伝しなかつたか。

沖繩決戦前夜においては、このような政策の推進を基礎に、「久松五勇士」ならぬ「大弭大尉精神」を宣伝して、戦意の高揚をはかり、又現地守備軍長勇参謀長は「皇軍将兵は一人で十人殺さねば死なぬ。県民もこの決意に徹し、沖繩は吸血のポンプになるのだ……」と煽動した。県当局は「県下の男子青少年は、全て太平洋の大空に送り、女子青少年は、一人残らず、航空機工場へ挺身せしめる」方針を打ち出した。

「ひめゆり部隊」の悲劇はまさにこのような中で、軍国主義の手により、生み出されたものであった。彼らは、非戦闘員にも玉砕戦法を押しつけ、婦女子・少年等の疎開を「非国民」扱いし、強制的に戦争に狩り出したのであった。だがむろん、このような天皇制政府―県当局、一部の買弁階級の、徹底した皇民化政策

玉砕戦への煽動に沖繩人民が屈服したわけではなかつた。社会主義が、苛烈な弾圧の中で人民の中に持ち込まれた。又、徴兵忌避が多発したその割合は全国でもっとも高いものであつた。農民は、政府の増産のかけ声にも拘らず、為政者への不満をあらさまにし、「軍・官・民」の一体化は、支配者が望む程には、実際上進行はしなかつたのだ。教師達は、一部の買収された者を除き、児童や生徒達が、戦線に狩り出されてゆくのを陰険と阻止し、疎開を進めたのであつた。沖繩戦前夜の沖繩は、日本軍と一部の国家官僚を除き、誰れも戦争の遂行に積極的に協力しようとはしなかつたし、それどころか学生達を戦線に強制的に狩り出した役人達の多くは、「出張」にかこつけて、沖繩から脱走するありさまであつた。このような「天皇主義者」のそらぞらしい正体が暴露されてゆく中で、沖繩人民は陰険とした抵抗をやめはしなかつた。

だがそれらの一切を巻き込んで沖繩戦は遂行され、全ゆるものが奪われ破壊されていったのであつた。「目をつぶらなければ、もう昔の沖繩をみることは出来ません。」最も大切な、中堅労働力の壊滅を含め、全ゆる都市・農村は、瓦礫の山と化し、長参謀長のいったごとく、沖繩は「吸血の鳥」と化した。だがそれは、他ならぬ沖繩人民の血でもつて。

だが、この沖繩戦の戦争責任を誰がとつたろうか。天皇ヒロヒトは、今日最高戦犯として死刑に処せられるべきことを誰れが反対しようか。天皇制は、それがどのような形であれ廃止されねばならぬ事、天皇制イデオロギーを全ゆる形をとつて抹殺しなければならぬ事について誰れが反対しえるであろうか。日本帝国

主義による沖繩の植民地的支配と苛酷な収奪について、そしてそれがもたらした全ゆる結果について、日本帝国主義はその責を負うべきであり、「本土」人民は、日本帝国主義の打倒と天皇制の廃止によって、戦争責任について、全てのアジア人民と沖繩人民そして自己自身に対して結着をつけるべきなのである。今日、沖繩人民は、日本帝国主義によって、その対米請求権すら放棄せられ、又細々と「返還」される基地のほとんど全ては「自衛隊」が肩代わり使用し、残る数パーセントの土地の「地籍調査」すら政府のサボタージュによって暗礁に乗りあげて、今だに沖繩人民の手には一握りの土地すら渡つてはいない状況である。だが沖繩人民は、対米請求権のみならず、基地の全面明渡しは言うに及ばず、日本政府に対する植民地的支配と沖繩戦の損害に対する請求権を行使するべきであり、又その権利は完全に認められるべきである。沖繩の開発、資本投資の全ては沖繩人民の決定と行使に委ねらるべきである。

第四章 沖繩解放の為の今日的課題

——結びにかえて——

屋良県知事の発言に迎合するかのよう、復帰運動・反戦反基地運動を担い抜いて来たはずの、婦人団体連合会、PTA連合会などが一七当日「来沖歓迎」の日の丸の旗を振つた。六〇年代は遠く去つてしまった。古いイデオロギーは色あせて風化し、今や、

支配者を肥え太らせるまでに腐臭を放っていることに我々は気がつかなければならぬ。「七・一七」は確かに、最も象徴的な意味で、沖繩現代史の一つの施回点となつた。沖繩人民にとつて近代天皇制とは何か、沖繩戦とは何か、今それが鋭く問われなければならぬ。それは沖繩解放を担う沖繩人民にとつて不可欠の課題となつた。（そして又、もちろん、「本土」プロレタリア人民も又、自己の解放を真剣に考えるなら、「七・一七」をはつきり把握返すと同時に、我々にとつて天皇制とは何かを今一度鋭く問わねばならぬ。「七・一五・一五」はその本質的な姿を、「七・一七」を通して明らかに露呈させた。

沖繩にとつて、近代天皇制とは、一九三〇年代以降のわずか十数年のかかりでしかない。それは、日本帝国主義が、血ぬられたアジア侵略の道をひた走る為、中国侵略を前後して、強引に沖繩に持ち込み、強制した皇国史観であり、それは只ひたすら、沖繩戦へと登りつめた侵略と同化のイデオロギーであつた。そして、沖繩自身の内在的な問題においては、沖繩有識階級が、この近代天皇制の侵略イデオロギーへの同化攻撃の前に有効な組織的反抗を結ぶまもなく、敗北していったことであり、それは、すぐれて、伊波歴史理論（沖繩史観）の事大主義的な同化理論とそのブルジョア性と、そして、それに依拠した、沖繩有識階級の天皇制と日本民族主義への反動的な同化・屈服の歴史過程が、内在的に照応している事を、把えておかねばならない。そして今日、沖繩解放を担う、沖繩人民にとつて、この日本民族主義への屈服的同化イデオロギーを不断にその内部から生み出すところの、伊波

第二部 資料編

同盟全国委下における

沖繩闘争をめぐる路線論争

——同盟の沖繩闘争論の総括へむけて——

資料一

わが同盟の沖繩闘争論
の総括と路線問題(七三年末)

加納 英 二

第一章

いわゆる「武装闘争の砦」論

と12・18路線

共産同の沖繩闘争論は、第二次ブンドにおいては、「国際主義

と組織された暴力」のスローガンの下に、国際主義の立場にたつて、中核派の反スター国主義的な「奪還論」批判、フロント等、構改革派系の日帝の侵略一般の暴露からする「返還」の位置付けに対する批判を通じて、沖繩闘争の国際階級闘争の中に占める位置を明らかにすることによって、政治的優位性をもった。だが、第二次ブンドの世界同時革命戦略からする沖繩闘争論は、第一に、党の立場(インターナショナル建設)を抜きに同時革命を語る実体主義に、第二に、沖繩闘争の方針の基礎を結局は日帝の攻撃一般におき、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の中に構造的に位置付けることのできないものであった。すなわち、抽象的な国際主義であり、帝国主義批判の客観主義と表裏をなす限界である。(「烽火」二八六号三面論文参照)

12・18路線は、日向派の一國主義的偏向と闘いながら、ブンドの國際主義を継承せんとした。そして、その場合、第二次ブンドの限界を根底から克服するものとして、資本主義批判に基ずく世界プロ独に綱領的立場を定め、そしてその立場を國際党派闘争を通じて、世界党（新しいインターナショナル）建設へと現実化していく過程において、まさに、國際主義の抽象性（実体的偏向）を克服しうる第一歩として画期的であった。12・18路線の革共同に対する（ひいては日向派に対する）、また第二次ブンドの限界の克服という点での画期的意義にも拘らず、「國際反革命軍事体系に対決する國際非合法党建設」という國際主義を、資本主義批判に基づく綱領的立場と、組織実体における國際性という、文字通りのコスモポリタン主義へと陥し入れることにより、左翼急進主義へと堕してしまつたのである。このことは、沖繩闘争についても「武装闘争の啓とせよ！」というスローガンの中に明白に現われた。（尚、三里塚闘争においても、同様のスローガンで闘われた）。このスローガンの背景には、階級闘争の主要な形態が、革命戦争であるという誤つた現実認識（註）があり、武装闘争に対する態度だけから革命派と日和見主義との政治的分岐を求めることによつて、階級闘争の複雑な様相を極めて単純化してとらえ、そのことによつて、六九年から七〇年にかけての武装闘争の一定の敗北という現実から目をそらし、その過程の中に現われた諸々の日和見主義・清算主義を真に克服していく道を見失つたのである。（「二派止揚・八派解体」路線は、まさにその典型であり、政治的に直面している問題に何ら答ええないことによつて、階級

闘争に対して、一見能動的に見えながら、その実、極めて消極的・受動的な態度にならざるをえなかつたのである。確かに、武装闘争に対する態度は、革命派と日和見主義派の明確な分岐をなしていることは事実であるが、それはむしろ、その党派の政治的・組織的な路線の結果にすぎないのである。もし、こういう問題の立て方をしないならば、口先だけの武闘派と日和見主義と実際に武闘をやるかどうかだけでしか区別しえないのであり、こうした論理に容易にはまり込んでしまうところに左翼日和見主義（急進主義）の政治的性格があるのである。

闘争に対して、一見能動的に見えながら、その実、極めて消極的・受動的な態度にならざるをえなかつたのである。確かに、武装闘争に対する態度は、革命派と日和見主義派の明確な分岐をなしていることは事実であるが、それはむしろ、その党派の政治的・組織的な路線の結果にすぎないのである。もし、こういう問題の立て方をしないならば、口先だけの武闘派と日和見主義と実際に武闘をやるかどうかだけでしか区別しえないのであり、こうした論理に容易にはまり込んでしまうところに左翼日和見主義（急進主義）の政治的性格があるのである。

政治的・組織的任務から目をそらし、また大衆に目をそらせ、幻想を強要するという誤まりであり、第二に、こうしたテーゼによつて、逆に、「革命戦争」を至少にし、「戦争」の概念を曖昧にするという誤まりである。この後者の誤まりの実践的帰結は、六全協以降の日本階級闘争の歴史の中で、極めて貴重な武装闘争の経験を徹底して教訓化し、次の闘争へむけて普遍化し、大衆の経験へと高めていく系統的・持続的な作業を放棄するということであり、そして、党の果すべき指導任務からするとき、このことは犯罪的ですらある。

以上のように、「武装闘争の啓とせよ！」というスローガンは、路線上の誤まりとの関連において提起されたのであるが、問題はそれに留まらない。それは、まず第一に、第一次琉球処分、第二次大戦後における日米帝による戦後処理として切り捨てられてきた沖繩の歴史と現実から、従つて、復帰運動として発展してきた沖繩階級闘争の直面している課題から、不断に目をそらせ、そのことによつて日本プロレタリアートの実践的任務が完全に喪失されるということであり、このことから、第二に、本土プロレタリアートに対しては、全く空文句に等しいスローガンと化し、何らの実践的任務も提起しないことにより、日米帝によつて分断され、差別されてきた現実を革新し、プロレタリアートの真の連帯と結合を促進するどころか、逆に分裂を固定化させ、本土プロレタリアの政治的意識を曇らせるという結果をもたらすのであり、第三に、沖繩プロレタリアに対しては、全くの無責任な政治利用主義であり、ここに最も悪しき「本土」主義が表現されていることである。

このことは、深く総括し、教訓としなければならぬ点である。12・18路線下における沖繩闘争論の展開としては、七一年六月鈴木論文があるが、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の危機と國際階級闘争との関連で把え、その中に沖繩闘争を位置づけようとする一定の前進はみられるにしろ、中共評価や、中核派「奪還論」批判における誤まりを含め、これまでの路線からの決定的な飛躍とはなっていない。（これについては、前掲首都圏論文を参照のこと）

第二に、一時代に亘る実力闘争と武装闘争の持続を可能とした階級闘争の客観的諸条件の中に、新たな形態をもって胎動しつつある階級闘争の成熟と、より高度の発展の芽が形成されつつあることに対して全く無自覚となるだけでなく、新たに突きつけている

第二章

いわゆる「結節環」立ちはだかれ」論について——「第二段階論」との関連で——

六九年日米共同声明——七一年沖繩「返還」協定調印——七二年五月一日沖繩「返還」という過程は、戦後帝国主義世界体制の崩壊的危機の進行の中で、その再編強化を、日米安保（侵略反革命）同盟を軸とするアジア支配体制の戦略的再編の過程であり、五・一五「返還」は、まさにその戦略的要となるものである。このような帝国主義の世界支配体系の崩壊という一つの歴史的時代の転換点たる「五・一五」へと登りつめる政治過程に対して、われわれは総力戦として取り組んだ。

七二年四〜六月闘争を全力で取り組むにあつたのわれわれの方針は、全国委結成時におけるわが政治的立場と、その後半年間における深化の上に立つものである。

すなわち、沖繩「返還」あるいは沖繩闘争の位置については、「沖繩」が、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制下においては、国際階級闘争の強制された最前線になってきたベトナム人民を先頭とする日米帝国主義の侵略反革命前線基地として一貫して存在し、いままた八中米会談と八ベトナム人民の大反攻に象徴的な戦後支配体制の崩壊の危機の中にあつて、日米帝国主義の侵略反革命の再編強化の要をなしていることにあり、われわれ日本労働者人民は、この闘争を通じて、中一朝一インドシナ三国人民との国際主義的連帯をわがものとし、帝国主義心臓部の革命闘争の飛躍——蜂起・臨時革命政府樹立への道——を切り拓く蜂起・戦争派の大潮流を形成していかねばならない」（「烽火」二七四号、七年五月五日付）ということであつた。このことは、第一に、「現時点のヤルタ体制の崩壊の時に、日米帝国主義の侵略反革命体制・再編強化の結節環」であり、第二に、「現時点における国際階級闘争の最重要の結節環」（民族解放闘争との結合）、第三に、「戦後日本階級闘争の革命的結節環」（人民戦線派との闘争と蜂起・戦争派の大潮流の形成）であり、「コザ大衆暴動闘争以降の人民戦線派の分解——沖繩の革命的民主主義勢力の再編を通じての日本革命運動の戦略的拠点として沖繩を打ち固める」（「烽火」二七三号、七年四月二〇日）ことである。

そして、以上の政治方針の下に、国際主義を単に立場に置きしめるのではなく、日本プロレタリアートの国際主義的任務として実践的に提起した。（いわゆる「立ちはだかれ」論として）。そして、この闘争を、自衛隊派兵実力阻止——武装進撃として、最

大限X闘争を含む可能な戦術を考慮して準備したのであり、四月下旬からの第一次P派遣から五月北熊本現地闘争を経ての反帝戦線の沖繩派遣へと推進したのである。（沖繩においても編成された）。

この七二年春の沖繩闘争についていえば、その戦略的位置付け、国際主義の立場など、政治方針の視角および問題のたてかたにおいては、いわゆる「第二段階論」と一致する（その限界をも含めて）のであるが、にも拘らず、その戦術・組織問題については、一定のズレがあることは事実である。「第二段階論」の路線的・理論的骨格をなす『大胆に着手しよう』論文は、戦術及び組織問題の領域を欠落させているという点に、決定的な限界をもつものであるが、しかし、それと相関関係をなす『戦士』組織者』論文における『中央委』細胞論』としての全党軍事組織化を要とする体系的非合法党建設における組織路線においても、現実の政治過程における戦略的中心をなす政治闘争の組織化に対して、どのようにして基本組織を軍事組織として打ち鍛え、党のための闘いを貫徹していくのかという点では、極めて曖昧（というより、ほとんど触れられていない）であつたということである。したがって、二三月において提案された「第二段階論」が、ほぼ同盟の路線として確立されつつある四六月段階において、沖繩闘争の戦略的位置付けにおける理論的深化を獲ちとりつゝも、現実に行進しつつある政治過程に対する戦術問題（とりわけ、闘争戦術・統一戦線問題）については明確な方針たたりえず、蜂起・戦争派潮流形成と武装進撃論として、それまでの方針を踏襲したのである。（

統一戦線問題については、8・25ブロックの形成と秋期闘争という条件の中で、「党統一戦線」として総括した）。「第二段階論」の以上のような限界と相補う形で提起された沖繩闘争方針は、以降の沖繩地方建設にとつて、不断に曖昧な部分をなさざるをえなかつたのであり、指導部において緊密な総括がなされないうままに、なしくずし的に地区党路線へと転換することによって、逆に、「第二段階論」のもつていた限界をも隠蔽し、路線上の切開をするをも妨げたことについては、指導部建設における破壊の主要な一要因として、深く総括しなければならぬ。

以上の確認の上に立って、いわゆる「結節環——立ちはだかれ」論を総括するならば、第一に、その戦略的な位置付けにおいて、「日帝の攻撃一般を主張する帝国主義的経済主義を克服し、沖繩の国際的、国内的な構造的な位置を明らかにし、したがって、その闘争方針の戦略的な方向を明らかにした」（「烽火」二八六号）という点において、第二次ブンドから12・18路線における限界と誤まりを明白に克服していることをはつきりと確認しておかねばならない。だが、第二に、これは「12・18路線の否定的側面の残滓を残し、現下の国際階級闘争を民族解放闘争と帝国主義の対峙として描きだし、現実に行進する帝国主義の支配（経済的・政治的・軍事的）の性格を一面化し、また、日本プロレタリアートの国際主義的任務を民族解放闘争との結合一般に流し込み（合流論的傾向）、帝国主義によって持ち込まれるプロレタリアートの政治的分裂——社会排外主義との闘争を媒介としてこの結合はあることとの決定的重要性を明確に位置付けることができなかつた」（同

上）のである。すなわち、この限界とは、戦略的位置付けの深化一般に留まる客観主義であり、沖繩闘争に即していえば、「本土主義」としての残滓を色濃く持っていたということである。

だがわれわれは、「結節環——立ちはだかれ」論の総括を以上の政治方針上の戦略論上の総括に留めておいてはならない。なぜなら、戦略論上の総括だけでは昨四六月闘争以降、沖繩現闘メンバリの突きあたつた困難とそれを同盟全体としては外在化したこと、すなわち、中央指導部として総括し、指導することができなかったことの根拠を明らかにしえないのであり、それは政治局——中央委員会としての単一の指導部建設の問題として相対的独自の領域の総括としてなされねばならないと同時に、たとえ、いまだ組織経験が浅く、組織的訓練を十分に積んでいないとはいへ、地区における反帝戦線カードルとして沖繩に派遣された沖繩出身のNが、沖繩における階級闘争に直面し、八武装進撃せよというスローガン及び武装闘争そのものに疑問を感じた途端に直ちに政治的解体へと向かわざるをえなかつたという問題を切開することができないからである。

「結節環——立ちはだかれ」論は、「結節環」（沖繩闘争の戦略的位置付け）から直ちに「立ちはだかれ」武装進撃（闘争戦術）へと直結させ、この沖繩闘争の未来から規定される政治的・組織的獲得目標が極めて一般的にしか（潮流形成論）示されえなかつたこと、即ち、政治過程主義的（戦略戦術主義的）限界をもつていることが第一である。だが第二に、この「立ちはだかれ」武装進撃」方針が急進主義的傾向を濃厚にもつているということはあ

つたとしても、この方針そのものをそれだけとりだして政治過程主義であると考えすることはできない。階級闘争において、一つの転機をなすような政治過程に対して党として、総力を挙げて闘うことを、党の力量であるとか、理論的不鮮明さの故に（指導上の問題としては、このことを一切合理化することは許されないとしても）回避することは誤まりである。したがって、この方針の政治過程主義的・急進主義的限界とは党の全体の路線との関係において、すなわち、その提起の仕方にある。この限りで総括すべきは、「第二段階論」との関係である。反スタ・トロツキズムの実践的克服（急進主義的克服）を中心的課題として掲げた「第二段階論」との関係においていえば、この「立ちはだかれ」―武装進撃―方針は、いわば一種の路線上のスキマを生み出しているものであり、七二年四―六月闘争の総括軸となつてはならず、なしくずし的に総括軸が移動しているのである。こうした過程の中で、この沖繩闘争方針は極めてプラグマチックな政治過程主義な方針とならざるをえなかったのである。だが、このことは「第二段階論」の次のような欠陥によって増幅されて現われた。綱領問題について、「最大限―最小限綱領―民主主義闘争」として提起することによって反スタトロツキズム（実践上は急進主義）の克服に向けての画期的意義をもちつつも、資本主義批判を最大限綱領の基礎づけとしてのみ捉え、12・18資本主義批判を前提的に建前化するることによって、第一に、戦略問題において日本革命戦略を最小限綱領に等置するという誤り（臨時革命政府の綱領問題として立てること―ここから、戦略問題を政策体系へと横すべりさせる傾

向を生み出した）によって、国際党派闘争が欠落し、一国主義的傾向に陥ったこと、第二に、最大限（共產主義）と最小限（政治的民主主義―臨時革命政府の政綱）を切り離し、戦略で結合させるといふ政治力学主義を生み出す限界をもっており、このことはまさに、反スタトロツキズム批判の不徹底を意味する。そして第三に、日本革命戦略を理論的に基礎づけざるべき方法と視角として、国際的帝国主義体制の絡みあいから日帝を位置付けるべきこと（国際権力要素としての日帝の位置）と、日本資本主義発展の分析からその構造的特質を明らかにして日帝の権力性格を鮮明にすることとして示したのであるが、ここでは理論方法上の視角として、第一は日帝の権力規定としての提起が混在することによって、二つに方法的に帝国主義権力を規定する場合に、その国際的位置と資本主義的内的発展からの規定をどのように理論方法上、統一的に説明するのが明らかにされていなければならない、その両者が全くバラバラになってしまっているということである。（というよりも、ここでは「日本資本主義発展の構造的特質―日帝の侵略性」に力点がおかれ、それとの関連において「国際権力要素としての日帝」を位置づけるにすぎない。ここから、帝国主義世界体制の分析、国際的政治経済の動向の分析が不断に捨棄され、一国主義的傾向を強めることになった）これらの限界は、政治方針上の一定の客観主義的傾向をもたらされざるをえないし、また現実の階級闘争における政治的分解、党派闘争が欠落するという傾向へと陥らざるをえない。

以上、総括してきた如く「第二段階論」における反スタトロツキズム批判の不徹底性と戦略問題における客観主義的傾向、一国主義的傾向との関連の中で「立ちはだかれ」―武装進撃―論の政治過程主義的な限界が増幅され、このことを徹底して切開しようとするような指導部の閉結を形成しえてこなかったという指導部建設における破綻によって、とりわけ、沖繩地方委に対する指導責任の放棄・無責任性を許容してきたことを総括しなければならない。

第三章

「五・一五体制」論―「烽火」（二八六号、七三年五月五日）及び「反帝戦線」（首都圏委機関紙十号）について

昨春五・一五闘争の前提に提起された首都圏委論文（「反帝戦線」十号）及び「烽火」論文（二八六号）三篇「五・一五体制」一年と沖繩闘争の課題（）は、わが同盟の沖繩闘争論を総括しつつ、「党建設の第二段階」とりわけ「その本格的展開」としての昨秋以降の政治路線を、われわれの実践上の経験の総括の上に立って豊富化しようとしている点で、極めて積極的な意義をもっている。すなわち、これらは、いわば沖繩闘争における「第二段階」ともいべき位置をもち、この一年余の第二段階の実践の成果の上に立っていることである。「われわれは、安保（沖繩「返還」協定）粉砕、日帝打倒、臨時革命政府樹立の総路線の中に沖繩闘争を位置づける」（反帝戦線論文）ために、第一に、五・一五沖繩「返還」が、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の危機 中における米

帝のアジア侵略反革命体制の戦略的再編の要石をなすと共に、日帝の侵略反革命―他民族抑圧への再編、強化、それにむけた官僚的警察的独裁の強化という統合形態の反動的転換への結節点をなすものであり、こうした日米帝国主義の戦略的再編と、その政策を「五・一五体制」（註）として捉え、第二に、この「五・一五体制下」に進行しつつある日帝による沖繩人民への略奪・抑圧の強化の現実に足場をおき、この日帝ブルジョア支配の強権的進行に伴なう沖繩階級闘争の変容に着目し、沖繩における階級闘争をおし進めるといふ観点から問題を立てている。このことによつて、「安保（沖繩「返還協定」）粉砕・日帝打倒・臨時革命樹立」にむけて沖繩闘争を闘うという沖繩闘争の政治路線上の位置が鮮明になるであろう。

（註）

「五・一五体制」―五・一五沖繩「返還」を現代の帝国主義の国際的・国内的体制の戦略的転換点をなすものと考え、る限り、「日米共同声明―七〇年安保―五・一五沖繩「返還」政策を特徴づけるものとして「七〇年安保―五・一五沖繩」返還」体制というのがより正確である。

以上のように、この二つの論文の積極的意義は、「構造的脆弱性―自乗化された侵略性」から理論的に基礎づけるという、理論上の限界をもつていたとしても（このことは、党全体の課題として残っている）沖繩闘争論の客観主義的傾向を克服せんとしたところにある。とりわけ、五・一五以降の日帝による沖繩の収

奪・抑圧の強化という階級支配の具体的現実を立脚し、沖縄に於ける階級闘争の発展・推進を媒介にせず、党の政治路線の貫徹がありえないという視点は「第二段階」の実践上の成果、とりわけ部落解放運動への実践的関わりや、入管闘争における「在日たることの重み」として把えてきた実践上の経験から獲得しえたものであると同時に、何よりも、昨秋以降の沖縄地方委員会の実践的、政治的成果にもとづくものであることを確認しておかねばならない。（「烽火」No. 二八五、一面、「強化進む侵略反革命の要」）

「沖繩」等を参照せよ）
これら二論文の積極的意義を以上のように評価した上で、ここでは主に「烽火」論文を中心としてその限界と克服すべき問題について総括することにした。そして、それと関連する限りで首都圏委論文をとり上げることにする。（というのは、前者は機関紙に公表されることを予定した論文であるということから制約はあるにしても、同盟の指導文書としてかかれたものであり、その意味で指導上の問題として、単にそこに展開されている内容上の問題についてのみ総括すればよいということにはならないのであって、むしろ欠落している部分にこそ総括せねばならない問題が含まれているからである。）

「烽火」論文の限界は、結論的に言えば「第二段階論」の限界を共有しているということである。とりわけ、沖縄闘争を戦略的に位置づけ、わが政治路線の中軸にすえているが故にその限界はより鮮明である。
問題は二つであり、それらは相互に結びついた欠陥をなしてい

り、このことは沖青委からの「民族派」の大量の離脱、現在の沖青委の組織的壊滅状況として進行してきた）、返還粉砕派の四分五裂の解体（フロント等の構成系諸党派の党的分解と、沖縄青年運動の自立化とその政治的分解と再編の進行、急進的「民族派」の登場―琉球独立党・琉球人民軍等）として展開してきた。日帝ブルジョアジーの階級支配の強化（五・一五体制）に直面して「復帰」に対する沖縄人民大衆の幻想がきわめて冷酷に打ち破られていく現実の中で、沖縄の階級闘争は新たな成熟を遂げつつあり、共産主義運動との結合を開始しつつあるので、五・一五沖繩「返還」以降の急速度の政治的分解の過程は、そこに様々な政治的・理論的偏向を含みつつも、明らかに沖縄階級闘争を発展させ、指導すべき主体（共産主義者）の産みの苦しみを示しているものに他ならない。そして、その政治的・理論的な分岐は、まさに、「民族問題」に対する態度をめぐって展開しているのである。この問題は沖縄人民の解放とその打ち立てるべき権力の性格態度と密接に結びついた問題であると同時に沖縄における階級闘争を発展させるといふ見地を捨て去らない限り、まず共産主義者に問われる、結合し指導しうるための条件として、その意味ではレーニンも言う如く、共産主義者にとっての積極的問題なのではなく、消極的な、しかし不可欠の条件としての問題であり、五・一五以降の過程はこの問題を避けて通ることを許さないのである。本土―沖縄を問わず、共産主義者（党）及びプロレタリアートはこの現実を直面している政治課題に対して自らのアイマイさを残してはならないのであり、そして又、我々が沖縄闘争において実

る。その第一は、路線の提起の仕方の問題であり、第二は、結論的客観主義の残滓である。

まず前者の問題について、「第二段階論」における大きな欠陥は、路線問題を戦略論としてのみ把え、それを主に政治理論上の問題として提起することによって、「大胆に着手せよ」論文では、文字通り、最終章（組織）が欠落していたことにある。この論文においても、そうした欠陥はそのまままひきつがれているのであって、沖縄闘争の戦略的位置づけの政治理論上の緻密化等と同義のものとして把握されている（事実、ここでは、沖縄闘争論を媒介にした戦略論の緻密化は、大きな前進を示しているものであり、その場合、戦略問題の立て方における視点の転換をも含めて、先に評価したような大きな意義をもつものである。しかし、それは依然として「戦略論」でしかない）。このような戦略問題を政治理論上の問題としてのみ扱っていくという「理論主義的偏向」は、現実の沖縄闘争において、いかなる問題をめぐって、政治的分岐が形成されているのか、そして、われわれ（共産主義者）は、それにどのような政治的立場をとるのか、そして、その立場（ないしは態度）を基礎づけるべき理論問題を徹底して解明していくという作業を、逆にアイマイ化させることになるのである。

五・一五沖繩「返還」をめぐって、大別して「無条件即時返還」「復帰派」「奪還派」「返還粉砕派」として形成された政治潮流は、いわゆる「五・一五体制」としての帝国主義者の攻撃の中で政治的分解を遂げつつあり、それは復帰協の解体（一〇・二二国際反戦デーにおける、社共分裂集会）、奪還派の破産の表現であ

際上の政治勢力を形成していないからと言って、否、むしろそうであるからこそ、現に運動が直面している、すぐれた実践的な政治問題を回避してはならないし、厳格なプロレタリアートの階級的な思想と理論でもって応えねばならないのである。

五・一五沖繩「返還」以降の情勢がまさしく政治的・理論的に答えねばならない新しい課題を突きつけているのであるが、「烽火」論文における戦略論的アプローチはこの問題に真正面から取り組まず、結果として回避している（理論問題において徹底性を欠いている）のであってここからこの論文は、きわめて実践性を欠如した「理論主義」へと陥り、党の指導文書としては路線的展開を為していないという限界をもったのである。「社会排外主義との闘争」が、単に沖縄闘争方針における視点の深化以上を出ず、実践的には必要性の強調にとどまり、又党派闘争（統一戦線）が欠落しているという限界も、以上の限界ないしは欠陥の結果にすぎない。こうした限界はどこに根拠をもっているのだろうか？我々はこれを路線の提起の仕方の問題として総括しなくてはならない。すなわち「第二段階論」においても、又この論文においても、△路線△戦略（政治路線）△という把え方が根底にあるのであり、ここから不断に路線問題は戦略問題としてのみ把えられるという傾向を生み出したのである。しかし、共産主義とは現実の運動であり、党の綱領、戦略は実践的に検証され、確認されていかなければならないのである。ところで、すべての実践はたとえ自然発生的な大衆運動であっても必ずしも戦術をもつものであって、どのようなレベルのものであれ「戦術のない実践」という

のは背理である。ただ共産主義者(党)の駆使する戦術は労働者階級を先利益だけでなく運動の未来を代表し、支配階級へと高め上げ、究極目標(共産主義的社会革命)を担いうる主体へと高め上げ、一切のブルジョア社会の矛盾と腐敗に対する闘いを通じて、完極目標への水路を切り拓いていくという、目的意識的な首尾一貫した戦術であるという点において、他のブルジョアの小ブルジョアの戦術と決定的に異なっているようにすぎない。

だからこそ、党の戦術は、綱領・戦術に基礎づけられなければならないのである。このように問題を立てるならば、党の路線とは、常に綱領・戦術・組織・戦術として提起されなければならないのであって、たとえ、綱領を設定しえていない段階であり、理論的に明らかにしえていない部分が残っていたとしても、又、いまだプロレタリアート自身が政治的経験を積んでいない(階級闘争の成熟の問題)ことからくる制約があったとしても、そうである。ただそうした段階においては、共産主義者(党)は、路線提起において、その多くの部分を、経験(階級闘争の歴史的教訓をも含めて)や、階級的良心、あるいは、マルクス・レーニン主義の思想的確信など、すぐれて、共産主義者(党)の思想性に依拠しなければならぬというにすぎない。だからこそ、こうした段階においては、すぐれて指導性の問題が問われるのであるが、しかしだからといって、一定の思想性をもったものであれ、党の路線は、体系性をもって提起されなくてよいということでは決しないのであって、そうでなければ、路線は不断に実践性を欠如するか、あるいは、逆に戦術主義を生み出さざるをえないので

である。わが同盟の路線形成において「第二段階論」のもったきわめて大きな意義を決して清算することなく、その上になつて、その路線形成における過渡性、そこから来る限界を明確に総括しておかねばならないのである。

第二に、「烽火」論文における結論環論的客観主義の残滓とは、まさに、上記の問題の結果にすぎないのであるが、ここでは、どのように現われたのかという点について、簡単に総括しておこう。ここでは、沖繩闘争の戦略的位置づけと、「七〇年安保一五・一五「返還」体制」下に進行しつつある帝国主義の支配の性格と階級闘争の特徴づけとが、いまだ依然として分裂しており、「結論環」論のもった限界を共有している。いうまでもなく、前者についても、とりわけ後者については、より緻密化され、又現実に立脚して展開されているという点では、先に評価を与えた通りである。にも拘らず、現実の資料に基いて分析されているにも拘らず、依然として後者については、日帝ブルジョア権力の攻撃一般の暴露と、沖繩における階級闘争の特徴づけ一般に終っているのは、上で述べた様に、この一年において、沖繩闘争が、そして沖繩階級闘争が、共産主義者(党)及びプロレタリアートに何を突きつけているのか、又、この過程における諸党派の政治的分解が何をめぐって生じているのか、ということこそを明確に把握していないところから、実践上の契機を見失っているという点に根拠をもっているのである。(沖繩地方建設過程における〇〇問題とは、まさに、こうした問題として総括されねばならない)。

以上の「烽火」論文についての総括との関連において、「反帝

戦線」論文に簡単に触れておく。先に述べたように、「烽火」論文と共通する積極的意義について確認した上で、この論文は、「烽火」論文を一步越えて、現実の實踐的要請に答えようという意識に明白である。とくに、そのことは、「第三章、諸党派の沖繩闘争批判」の展開において、そうである。だが、結論的に言えば、現実の沖繩闘争における政治的・理論的に遭遇している中心問題に一步接近しながら、その問われている問題(民族問題)にわれわれ自身がどう答えるのかという点を回避して、「第四章」の日帝の攻撃一般の暴露と、われわれの政治路線を対置することによつて結局、「われわれの路線に内在的に位置づける」という意図は、全く挫折してしまつたのである。このことは、諸党派、諸グループの評価と批判において、批判の基準が一定せず、党の立場がどこにあるのかはつきりしないという欠陥、従つて、悪く言えば、批判的批判の傾向に流れていることに表現されている。いいかえれば、現実の運動から突きつけられている政治的立場について、理論的に考えぬかれて提出されていないということ、従つて実践的帰結が何ら出ていないということである。このことを、「反復帰論、独立論などのグループ」に対する批判と、「中核派」批判にそつてみておこう。

まず、第一のグループに対しては「沖繩人民にとり、日帝に対する闘いの」拠点」はいわば民族的傾向をおびざるをえないことは当然であり、ことと結合して、反復帰、独立論などは生み出されたのである」として、これらの政治グループの登場する客観的根拠について示している。だが、これに続いて「だがしかし、こ

れは何も現実の日米帝国主義による沖繩の政治的・軍事的・経済的支配を打倒する戦略をぬきにしての「世界革命によってしか、沖繩人民の解放はありえない」ということを容認するものではない」として、反復帰・独立論者たちの評価と批判にはいる直前でちゅうちょし、問題を回避してしまつている。(実際、このグループの中で「世界革命によってしか……」というきわめて粗雑な主張をしている部分があるかどうかかわからないが、もし、いたとしたらもつとも質の悪い部分であるに違いない。何故なら、これらのグループの主張はむしろこうした帝国主義的経済主義への反発から形成されているのであり、もしこれら「民族派」グループがこうした主張をするとしたら、彼ら自身、自分で一体何を言っているのかわからないほど混乱した主張だといわねばならない。しかし、いずれにせよ批判する場合にはもつとも質の良い部分を対象にしなければならぬのであって、そうでなければ、我々は問題の核心に迫るのに余計な回り道をしなければならぬのだから)。そして、この後につづけてレーニンの民族問題についての態度を簡単に抽出して、それにつづいて、「従つて、反復帰論者たちはレーニンにもつと学ぶべきであり、沖繩人≠異民族論をあまりとておぼろげに示さなければならぬ」という説教でお茶をにごしている。これは、全くの日和見主義であり、われわれ共産主義者(党)は、こうした沖繩の歴史と現実の中で客観的根拠をもつて登場してきた戦闘的民族主義者(≠民主主義者)に対しては、説教をするのではなく、その誤まりと闘わねばならないのである。こうした説教からでてくる実践的帰結は、きみたちは、

沖繩人＝異民族である主張をもつと徹底して主張したまえ。われわれは、そうした問題は別に大した問題だとは思っていないし、沖繩人が異民族であろうとなかろうとどちらでも大した違いはない。ただ、きみたちが、レーニンをよく学んで、悪質な支配者どもの独立論に足をすくわれたり利用されたりしないことを希望するし、われわれは、きみたちが、そうした道に踏み込まないように見守っていてやろう」ということである。これは、やはり全くの日和見主義であると言わねばならない。

次に、中核派（沖青委）批判についてみよう。復帰協運動の評価についての沖青委パンフを引用した後で、「（復帰要求に）、『帝國主義的民族内部の民族的分断』としての日本帝國主義の分断支配を打ち砕く民族的階級的契機を求めんとしている」と、かれらの主張の要点を紹介し、要約している。だがここで又もや、復帰運動についての中核派の評価そのものについて批判しなければならぬ時に、この問題を回避して、次のように全く異った基準から批判している。即ち「だが、奪還論は、自己解放などという意識変革と主体の認識に階級闘争を切りちぢめるものである急進主義イデオロギーに立脚しているかぎりにおいて、日和見主義に転落せざるをえない」と。たしかに、我々は、彼らの路線のイデオロギーの基礎はこうした人間主義であり、あらゆる機会を通して、その批判を行なわねばならないのであるが、しかし、ここで問われている問題について、何ら正面から対決しないで、こうした基底還元主義的に批判することは全くの批判的批判にしかすぎず、『小ブル急進主義は、結局小ブル急進主義にしかすぎない』

といった以上のことを言っていないし、そのことによつて、我々自身の政治的立場を鮮明にするということとを避け、ごまかしているとすれば、これはむしろ我々自身にとつても有害無益であるといえよう。

資料二

沖繩闘争終焉論を粉碎し、沖繩闘争の革命的発展をかちとれ

6・15闘争の勝利へむけて
同盟中央書記局（文責・本田篤紀）

七二年五・一五以降「七〇年安保（沖繩「返還」協定）粉碎—日帝打倒—臨時革命政府樹立」として沖繩闘争を基本的な革命戦略の中に軸的に位置づけている我が同盟の主張は、文字通り「小党派」であり、新左翼総体としては、もはや沖繩闘争を戦略的観点から取り組めなくなっている。それが沖繩闘争終焉論がまかり通っている今日の事態の本質である。（マル青同、革マルを筆頭に、中核派、赤軍系、沖共闘系）

沖繩闘争に関して中核派は、六九年以来一貫して戦略的軸を喪失しているし、彼らの依拠して来た沖繩小ブル階級の分解と没落の中で、文字通り、革マル共々後退の道を歩んでいる。又マル青同も、「終焉論」の先兵となつて、五・一五闘争の庄殺に乗り出している。戦線の北熊本闘争の一定の意義を自らすて去り、「挙国一致体制」に日帝の攻撃に対するバクロの環をおき、「田中政府打倒—反動諸攻勢粉碎」（実は、筑波粉碎のみ）として、プロレタリアートの武装解除に奔走している。

この様な状況の中で、客観的には「五・一五」を媒介にして戦略問題を巡る党派闘争が開始されようとしているし、又、種々の情勢はそのことの積極的推進を我々に要請しているといわねばならない。そして、まさに、その我々自身が決定的な飛躍をかちとらない限り、その要請に応うるべくもないものとして、現在の我々の置かれている位置があり、この間の一連の沖繩を巡る問題、とりわけ、「山口君闘争」を媒介にした「沖解同」の問題の本質はかかるものとしてあるのである。

(1) 沖繩闘争を巡る新たな情勢とは何か——それは、実はすでに昨二八六号三面（八木沢論文）において予見的に展開されていることであるが、文字通りその「予見」が現実急速な進行を開始し、「予見」以上の重要性をもつて我々の前に提起されていることである。

五・一五の本質を我々は、二八六号論文において①日米帝國主義による、より徹底した侵略反革命前線基地としての強化、②そして、それとまさに不可分なものとしての沖繩人民に対する差別・抑圧の強化＝人狼的「略奪」＝一体化政策、官僚的警察的独裁による差別分断支配の強化——として提起したが、その「五・一五体制」の具体的進行が更に「返還」前後に於ける物価急騰、米軍基地の強化と自衛隊の進駐、「本土」資本の土地買い占め等々として繪じて沖繩人民をして次第に自らの沖繩から追い出され

ていく状況を招来せしめつつある。こうした状況の中で多くの沖繩人民は職を求めて「本土」に渡るが、既に関西地方で生じた如く、あの第一次大戦後の不況期の「朝鮮人、琉球人お断り」といった差別と全く同様の現実が待ち構えているのである。」という情況の飛躍的な顕在化をもって進行しつつあるということであり、これらがまさに国家の基地強化へ向けた体系的政策として一貫して遂行されており、とりわけ海洋博を媒介に決定的に遂行されていくという情況の中で、情勢分析の優位性では闘いえなくなってきたというということ、逆に言えば情勢の把握の優位性、正しさを以降の路線上の優位性、政治上の優位性、戦術上の優位性にまで貫徹しえなかつたことに根本的問題があるのであるが（これに関しては別途提起している）、基地強化と闘い、一体化政策と闘い抜く具体的な戦術が要求されていることである。第二に、より重要な事は「沖解同（準）」の結成に象徴される如く、沖繩人民の闘いが急速に（運動一般ではなく、思想上、路線上の前進として）発展を開始していることである。「返還一奪還派」が日帝の五・一五攻撃の中で、文字通り壊滅、屈服させられていく中で、即自的な「返還」粉碎派等を生み出しつつ、ようやくにして「五・一五体制」と正面きって闘い抜ける思想と路線を持った主体が沖繩人民の中に構築されはじめたことであり、このことが逆に革命的左翼に「新たな地平における結合」を突きつけており、文字通り真正面から受けとめることを要請していることである。

(2)この二つの要素を軸にした「新たな情勢」に正面から応えきっていく事が、我々の革命的スローガンの正しさを積極的に労働者階級の中に普遍化させていく事の内容であり、又「終焉論」を粉碎し、「沖繩から朝鮮へ」とするマル青等の政治過程主義的、利用主義的部分に対する批判の武器たりうるのである。

(3)この様な中で沖繩地方委の四・二八基調に象徴される（ある意味での）積極的主張も存在する。沖繩地方委はこの様な情勢に応えていく為に、まず第一に従来のわが同盟の沖繩闘争論を「日米両帝國主義の軍事路線からのみ沖繩をみたところに最大の欠陥があった。」として総括しつつ「沖繩社会」の歴史的分析を通じて、簡単に言えば沖繩人民にとつての「沖繩解放」の視点を導入し、その上にたつて「五・一五」日帝の再侵略論に立脚した「沖繩革命」を主張している。我々は、この主張の当否はともかくとして（別途詳述）、我々の踏み出すべき方向性をさし示している点においては積極的に評価していかなねばならない。

二八六号論文は、方法的には、沖繩を「日帝・ヤルタ・ジュネーブ体制」の視点で位置づけることを定式化しつつ、同時に「五・一五」そのものを、一方において「差別分断支配の強化」として把える視点を提出している。だがしかし、この提出の方法そのものは、当時の具体的な分岐（返還一奪還派、粉碎派、民族独立派）として、その「差別分断」の政治的評価が遂行されようとしていた事態に対しては、解答たりえないものであり、その意味での、政治主張一実践としての有効性にまで到らしめることが出来なかつた点における不充分性を持っていた。

そして、この四・二八沖繩地方委の文書は、主観的には、その限界に正面きつて、前述した方法によって答えようとしたのである。

り、それが「五・一五」を「三つの矛盾」として把える仕方であり、日帝の攻撃を「新植民地主義的支配」として規定づけようとした根拠である。にも拘らず、「新植民地主義」という概念規定のあいまいさ、あるいは、「沖繩革命」の提起のアプロオリさ、あるいは「三つの矛盾」の恣意性、等々の限界や誤りをも同時に内包している。我々は、それを踏まえて、なおかつ、沖繩地方委が提起している諸問題に関しては、同盟総体の課題として積極的に深化していかなねばならないものとして存在していることを認めなければならぬ。

(1)「返還」以降の二ケ年を経た今日の情勢の主要な特徴は、①「五・一五体制」の反動の本質が、増々明らかに暴露されつつも、日帝の強権的遂行が貫徹されつつあるということであり、それを巡って様々な闘いが展開されている、ということ（海洋博など）

②矛盾の顕在化と、沖繩人民の闘いの持続と尖鋭化にも拘らず、本土労働者階級の中には「沖繩闘争終焉論」が、マン延し、日帝に屈服していること、革命的左翼も例外ではなく、戦略的基軸を失っていること（排外主義の抬頭と主体の危機）

③その中で、文字通り、民族主義的思想を克服して、労働者・農民に依拠して沖繩闘争を、階級的見地から把えはじめた新たな運動が、序々にではあれ、沖繩人民の中で培われはじめていくことである。

(2)「五・一五体制」の反動の本質と、五〇年海洋博攻撃の本質

①五・一五沖繩「返還」は、文字通り第三次琉球処分であり、「本土」一体化政策は、日帝の沖繩支配の常とう手段であり、最局的に沖繩を破滅に導くところの政策である。

②従つて、「五・一五体制」に対する闘いは、決して「安保体制」一般、日帝の軍事路線一般に対する闘いのみとしてあるのではなく、「本土一体化政策」―「更なる『同化』・抑圧・棄民政政策の推進―徹底収奪」に対する闘争として把握する必要がある。この事を抜きには、沖繩闘争は、一般的（マル青同様の）安保体制や四次防に対するバクロに横すべりさせることになつてしまう。（この視点抜きには、沖繩基地解体の主体と戦術が生み出しえない点、決定的に重要なのである）日帝は、「本土一体化政策」の強権的遂行を通して、（屋良を手先としながら）沖繩人民に対する「同化」差別・抑圧・棄民政政策を遂行していく中で、沖繩人民の戦いの陣地を根こそぎ奪いと

り、圧殺しながら、沖繩の全経済・政治・文化を「軍事基地社会」に徹底して相応した、そして屈従したものとして再編成していく中で、文字通り沖繩を「侵略反革命前線基地」として打ち固めんとしているものであるからして日帝にとつては、「本土一体化政策」の成功的遂行こそ、「沖繩基地」の強化の「要」なのである。（それこそが、六九年二・四ゼネスト―コザ暴動などに対する恐怖の鎮静剤なのだ）

(3)沖繩解放運動の四つのピーク（戦前）

「その第一は、明治二〇年代の農民による人頭税廃止を中心

とする旧制改革運動であり、第二は、この農民の運動をふまえ、一歩前進させた明治三〇年代の沖縄の自由民権運動であった。そして第三に、これが徹底的に弾圧され、挫折をよぎなくされた後、明治四〇年代には「沖縄人も日本人である」ことを実証し、そこに沖縄人の解放を求めるという否定的な沖縄学の運動があり、一九二一年、「本土」に遅れること三〇余年にして漸く制度上の差別が撤廃されたが、それ以降も、依然沖縄の歴史が解放へと迫りつかないが故に、第四に、あの戦時下の昭和一〇年代に至るもなお反戦運動を展開した輝かしい社会主義運動が開花していくのである。制度上の差別が撤廃されていく中で、沖縄学の試みは成功したかにもえた。だが、皮肉な事に、この「本土並み一体化」の完成以降、沖縄近代史上最大の残酷史が、そのピークを迎えたのである：それまでまがりなりにも収支均衡のとれていた沖縄経済は赤字経済に転落し、それは年々累積され、一九二七年には八〇〇万円台に達した。こうした状況を背景にして「ソテツ地獄」が現出された。主食を買う金さえなくなった沖縄の民衆は、山野に自生するソテツを主食に充てざるをえなかった。だがソテツにはデンブン質とともに猛毒も含まれており、処理を誤まつて死ぬ者はあつた。地獄絵さながらの惨情を呈したのである。……日本はこうしたソテツ地獄に苦しむ沖縄から、「本土」の六倍もの税金をとりたてていったのである。||新里金福「沖縄解放闘争の未来像」より||

(3)戦後米軍と米軍基地からの解放を「現代の沖縄学」とも言うことは日帝の「本土一体化政策」との対峙と闘い抜きには不可能であることを踏まえ、反基地闘争、安保闘争を担うと同時に、その主体を培うべく「本土一体化政策」との断固たる闘争に立ち上ることである。

そして第二に、この闘いは同時に、「本土」プロ人民が沖縄人民と固く結合して連帯してゆく為の必要条件であることをしっかりと踏えることである。この「本土一体化政策」は沖縄人民に対する「同化」・差別・抑圧・棄民攻撃として具体的には展開されるわけだが、我々は従って、この日帝の「同化」・差別・抑圧・棄民攻撃に対する全ゆる反撃を組織すると同時に、それらの一切の根源が、沖縄の「侵略反革命基地」としての存在にある事を暴露し、それらの全ての闘いは、「沖縄基地」と、それを支えている「基地社会」の根底的粉砕へと向けなければならぬ。

(一)

(1)「国際海洋博覧会」——テーマ「海—その望ましい未来」(五〇年三月開催のめど)。自民党政府と屋良県当局が「万難」を排して推進している。「海洋博を平和沖縄のシンボルにする」と共に、これを機に沖縄を発展させたい。海洋博によって物価高、資材不足などの問題が派生しデメリットの部分が多く目につくと思うが、完成したらメリットの部分が多くなると思う。「・・・政府としては海洋博を延期する意志はない。」(七三年五月中旬根通相の訪沖時の記者会見)

うべき、「復帰運動」の展開が、文字通り、日帝の「沖縄の侵略反革命前線基地化」の策動の中にとり込まれ、七二年「返還」として、それ以降の「本土一体化政策」の推進として現下の情勢があるとき、「本土一体化政策」のもたらす、沖縄の未来の姿(半ば現実化しつつあるが)は明らかである。だとするならば、日帝の沖縄に対する「侵略反革命前線基地」の強化に絶対決する。現在の大きな防攻環は「本土一体化政策」に対する徹底した闘いの推進であり、又その闘いを基礎づける思想の強化、戦術の強化を図ってゆくことが大きな重要性をもって提起されているのである。そして、戦前土地整理・日露戦争の中で本格化した、沖縄からの労働力の流出は、戦前の「ソテツ地獄」の深刻化以降、第一次大戦から昭和期にかけて、増々構造化されていったことは、首尾一貫した日帝の政策として遂行された事を物語っているわけであり、現在の日帝の「五・一五体制」下の政策においても、それはより徹底された形で(なぜなら、第一に、沖縄の侵略反革命前線基地としての、徹底強化||より一層の「基地社会」化の為に、第二に、二〇数年間培われて来た沖縄人民の、戦闘的エネルギーを粉砕するというより鮮明な政治的野望の為に)表現されんとしている。

(4)ここにおいて「五・一五体制」に対する、「本土」プロ人民の任務は鮮明である。

それは第一に、何よりも日米帝の侵略反革命前線基地としての強化策動に対し、「国際階級闘争の結節環」としての重要性を込めて徹底した対決を組織しなければならない。そして同時に、こ

(2)基盤 ①直接事業 約八〇〇億 アクアポリス、博物館、海上公園地、②関連公共事業 約一二〇〇億 道路、港湾、空港、沿水、通信他、ほとんどが住民生活とかけ離れており、高速道路、空港(伊江島)等はそのまま軍事施設へ転用可能なものばかりである。

③その他関連事業 約六〇〇億円 本部リゾートゾーン開発 電力

主要プロジェクトは設計から完成に至るまで本土巨大資本の手に握られている。又開発は政府直轄の「沖縄開発庁沖縄総合事務所」が全面的に指導している。

(3)海洋博の本質——侵略反革命基地機能の徹底強化と沖縄の更なる基地社会化。

①「本土」一体化政策、「同化」、棄民攻撃の要である。

②沖縄経済のより一層の破綻と巨大資本の支配・収奪。③土地買い占め(七二年五月〜七三年五月で全土の六割が本土資本に買収されたが、ちなみに、暴力と武器で二七年間に米軍が奪った米軍基地は一六割である。④物価急騰⑤一時的な労働力不足(=疑制的な)と海洋博事業後の失業者の増大⑥農漁業の破壊⑦巨大資本による地場産業の解体・吸収・支配(パイン工場等)

③米軍基地に緊縛された沖縄経済の寄生的経済構造(沖縄経済の国民所得統計における産別構成比は、第一次産業一〇・九%第二次一九・一%第三次七〇%)が、この海洋博によって更に第一次、第二次産業の根底的解体・再編(四九一五〇年の一時的疑制的好況のあとで)を受け、一方での巨大資本の觀光政策で、

第三次産業（観光、レジャー、他）の一層の肥大化は、沖縄人民に「生産」からの徹底した「駆逐」を強要し、基地社会への依存を強要する。これは沖縄の労働者、農漁民階級への根底的な打撃を意味し、沖縄人民の一部は都市浮浪階層として、一部は沖縄からの流出としてその階級のエネルギーをその潜在的な安定を何よりも第一義のものとなし、恒久的な安定を保障するものと沖縄社会を大改造せんとしているのである。その野望を「基地とCTSと観光の島」化することなのである。

- ① キビ作農民の東京行動
- ② 金武湾を守る会の運動の中域湾その他へと拡大波及。公害（大資本反対闘争）
- ③ 県労協を主とした反海洋博運動。七三年六月に県労協（九〇単産五万人）の反対表明。
- ④ 日帝政府の攻撃の強化。

① 屋良県政の政府手先への徹底化

② 「本土」一体化による労働組合の系列化、政党の系列化等による排外主義の台頭と県労協の解体・再編攻撃、沖縄の政治的戦闘性の解体。「本土」への屈服の強要。（ex 一九六九年二・四・ゼネスト。）

③ 社大党は海洋博を承認。推進派へ。人民党（日共）は「延

期再検討」を主張している。だが実際は「海洋博会場周辺への整備事業」を目的とする「沖縄リゾート開発公社」への県支出を認めることによって関連工事の推進に手を貸している。（cf.「延期したところで、かえって労働者人民の苦悩は増大させられ、一層の零落と貧困がもたらされ、資本家はより巧妙に沖縄「略奪」の体制を打ち固めるだろう」全糖労委員長）

我には昨烽火二八六号において「国際階級闘争の結環」論を一方において「日本プロレタリアートの国際主義的任務を、民族解放闘争との結合一服に流し込み、帝国主義によって持ち込まれるプロレタリアートの政治的分裂」社会排外主義との闘争を媒介として、この結合はある事的重要性を位置づけることが出来なかつた」と総括した。その上になつて、我々は、この帝国主義的政治的分裂策動の「要」こそ「本土」一体化政策であり、現在のには「海洋博攻撃」として加えられている事をしっかりと見抜き、社会排外主義との闘争を含んで徹底的に推進してゆかねばならぬ。

資料三

日帝の「七〇年安保一五・一五体制」の環Ⅱ75年海洋博粉砕闘争を軸に、沖縄闘争の革命的発展をかちとれ

「中央書記局通達」NO 7

（七四年七月七日）

(1) 七五年沖縄海洋博は「七〇年安保一五・一五体制」強化の環であり、日帝ブルジョア権力による沖縄政策の強権的遂行である。

我々はこれまで五・一五沖縄「返還」の本質を、①日米帝国主義による、より徹底した侵略反革命前線基地の強化、②そしてそれを將に不可分のものとしての沖縄人民に対する差別、分断、抑圧の強化Ⅱ人狼的「略奪」Ⅱ本土一体化政策、③日帝の統治形態の反動的転換Ⅱ官僚的警察的独裁体制への転化をもつて、まさに強権的、暴力的支配としての遂行、として提起したが、その「一五・一五体制」の具体的進行が更に、「『返還』前後における物価高騰、米軍基地の強化と自衛隊の進駐、本土資本の土地買い占め等に、総じて沖縄人民をして次第に自らの沖縄から追出されてゆく状況を招来せしめている。こうした状況の中で、多くの沖縄人民は、職を求めて『本土』に渡るが、既に関西地方で生じた如く、あの第一次大戦後の不況期「朝鮮人、琉球人お断り」といった差別と全く同様の現実が待ち構えているのである」という状況の飛躍的顕在化をもつて進行しつつあるのであり、これがまさに、ブルジョア権力による基地強化へ向けた国家的、体系的政策として一貫して進行されてきており、まさに、七五年沖縄海洋博とは、

その中心環を為すものである。

七五年沖縄海洋博をもつての攻撃とは

① 日米帝によるアジア侵略反革命の前線基地としての強化Ⅱ海洋博の軍事的側面。軍事要塞としての沖縄を更に、海底基地建设、通信網の集中センターとしての軍事的中枢センター化等として、海洋開発の美名にかくれて、文字通り徹底した軍事基地の島へと仕上げようとしているのである。第二次帝国主義戦争において、日帝の軍部独裁権力は、沖縄を「本土」防衛の為の捨石（犠牲）としたのであるが、日帝は、今また侵略反革命戦争遂行への道を準備するに当って、単に、沖縄を防衛のための捨石とするだけでなく、明らかに攻撃拠点、前線基地とせんとしているのである。軍事的には、沖縄Ⅱ前線基地、「本土」Ⅱ後方基地へと体系化せんとしているのである。

② 基地社会への全社会的再編Ⅱ基地依存経済への徹底した改編、土地と海の略奪、農漁業破壊、独占資本によるCTS、コンベニアート建設等々として進行している事態は、一方における大規模な沖縄経済の破壊と、他方、その破壊を通じて、日本の独占ブルジョアジーによる寄生的収奪構造の創出及び、基地経済への純化として進行しているのであり、沖縄海洋博は、国家事業の名においてこの過程を推進しているのである。これまでも、基地労働者以外にも、沖縄労働者は、官公労働者を除けば、圧倒的に第三次産業部門に集中していったのであるが、基地合理化、農漁業の破壊による過剰労働力を一時的に海洋博に吸収したとしても、その終了と同時に、ほぼ飽和状態にある基地関連サービス業に吸収されえ

ず、大量に路頭に放り出されざるをえず、海洋博終了時には、沖繩の人口は、四〇万〇五〇万へと半減するであろうと予測されるような事態であり、しかも、こうした過程は、沖繩「返還」以降、急速に増大した「本土」への人口流出として現に進行しているのである。例えば、大学卒業業者で、沖繩での教職員への採用は、全県下でほんの少数しかいないという事実も、明らかに人口の絶対数の減少を示している。まさしく、海洋博を頂点とする沖繩経済社会の破壊と再編とは、国家的規模における沖繩からの沖繩人民の叩き出しに他ならないのである。

③「本土一体化」政策―差別・抑圧・「同化」攻撃の要としての海洋博―海洋博を頂点とする棄民政策は、同時に、その盾の裏面としての差別・抑圧・「同化」攻撃としての「一体化」政策でもある。それは、教育の反動的統制と不断の天皇一家族の訪沖活動として、又、「本土」へと叩き出された沖繩プロレタリアへの差別・抑圧の強化として（例えば、山口君虐殺、沖電気による島添さん不当解雇などは、まさに闘争を通じて初めて明るみに出されたもので、ほんの冰山の一角にすぎない）である。

④沖繩階級闘争、人民の闘争の圧殺―七二年沖繩「返還」―七五年海洋博へと至る日帝ブルジョア権力の以上のような体系的攻撃は、同時に、何よりも、復帰運動として未曾有の高揚をもちつてきた沖繩人民の闘い、沖繩労働運動の尖鋭化に対する徹底した圧殺を策するものである。それは、第一に、棄民政策―「一体化」政策として沖繩社会の破壊と再編として、文字通り、経済的、社会的（物理的）に、沖繩人民の闘争の物質的基礎を根こそぎ奪い

去ってしまったおうとする直接的な攻撃としてある。それは、基地合理化を軸にした基地労働者への解雇攻撃であり、沖繩階級闘争の中心を担いつづけている全軍労働体攻撃として、又土地闘争の伝統的闘争性を保持してきた農漁民に対して、海洋博、OTS建設「本土」観光資本etcによる農漁場の略奪として根こそぎ解体攻撃等々としてある。そして第二に、社会排外主義の大規模な育成・労働者人民への差別分断支配としてである。屋良（社共）は、沖繩経済の自立という幻想を、日本独占資本の積極的導入と、沖繩経済の資本主義的再編をもって計らんとし、今や、資本と国家権力の走狗としての役割を見事に果しつつあるのであり、海洋博の推進を日帝ブルの手先として奔走している。そして労働運動においても、「本土」労組への系列一元化により、その闘争性は奪われつつあり、本土労組の七二年北熊本自衛隊派遣反対闘争を最後とし、今春闘において文字通り、社会排外主義者共の沖繩闘争終焉宣言を発するに至った「本土」労働運動へと屈服してきているのである。

以上のような日帝ブル権力による沖繩人民に対する闘争圧殺攻撃にもかかわらず、七二年「返還」―七五年海洋博による沖繩人民に対する攻撃は、何よりも矛盾を顕在化させ、一方において、沖繩人民の闘争は、より一層の拡大として進行している（沖繩における自衛隊闘争、反OTS公害闘争、サトウキビ農民の大量の陳情闘争等々、又、「本土」における差別糾弾闘争等々）。

以上明らかにしてきた七五年海洋博を頂点とする攻撃が、体系的としてあるとき、海洋博粉砕闘争は、「本土」―沖繩プロレ

タリアの強固な結合と、共同の闘いとして打ち抜くことが、一切の日和見主義、社会排外主義との闘争の試金石としても、かつ、革命的左翼を真に打ち鍛えるものとしても環を為しているのである。

社共、革マルの公然たる社会排外主義者に続いて、革命的左翼潮流の中からも、沖繩闘争終焉論者―マル青同を生み出したことの責任を、断固たるマル青同の八・二五共闘からの放逐として推進してきた四・二八―五・一五―六・一五の成果を踏まえ、それを、より徹底的に貫徹していくことが第一の任務である。と同時に、「本土」―沖繩のプロレタリアの真の結合を破壊し、「本土」プロと沖繩プロの闘いを一層分離させ、分散させ、のみならず、沖繩プロレタリアートの闘いを沖繩現地と「本土」に分離させようとする主張（民族自決権派）は、現在の沖繩闘争の決定的な位置からして、単なる日和見主義にとどまらず、反動ですらあることを確認し、彼らとの徹底した闘いを組織しなければならぬ。（残念ながら、八・二五共闘に於いて、マル青同の沖繩闘争終焉論を我々と共同して批判してきたドトー派が、沖プロ政闘委の反動的主張（沖繩現地闘争は、在沖繩プロの任務であるとして、大和人との共闘を拒否し、又、海洋博はお祭りであるとする誤まった現状分析に基づく海洋博粉砕闘争からの逃亡）に、拜跪して日和見主義への転落の淵に立っていることに對して、断固たる批判でもってこたえなければならぬ。）

①社共、革マルの日帝美化、社会排外主義の躍梁、国民春闘―参院選議会主義路線への屈服としてのマル青同（準）の沖繩闘争終

焉論との政治的分岐、四・二八―五・一五―六・一五闘争の戦果を断固として拡大発展させよ？（略）

②七・二〇海洋博粉砕・沖繩解放現地闘争への圧倒的結集をもち、それを橋頭堡として、海洋博粉砕共闘会議結成を領導し、今秋全人民政治闘争の政治的基軸に押し上げよ！

③全国拠点大学―職場に、共闘会議の結成を！（略）

④日帝の沖繩政策、安保―五・一五体制への自らの敗北を合理化する日和見主義潮流との対決を強め、「本土」―沖繩を貫く単一の沖繩同建設計とその飛躍的發展をもちとろう！

⑤沖繩同建設計の意義と我々の立場―以下略（沖闘委以降、沖繩同に至る新左翼系沖繩青年運動の説明）

新左翼の政治的影響下で形成された沖繩青年の闘争と組織の分裂と再編の過程は、米帝の戦略（ニクソンドクトリン）の転換と再編の中で、七二年沖繩「返還」へと向う復帰運動の高揚と破産の中で、新左翼総体の敗北とその限界の露呈であり、かつ、沖解同へと至る過程はその克服の第一歩である。

即ち、七二年「返還」政策とは、一方では、米帝による沖繩占領政策の終了であると同時に、それは、日米帝によるアジア侵略反革命前線基地としての一層の強化であり、かつそれは日帝ブルジョアジーによる沖繩社会の全面的再編を強行しつつ、沖繩人民への徹底した差別・抑圧・同化攻撃（一体化政策）であり、そうした日帝権力の意図が徐々に明らかになるに従って、復帰運動の分裂、とりわけ最左派としての奪還論の破産が鮮明になったのである。と同時に、反日帝を反日（反ヤマト）として表現する民族

主義者を生み出したのであり、冲青委海邦派の形成（七〇・六）

と冲青同「返還」粉砕派は、こうして登場したのである。（中略）

これらに対して、七二年六月中核派と訣別した冲繩解放同志会は「……きわめて革共同指導部との路線的対立を鮮明に掲げて登場したのであり、この同志会を母体として形成された冲解同（準）は、第一に、「本土」―冲繩の分断攻撃に対して、真に、「本土」―冲繩プロ人民の結合を計るために、「本土」―冲繩を貫く単一の冲繩人民の組織化、第二に、奪還―「返還」粉砕の路線的対立の一面性を止揚せんとし、第三に、冲繩青年組織のもつていた小ブル性の克服を、プロレタリア人民の大衆的結集でもつて計ること、かつ、第四に、現に進行しつつある日帝の冲繩人民への攻撃（ひいては、「本土」プロレタリアへの抑圧強化）と闘う組織として（単なる県人会的な「本土」の冲繩出身者の親睦組織化の拒否）結成されたのであり、我々はこうした冲解同の基本的立場を高く評価し、それとの共闘、連帯から、冲解同の建設とその闘いを断固として援助しなければならぬ。

②現在進行しつつある冲解同内、右翼反対派の分裂策動はいかなる政治的性格のものであり、かつ分裂策動を許した指導部の弱点克服にむけて、我々の関係をいかに強化すべきか。（この項については、後稿「海洋博粉砕闘争とりわけ、七・二〇闘争を巡る冲解同内の分裂と我々の取り組みについて」）

(V)冲繩の地に、我同盟地方委を不拔の前衛として組織せよ！

④我が同盟の冲繩闘争総括（省略）

（六・一五討議資料（補）「我同盟の冲繩闘争論の総括と路線

問題」第〇章を参照）

②四・二八―五・一五に於ける冲繩地方委のスローガンについて（「補遺」を参照）

海洋博粉砕闘争、とりわけ七・二〇闘争を巡る冲解同の分裂と我々の取り組みに関して（略）

（以上文責 本田）

資料四

「中央書記局通達」NO 7 の補遺

加納 英 二

△解題▽ 以下に収録する文書は、七四年七・二〇海洋博粉砕闘争に際して、発行された中書記通NO 7 の補遺として、中央指導部間および一部の「関係者」のみに配布されたものである。

「(IV) (一) 冲解同結成の意義と我々の立場」への(補)

①冲繩解放同志会を軸にして形成された冲解同（準）の立場については昨年（七三年）十月の関東冲解同（準）結成報告から、次の部分を引用しておく。

「こうして緊急に問われている海洋博粉砕を中心とした、当面の『在日』冲繩青年の諸課題を真剣に考えるならば、我々はこれまでの新旧左翼の悪しき傾向をのりこえ、圧倒的に未組織の冲繩青年を広範な大衆組織へと統一しつつ、『日本』―冲繩を貫ぬく冲繩解放闘争の前進を断乎として勝ちとっていかねばならないと考えます。

このような立場に立って、多くの兄弟・先輩諸氏の温い支持と、共感を得て、我々冲繩青年は、七〇年代冲繩闘争の高場と

低迷の中で混乱と混迷を続けて組織的細分化と個人的活動を余儀なくされてきた冲繩青年運動の革命的大衆的な統一を目指して努力してきました。

……単なる共同闘争機関としてではなく、強固な同志的、兄弟的結合と単一に統一される冲繩解放同盟の創建は、我々多くの冲繩青年の共通の夢であり、今こそ、それが強く要請されているものであることを確信しています。

……関東冲解同（準）は、冲繩青年同盟と冲繩解放同志会を中心として、広く冲繩青年に開かれたものとして存在し、全体の利益と各々の△党派▽フラクションの利益をセクト的に処理せず、革命的、かつ民主的に止揚させる立脚点に踏んばって闘かう決意です。そして特に、関東における冲解同と同志会は、この間の組織的關係や各々の活動の総括を準備会運動の中に反映せしめ、もつてあらゆる困難、障碍、失敗、不信を冲繩解放の試練として主体的に受けとめ、すぐるプロレタリア国際主義の紅旗高々と、冲繩解放の旗鮮明に掲げながら、共に前進するものであることを宣言します。」

②新たな冲繩解放闘争への胎動の一つとして、冲解同（準）を評価し、支援してきている新里金福氏の言葉から引用しておく。

「昨年（七三年）十月に、関西と関東でそれぞれ在日本（本土）冲繩青年の組織として冲繩解放同盟があらたに結成され、これが七二年返還をめぐる、四派に分裂していた冲繩青年運動の三派を糾合して名前の通り冲繩解放のために立上がりました。それもこの組織が七二年返還政策と、その主軸をなす海洋

博に反対する青年運動を展開するなから、つかみとつた沖縄の未来を展望する組織だったことは、きわめて象徴的なことだろうと思います。関西と関東の沖縄解放同盟は発足から一つに結合し、やがて旧冬、沖縄の現地で旗挙げした沖縄解放同盟とこの正月(七四年)には結合をはたしたと聞きます……」

(V)の(二)四・二八一五・一五における沖縄地方委員会の基調報告及びスローガンについて

① 地方委員会の四、二八基調報告についての評価

(a)五・一五沖縄「返還」から二年を経つつある現在、日帝ブルジョアジーの沖縄政策が日々、沖縄人民をもっとも苛酷な運命に陥し込めつつある中で、しかも、屋良を筆頭とする社会排外主義者どもが、日帝国家権力の手先として、沖縄人民に「その苛酷な運命を甘受せよ、国家に従順なれ、そうしてはじめて、ブルジョアジーのおこぼれにあずかることができるのであり、そのみが唯一、沖縄人民が生きてゆける道である」と煽喝を加え、社共、革マルもそれに唱和してはやばやと沖縄闘争終焉を宣言し、あるうことか、マル青同(準)のように、必死に革命的左翼の一部たらんとしてきた部分も、日和見主義を全面開花させて、沖縄闘争終焉を唱えるに至るといふ、まさに、七〇年代階級闘争の帰趨を問われる段階において、この四・二八基調報告は、究極的には、

に日帝の沖縄支配政策の特殊性を、支配の歴史的蓄積から明らかにせんとする意図の積極的意義を把握した上で、その方法上の限界、内容上の誤まりについて検討を加える必要がある。

ここでは、「日本帝国主義の沖縄侵略—新植民地主義的支配粉砕!」というスローガンに帰結した内容を軸にして検討する。

基調報告において、日帝の沖縄政策を新植民地主義的支配と規定している根拠は、①日帝の矛盾のハケ口、②歴史的な収奪・支配の堆積の結果としてある現在の後進性、③「本土」以上の強搾取、とされており、④更に、その「歴史的な収奪・支配の堆積」とは、明治政府による「徹底した強収奪を内実とする特殊な植民地支配」である、ということに求めている。

既に、ここでは、沖縄は、明治以来一貫して日本の植民地であり、その根拠を、主に「強収奪、強搾取」に求め、その特殊性を「琉球『民族』と大和『民族』が祖先を同じくする事」に求めていると思われる。(「異民族だから植民地、同民族だから植民地でない、という分類方法は採用しません」という表現からして、こう判断しうる)。

いうまでもなく、こうした規定は、不十分というよりむしろ誤まりであり、厳密には何らの規定性ももっていないのであり、階級支配の苛烈さ、帝国主義ブルジョアジーの支配の性格から生じた現象の一つを特徴付けようとするものにすぎない(ここでは「植民地」という規定についていっているものであり、このことを、沖縄支配の特殊性を等閑視することと混同すべきではない。例えば、日向派であれば、この特徴を「『国内植民地』的位置にある

沖縄人民(とくに、沖縄の地に居住している)に、闘いの方向と任務を提起せんとすることを目標に、それを何よりも、日帝の沖縄支配の特殊性として、歴史的に明らかにするという方法をもって提起されたのである。

何故、沖縄がとくに、「基地とOTISと買春觀光の島」という歪な基地社会へと押し込められ、土地と海と職を略奪され、沖縄の地から叩き出されるという苛酷な運命へと陥し込められるのか——このことの特性を明らかにすることなくして、現に進行しつつある沖縄人民への略奪と抑圧の性格と、従って、不断に顕在化する複雑な様相をもった諸矛盾とを明らかにし、持続的かつ戦闘的に闘っている沖縄人民の闘争に明確な指針を与えることはできないということ、そして、そこからして、「日米帝国主義の軍事路線からのみ沖縄を見た」われわれの沖縄闘争論の限界の総括。

この二点についての基調報告の主張は、きわめて積極的意義をもったものであり、「通達、NO7」に採録した六・一五討議資料(「わが同盟の沖縄闘争論の総括」本誌二号収録)の総括と一致するものであり、後者において、「いわば『民族問題』」といった言葉で表現しようとした問題である。(なお、地方委が、第二次ブンドから12・18路線、及び全国委を一からげにして、「軍事路線のみから沖縄を見た」と総括している点については、六・一五討議資料で詳細に総括したように、きわめて粗雑な総括の仕方であると云わねばならないが、これは後で見ると、単なる粗雑さにとどまらない問題をはらんでいるのである。

(D)四・二八基調報告における沖縄地方委の主張が、以上のよう

もの」とするのであるが、これも比喩的、感覚的な表現としては認めうるが、しかし、これでもって厳密な政治的規定に代えようとするならば、明確に誤まりなのである。)

地方委が、「植民地支配」、「新植民地主義的支配」を比喩的表現として言っているのではない限り、およそ、基調報告では、その概念規定は、誤まっているし、一定の概念上の混乱があると云わねばならない。

植民地とは、帝国主義ブルジョア国家による他民族支配・抑圧の一形態であり(というのは、他民族抑圧は必ずしも植民地という形態をとるとはかぎらないから)、本来、無制限の征服欲、支配欲を本質とする資本が、労働者階級への搾取、従って、労働者階級への階級支配(近代ブルジョア国家は、階級支配貫徹と維持、強化の桿件であり、暴力装置である)に基づき、巨大な富の資本家階級への集積・資本家同士の競争と資本による資本の収奪もあって、独占資本主義へ転化することをもって経済の本質とする帝国主義段階において、独占資本の征服欲(内包的、外延的)は、文字通り、帝国主義国による他国家支配・侵略(この場合、被抑圧国、被従属国の国家形態は問題にならないのであり、前資本主義国が大部分、資本は自らの利害にそって欲するままに動く)植民地化をその主要な他民族抑圧の一形態とするのである。(ここでは、資本主義以前の植民地については、一応考慮の外におく)。

即ち、植民地を、帝国主義国による他民族抑圧、支配の主要な一形態と捉える限り、地方委の主張は、日帝の沖縄支配について、他民族かどうかという問題をあいまいにしたままで、「植民地支

配」と規定したのは、明らかに、短絡した論理であり、理論的誤まりであるといわねばならない。

明治の琉球処分以来の日帝の沖繩政策が、その強擄取、強収奪、沖繩人民への惨禍の集中、とりわけ苛酷な支配政策が、帝国主義による植民地政策とほとんど何の変わりもないということは全くの事実であり、この沖繩の歴史から目をそらすことは決して許さるべきではない。

しかし、この事実から、直ちに、沖繩人を異民族であるとしたり、まして、沖繩を植民地であるという帰結が導かれるわけではないことを明確にしておく必要がある。

従って問題は、第一に、明治維新の性格をどのように把握するかということであり、それとの関連で、一八七九（明一二）年の琉球処分をいかに把握するかということであり、第二に、琉球人（沖繩人）を同民族と捉えるか異民族と捉えるかという問題である。

理論的には問題はこのように立てられねばならない。

たしかにこれらについては、より具体的な歴史研究に基づく論証が必要ではあるが、しかしながら、現在われわれ（共産主義者）が直面している政治的課題に対して、原則上の政治的立場と実践的帰結は、以上の研究をまっしてはじめて獲得されうるというものでは決してない。

何故なら、例えば戦前の日帝権力の沖繩人民に対する皇民法政策とは、一方で同一民族としての一体性を強制し、他方で不断にいわば「沖繩人」≠「劣等民族」という偏見を強制し、

日共）である。

他の一つは、「日本資本主義は、薩摩の沖繩政策を資本主義的帝国主義的に継承し、きわめて深刻な沖繩差別を維持、再編しながら、民族形成≠民族国家をなした。」（「沖青委パンフ」）といった主張に見られるように、近代民族統一国家の形成でもって民族が形成されたとする機械的な民族論（これは、近代の歴史において、例えば、東欧におけるように、資本主義の発展が遅れた地域で主要に見られる多民族国家の例を見てもわかるように、一般的に「民族国家」≠「民族形成」は誤りであり、又、特殊沖繩について見ても、琉球王朝と薩摩藩及び清朝との関係、更に維新後、琉球処分に至るまでの明治政府の対応などに照らしても、そして何よりも、琉球において民族統一に向けた民族的運動というものが皆無であったということからしても、「民族国家」≠「民族形成」という把握は誤りであるのみならず、ブルジョア民族主義へと墮するものである）に基づき、沖繩支配の特殊性を帝国主義的政策一般に解消せんとする帝国主義的経済主義、これは政治的には空文句的に日帝打倒を呼号する急進主義、実践的には、復讐運動を左翼急進主義的に補完する奪還論の立場である。（中核派）

しかし第二に、琉球処分をもって、ブルジョアの民族統一国家の形成であるということ拒否し、国家的結合を否定せんとするサンジカリズムに対しても批判しなければならぬ。すなわち、沖青同に代表されるように、琉球処分の強制的・暴力的性格に対する反発から、日本国家に対して沖繩人意識と沖繩共同体を対置し、「日本国家は沖繩の深部にこいこむことなく沖繩人の上を、

総体として排外主義へと動員していったのであるが、明らかに、その根底において「異民族」≠「劣等民族」に対しては、民族的抑圧、侵略、強収奪を当然のものとするブルジョア・イデオロギーが貫徹しているのであり、プロレタリアートの思想的敗北に他ならないからであり、現在の日帝の支配についても、同一民族が異民族かに科学的結着をつけなければ闘えないというのは日和見主義であり、プロレタリア独裁の思想を譲りわたすものに他ならないからである。

これらの問題については、われわれはまず、明治維新から琉球処分に至る過程を、ブルジョアの民族国家の形成として捉える必要がある。

この場合、われわれは次のような見解をはっきりと批判しておく必要がある。

第一に、民族統一国家の形成として捉えることによつて、「民族問題」（≠沖繩問題）を一般性の中に解消する考え方である。その一つは、明治維新を不徹底なブルジョア革命（政治革命）と捉え、沖繩に対する差別・抑圧支配の特殊性（その一つの表われであり、結果として、選挙制などが「本土」並みになったのは、明治末年から大正にかけてであった）も、ブルジョア民主主義革命の不徹底性に根拠を求め、いわば、民主主義の不徹底の自利化とでもいった、相対的、量的区別に解消してしまうものであり、いわゆるブルジョア民主主義の賛美という思想的根拠に基づいた二段階革命論であり、政治的には社会排外主義、実践的には、「本土並み復帰」論に基づく復讐運動の全面的賛美へと至る主張（

沖繩共同体の上を通り抜けた）（「沖青同パンフ」六七頁）とする反国家主義であり、これは日帝権力の支配に対し、また権力問題に対して日和見主義であり、実践的には、沖繩返還≠日帝への国家的再統合≠第二の琉球処分として復讐運動を全面的に否定し、「返還」粉砕へと帰着した立場である。七二年五月発行の「沖青同パンフ」は、その最大公約的な理論的立場を提出しており、反国家≠沖繩共同体を共通のイデオロギーの基礎としつつ、日本民族との民族的異質性を、その地理的条件、外観からする人種的異質性・言語・慣習・生活様式における実感としての異質性・文化的相違・民族意識等を挙げつつ、証明しようとしており、ここから日本民族ではないとしている。だが、「我々は日本民族ではない。だが、きちんと分類できるものとしての『沖繩民族』なるものも存在しない。我々は、はっきりと『沖繩人』として存在している。……一国的民族的枠をこえた『沖繩』……。無理に呼ぶならば、我々は『アジア民族』であるものとしての沖繩人である」という主張に至つて、概念的な混乱に陥つていたのであるが、少くとも我々の問題の立て方にそつて理論的に整理すれば、沖繩人を日本民族とは別の「民族」として捉えているのではなく、従つて、琉球処分以来の支配を多民族国家における少数民族への圧迫・抑圧として把握しているのではないということである。（そして、現在までの歴史学の成果からして、ほぼこうした異民族説は、否定されている。）このパンフにおいては、民族的異質性として問題を立てながら、結局、「沖繩民族」には否定的であり、ついには「アジア民族」なる概念的混乱に陥り、理論的には不徹底

なものに終っている（この点を、沖青委は、「『民族問題』の要素への日和見主義」と批判し、また「彼らは『民族的相違』の主張の必然的実践的帰結としての民族的独立闘争、民族解放闘争からは一言に逃亡してしまふ」と批判している点は、沖青同パンフの上述の限界の批判として正しい点をつけている）のであるが、しかし、我々はまさにここに沖繩問題の独自性・特殊性があることを看過してはならない（反日本国家→返還粉砕という誤まった思想と政治主張は五・一五沖繩「返還」過程で破産し、パンフの中での理論的立場のアイマイ性が前面に露呈する中で、沖青同は、沖青同（民族自決派）と人民権力派に分解したのであるが、ただし、これは必然である）。

以上のように、一方で返還粉砕論、他方で復帰（奪還）論の対立として、現実の階級闘争の中で、その一面性故に、実践的（組織的）に破綻せざるをえなかつたのであるが、それは、理論的には琉球処分をめぐる把握における限界・誤まりの露呈であつて、それら両者の誤まりの根拠は、ブルジョア階級支配、従つてブルジョア革命に対する本質的な把握における誤まりに基づくものである（これは小ブル的資本主義批判からの必然的帰結である）。

資本とは本来的には、無国籍であり、また、これまでの歴史に登場した支配階級の中で、資本家階級ほど冷酷無慈悲で、徹頭徹尾、打算によつてのみ動く階級はないのである。資本家階級とは、剰余価値の無償の取得をその規定的推進動機とし、「蓄積せよ！蓄積せよ！」が自らの生存のための至上命令となり、又、支配力と支配圏の不断の拡大、強化、際限のない支配への欲求につき動か

されている階級であるという点にその本質がある。従つて、かれらは何ら民族的統一（民族としての自覚と誇りの覚醒）それ自体あるいは、民主主義的政治制度それ自体の創出を目的とするものではないのである。そうではなくて、かれらにとつては、手段を選ばぬやり方で自己を資本たらしめるための原始蓄積を遂行し、古い生産関係を破壊しつづ（あるいは、力関係上、一部温存させたりしながら）、徹底して小生産者を収奪し、「二重の意味で自由」な賃労働者を創出し、資本―賃労働関係を全社会を包摂する関係として創出することこそが目的であり、したがつて、ブルジョア民主主義とは、何よりも封建的・共同体的な身分的繁縛から小生産者をとき放ち、「自由」な賃金奴隷を資本の必要に応じて再生産しうるための法的・政治的条件として、あるいは、資本―賃労働の所有関係の基礎たる私有財産制の防衛のための法的条件として要請されるものにすぎないのであり、また民族統一国家とは、さしあたりは、経済的土台における国民経済（市場）の資本家的征服と、階級支配の維持・強化の強制力としての国家の必要国家権力の集中的掌握の必要という限りで要請されたにすぎないのである。しかしながら、これは資本の本質からする運動の結果ではあれ、古い細分化された経済（したがつて諸個人の生活）を不断に交流させ、分散化した政治権力を集中させ、古い生産関係すなわち、階級関係を解体させ、諸個人・諸共同体・諸民族を不断に結合させ、融合させていくのであり、また、こうした過程を通じて、生産諸力の飛躍的發展の条件を形成するという限りで、明らかに一定の歴史的進歩性を代表しえたのである。

このように、ブルジョア階級支配の本質を資本の本性からとらえるならば、琉球処分をもつての民族統一国家の形成を賛美し、「本土」―沖繩の民主主義的一体化の過程として評価したり、近代的日本民族の形成として評価することは、資本の運動の結果（その開花的・進歩的側面）のみを一面的にとらえて、その本質に對しては何らとらえることのできない民主主義者に他ならない。

ここから、中核派のように、民族国家の形成をあたかも資本主義の本性であるかのようにとり違え（かれらの『民族形成』への手放しの賛美ぶりをみよ）、資本の運動の結果たる進歩的側面のみからとらえ、その結果、現実の沖繩人の抑圧を資本の本質から切り離れた帝国主義的政策へと一面化してしまうことになるのである（註）。あるいは、自決論者の場合も、同じメダルの裏表の関係にすぎない。すなわち、かれらの場合にも資本の運動の結果であり、階級支配の手段たるにすぎない民族国家の形成に対する幻想が、したがつて、沖繩支配の苛酷さに対して、同一民族に対するものとは考えられない、あたかも他民族に対する抑圧と同じだとして扱えられないのであり、こうした把握・実感はすでに排外主義への思想的屈服をはらんでいることに注意しなければならぬ。資本の支配は、本来、国境をもたないのであり、その階級支配において、その利潤追求において対象は無差別である。ただ依然として、国民経済の支配にその階級支配の経済的基礎の基礎盤をおいているという限りで、民族的性格をもつのであり、自己の支配の維持という利害からのみ、人種的・民族的等の区別をするにすぎないのであり、資本の本性からして他民族への抑圧支配のみ

ならず、場合によつては、同一民族の分離（民族国家の分割）でも、あるいは一民族の抹殺でも平気でやつてのけるということを忘れてはならない。

（註）中核派のこうした理論は、いまでもなく宇野理論によつていて、中核派の諸君は、「帝国主義は、民族問題を解決することはできない」と主張し、その根拠を「宇野理論の三段階論（すなわち、帝国主義段階においては、純粋資本主義社会の、あたかも永遠の循環をなすかの如き資本の運動は不純な要素が混入してくるのであり、したがつて、帝国主義の運動は、原理論では説明できず、その不純な要素のカテゴリー的析出と、それを基礎にした特殊のパターンの再構成としてのみ説明しうる」とする方法、そこから帝国主義の歴史性を導き出してくるといふ三段階論）に求めている。ここから沖繩問題についても、帝国主義政策として一面的に把握するという誤まりが生じるのだが、なお民族問題についていえば、宇野の限界を文字通り全面暴露しているといえる。帝国主義は、民族問題は解決できないのではなく、資本家流に、帝国主義流に解決してきたのであり、即ち、世界の領土的分割、再分割、植民地抑圧・支配として解決してきたのであり、それがもし、世界闘争へと至らざるをえなかつたという点で解決できなかつたというならば、事物の弁証法を知らないものというのであり、資本主義が必然的に生み出してきた諸矛盾の運動の結果として世界闘争はあつたのであり、また、資本主義そのものが自らを止揚することができないという意味でい

うなら、「資本にとっての制限は、資本そのものである」であり、特殊、民族問題を取り出す必然性はない。したがって、より正確には、帝国主義にとっては民族問題などは存在しなかったであり、それが文字通り「民族問題」として、あたかも解決不能のごとく帝国主義者の前に現われたのは、中国革命の勝利と民族解放闘争の前進によってである。ちなみに、ブルジョア経済学者が「南北問題」を喧伝し始めたのは、五〇年代なのである。

さて、以上の原則上の理論的確認に立って、われわれの沖縄問題についての立場を述べる。以下、きわめて論証ぬきの結論だけをレジュメ的に提起する。

まず第一に、琉球処分は、強権的・暴力的に遂行された民族統一、民族国家形成の一環であり、むしろ「侵略的統一」という特徴づけ（やや厳密性を欠くが）をしてもよいと考えられること。第二に、日帝の沖縄政策をその苛酷な収奪・略奪等からして、「植民地的支配」であること。第三に、琉球処分による国民的統合は、日本資本主義の発展にとっての内的・外的要因からする特殊性、明治維新に始まる一時代の過程におけるブルジョア革命の特殊性に規定され、何よりも単なる国内市場形成にその中心的意図があったのではなく（もちろん、徴税による収奪、安価な労働力の創出ということはあったとしても）、基本的には、「沖縄は長男、台湾は次男、朝鮮は三男」という表現にもっとも端的に示されるところの沖縄統合の意図は明白であり、それ以後、日帝の沖

縄政策の基本はここにあること（この点で、沖縄地方委員会の基調報告は、沖縄社会の矛盾という点のみから強調しているきらいがあり、それがブンドの方針の総括の仕方特に現われている）。われわれは、琉球処分およびそれ以後の沖縄支配と沖縄社会の特殊性について、それが地理的には日本の最南端の辺境にあり、且つ、アジアにむけてのキーストーンにあるということ、そして、民族的統合（琉球処分）以前の数世紀にわたる経済的、政治的、あるいは言語、慣習、意識等の文化的な独自性という歴史の堆積（これについては論証が必要だが、割愛）の上に形成された特殊性であること、こうした要因の上に、まさに上で述べた「侵略的統合」「植民地的支配」が行なわれてきたのであるということを確認しなければならない。

「通達NO7」についての補足（ここでは項目のみ。追って発行）

(a) われわれは、「全ての沖縄人（民）は団結して決起せよ！」というスローガンを無条件に支持しなければならない。

(i) 日本民族主義＝帝国主義的排外主義攻撃との関係

(ii) 社会排外主義（社・共・革マル）及び、その急進主義的補完物としての中核派の日和見主義との分岐

(b) 沖縄人民の先進的部分における誤まった傾向を断固として批判しなければならない。

(i) 民族自決派の反動的役割

・ 沖縄「本土」プロを分離させ、対立させる反動性

沖 縄 通 信

沖縄通信編集委員会発行

《四号》品切れ 四〇〇円

◎五・一五闘争の地平と我々の決意

— 寄稿 — 沖縄同郷本部

海洋博粉碎・皇太子訪沖阻止の

歴史的な意義

《五号》品切れ 三〇〇円

◎七・一七—二〇皇太子沖繩上陸を

— 阻止し沖縄現地に総力を

◎現代の強制連行と闘う

《六号》好評発売中 五〇〇円

— ドキュメント —

七月の熱い島

— 寄稿 —

沖縄戦の今日的把握と七・一七

・ アジア民族解放に対する被抑圧一般による同一化、プロレタリアートの任務として提起することに対する阻害（「本土」—日帝ブルによる抑圧のみをみて、アジア人民に対する反革命・抑圧的位置について見ようとしなさい）

(ii) 民族自決派に拝跪する日和見主義との闘い

(c) 我々の立場

(i) 単一のプロ独にむけた闘い

(ii) 沖縄「本土」プロレタリアの真の結合を常に促進しなければならぬ 「沖縄人（民）の団結」スローガンの無条件的支持は、結合のための条件である。

(iii) 単一の前衛党の建設

現在のには、「沖解同」への結集の呼びかけ、沖解同の建設・指導。但し、このことの呼びかけだけでは、民主主義的要求を掲げること留まってしまうのであり、われわれは常に、全国委への結集を呼びかけなければならない。

マルクス主義

3号

12月1日発売予定

同盟過渡期世界論総括

同盟階級的労働運動論総括

戦術論を巡る総括

その他

マルクス主義

創刊号

好評発売中!! 定価 1,000円

- プロレタリア独裁と女性解放
(序説)
- 党の綱領的基礎と女性解放
- 共産同全国委と党綱領問題
党綱領確立へむけて(序)
- 総括への序説
- 組織論確立の為に(一)
- 北原イズム—純正サークル主義を粉碎せよ
- 五・五第九回「糾弾会と我々の進むべき道
- 声明……………共産同全国委
(ボルシェビキ)
- 声明……………女性解放委

12・18路線の経済主義を克服する為に

資本主義批判と唯物史観について

本田篤紀

目次

- 第一章 部落(上) 加納論文の限界とその方法的誤りについて
- 第二章 榎原「宇野経批判」の限界と唯物史観について
- 第三章 マルクス主義と唯物史観について
- 第四章 いくつかの補足について

第一章 部落(上) 加納論文の限界と

その方法的誤りについて

再び我が全国委員会における「資本主義批判の問題」をとりあげる場合、やはり「我が同盟の到達地平と部落解放運動」(部落パンフ二九頁)の批判から始めなければならない。なぜなら全国委における依然として最高水準を形成しているからである。ところで、この論文を指して「第二段階論の理論的支柱」であるとかの評価は排されねばならない。それらは根本的に誤っている。それらの扱え方は、七二年における数多くの理論的展開の位置を

全く忘却しているか、あるいは第二段階の総括を、「資本主義批判」の問題として、切りちぢめようとしているかのどちらかの結果であり、感性的な把握にすぎないものである。

この論文が生み出された歴史の必然性は、七二年一年間を通して問われ続けてきた。「部落差別」の共産主義的見地からの把握の火急性であった。それは「現代の部落差別は、資本制的生産様式の中に根柢を持ち、その必然の産物であるという事、そしてその根本に敵として、ブルジョア階級支配の存在を据えねばならない」ことを論証せんとしたことに問題意識の基底が存するわけであり、その限りにおいて12・18路線における資本主義批判の再把握を試みているのであって、そのことにおける限界は敵として押えておかねばならない。それは「我が同盟の到達地平」を、全的に明らかにしているのでもなければ、又「12・18路線の意義と限界」を、全的に取り扱っているというわけでもないのである。

但しこの論文は、第一に綱領・戦略問題における方法的視点において、第二に資本主義批判とその深化の方向性において、一定の展開を為しているものであって、今この論文をとりあげるのは唯一その為である。

「総括への序説」(『マルクス主義』創刊号)においても一定触れてはいるが、この論文は12・18路線における資本主義批判の意義とその限界をどのように把握、その深化発展をどのような方向において示そうとしているのか。

第一に宇野経済学が、「資本による労働の支配・剰余価値の取得を自然法則として描き出し、その再生産過程(蓄積)を永久に

循環する自然法則として描き、資本制社会の原理的な調和性を論証しようとする体系である事」を批判し、それに対するマルクスの資本主義批判の復権を、第一に階級関係は価値関係ではなく所有関係である事。第二に、「直接生産者からの生産手段の分離(労働力の商品化)貨幣の資本への転化」という資本発生条件が、資本の生産過程の結果として不断に生み出されてくること、つまり労働からの所有の分離に資本制の真の秘密がある事。第三に、こうした労働からの所有の分離という資本の運動の現実的条件は、資本と労働の交換が平等な商品所有者間の交換という仮象の下に、実際には労働の「処分権」の譲渡が行なわれているという事……つまり、自由意志による契約関係という外観の下に進行している事態は、まさしく強制関係であり、何ら経済的強力を必要としない強制労働である事。第四に、直接的生産過程とは……価値増殖過程であり……資本の増殖に他ならない事。

第五に、この過程を再生産として把握するならば、それは、資本増殖の過程であり、資本-賃労働関係の再生産であり、一方の側に富の集積と他方の側に貧困の集積でありここに階級対立の非和解性、その対立の増々激化せざるをえない根柢が存在する事。第六に、こうした資本主義批判に立ってはじめ、賃労働制度の廃止、労働者階級の経済的解放を究極目標として掲げることが出来る事」として12・18路線におけるマルクスの資本主義批判の復権を把えたこととして展開している。(同三六・三七頁)

そして、にも拘らず、このような資本主義批判は「学説批判を通して階級支配の経済的基礎を解明し、プロレタリアートの解放

の目標と物質的諸条件を明らかにする」という、マルクスの資本主義批判の再興」という点では今だ、一面的であり、その一面性の克服(＝深化)の方向と条件として、第一にそのような一面性は「本質的には剰余価値の生産であり、剰余労働の吸収である資本制的生産」の生産過程における、内的作用を分析するには至っておらず、そのような結果として

「資本の生産過程における階級支配、資本の専制の労働者に及ぼす諸結果(プロの疲弊・摩滅と資本への反抗の増大)に対する軽視へと導いた」(同三八頁)

のであり、これらはサンジカリズムに反発するあまり、自ら右翼組合主義に転落したのである事。第二に従って、そのような限界を突破すべきところの資本主義批判の一面性の止揚は、第一にマルクスが「絶対的・相対的剰余価値の生産」で分析した内容と論理を、資本主義批判として解明する事(同三九頁)、第二に「……そうした過程の中に新社会の形成的要素と旧社会の変革的諸契機とが成熟する、こうしたマルクスの生きた弁証法を教訓として復権しなければならぬ」として結論づけている。だが客観的な評価としては、この論文は「資本主義批判の真の一面性」について正確な認識に到達しているわけではない。従って、「資本主義批判の深化」の提起も又、正確な方向性を示しているわけではない。もちろん部分的には「……プロレタリアートの解放の目標と物質的諸条件を明らかにする」という点に、資本主義批判の再興を置いたり、又「……そうした過程の中に、新社会の形成的要素と旧社会の変革的諸契機とが成熟する」「こうしたマルクスの生

きた弁証法」等として触れられてはいる。しかしこれらは論文全体からすれば、明らかに二次的・副次的要素として、あるいは偶然的要素として立ちあらわれているにすぎず、基本的には、その「批判の一面性」は、何よりもその批判が、「プロレタリア大衆の現実の生活の矛盾をとらえ得ない」という資本主義批判の一面性(同三九頁)として認識・把握されているという事である。従って又、12・18路線における批判が「……資本の専制の労働者に及ぼす諸結果(疲弊・摩滅・反抗の増大)に対する軽視を導いた事」(同三八頁)や、「12・18路線における資本主義批判が、実践的な批判となっていない事を自覚し、批判し、それを立脚点主義として批判した」(同三三頁)等々として、その「一面性」が語られるのであり、又この事は、この論文における「権力問題の抽象性」の解決にあたって、「我が党の綱領戦略は資本主義の原則的批判に基づいた」「現実の帝国主義の運動の解明の上にのみ確立せられるのであって、決して資本主義批判において全てが含まれるわけではない」として、主張する事の中においても表現されている事を見抜かなければならない。従ってこの論文においては、「生きた弁証法」の表現においてもその魂は「生きた」という点に存在しているのであって「弁証法」ではないのである。肝心なことは、まさに「弁証法」であったのだが、従って要約すれば「12・18資本主義批判は原則的批判にすぎず」それは「上向過程を経なければ、実践的たりえず、又権力問題にも接近しえないのである」という事に尽きるであろう。この論文のこのような問題意識において始めて「プロレタリアートの指針たる党綱領の原則的

部分(最大限綱領)と実践的部分(最小限綱領)……の兩者共に資本主義に対する原則的批判が貫徹されていなければならない(同三三頁)とか、又「資本主義批判は完了した、次は帝国主義論だ」等という把握に対する批判が展開されているのであって、従って、これらに関する論調・分析がこの論文の主要な基調を形成しているのである。

確かに「上向過程として発展されなければ実践的たりえず、又権力問題にも接近しえない」とする見地は、一般的には正しいものである。だが何よりも12・18路線の発展が「階級対立の非和解性こそが、階級闘争が最初から革命戦争として闘われねばならない根拠である」とするズブズブの経済主義者、民主主義者、赤報派を生み出したそのような局面の中では、極めて不十分でしかなかったのである。それは赤報派の真のイデオロギー的性格を暴露しえなかつたし、又真に12・18路線を揚棄する武器たりえなかつた。

基本的問題は「序説」で述べたように「唯物弁証法」の問題であり、「唯物史観」の問題であり、権力問題そのものであったのである。資本主義批判の一面性ではなく、批判そのものの限界、不徹底性であった。

それは何よりも12・18資本主義批判が、その根本的内容において唯物史観を拒否したことに根本的根拠を有している。12・18路線はこの点においては、何よりもスターリンの法則適用論、史的唯物論の体系化を批判した。又宇野が経済学を科学体系へと歪曲せんとする事を批判した。それはまさに「スターリン主義と宇野

第二章 榎原「宇野経批判」の限界と唯物史観について

榎原の「宇野経批判」の真の問題意識は「組合主義」の解体であった。それも「レーニンと第三インター」が解体しえなかつた先進国の組合主義(『共産主義』一五号二〇二頁)を解体することであった。

「宇野理論の場合は先進国の階級闘争、とりわけ労働組合運動が現実的に生産している意識の論理化であり、一方黒田理論の場合は、石化したスターリン主義に対する人間主義の立場からの告発であつたわけで、その根本思想が共に資本と賃労働との関係を価値関係(商品交換関係とみる点で共通していたわけであるが、このようなイデオロギー的決着のつけられていない領域であつたのである)」「『共産主義』一五号二〇〇頁)

従つて榎原にあつては「先進国の組合主義」(宇野経済学が「価値論を価値形態から純化しその結果、資本と労働の交換を一般商品交換と同じものと捉え、資本家と労働者を平等な商品所有者の一般関係に総括し、他方価値の实体を超歴史的な労働一般に求めることによって、直接的生産過程において剰余労働、剰余生産物の生産を労働一般の自然属性とする事(経済原則)によって剰余価値の生産を『労働力商品』の自然属性にしてしまつた」(部落パンフ三六頁)ことを批判し、

経済学は、史的唯物論と経済学をそれぞれ対極にもつたところの科学主義(『共産主義』一四号一五〇頁)として批判したのである。だが何よりもこの批判は、これらの方法によつては真に「共産主義を科学たらしめない」ところの科学主義として批判したのであり、唯物史観の革命的復権として把握しなければならなかつたということである。

そして榎原の「宇野経批判」は、明らかにこの点においてみじめな失敗に帰しているものであり、その結果が榎原の経済主義への空想的社会主義への反動的回帰の真の根拠なのである。

「(そのような)……平等な商品所有者間の交換という仮象の下に、実際には労働の『処分権』の譲渡が行われているという事……」「つまり自由意志による契約関係という外観の下に進行している事態は、まさしく強制関係であり、何ら経済外的強力を必要としない強制労働である」

「この過程も再生産として捉えるならば、それは資本増殖(蓄積)の過程であり、資本―賃労働関係の再生産であり、一方の側に富の集積と他方の側の貧困の集積であり、ここに階級対立の非和解性、その対立の増々激化せざるをえない根拠がある」(部落パンフ三七頁)

ことを対置すれば彼の宇野批判は完結するのである。それはまさに彼が歴史的に(階級的労働運動以来)、組合主義の克服という問題を問題意識としてもっており、しかるに彼の体系が組合主義に対して「戦術論の体系化」でしかない事を常に自覚してきた事と無関係ではない。

「榎原理論は、組合主義の克服というすぐれた視点を持ちながらも、その事の解明をいわば『イデオロギー領域』において考察する事を12・18を迎えるまで為す事がなく、『実践上の指針の問題』に限定し、『実践的―機能的―戦術的有効性』の側面においてのみ考察してきたところに一面性があり、結局戦術論の体系化によつて政治を表現することになつたのである」(以上階級の労働運動の総括より)「共産同階級の労働運動の総括と飛躍の課題 三章」

だが榎原は自己の永年の問題意識の余り、宇野批判における極

めて重要な側面を欠落させてしまった。それはつまり先進国の「組合主義」というなら、その「組合主義」は何よりも国民経済学であって、資本制的生産様式を即ち資本主義社会を永遠不滅のものとして扱っていることに、現在における真の反動性が存在しているという点である。だとするならば宇野は何よりも「資本論」に対する、又マルクス経済学に対する換骨脱胎を通して何を実現したのかと問うならば、何よりもその「唯物史観」を一切排除したのであるといわねばならないのである。まさにここに宇野の根本的犯罪性・小ブル性が存在するのである。もちろん榎原は、この点を単に欠落させたのではない。彼はスターリン主義の法則適用論に反発するあまり、極めて意識的に唯物史観に敵対し清算したのであり、彼はそれを極めて自覚的に為したのである。宇野は「経済学方法論」において次のように述べている。

「かくて経済学は、資本主義の発展によってその対象を、明確に純粋の資本主義社会としてその原理を確立するのであるが、しかしそれと同時に、唯物史観に規定される歴史的社会的発展、転化の過程自身を直接的には解明しえない事になる。

経済学の原理は、唯物史観という歴史的諸社会はもろろんの事、資本主義自身の発生、発展、消滅の歴史的過程をも、いわばその背後に留保しつつ、資本主義社会の（経済的運動法則）を明らかにするのである。それはかかる歴史的背景のもとに、資本主義社会を自立的な運動を為す一社会として提示する。従って又それは、他の社会から発展したものであるのではなく、さらに又他の社会に転化したものとしてでもなく、むしろ永久的に同

じ運動を繰り返しつつ発展するものであるかの如くにして、その運動法則を明らかにするのである。……」（「経済学方法論」一五〇頁）

まさに宇野は「唯物史観」に対して「背後に留保しつつ」と述べながら、その実全面否定し「原理論」を「完結した体系的な社会としての純粋の資本主義」が、「永久的に同じ運動を繰り返しつつ、発展するものであるかの如く」に、その運動法則を定式化せんとしたのである。

まさにこの様な理論は、マルクス主義に対する全面敵対であり、マルクス主義における資本主義批判をまさに清算し、国民経済学以下の水準にまで墮落せしめるものに他ならない。我々が批判しなければならぬのは、「経済学が唯物史観との関連を無視して、経済現象を唯機械的に孤立的に超歴史的に取り扱い、しかもそれを完全に法則的にしうる」かのようである、まさにそのブルジョア経済学としての即ち、榎原流にいえば「先進国の組合主義」としての宇野経済学が批判されなければならないのである。まさしく榎原はこの点からいえば、国民経済学の見地から宇野を批判したにとどまっていたにすぎないのである。我々はマルクス主義者であるならば、マルクスが唯物史観を導きの糸としてのみ首尾一貫した徹底した資本主義批判を、又経済学批判を為しえたことを認めないわけにはゆかない。

「……その合理的な姿では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者達にとつて腹だたいものであり、恐ろしいものである。なぜならば、それは、現状の肯定的理論のうちに

同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、いつかこの生成した形態を、運動の流れの中でとらえ、従ってまた、その過ぎ去る面からとらえ、何もものにも動かされることなく、その本質上批判的であり、革命的であるからである。

資本主義社会の矛盾に満ちた運動は、実際にはブルジョアジーには、近代産業が通過する周期的循環の局面転換の中で、最も痛切に感ぜられるのであって、この局面転換の頂点こそが、—— 一般的恐慌なのである。この一般的恐慌は、まだ前段階にあるとはいえず、再び進行しつつあり、その舞台の全面性によつても、その作用の強さによつても、新しい神聖プロイセンドイツ帝国の成り上り者達の頭にさえ、弁証法をたたき込むであろう。ロンドン、一八七三、一・二四、カール・マルクス」（『資本論』第二版後記）

我々にとって、批判の武器は弁証法である。

更に、同じ「第二版後記」で、マルクスは次のように述べる。「経済学がブルジョア的である限り、すなわち、資本主義的秩序を社会的生産の歴史的に過ぎ去る発展段階としてではなく、反対に社会的生産の絶対的で最終的な姿として考える限り、経済学が科学でありうるのは、ただ階級闘争が、まだ潜在的であるか、また只、個別的現象としてしか現われていない間だけのことである。」

「……ドイツ社会の特有な歴史的発展は、ここでは『ブルジョア』経済学の独自の育成を全く排除したのであるが、しかし、それに対する批判は排除しなかつたのである。およそ、こ

のような批判が一つの階級を代表しうる限りでは、それはただ、資本主義的生産様式の変革と諸階級の最終的廃止とを自分の歴史的任務とする階級—プロレタリアートだけを代表することが出来るのである。」

にもかかわらず、榎原は、その「宇野経済学批判」において、このマルクスの唯物弁証法—唯物史観の見地からする資本主義批判の首尾一貫した展開を復権させるのではなく、逆に否定しざるのである。榎原は、スターリン主義における資本主義から社会主義への移行の必然性の理論を批判しながら次のように述べる。

「資本主義から社会主義への移行の問題とは、他ならぬプロレタリア世界革命のことであつて、それはプロレタリアートと党が、政治的に正しく問題を解決できるかどうかにかかつていゝるわけであつて、理論的に解明すべき事柄ではない。むしろ理論が果たすべきことは、現実の資本主義の運動を全面的に正しく把握するということであつて、何かしら理論家が、移行の法則を明らかにしうるのではないかと考えるのは幻想でしかないのである。」（「宇野経批判」中）『共産主義』一五号二〇三頁）

「……確かに、資本の生産過程のうちには所有をめぐる階級闘争が存在すれば、資本の蓄積と共に階級闘争も蓄積され、その結果、革命の必然性が理論的に明らかになるかの如き幻想が生まれるのであるが、こうした幻想は、誤まった資本主義批判がもたらしたものに他ならない」（「宇野経批判」中）

前述したように、榎原は、このようにして極めて意識的に唯物

史観を否定しているのである。榎原が述べるところの「現実の資本主義の運動を全面的に正しく把握する」という場合のその理論的方法は、唯物史観によらずして如何に可能であろうか。我々にとって、「全面的に正しく把握する」ということは、

「現状の肯定的理論のうちに、同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、一切の生成した形態を運動の流れの中で把握し、したがってまた、その過ぎ去る面からとらえ、何物にも動かされることなく、その本質上批判的であり、革命的である」見地から以外に、どのように為すことが可能なのであろうか。このような方法以外に、どのような「全面的」な方法が、また「正しい」方法がありうるのであろうか。

マルクスの述べるように、「資本主義秩序を社会的生産の歴史的に過ぎ去る発展段階」として把握する以外に、榎原はどのようにして「現実の資本主義の運動を全面的に正しく」把握しようというのであろうか。結局のところ、彼は「現実の資本主義の運動」を、ただ現実的に、あるがままに、どんな将来と過去への憶測をも捨てて、ただあるがままに把握せよ、あるがままに認識せよと述べているにすぎないのである。

榎原は、「プロレタリアートの解放の目的と物質的諸条件を明らかにする」というマルクスの資本主義批判の方法を再興する（「部落パンフ」三八頁）ということは、幻想であるときっぱりと批判している。彼は、スターリン主義者の「資本主義から社会主義への移行の法則」を否定し、批判したいために、まさにその批判の最大の武器たる唯物史観を売り渡すことでもって、国民経

済学の見地、更には、あの批判したはずの宇野の見地からの批判に転落したのである。他ならぬ宇野は、榎原の見地を支持して、次のように言っているではないか。すなわち、

「経済学の原理は、唯物史観という歴史的諸社会はむろんのこと、資本主義自身の発生、発展、消滅の歴史的過程をも、いわばその背後に留保しつつ、資本主義社会の（経済的運動法則）を明らかにするのである」（前掲書「経済学方法論」）

まさに宇野も、「大事なことは、資本主義社会の（経済的運動法則）を明らかにすることであって、その資本主義社会を、他の社会から発展したものと、また他の社会に転化するものとしての『歴史的社会』として扱うことではないのだ」と榎原に唱和して叫んでいるではないか。ただ問題なのは、宇野にとって「商品による商品の生産」が全てであるのに対し、榎原は、「階級対立の非和解性」が全てであるということだけである。まさに榎原は、彼なりに宇野批判の中で、相互の共通性を認識したとみえて、次のように述べている。

「確かにスターリン主義が、資本主義から社会主義への移行の必然性を理論として明らかにし、そのことによって、理論と実践とを統一するという内容は全く混乱しているわけであって、これに対して理論の自立性を主張した宇野は、一面の真理を表現したのである」（「宇野経批判」中頁二〇三頁）

ところで、宇野が主張する「理論の自立性」とは、根本的には、マルクス経済学と「資本論」を換骨脱胎し、唯物史観を排除することにその本質があるわけであるが、そのような「本質」のどこ

に、マルクス主義にとつての「一面の真理」が存在するのであるう。あるのは根本的誤まりと犯罪ばかりである。

確かに、スターリン主義者の主張する「資本主義から社会主義への必然性」を「生産力と生産関係との矛盾が社会発展の原動力である」とすることによって根拠づける方法は、根本的に誤まっている。だがこれは、スターリン主義者の「史的唯物論の悪しき体系化」が根本的に誤まっているのであって、マルクス主義における唯物史観の誤まりを証明するものではなくない。榎原は、やはりこのことが基本的に理解できていない。唯物史観の確立に伴って明らかにされたのは、ただ次のことである。

「いまや社会主義は、もはやあれこれの天才的頭脳の偶然的な発見物としてではなく、歴史的に成立した二つの階級、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争の必然的産物として現われたのである。社会主義の課題は、もはやできるだけ完全な社会制度の見取図を描くことではなく、これらの階級とその対立抗争とを必然的に発生させた歴史的な経済的経過を研究し、この経過によってつくりだされた経済状態のうちに、この衝突を解決する手段を発見することであった。

しかし、フランスの唯物論の自然観が弁証法や近代の自然科学と相容れなかったのと同様に、従来の社会主義は、こういう唯物論的な見方とは相容れなかった。」

まさに、唯物史観が発見したものは、スターリン主義者の主張する如くの「移行の自動的必然性」でもなければ、「生産力と生産関係との矛盾が発展の原動力」ということでもなく、それは「

この経過によってつくりだされた経済状態のうちに、この衝突を解決する手段」であり、また「プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争の必然的産物としての社会主義」以外ではない。人々は、「資本論は資本主義の没落の必然性を証明している」とか、あるいは「唯物史観、ひいてはマルクス経済学が社会主義革命の法則的必然性を措定した」としばしば主張する。

だが、マルクスは決して資本主義の自動崩壊を説いているわけではない。マルクスはただ「ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時に、この敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす」ことを証明しているのである。それは、「資本主義社会は、自己の運動の必然的結果として生み出される『階級対立の非和解性』を自己の枠内で解決することができないことを宣言する事、ただその『解決のための物質的諸条件』を生みだし、成熟させることができるだけであること、その解決は、プロレタリア階級の手によって、賃労働制度の廃止、諸階級の最終的廃止としてのみ達成されること」（本田論文「総括への序説」一四四頁）を主張するのである。

エンゲルスは、「J・プロッホへの手紙」で、唯物史観の歪曲について次のように述べている。

「……唯物史観に従えば、歴史における究極の規定的要因は、現実の生命の生産と再生産とである。それ以上のことは、マルクスも私もかつて主張したことがない。

今これを、経済的要因が、唯一の規定的要因であるというふうになじ曲げる者は、先の命題を無意味な抽象的な不合理な空

語に変えてしまうものである……。」

「……そこにあるのは、これら全ての要因の交互作用であつて、そのうちにあつて、全ての無数の偶然ごとを通して、終局的には、経済的運動が必然的なものとして自己を貫徹する。もしそうでないなら、理論を任意の歴史時代に適用することは、簡単な一次方程式を解くよりもまだ容易なこととなる。」

「我々は、自分の歴史を自分でつくっていくが、しかし第一に、極めて特定の前提と条件との下でつくるのである。それらのうちで、経済的な前提と条件が終局的に決定的なものであるが、しかし、政治的その他の前提や条件もまた、いや、人間の頭脳につきまといつていく伝統さえ、決定的な役割でこそないが、ある役割を演じるのである。」

まさに、スターリン主義と共に唯物史観をも「脇へ投げ捨てた」復原が、どのようなみじめな位置に転落したかは、もはや明らかであろう。彼とその一派は、「階級対立の非和解性」を止揚する物質的諸条件が、他ならぬ資本主義社会の中で、どのように生みだされつつあるかについて、思いをめぐらせることができず、従つてまた、「綱領・組織・戦術」に渡る科学的な革命戦略の下にプロレタリアートを統合していくことに革命党の任務を指定することができず、自己の導きだした「非和解性」の巨大さに恐れをなし、「非和解性」遊撃戦争の根拠となる「遊撃戦争のテーゼ」をデッチあげて、経済主義の破綻の道をひた走つていたのである。彼らの「遊撃戦争テーゼ」は、他ならぬ「プロレタリア独裁」を永遠の彼岸に追いやる底なしの日和見主義の栄光ある紋章である。

だが、そうであろうか？ 決してそうではない。彼らが考えているほど、プロレタリアートはおうようではない。彼らは、とつくの昔に、「階級対立の非和解性」やら「一方における富の集中と他方における貧困の集中について」知つていたのである。自分が決して資本家と平等な商品所有者ではないこと。「自由意志による契約関係という外観の下に進行しているのは、まさしく強制労働であり、自分が売り渡しているのは、決して労働力という商品ではなく、労働の『処分権』であること、自分が不自由で奴隷の境遇におかれているのは、一日のうちの数時間だけではなく、実は、二四時間全てであること、自分が今日生きているのは、ただ明日の労働のためであること、そして自分だけではなく、不断に家庭の全員が、妻も、母も、姉も、弟も、自分と同じ境遇に落ち込められつつあること等々……。」

これらは皆、とつくの昔に周知の事柄なのだ。大幅な労働強化と引きかえに獲ちとる賃上げも、明日の幸せすら保障してくれないことも、彼らは全て知つていたのである。まさに赤報派の考えるように、わざわざ「刺激」を与えなければそのことに気がつかないほど、資本家達の収奪は、ゆるやかで、本音を隠した猫なで声のような調子なのであるか？ 労働者に、一瞬でも、自分たちは資本家と平等の契約関係なのだと思ひ込ませるほど、資本の支配と収奪はゆるやかであろうか？ 職制は、それほど親切なものであろうか。そうではあるまい。ただ彼らは、自分たちの境遇をどのようにしたら根本的に転換することができるのかということについて知らないだけなのである。自分たちの真の敵が誰であり、

彼らが現在、救われている根拠は、なによりも、他ならぬ彼らの「公約」を一度たりとも実践に移さなかつたおかげである。彼らの今一つの日和見主義が、他ならぬ彼らの真の日和見主義を擁護しているのである。

「階級対立の非和解性」は、社会の至るところにブルジョアジイに対する不満・憤り・政府への怒りを拡散・集積せしめている他方で、一方における富の集積と一方における貧困の集積は、小数の資本家の多数の資本家の収奪に供つて、巨大独占資本を生みだし、他方における貧困の集積は、ますますブルジョアジイに対する怒りの集積と同時に、ますます訓練され、統合され、組織されていく増大する労働者階級を生みだしつつある。にもかかわらず、このように成長しつつある「資本主義社会の墓掘り人」に対し、それを分断し、抑圧し、分散させようとする全ゆるブルジョアイデオロギー、反動的イデオロギーが、まさにあの一九三〇年代のヨーロッパをおおいつくしたように、まん延せんとしているのが、他ならぬ先進帝国主義内部のプロレタリアートの状態である。このような中で、革命党とは何か？ 何をなすべきか？

復原とその一派は主張するのである。「プロレタリアートに階級対立の非和解性を教えこまなくてはならない。彼らは、気ずきさえすればよいのだ。非和解性に気ずきさえすれば、彼らは、きつぱりと決心するであろう。したがって、我々は身をもつて非和解性を体現してやることだ。プロレタリアートとブルジョアジイは、実は戦争状態であるということを、遊撃戦争だけが教え込むことができるであろう。」

自分たちの真の武器は何なのか。自分たちの歴史的 성격は一体どのようなものなのか、自分たちは何をなすことができるのか。「民主連合政府」は、本当に自分たちの進むべき道なのか？ まさに、三〇年代のヨーロッパの労働者が本当に自分たちの進むべき道は、ブルジョアジイと連合した「反ファッショ統一戦線」なのか、と問うように、今、日本のプロレタリアートに問うているのである。

「……従来社会主義は、なるほど、現在の資本主義的生産様式とその帰結とを批判はしたが、それを説明することができなかつたし、従つてまた、それに決着をつけることもできなかつた。それをただ単に悪だといつて排撃することしかできなかつた。」

従来社会主義は、資本主義的生産と切り離せない労働者階級の搾取を激しく非難すればするほどますますこの搾取の本質が何であるか、どうしてそれが発生するのかを明らかにすることができなかつた。「(エンゲルス『空想から科学へ』)」

まさに、「あれこれのプロレタリアが、また全プロレタリアすらが、さしあたり何を目的として思ひ浮べているかが問題なのではない。問題は、プロレタリアートが、彼らの存在に依りて、歴史的になにをなすべく余儀なくされているのかである。彼らの目的と歴史的行動は、彼ら自身の生活状態のうちに、また今日のブルジョア社会の全組織のうちに明示されている」(「聖家族」)のである。

第三章 マルクス主義と

唯物史観について

まさに立ち遅れているのは、榎原か、それともプロレタリアートか。それが問われなければならない。すでに内的動揺を開始しはじめた榎原は、それでも圧倒的に立ち遅れているのである。

さて、更に、このような榎原の資本主義批判が、国民経済学の地平にまで一挙に転落せざるをえないのは、何よりもマルクス主義がどのようなイデオロギーと又、どのような社会主義の諸潮流と闘う中で形成されたのかについて、基本的な理解を欠いている事にある事が鮮明にされなければならない。

唯物弁証法―唯物史観を否定した榎原は、なぜ一挙に「従来の社会主義」に、又、国民経済学に転落せざるを得なかったのか。それは何よりも、マルクス主義が、エンゲルスの述べているように、「唯物史観」と「剰余価値」の二つの偉大な発見によって、その科学としての発展が、保証された事に存在し、又、その事によって、はじめて、従来の「空想的科学主義」を止揚したという事が想いおこされなければならない。

「ユートピア社会主義者達の全てにとって、社会主義とは絶対真理、理性、正義の表現なのであって、ひとたび発見されさえすれば、それ自身の力で、世界を征服できるものなのである。絶対的真理は、時間、空間、人間の歴史的發展とは関わり

彼らは、なるほど、その彼らの計画においては、「意識的に、主として最も悩んでいる階級である労働者階級の利益を代表した。」だが、彼らにとっては、「プロレタリアートは、只、この最も悩んでいる階級という見地のもとのみ存在した」。即ち、彼らが、プロレタリアートの中に見いだしたものは、賃金奴隷の悲惨さだけであり、階級対立の深刻さ、根深さ、増々富みゆくブルジョアジーに比して、失業と低賃金と強制労働に悩み苦しめられているプロレタリアートのみじめさのみであった。だから、彼らはそのようなプロレタリアートの解放の武器を、プロレタリアートの中に見いだすのではなく、支配階級の慈悲と福音の中に見い出そうとした。ブルジョアジー慈悲心と財布に見い出そうとしたのである。そして他方では、自己の悲惨さの真の根源を把みえなかつたプロレタリアートの大群は、ただ自己を苦しめる眼前の「工場・機械」に、その怒りを爆発させていたのであった。だから、社会主義が空想から科学へと発展する為には、資本主義生産の未熟な発達、高度の全的な発達におきかえられ、階級の未熟な状態が全的に発展した状態におきかえられる中で、資本主義社会の矛盾が成熟し、プロレタリアートの階級の成長が進展するという歴史的条件が必要であった。プロレタリアートの解放の為の物質的諸条件の成長と成熟が必要であった。まさにこのような歴史の諸条件の成熟の中で、はじめて「これらの階級とその対立抗争とを必然的に発生させた歴史的な経済的経過を研究し、この経過によってつくり出された経済状態のうちに、この衝突を解決する手段を発見する」ことを可能にさせたのである。まさに、唯物史観

ないものであるから、いつ、どこで、それが発見されるかは全くの偶然でしかない。そのうえ、この場合に、絶対的真理や、理性や正義なるものが、各流派の開祖によって、それぞれちがっている始末である」

「資本主義の生産の未熟な状態、階級の未熟な状態には、未熟な理論が対応していた。社会的な問題の解決は、未発展の経済関係のうちに、まだ隠されていたので、頭の中から、それをつくり出さねばならなかつた」(エンゲルス『反デューリング論』)

共産党宣言は、そのような「空想的社会主義」の歴史的 성격について次のようにのべている。

「厳密な意味での社会主義的及び共産主義的諸体系、すなわちサンシモンやフーリエやオーエンなどの体系は、先にのべたプロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争の最初の未発展の時代にあらわれた。これらの体系の発明者達は、なる程、支配的な社会そのものの中にある階級対立と崩壊諸要素の作用とをみた。しかし彼らは、プロレタリアートの側に、歴史的な独自性も、それに特有な政治運動も認めなかつた。」(『共産党宣言』第三章)

また、「階級対立の発展は、産業の発展と、等しい歩調で進むのだから、彼らの前にはプロレタリアートの解放の為の物質的諸条件が存在しなかつた。そこで、彼らはこれらの諸条件をつくり出す為に、(新しい)社会科学や、(新しい)社会法則を捜し求めた」と。

は、このような歴史的条件の成熟の中で、はじめて、確立されえたのであり、これこそ、「従来の空想的な社会主義」を余儀なくさせた歴史的条件の未成熟に対する歴史自身の総括なのである。

だから、確かに榎原が階級闘争の予定調和的發展を云々し、経済決定論を云々するスタリニストに反発するあまりであつたとしても、「たしかに、資本の生産過程の内に所有を巡る階級闘争が存在すれば、資本の蓄積と共に階級闘争も蓄積され、その結果、革命の必然性が理論的に明らかにされるような幻想が生まれるのであるが、こうした幻想は、誤まつた資本主義批判がもたらしたものに他ならない」と述べる時、彼は、一八四〇年代を通して確立されたマルクス主義の歴史的な地平を捨て去るのである。そして空想的な社会主義の陣営に、即ち、十八世紀の世界に回帰するのである。まさに、榎原が述べるこのような批判は、かつて空想的な社会主義の創始者の反動的な弟子達のマルクスに対する非難であつたろう。そして、又、二十世紀における組合主義の御用理論家達のマルクス主義に対する批判であつたろう。そして、今、たしかに宇野野経済学は、そのように、マルクス主義に対して批判をしているのである。即ち、「イデオロギー過重」であると。榎原は、事の本質において、マルクス主義を「幻想」として、捨て去つたのである。

だから、彼のイデオロギーは、組織されたプロレタリアートへと高めあげてゆく思想ではなく、基本的には、ルンペン・プロレタリアの組織されざるプロレタリアの、むきだしのイデオロギーに他ならないし、又、絶望した小ブルジョアのイデオロギーに他

ならないのである。それが、彼らの「遊撃戦争論」の真のイデオロギーの性格であり、その階級の本質なのである。

エンゲルスは述べている。

「……だが問題は、一方では資本主義的生産様式をその歴史的連関の中で示し、又、一定の歴史的時期にとつてのそのもつ必然性を明らかにし、従つて、又、その没落の必然性を示すことだったのであり、他方では、あいかわらずおおい隠されたままだったこの生産様式の内的性格を暴露することだったのである。この仕事は、剰余価値の発見によつてなされた。

不払い労働の取得が、資本主義生産様式と、それによつて行なわれる労働者の搾取との基本形態であるという事、資本家は、労働者の労働力を、それが商品として商品市場で持っている価値通りに買ひあいでさえも、自分がそれに支払つたよりも多くの価値を、この労働力から引き出すのだということ、そして、この剰余価値によつて形成される価値額が、結局、有産階級の手の中に絶えず増大する資本量が積み上げられていく源泉なのだということ——これらのことが証明された。……

これら二つの偉大な発見、すなわち、唯物史観と剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、マルクスのおかげで我々に与えられたものである。これらの発見によつて、社会主義は科学になった。」

「社会主義が科学になった」ということは、「社会主義が真にプロレタリアートの武器になった」ということであり、また、「プロレタリアートが、自己の歴史的位置と任務を科学的に洞察す

る武器を獲ちとつた」ということであつて、「何人も認めざるをえない客観的真理・公理」が、この世に打ちたてられたということではないのである。それは、厳然とした階級の武器であり、万人のそれではない。エンゲルスは述べている。

「問 共産主義とは何か

答 共産主義とは、プロレタリアートの解放の諸条件に関する学説である」(『共産主義の原理』第一テーゼ)

また、「資本論」は述べている。

「……資本主義的生産そのものの内在的諸法則の作用によつて、資本の集中による集奪が行なわれる。ある資本家が、他の資本家を次々と打ち倒していく。この集中、すなわち、少数の資本家による多数の資本家の収奪にともなつて、労働過程の協業的形態の大規模化、科学の意識的な技術的応用、土地の計画的利用、労働手段の共同的使用手段への転化、結合された社会的労働による効率的な使用にもとづく生産手段の節約、世界市場の網への世界各国の編入が進展し、資本主義体制の国際的性質が増進する。

この転化過程の利益を横奪し、独占する大資本家の数の漸減に照応して、貧困・抑圧・隷属・墮落・搾取が増大していくが、しかしまた、不断に増大していく労働者階級、資本主義的生産過程そのものの機構によつて訓練され、結合され、組織化される労働者階級の反抗もまた増大していく。資本独占は、……この生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も、労働の社会化も、その資本主義的な外皮とは調和できない一点に到達する。」

……「この生産様式を永久化しようとするのは、万人の凡ようを命ずることである」この生産様式は一定の高さに達すると、自分自身を破壊する物質的手段を生み出す。この瞬間から、社会の胎内で、この生産様式を桎梏と感ずる力と情熱とが動めきだす。」

ここにおいて、「資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもつて、それ自身の否定を生み出す」のである。

以上が、現局面における我々の出発点としてふまえられなければならない。「資本主義批判の一面性」だとか、「立脚点主義」だとか、「理論闘争主義」だとかとして、部分的に語られてきたことがらには、こうして一定の終止符がうたれねばならない。

もちろん、この終止符は、単なる「真の出発点」にすぎないものである。それは、エンゲルスも述べているように、「今、なによりも重要なことは、この科学をそのあらゆる細目と連関について、さらに仕上げていくことである。」我々は、そのことによつてのみ、真に日本プロレタリアートの前に、その生き生きとした綱領を、それはまさにレーニンが、「その綱領といわず、戦術といわず……一切のものの重点を全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見落とす危険をおかすことが最も少ないのである」と述べるような、煽動的な、そして、情熱と客観的な経済的・社会的諸条件に適応したプロレタリアートの進むべき進路を、このうえなく明瞭に指し示すような、そのような綱領を提起することができるであろう。だが、更に重要な今一つのことがある。それは、現実の階級闘争の発展は、あるいは、その歴史過程は、決し

て「最終的な」「完成された」「余すところなくつくした」ところの、マルクス主義的研究の成果を待つてはいないということである。確かに、「理論は、非常に有効である。しかし、ペダンチックな理論の物神崇拜は何もならない」のである。第三インターナショナルは、その最良の期間、完成された綱領なしに存在していた。また、共産主義者同盟は、マルクス・エンゲルスによつて、彼らが「党宣言」を提呈する前に創立されたのである。

第四章 いくつかの補足について

第一節 榎原と宇野の隠された反動的密通

榎原批判の過程で、榎原と宇野の密通性について少し触れたが、今一つの側面から以下付加する。

榎原は、宇野の「理論と実践論」を批判しながら次のように言っている。

「宇野実践論は次のような内容である。

『僕は元来マルクス主義における理論に対する実践という場合の実践を政治的な組織的活動と理解しています。僕達の日常生活の行動も実践にはちがいないのですが、それは、この場合の理論に対する実践とは異なる実践だと考えています。』（『資本論と社会主義』）

『理論と実践の統一ということとは、僕としては、理論が実践活動の基準として役立つことだと考えています。それは理論の完成という所に重点があるのではなく、実際に役立つということに重点があると考えています。』（同）

宇野はこのように、一般的には、正しく問題をたてている。だからここでの問題は、宇野の理論が、果して実践活動の基準

として役立つかどうかという事に他ならないのである。」「（「宇野経批判」八中V『共産主義』一五号二〇四頁）
このように榎原は、宇野の提起に、まふまふと屈服させられ、「一般的には正しい」と認めているのである。だが本当に宇野のこの提起は、一般的には正しいものなのであろうか。決してそうではない。宇野のこの提案は、実際の所、宇野の、そして又、ひいては大学インテリゲンチヤの腐敗と墮落を、まきちらしているものに他ならないのである。

宇野はかく言うところによって、結局の所、第一に、政治的組織的活動をしなくても、マルクス主義者が存在できる事を認めるように要求し、第二に、「理論と実践の統一」を理論と実践の単なる補完関係に陥し込めるように要求しているのである。

このような宇野の本音は、次の「大内兵衛」のことばの中に凝縮されている。
「マルクス主義というのは、本来政治的な性質を持つ学問である。もつとも、そのうちで、経済学は科学であつて、純粹のそれは政治的とはいえないが、かりにその経済学のみをやっているにしても、世の中は彼を何か階級的な政治のイデオログではないかと思ふことをさけることはできない。そのことは、かつて、ぼくらが身を持って体験したことである。……今の日本の大学の自由は、ブルジョア政治が、自由のスローガンの前にちぢかんでゐる為に生じている一時的変態であり、又彼らが、過去のファシズムの行きすぎに対する反動の前に彼らが見だすの正体を表わすことをつつしんでいるからにすぎない。日

本のマルクス学者が、本当に自らの自由を尊重しようと思ふならば……：自己の研究と主張とを、学問の範囲に限るべきであつて、いわゆる政治運動をやつてはいけない。マルクス主義の学者は、学者中の学者でなければならぬ。政治家であつてはならぬ。彼がもし、政治上において自分の意見をのべ、且つ、それを実行に移そうという考えであるならば、彼はその運動を大学の中でやつてはいけない。大学教授を辞して後にそれをするべきである……」（大内兵衛『経済学五十年』）

このような、政治的本音のうえに、先の宇野の提起があるのであつて、それこそ反動的な代物なのである。彼らにとつて、自由とは人民の自由ではなく、自己の大学研究の自由なのである。彼らは、自己の学問的欲求の爲には、人民の自由をも平気で売り渡し、権力の前にこびへつらうのである。「マルクス主義学者は、学者中の学者でなければならぬ」。彼らは、マルクス主義学者は、反動中の反動でなければいけないと主張しているのである。そうでなければ、生き残れないのだ。

彼らは、このように主張することによつて、大学と学問の政治的自由——それは、何よりもプロレタリアートの利益と結合し、彼らと共に前進する自由である——を国家に引き渡し、一切の「自由」を得るのである。

六〇年代の後半に、まさに彼らは、そのことを身をもつて実証したではないか。マルクス学者は、学者中の学者としてではなく、政治家中の政治家、反動中の反動として、大学闘争の圧殺と権力との野合に走り回つたではないか。少数の良心的教授に対し、「

政治的に振るまうのなら、大学を去るべきである」と主張し、悪罵を投げかけ、最も熱心に追い出し策動を講じたのは、他ならぬマルクス学者ではなかつたのか？我々は、その事を、片時たりとも忘れてはならない。彼らの学問なるもの、理論なるものが、そして又、実践なるものが、どのように腐敗にまみれ汚辱にまみれているか、どのようにプロレタリアートと全人民に敵対しているかを、我々は全共闘運動を通して、まさしく赤裸々に、暴露し、批判し、粉砕してきたし、彼らの深遠な化けの皮は、あとかたもなくはがれ去つたのである。彼らマルクス学者は、大学の体制（＝講座制）に合せて、マルクス主義を切りちぢめ、分解し、思想だとか、科学だとか、歴史だとか、理論だとかに分類し、更にそれらを一層個々ばらばらに分解しながら、マルクス主義を認め殺し、その革命性、その実践性、その批判性、その思想性、その人間性を骨抜きにしてゆくのである。

宇野経済学は、そもそも、そのような大学の反動機構に適應せんが為に、又適應させてゆく過程で形成されたものに他ならないのである。それは、徹頭徹尾、反動的で反人民的なものに他ならないのである。

従つて、今、榎原が、このような「政治的本音」の上に構築されてきた宇野の提起に対し、「一般的には正しく問題をたてている」などと、エビゴネ的に評価する事は、極めて許されざる事なのである。即ち大学マルクス主義は、六〇年代の後半に、その歴史的使命をすでに終えているのである。

それは丁度、十九世紀後半のロシアの「合法マルクス主義」が、

社会革命やプロレタリア独裁などの思想を骨抜きにし、官許の卑俗化された「マルクス主義」を、その合法機関誌を通じて、ロシアの人民の中に宣伝したように、そしてそれは、次の真のマルクス主義者達の登場によって、その歴史的使命を終え、それは只、ロシア人民の中に幅広く（たとえ俗流化されたものであつたとしても）マルクス主義を宣伝したことのみ歴史的功績が帰されたように、戦後の「大学マルクス主義」も又、そのようにして、六〇年代の後半には、自らの進歩的使命を終えたのである。その致命傷を与えた直接の功績は、全共闘運動に帰せられるべきであろう。だがそれは、今にしていえば、七〇年代の労働運動と階級闘争の巨大な成長・発展が要求するであろう「真のマルクス主義」、まがいのものや、断片や、和平を呼びかけるそれではなく、プロレタリアートの進むべき進路を一貫して指し示し、自らを支配階級に高めるところの武器、「真の革命的な」マルクス主義の要求を直感し、その要求に答える為に、従来古くさくなつたマルクス主義の道を、はき清めた事に、その真の歴史的立場が存在したといふべきであろう。

そして、今、我々は、そのはき清められた道の上に、真の革命的なマルクス主義を復権させる事、七〇年代の階級闘争を何よりも勝利に導く為に、その復権をもちとる事が、火急の任務、歴史的使命として突きつけられているのである。

榎原は、実際の所、誰れが最も立ち遅れ、運動の後尾にくついているだけなのかということに関して理解がないようである。それだから、彼は「階級対立の非和解性」を発見した事に喜び、

そして宇野が「理論は実践の指針でなければなりません」などと、自己の政治的本質をカモフラージュする為の発言にも、我が意を得たりと飛びつくのである。

だが、我々は、実際の所、そんな事は百も承知なのだ。只、榎原が気がつくのが遅すぎただけなのである。彼は実の所、彼の果たしている客観的役割は空想的社会主義者であり、又、当世風にいえば、俗流経済主義なのである事に、全く一度たりとも気がつかない様子である。

もちろん、我々は、12・18路線下における宇野経済学批判の歴史的功績を決して過少評価するものではない。それは六〇年代の階級闘争の過程で共産同の奥深くに浸透しつつあつた、組合主義的理論（もちろん戦闘的な）に対する最初の革命的な一翼であつた。同時にそれは、六〇年代の諸派に対する、その歴史的使命の終わりを告げる宣言でもあつた。それは、六〇年代の階級闘争の発展の更なる飛躍にとつて、もはや従来「合法マルクス主義」、即ち「大学マルクス主義」、総じて反スタマルクス主義が極端と化しはじめている事の宣言でもあつた。「高度経済成長」下の六〇年代は、「戦闘的組合主義」の最後の楽園であつた。我々は、その様な歴史的立場に関しては、夢忘れてはならないものとしてあるという事をしっかりと把握しておかなくてはならない。12・18路線は、革命的転換の第一歩をなすものであつた。だが同時に、第一歩でしかなかった。神奈川県委員会「左派」、赤報派は、その不十分な第一歩を固定し、定式化し、「軍事を組織するイデオロギー」などと手前勝手に解釈して経済主義に転落した。全国委

員会は、そのような限界の固定化と立脚点化に対する批判を軸に結成された。12・18路線は、決して、「四・一論文」の如くに「発展させられるものではないこと、それらは、権力問題や帝国主義論をめぐり、また綱領・組織論・戦術論・労働運動論・国際主義等々、をめぐって豊かに理論的發展をなしていかなばならないこと、それをもつて始めて、革命的左翼を統合していくところの党建設たりうること等、をなによりもその結果軸としていたのである。そのかぎりでは、極めて正当な見地であつたのである。」

第二節 宇野弘蔵の唯物史観の否定について

先述しているように、宇野は、唯物史観と経済学の原理の關係において、「経済学は、唯物史観という歴史的諸社会はもちろんのこと、資本主義自身の発生・発展・消滅の歴史的過程をも、いわば……その背後に留意しつつ、資本主義社会の八経済的運動法則Vを明らかにするのである」と述べている。正確には、唯物史観を「背後に留意しつつ」として取り扱っているわけではなく、このことから、宇野は決して、唯物史観を否定しているわけではない。宇野は、「背後に留意する」見地をどのように立証しているのか。彼は、次のように述べている。

「体系的に完結した認識の対象をなす資本主義社会は、いわば完全に認識しえられるものである。この完全な認識に対応して、一般的ではあるが、社会主義社会の可能性が与えられる。」

……この法則の科学的認識は、一方では、この目的活動の社会的統一を可能ならしめるとともに、他方では、理論的に可能性を与えられる社会主義を、実践的には歴史的必然なるものとするのである。目的活動の社会的統一化は、資本主義的経済法則の基礎をなす労働力の商品化という近代的な自己疎外を止揚せずにはおかない。かくして社会主義は、経済学この原理論的成果にその科学的根拠を一般的に与えられるのである。」（『方法論』一五一頁）

宇野の「留意した」結果の結論は、「体系的に完結した資本主義社会の完全なる認識」こそが、逆に「社会主義の可能性」を与えるのであるということである。なぜか？宇野は、さらに述べている。

「……経済学は、その対象を基本的な点ではあるが、完全に認識し、これを除去しうることを示しているのである。もちろんそれは、吾々人間の経済生活自体を除去するということではない。」（同二三二頁）

つまり宇野は、資本主義社会は、労働力商品化、商品経済形態としての完結した体系であるからこそ、逆に資本主義の束縛、すなわち、資本主義的商品経済の法則の支配から脱出するためには、労働力商品化・商品経済形態を除去すればよいのだというのである。だが、このような認識は、スターリン主義に対する、すなわち、「法則適用論」に対する反発になりえたとしても、決して唯物史観ではないし、またプロレタリア階級の闘争の武器にはなりえないものである。簡単にいえば、宇野は、「自由とは、必然性

（『法則』の認識）によるのではなくて、「法則からの自立・独立・法則からの自由」によるというのである。それは確かに、「資本主義社会における生産力と生産関係の矛盾の自己発展が、社会主義社会を必然化せしめる」とするスターリン主義の認識に対する批判としては、一面の有効性を示すであろう。

だが果たして、「労働力商品化・商品経済形態の除去」という主張は、階級闘争の論理たりうるかといえ、決してそうではないことは明らかである。『共産主義』一四号は述べている。

「……革命論・共産主義とは、理論的には、プロレタリア革命の物質的諸条件の解明を与えるものでなければならぬにもかかわらず、価値法則の廃棄や労働力商品化の廃絶といった内容は、革命の解釈にはなりえても、そのみでは、全く無媒介的な内容であり、革命的実践の基準たりえないことである。……」（『共産主義』一四号——理論戦線十号、日向共産主義論批判一一二頁）

これらの諸点に関しては、宇野の「経済原則」論に対する批判として体系的になされる必要がある。我々は、この点に関しては、『共産主義』一四号の上述の論文で、一定の展開を果たしていることがふまえられなければならない。

『共産主義』一四号における「革命論の宇野経済学への解消——日向共産主義論批判」（一〇四—一三〇頁）の基本的な宇野批判の内容は、榎原均の「宇野経批判」（上）（中）における「価値論批判」と共に、大要において継承すべきであると考える。むしろ今日においては、榎原論文の政治的限界が明らかにされている。

る時点においては、この論文の方が、政治的価値は高いのではない。むろん、榎原論文も先述したように、「価値論」の分野に厳格に限定すれば、継承するに足ることは忘れてはならない。

共産同の歴史的限界を突破し、鉄のボルシエビキ党を創造せよ

マルクス・レーニン主義と党組織理論

——組織論確立の為に(II)——

本田篤紀・編

Ⅱ 序 Ⅱ

共産主義者同盟は一九五八年結成以来、日本階級闘争史上において、その最も戦闘的な翼、その最も国際主義的な翼、その最も献身的な翼を代表し、今日までの日本労働者階級の闘争の中に、深い影響を与え続け、そして牽引し続けてきたことは周知の通りである。我々はその事に限りない誇りを持って闘争の部署を守っている。

だが今日では、六九年七月、同盟統一委員会が、赤軍派を生み出して以降、九回大会の獲得にも拘らず、その野合性の故に、情況派、叛旗派、日向派とたて続けに、東京の学生戦闘団を中心とした分派を発生させ続け、更に12・18路線の下に再進撃を開始したかに見えた同盟は、その内なる思想闘争の日和見主義の故に、その掲げた「反スタマルクス主義の止揚、マルクス・レーニン主義の復権」を中途半端な路線に押しとどめ、赤軍派コンプレックスをあらわにした左派、赤報派の屈服の中で、その四分裂を余儀なくされた時、我々は、『戦旗』の停刊の自主的決定に表現したように、基本的には、統一委員会の分裂とその最後の崩壊を客観的情勢として受け止め、全国委員会を結成し、再度共産同の革命的統合へむけた橋頭堡にせんとした。

この様に、共産同の今日状況は、今だ全くの分裂と思想的混乱の極にあり、この事が、日本階級闘争の現在

と未来に与えている否定的影響は誰れ認めぬ者はいない。

唯一統合の戦闘を宣言した我が全国委員会は、その中枢指導部の大言壮語の裏にひそむ日和見主義と腐敗の故に、その歴史的使命を果たす戦闘に全精力を注ぐのではなく、日々の組織維持にきゅうきゅうとし、ブルジョア政治と取り引きに党派闘争を低め、三年後の今日、全くの腐敗の極地で同盟を崩壊せしめた。

我々は真実知った。党派統合のこの最も困難な事業は、限りなき献身性、限りなき戦闘性、限りなき前進への欲望、そして限りなきプロレタリア人民への信頼を要求する事を。そして、八木沢や永井には、肝心の、それらのどれ一つとして内に獲得したものがなく、怠惰の頂点に安住する俗物根性だけが唯一その取り柄であった事、だから、同盟員の日々の苦闘、献身は空転し、閉塞せしめられて来ざるを得なかつた事を。

だが今や、閉塞は破壊され、全国委はその雄姿を、ボルシエビキとして、日本の階級闘争にくつきりと刻印した。我々は苦惱しつつ、闘かい続け、闘かいつつ、苦惱し続けた。全ゆる前進を真底望みながら、全ゆる後退を経験した。全ゆる栄光を望みながら、全ゆる屈辱の沼地にはいつくばった。

そして我がボルシエビキは、全ゆる腐敗と混乱の極地の中から、それらの一切を、全身の憎悪を込めて食いぢぎり食い破って誕生した。それ故腐敗したマルクス主義に対するボルシエビキの憎悪は世界のどの海よりも深く、嵐よりも激しい。だが同時に、プロレタリア人民の未来の運命に対する確信と、そして我々が共に歩むその確信も又、鋼鉄よりも固い。

ボルシエビキの誕生は、確かに一つの恐怖である。それは、日本階級闘争の腐敗と混乱から、栄光と前進への施回点である。

我々は、全ゆる革命的団結を呼びかけると同時に、全ゆる腐敗、日和見主義、経済主義への戦闘も又呼びかける。我々は今日の状況が相対的な優位性を競うには余りに危機的時代であり、全国委員会、赤軍派、日向派、マル戦派の枠内での、即ち旧来の分派闘争の水準での論争では、今日の時代的要請には応えきれない事を大胆に宣言すると同時に、あわせて統合と団結へむけた、全面的な党派闘争の時代へ突入する事を宣言する。マルクス・レーニン主義へ接近しつつある全ての共産同分派、グループの諸君へ断固とした団結を呼びかけると同時に、経済主義、組合主義の沼地に転落しつつある諸派への無慈悲で非妥協的戦闘を呼びかける。マル青同セン滅ノ八木沢(西)ノ北原一派セン滅ノ

この様な事業の開始の中で、我々が共産主義者同盟の歴史的な弱点——その組織思想、組織理論の全きの組合主義を、その根底から解体する事は、我々の不可避の課題である。共産同を始めとして、日本の革命的翼は、反スタマルクス主義思想の小ブル性の中で、レーニン組織思想——理論を獲得することにおいて、ことごとく失敗に帰して来た。我々は今、この課題を正面から突破する戦闘を開始した。

我々は、反スタマルクス主義の組織思想——その体系化としての革共同の組織思想のその基底にひそむエセマルクス主義、梅本ノ黒寛流の人間主義を批判した見地から、我々の組織思想を建設する。

それ故、『共産主義』十四号における「梅本批判」(同志加納執筆)及び、「総括への序説」(『マルクス主義』創刊号)が、我々の現在の基礎であり、それから導き出される「組織観」「実践観」を基礎に我々の組織理論を建設する。我々はそのことよって、八木沢、永井流の「妥協と怠惰の弁証法」の上に存在する関西フロント流の組合主義的なふやけた組織思想——理論と完全に訣別し、「攻撃と変革の弁証法」の基礎の上に、おそろしい程の、破壊力をもった攻撃と変革の組織思想——理論を建設する。ここに編集した「組織論の確立の為に(Ⅰ)」は、その突破口を為すものである。

第二章、第三章、第四章、第五章は、三・九中央委決戦へむかう党内闘争の只中で生み出されたものである。「組織論確立の為に(Ⅰ)」(『マルクス主義』創刊号所収)は、本来この論文の第六章の前半に属するものであるが、分派闘争の都合上、創刊号に掲載したものである。なお、「マルクス主義編集委員会」は、ボルシエビキ大会へむけた同盟の臨時指導部の名称である。

第一部 マルクス・レーニン主義と組織思想

第一章 党建設は壮大な事業である

——党建設こそ目的意識性の試金石である——

第一節 党建設は事業である。一切の自然発生性への拝跪を粉碎せよ

(一)

我がボルシエビキがその壮大な歴史的事業を担うに足る組織へ成長する為には、確固とした党建設事業の計画が必要である。だが共産主義者同盟はその運動主義的限界の故に、常に眼前の自然発生的、即時的利害に拝跪し、党建設を「計画された事業」であ

ると認識することが出来なかった。

共産主義者同盟はその画期的な結成と巨大な政治的波及力にも拘わらず（例えば日共港地区委を根底から解体したような）二年を経ずして、六〇年安保闘争の巨大な余波と革共同のさん奪の中で四分五裂（プロ通派、革通派、戦旗派、関西地方委等）した。数年を経て再建された統一委員会（謂ゆる第二次共産同。六回大会、九回大会）も又、結成後三ヶ年の命運しもなく四分五裂した。（マル戦派、情況派、叛旗派、日向派）そして12・18プラントは、驚くべき事に、一年を待たずして四分裂し、我が全国委員会は、記録的長命、三年半を経て四分解し崩壊し、只そのガレキの中から我がボルシエビキが誕生した。又この三ヶ年の間に、情況派は二分解（遊撃派、遠方からの手紙派、松本礼二）、日向派は

四分裂（国際主義派、荒派、西田派、本多グループ）、仏派は二分裂（仏派と白派）、赤軍派は五分解（プロ革派、日本委員会、マルクス・レーニン主義派、臨総派、川島グループ）して今日に至っている。

又旧構改系諸派、ML系諸派は、共革党（旧統社同）ML同盟が党的に崩壊し、今日では構改諸派はその党的影響力を全く喪失させており、ML系諸派は、主要にはマル青同（旧志田派に屈服しその手足になり下がっている）労働党としてその再生を図っている。

革共同系三派（革マル、四インター、中核派）及び、解放派はその腐臭を強めながらも六〇年代の組織構造を維持して今日に至っている。

これらの中で、共産主義者同盟が持ったその根本的な弱点は、共産主義と党に対する基本的な考えにおける誤りであり、大衆運動主義、一揆主義を共に生みだすところの、経済主義であった。それらは第一に、マルクス・レーニン主義をその団結の基礎におかず、情勢分析と、闘争戦術を団結の基礎にするプラグマチズムであった。第二に、中央集権主義を軽視し、サークル主義を信奉した。第三に機関紙活動による集中した宣伝、煽動を軽視し大衆運動で代置する。第四に党を大衆に溶解させる事も、大衆組織に党を代行させる事も平気でやり党組織理論を全く確立しえなかつた。第五に思想闘争、従って党派闘争を軽視した。第六に運動方針を猫の目のように変え、スローガンを少しの情勢の変化にも対応させてすぐ変更した。（これらは今日では八木沢（西）―北

原一派に集中して体现されている。完成されたサークル主義もここまで来ると立派である。）

更に共産主義者同盟が負ったその歴史的ともいえる弱点は、思想的、政治的、組織的立場における中間主義、折衷主義であった。基本的には、第一にスターリン主義に対して、第二にトロツキ―主義に対して、第三に毛沢東主義に対して、第四に社会民主主義に対して、第五に反スタマルクス主義に対して、第六にサンディカリズム、ブランキズム、無政府主義に対して中間主義であり、常に日和見主義であった。そしてこれらの日和見主義もたらした組織的帰結として、毛派に屈服したML派、純粋トロツキズムに屈服した日向派、社民に屈服した全労活系諸派（解放派もこれに属す）、ブランキズム・無政府主義・毛沢東主義に屈服した赤軍

KOMAKO 旗

共産主義者同盟全国委（ボルシェビキ）政治機関誌

定期講読をしよう

月二回（十、二十五日）発行
二〇回 二千元（千五百円）

派、あるいは近代主義に屈服した情況・叛旗等を生み落としたのであった。だから共産同はその胎内から社会主義革命派と共に社会革命派、民主主義革命派を生み、自己権力ソビエト革命派と共にゲリラ戦争派を生み、北原イズムと共に無政府主義を生み出したのである。これらは周知の如く、代々木との闘争において有効なる諸イデオロギー（トロツキー、ローザ、毛沢東、ゲバラ、ドブレ、マックス・ウェーバー、等）をマルクス・レーニンと共に雑多に流入せしめた発生史に根拠を持っている。

更に組織的立場においても、プロレタリア中央集権主義に分権主義、自由主義を対置し、共産同統一委員会結成時においてもその分権主義の基礎（中大G、明大G、専大G、東大G、関西G）を温存せしめたまま全国組織としての拡大を図った。そして東大闘争から六九年四・二八闘争へ至る過程で、第一に日共、第二に中核派に党派闘争で敗北し、敗北主義、急進・無政府主義としての赤軍派を生み出したのである。九回大会は只、秋期決戦の為のみ妥協の産物として組織されたとどまり、安保決戦以降党派闘争が再開され、統一委員会は歴史的使命を終えていったのである。

我々はこれらの分裂史の過程から少くともつぎの教訓を学ばねばならない。それは、文字通り、思想的雑炊性の根絶である。今日の我々にあつては、マルクス・レーニン主義なのか、社会帝国主義、あるいはスターリン主義、あるいはトロツキー主義、あるいは毛沢東主義なのかという分岐が鮮明に組織されなければならないのである。社会帝国主義には毛沢東主義を対置し、スターリン主

義にはトロツキー主義を対置する怠慢、欺瞞は、必ずや党の解体に結果するのである。

だから我々は、どんなにそれが廻り道にみえようとも、又かえって孤立を深め、脱落者を生み出すようにはみえようと、この分岐を鮮明にし、マルクス・レーニン主義を空念仏ではなくて、現実の革命闘争の指針にまで「特定」づけなければならぬのである。この基礎工事をいかげんに済ます時、現実の諸情勢に如何に大衆受けする形で方針を述べる術に長けていようと、階級闘争が特定の段階から次への質的飛躍を試みる時代にあつては、集中して崩壊、分解の浮き目を見ざるを得ないのである。この時北原の様に、「どんなに思想的に相違しようとも分裂だけは絶対的ではありません」という誓約書さえ義務づければ不幸はまぬがれるのではないかという淡い希望などは全く関係がない。なぜなら誰れも「分裂や崩壊」を望んではいないからである。

共産同にはマルクス・レーニン主義にもとづく確固とした組織思想―組織理論が存在しなかつた。共産同は、ある一時期には前衛主義に反対し、別の時期には党の為の闘争に反対した。それらは、日共や、あるいは革共同の、大衆利用切り捨て主義、組織利害第一主義に対する反発の余りであつたにせよ「批判的自由、思想の自由」を同盟内に流入させ、革命的規律を嫌い、「同盟を支持する者は全て同盟員」とみなす、ルーズなメンシェビズムを生みさせ、その政治的組織的帰結として、情況、叛旗等を生み出したのであつた。又関西地方委は一貫してこのメンシェビズムの政治的・風土的温床であつた。

この弱点が俗にいわれる「階級形成一元論」としての諸点であるが、だがこの思想的弱点は、又決して七〇一七一年の過程で神奈川左派の唱えた「党母胎論」（「左派」一、二号）や又日向が取り込んだ革マル流の組織思想によつては決して克服されえないばかりか、それはかえつて異常な程に党の位置を低め喪失させるものでしかなかつた事は今日銘記されねばならない。北原は主観的には、この弱点をなんとか克服したいと考へたのであつたが、彼のウルトラ手工業主義（彼は眼前にあるものしか信じない）に基づき、「中央集権主義」の主張は、全く手工業性により一層の肥大化でしかなく、それは只、赤軍派に対する反発という北原イズムの発生史にも規定されて下からの組合主義と上からの官僚主義の折衷であつた。

八木沢、永井はついに一貫して自らの組織思想理論を呈示することが出来ず、八木沢は純粹の経済主義を、永井は『序章』や「戦士組織者」論文にみられるように、指導者の資質や経験、理論的に粉飾をこらした評論しか持ちえなかつた。永井はついにその生来のボナバルチズムの枠から脱出できなかった。

だから当然にも、このような組織思想に基づく組織建設は、自然成長的な以外のなにもなく、一貫して「計画された党建設」は彼岸の彼方であつた。彼らにはそもそも「党建設は事業である」という観点が全くなく、日々の怠惰な生活の中で只その日だけを無為に過ごし「なに今に諸派の統合のテーブルを持ってやれば何とかなるさ」と大言壮語をばくのみであつた。

だが、だからこそ、我々は座して待つわけにはゆかず、その勝利の展望と確信を全ゆるプロレタリアートの陣営に持ち込み、敗北主義や改良主義、議会主義等の全ゆるブルジョアイデオロギーを粉碎し、革命的プロレタリアートへと高めあげてゆかなければならぬ。我々の任務が、より一層、強く要請されざるを得ないのである。

「革命」は決して一握りの前衛闘士の英雄主義だけでは勝利する事は出来ない。だからこそ我々は、全プロレタリアートを革命に決起させる為、全ゆる精力を注ぎ込まねばならないのであり、革命党を単なる数百、数千の単位ではなく、数万、数十万、数百万のプロレタリアートを結集して建設しなければならぬことを、マルクスのこのテーゼから学ぶのである。このテーゼは、我々に座して待つことや自分自身の英雄性をのみ育くむことを教へていゝるのではなく、我々に、只の一瞬も休むことなく、只の一瞬も気をゆるめることなく、どんな巨大な障害や、弾圧にも恐れることなく、プロレタリアートのありとあらゆる陣営に働きかける事、マルクス・レーニン主義を持ち込む事、革命党建設を持ち込む事、武装蜂起と権力奪取を呼びかける事を教へてゐるのである。我が同志諸君はこのことをしっかりと頭の中にたたき込んでおかねばならない。これがボルシェビキが「最後の党」である事を示す我々の革命的作風でなければならぬ。

だが今、我が一部の同志諸君はこのテーゼを永井が理解したように「自己解放の物神化」に矮小化して理解してゐないだらうか。

(二)

だが全ての同志諸君。「ボルシェビキ」は、これらの全ゆる思想的腐敗と怠惰を食い殺して誕生したのだ。

「ボルシェビキ」——それは「最後の党」である。それは分裂と腐敗から、統合と前進への施回点に誕生した「回天の党」である。今日の革命的翼の怠惰な安眠をむさぼる中で、我がボルシェビキの成長以外に、日本革命左翼の統合を推進する力がありうるだらうか。全ての同志諸君。他力本願を排して、我がボルシェビキの成長、発展に日本革命の勝利を委ねよ。労働者階級の変革の力は、革命党建設と結びつかない限り、勝利の条件に転化しない。「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である」というマルクス主義の原則的テーゼを、一体我々ほどのように把握する中で、我がボルシェビキ党建設とその活動の基礎にすえたのか、今一度思いおこすべきである。それは、永井が我々を批判して述べたように、「労働者階級の自己解放の能力を物神化」する為の思想であつたらうか。それは、我々が座して待つていれば、「一人」で「労働者階級は立ち上るのだ」という待機主義と怠惰の論拠であつたらうか。断じて否である。我々はマルクスとそれに続く全ゆる革命家達に教えられ、そして又全世界の勝利したプロレタリア人民に教えられて、今日どのような沈滞の淵にありとも、日本プロレタリア階級は、必ずや自己と全人民を解放するであろう事について、ゆるぎない確信を持っている。日本プロレタリアートは、必ずや近い将来、輝かしいプロレタリア独裁権力を打ち

「待機主義の論拠」に、「ボルシェビキの意識性と能動性を軽視する論拠」に利用してゐないだらうか。自分の党建設に対する日和見主義、消極性、怠惰の合理化に利用してゐないだらうか。厳しすぎる程我々に向つて日々問うべきであり、そのような日和見主義を絶対に許容してはならない。レーニンは述べてゐる。「君達自身こそ、まさにこの積極性が不足してゐるのだから。自然発生性の前に拝跪するのを今少し少なくし、自分自身の積極性を高めることをいまま少し多く考えたまえ、君達！」と。このレーニンの提起は政治暴露におけるインテリゲンチヤの日和見主義、経済主義を批判したものである。レーニンがいかに苦々しく、憤りをもってそれらを批判したか——本当に思いを寄せざるべきである。レーニンのほう大な経済主義や日和見主義に対する批判は、いかにロシアの革命運動の中に、マルクス・レーニン主義が少なく、経済主義者に満ちあふれてゐたか、レーニンが実際どれ程孤立した闘かいを強いられてゐたかを我々に知らせてゐる。同志諸君、孤立を恐れるのか？

今我々は、更に党建設についてもレーニンの如くに批判しなければならぬのである。

あるがままの条件に拝跪し、その条件を変革する事に思いを寄せようとしない諸君は、目前の困難性の前に只拝跪し、その困難性を創意工夫と精力的活動の中で克服する積極性を高めることを軽視する。一体このような共産主義者に、多くの労働者を政治的訓練に引き込んだり、更には共産主義者を創出する事等について、我々は期待をしたり、又党の責任を分与したりすることについて

期待することが出来るだろう。全く否である。そのような諸君は共産主義者でもなければ、ましてや我がボルシェビキの黨員などでは断じてない。

我々は八木沢イズムにおける実践観を批判した。八木沢イズムは関西プロト主義にあっては、自然発生性や、又あるがままの現実に、あるがままに対応することがその言ひところの「実践」であった。だがそれらの「実践」はマルクス主義が示すところの「実践」では全く単なる「日常的営為」にすぎないのだ。我々はそれに対し、共産主義運動とは批判的認識による実践の事である事を論じて来た。この「実践観」からするならば、まさに自己が、共産主義者であるかどうかは、本人の意識によって判断されるのではなくて、まさに本人の現実社会に対する関係によって、本人の資本主義社会とプロレタリアートに対する具体的・現実的諸関係によって判断されるのである。手みじかにいえば、彼が「どのような活動を形成しているのか」によって、彼自身の共産主義に対する（従って資本主義社会に対する）考えが判断されるのである。

だから「自分自身の積極性を高める事」即ち現実に対する意識性を強める事、批判性を強める事によってその変革の能動性を強める事に留意せず、一体我々ほどのようにして革命的な共産主義者たりるのであるのか。我々が、ボルシェビキであるかメンシエビキであるかは、我々がその党名称にボルシェビキを名のっているかどうかによってではなく、我が同盟の活動の全体（その理論的側面においても政治的側面においても組織的側面において

も）がボルシェビキ的であるか否かによるのである。だからいくら伊集院内一派がマルクス・レーニン主義派を名のつてもマルクス・レーニン主義とは無縁なサークル主義なのであり、塩見一派がプロレタリア革命派を名のつても、少しもプロレタリア革命派ではないのである。それと同じように、我が一部の同志諸君が、いくら自己をボルシェビキであると自認していたとしても、全々ボルシェビキではない事も又当然ありうるのである（ボルシェビキを名のする民主主義者の存在について我々は結成直後にすでに思い知らされたではないか）。果たして諸君は何物であるか。厳しく己れに自問すべきである。そして願わくばその判断は、自分がどう思っているかではなく、どのような党活動を遂行しているのかによって判断すべきである。

我々は誰れよりも、革命理論の重要性を説いた。だが我々だからといって、革命理論を物神崇拜したいわけではない。どの観点から革命理論を重視するのか。それは只「実践の指針」の見地からである。学者的興味や、又真理を極めたいが為の見地からではない。それは我々が何よりも「変革の実践」を重んずるが故であり、この社会を物質的に変革することを革命運動の基礎にすえているが故である。現実を変革する事を真実望む者のみが、革命的理論の重要性を真に理解しうるのであって、自然発生性に自己の命運を委ねる事の出来る分子は、又決して革命理論の必要性に気づくこととすらないのである。従って我々共産主義者にとっては、理論と実践を対立させる如き見地等はそもそもありえないのである。我

々にとっては革命的理論に導かれざる実践はありえない。そのような諸活動は行為一般にすぎず、偶然的営為に過ぎない。我々にとって意味をなする実践とは、只変革の社会的実践のみである。従って自然発生的営為に支配された革命党の存在なるものは背理であり、そもそも革命党ではありえない。（主観的思い込みは別として）共産主義者の組織は、社会のどのような組織よりも最も強く、意識的要素、科学的要素、積極的・批判的要素に支配された集団である。

八木沢イズム——この自然発生性への拝跪の体系は関西プロトの組合主義とは、お人好しの世話人根性を指しているのではない。西一派の参謀である味岡（吹き出す程の小心な動揺分子）が、八木沢脱走直後に「八木沢は良心的なレーニン主義者だった」と叫んだのだが、この感覚こそ、組合主義者、民主主義者特有のものなのだ。どこの世界に恥知らずにも逃亡した「議長」をこのように評す輩がいるであろうか。全国委員会をこゝまで腐敗に導いた指導者の何処に「良心的」なものが存在したというのだろうか。西一派にあっては「怠惰」やら「日和見主義、動揺」やらが「良心的」なものに映るのであるが、それはとりも直さず、彼らが、「革命的批判」や「政治的批判関係」をあれ程までに恐れている反映なのである。

八木沢イズムとは「腐敗しブルジョア化した共産主義」の事である。八木沢イズムは、革命党を労働組合や、同好会にまで変質、腐敗させるのだ。それは労働者階級に対する「善人面」をした「本質上残忍な」攻撃なのだ。そして我々が規定したように北原

イズムとはその本質上、八木沢イズムに対する罰である。

関西プロトの組合主義は今日までに、日向派の革マル主義、神奈川左派の党母胎論、その亜流としての北原式母胎論という三つの罰を生み落とした。この三つの組織思想がいずれも、関西プロト第二次プロトを批判の対象として生み出された事を想起するならば、それらを一対一的に批判するのではなくて、何よりも、共産同の組合主義的組織思想、この巨大な見えざる奔流をこそ、批判・解体しなければならぬのである。この三つの組織思想はそれぞれにおいて第二次プロトの組織思想を止揚しえたわけではなく、単純反発にとどまっておらず、それらが實際上、一時期にしろ反対派ではなく、一定の組織指導の主座にまで昇った時、その偏向故にたちまちのうちに破産したのである。今日における日向の分裂と日向個人の毛沢東への解体、神奈川左派の完全崩壊、北原が勝利した十月中央委以後の全国委の完全破産はそれらを物語つて余りある現実である。

関西プロト、第二次共産同の組合主義は八木沢イズムを克服し、マルクス・レーニン主義で武装せよ。「党建設は事業である。」自然成長性に委ねて党建設はありえない。

我がボルシェビキは最後の勝利をかちとる為に「計画された党建設」を遂行し、巨大なボルシェビキ党を建設するであろう。

第二節 我々の「批林批孔」運動を推進

せよ

- 一、「批八木沢批北原」の思想闘争を更に徹底強化し
- 二、マルクス・レーニン主義で武装せよ
- 三、四つの戦略武器（「プロレタリアの旗」、「マルクス主義」、「全国労政、共学同」）を練磨・強化・駆使しボルシェビキ党建設の大躍進の礎とせよ

(一)

「共産主義者が他のプロレタリア政党から区別されるのは、ただつぎの点だけである。すなわち共産主義者は一方では、プロレタリアの種々の民族的な闘争において、全プロレタリアートの共通の、国籍に左右されない利益を強調し、おしつらぬく。他方では、彼らは、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争が経過する種々の発展段階において、つねに運動全体の利益を代表する。だから共産主義者は、実践的にはすべての国々の労働者政党のうち、もつとも確固たる、たえず推進していく部分であり、理論的には、プロレタリア運動の条件、進路、一般的结果を理解する点で、プロレタリアの他の大衆にまさっている」(マルクス『共産党宣言』)

我々は、すでに我が党建設の武器、「プロレタリアの旗」を創刊した。更に、理論誌『マルクス主義』創刊号を「マルクス・レーニン主義の復権」を高々と掲げて労働者階級の深部に送り届ける。

我々は、ボルシェビキの結成が、かえって西一北原一派の結束を強め、永井一派の延命を助け、反動を強化させたかのように映じている。また結成された直後の我が胎内からさえ、小ブル的動揺と日和見主義が発生した。

我々は孤立しているのか？我々もつと妥協に心を寄せる必要があったのではなかったのか？だが決してそうではない。

ボルシェビキの結成は、我々を圧倒的に優位にした。反動一派は、その没落の運命が決定された。これが冷徹な本質である。

我々の武器、団結の武器、戦闘の武器は何か。それは、マルクス・レーニン主義であり、中央集権組織であり、「狭量の問題」であり、同志間の共産主義に基づく団結である。これらは、旧来の全国委の土俵の上からは自然発生的に生みだされるものではなく、それどころか、全く逆に全国委の古い小ブル思想、組織と非妥協に闘り中でしか絶対に得ることの出来ない武器なのだ。だから現在の状況は、我々が本当に、この戦闘と団結の武器を欲しているのかどうかを試す、最も重要な時期である。そして向けられている敵意は、我々が一步一步前進しつづつあることを証明している。そして発生する動揺と日和見主義は、ボルシェビキ内に投機主義的な小ブル思想がまざれ込んでいた事を暴露すると同時に、我々の思想的純化の一步前進を示しているのだ。

八木沢(西)一北原一派は、内部に何の団結もない。只、反動と腐敗と小ブル学生の利益を延命させる為だけに存在しているものであり、当然の事ながら歴史的重圧に耐えられるものではなく、明日には、くず箱行きの運命でしかない。個々人のあるいは、当

ている。

誕生期におけるボルシェビキを徹頭徹尾、マルクス・レーニン主義で武装させ、不屈の共産主義者へ我々を高めあげ、強固な革命党建設の盤石の基礎をつくりあげねばならない。

「運動の党」「戦略・戦術の党」から「綱領の党」への転換を文字通り空文句に墮さしめないために、我々の強固な思想的強化闘争を、中央集権党の組織的結実に至るまで貫徹させねばならない。そして編集委自らが、自己を改造しつづつ、これらボルシェビキの共産主義者への改造の最先頭に立たねばならない。

我々は、これらの長期の生涯にわたっての巨大な任務に着いた。それは、全国の同志を「共産主義的団結」で強固に打ち固める以外に、従来の運動方針や「全国政治闘争」にとつてかわる「プロレタリアの旗」による代置を支え、「秘密の機能の集中と運動の機能の分散」を成し遂げられない。

編集委は、不退転の決意を新聞と理論誌の発行の中に、その思想的武装の物質化の一つを闘いとる。

全国の同志諸君、何よりもマルクス・レーニン主義で武装せよ！

(二)

誕生したばかりのボルシェビキには当然の事ながら、様々な古い残滓や、転換上の混乱や、不練れ故の遅延などがある。そして更には全ゆる憎悪が我々に向けて放たれている。日和見主義者の目

面の運動の利害のみで、団結を維持せんとする彼らは、運動の展望や、又、当面の動員力の優位性やらを求める事によってしか、自己のつかのまの安楽を見出しえない。

永井一派も加えて、「綱領論争」とやらを組織し「党を再建する」(只、ボルシェビキを清算主義、解党主義として批判したいが為のアリバイ工作としてのみの)路線を、もし、彼らが(西派が)選ぶなら、彼らの崩壊は歴史的に決定されるだろう。

分派闘争の経緯そのものが、我々の戦略的優位を形成しているのだ。我々は、創造の集団であり、彼らは防衛の集団である。我々は全国委員会にとどまらず、全新左翼を止揚、統合する武器を探し打ち鍛えんとする集団であるが、彼らは、只、十月中央委「プロ通」を支持し、破産証明書をたずさえて、只、過去の同盟の最も右翼的、小ブル的遺産にしがみつこうとしている集団でしかないからだ。

我々は、全国委員会が歴史的に為した事をはるかにこえて進んでゆく集団であるが、彼らは全国委員会の成した事すら成しえない小グループでしかない。これらの大枠は、この間の分派闘争の中で決定された事からである。明日は明日の風が吹くだけではない。それは、これらの大枠を、日一日と、現実の姿として、我々の前にさらしてゆくであろう。なる程、彼らは今、「同盟を混乱や解党主義から防衛する」という耳ざわりのよい(だが、決定的に安易な)言葉で、兵隊を募っている。だから、多少とも、同盟に愛着を持っており、直かつ、自己の政治的立場を持っていない分子(関西ブント特有の組合主義者達)をかき集め得たにして

も、だが、明日も団結する保障などは全くないのだ。

彼らは、見事な程に、八木沢イズム、北原イズムを、日常の実践の指針にまで高めあげている。だが、それも、これも、彼らの目的意識性故ではなく、全く、自然発生的に無意識に迎合しているにすぎないのだ。

八木沢イズム、北原イズムとは、怠惰と腐敗と小手先の技術主義に他ならないのだから。彼らは、今「過渡期世界論の再把握」の名の下に情勢分析を団結の基礎に置いて、彼らに似合ひの団結だ。「思想」という言葉を聞いただけで、マルクス主義という言葉を聞いただけで、「イデオロギー偏重」やら、「思想一般」やらとって恐れおののく、彼らには、情勢の推移と戦術レベルの三文文書による団結こそ、居心地のよい寝ぐらに相違ない。

(注) 彼らの基本文書……四・二八前に出された情勢分析の貧弱な雑文の事

我々の具体的武器は何か、それは、第一に、機関紙誌「マルクス主義」と『プロレタリアの旗』であり、それを基礎にした中央集権的党体制であり、第二に、全国労政、共学同の建設路線である。

この四つの戦略的武器(『マルクス主義』『プロレタリアの旗』、全国労政、共学同)こそ、我々が、徹底して、依拠するに足る、そして、我々をして、大躍進せしめる重要な武器である。

むしろ、全ては、「思想」が決定する。我々の思想が前進をよめ、創造をやめ、自己批判をやめるなら、そして、「狭量な精神」を、「寛大な精神」で置きかえるなら、そして、又、もとの腐敗

の淵に身を沈めるなら、この四つの戦略的武器は、何の力にもなりはしない。この事はしっかりと踏えなくてはならない。

我々は、この点で、一つの勝利をかちとっている。我々だけが「思想」を扱った。他の分派は、地区利害や、せいぜいの所、政治的、組織的利害のみを取り扱った。「思想改造」を提起し、団結したのは、我々だけである。だからこそ我々は、逆に、この四つの武器を必要としたのであり、又、使っているのである。必要は発明の母だ。

我々が、この四つの武器を造ろうとしたのは、決して偶然の産物ではない。熟考した反省と思想改造の中から、又、思想闘争の必要性が生み出したのである。北原イズムとの中央集権思想を巡る闘争が、物質的に生み落したものである。だから我々の、この四つの武器の対極には、八木沢(西)―北原における「基本組織」中央委―細胞」やら「XX機関」やらの相も変らぬ「討論の徹底」と命令への服従」やらが存在している。

我々は、具体的であるが、彼らは観念的である。思想―マルクス・レーニン主義に忠実たらんとする者のみが、原則を発見し、現実的に具体的に科学的に拘わりうるのである。だが、彼ら、素朴実践主義者、既ち、組合主義者共は、自分達が、最も良く、現実を知っており、具体的であると思ひ込んでいる。思想や理論や、原則一般を語る事は、形而上学であり、情勢や運動を狭い経験の枠の中で語る事が、何よりも、「唯物論者」の為すべき事ではないかと、全く本気で語るのである。

だから、彼らは、即時的な、又、即興的な効果を求めて、全ゆ

るものを取り込んでいる。八木沢イズム、北原イズムは無論の事、今日では、昨四・二八の沖繩地方委員会、太田論文まで取り込んで、雑炊をつくりつつある。それらは、只、眼前の局面を、政治技術主義的に、どう乗り切るのかという一点において、彼らの「団結と組織維持」がある事を証明するものであり、十月中央委の精神を、見事に体現しているのである。

我々は、今、出来る限り、安易な、感性的な団結を排そうと努めている。ボルシェビキは「首尾一貫熟考した理論的・思想的基礎」の上に建設されたわけではなく、内部に雑多なイデオロギーを流入させながら出発した。マルクス・レーニン主義を、時々、時々、気まぐれにおぼれさせようとする浮動分子や、又、フォイエルバッツハ流の感性的直感で全てを把握するかのよう主張する無政府主義(者)、関西プロント特有の、組合主義(者)(只、右翼的か左翼的かのちがいでしかない)に対する闘争は、今始つたばかりであり、非妥協に、推し進められねばならない。だが、にも拘らず、我々は、戦略的武器を、保持しており、我々は、戦略的に完全優位であり、攻勢である。

北原―八木沢(西)一派、又は、永井一派は手工業的な、はったり政治は行使しても、まともな総括文一つ提出する事は出来ない。勝利を決定するのは、戦略的局面における勝利である。だから、我々は、この局面に最大の関心と注意と精力を注がねばならない。小局面や、戦術的側面を過大評価するのは、地方主義、利己主義であって、少しの変化や、混乱にも動揺し、革命と党建設の、又、プロレタリアートの全成熟を冷静に判断することの出

来ない、小ブル動揺分子である。

今回の党内一分派闘争で、誰れがプロレタリア階級全体の見地を堅持し、誰が個別利害を肥大化したのか、誰が、全国性、世界性を代表せんとし、誰が地方主義であったか、誰が、真の中央集権主義を主張し、誰が、サークル主義、手工業性を、党の規律にまで高めたのか、誰が、マルクス・レーニン主義の原則を復権せんとし、誰が、組合主義、経済主義を党の指導理念にまで祭り上げたのか、―これらは、今では、すっかり明るみにだされている分岐である。

だが、我が一部の同志諸君は、この誰からも、明るみに出されている分岐から、意識的に目をそらし、相対的優位性やら、局面的優位性のみ、ボルシェビキ党建設の理念を、譲り渡すように要求するのである。

そして、他ならぬ自己が、今だに、サークル主義、経済主義、急進民主主義派の沼地にひたっていることを、あからさまに暴露するのである。それは、未だ、純正の八木沢イズムである。それは、北原イズムに対する反対派的批判者であつても、ボルシェビキの党理念ではない。

だから、我々は、この四つの戦略的武器を増々打ち鍛えるためには、我々の内的な弱点として、今だに集くっている八木沢イズムを文字通り、毛すじ一本残さず、根絶しなければならぬ。

我々は、この四つの戦略的武器を、八木沢イズム、北原イズムとの闘争―党内闘争の中から、「批判的批判」でなく、それに置き換えるべき我々の思想的核心的組織的帰結として、明らかにした。それ故にこそ、我々にとって武器たりうるし、それ故にこそ、武器としての威力を、階級闘争―党内闘争の中で、発揮するかどうりかも、この四つの戦略的武器をつなぐ、その思想的核心―マルクス・レーニン主義の復権にかかっている。

現在の我々の弱点は、主要に、これらの思想的核心的堅固さ、深さにおいて存在する。それは、二つのあらわれ方をしている。

一つには、×××合宿を前後して、ボルシェビキに結集した同志の内に表現された、動揺と、更に、ボルシェビキとして発展した「五・五糾弾会」の核心的根本性を清算させていくといった表現をとっている。―(注)『プロレタリアの旗』創刊号三面参照
ボルシェビキ誕生の中に、他の誰からの借りものでもない、党内闘争の発展―全国委員会の止揚を闘い取らんとしてきた同志達が、「総括」「加納フラクではないか」「別党コース、分裂はやっぱりけしからん」とする、旧全国委員会防衛の立場の中に、自らの闘いを清算し、今日は日和見主義へと、転落を開始した。

それは、「共産主義者」として、自己批判し、させていくといった地平を、今日には「大衆」にもどって、批判するといった清算が簡単に為されておき、「五・五糾弾会」闘争の中に、同じ表現と同じ言葉を使用しながら、全く、党内闘争の核心を異ったも

のとして、秘かに、ひそませてきた部分の存在を、暴露している。

ここにこそ、「五・五糾弾会」以降、八木沢(―西)―北原―永井一派の反動的分子に勿論のこと、我々内部の(未成熟さと混乱はともかくも)、思想的核心をめぐる分岐が露らわになってきた。

共産主義者が、文字通り、大衆と共に、最先頭を担いつつ、大衆の未来の利害をどのように、現実の中で代表するのか。

それは、どのような理論的武装の中で、成しえるのか。

その分岐をこそ、厳格な分岐を「五・五」に至る糾弾闘争は、今日も日々、我々自身をふるいにかけつつ鮮明にしつつある。大衆運動主義者が結局のところどのように、大衆自身の未来と現実の利害を裏切っていくのか、示して余りある。ボルシェビキ内部に起った、又、現に起っている事態の根本的核心的は、ここに存在する。

どのような嵐のような糾弾や批判に、我々が、「共産主義者」としての一切をかけて、その内実を問いつつ、自己批判する以外に、真に応える道がないことを、簡単に忘れる諸君がいる。彼らは、それも「共産主義者」として応えているという。それは、「共産主義」革命的実践」「革命的実践」諸民主主義闘争へと、天と地ほどの誤りの内に、共産主義を随落せしめた、文字通りの八木沢イズムの一形態である。

又、我々の内部には、これらの大衆運動主義とは異った表われ方で、古い残滓を残している。

今や、「烽火」再建路線の反動分子が、「安保、沖繩、日韓闘

争」の大空文句を並べたて、東京から沖繩まで、必死に走り回っている。当面的政治過程の内に、組織を團結させ、維持し、延命する、八木沢―北原イズムで武装した彼らは、がんばればがんばる程、彼らの経済主義、サークル主義、地方主義を暴露している。

しかし、これらの「政治過程」主義にひきずられて、ボルシェビキが、今日、何から始めようとしておき、どのような組織的転換を成し遂げようとしているかを、忘れ去り、「当面的運動」「方針」上の優位性の中に、彼らとの闘争を成さんとする傾向が、不漸に生れてきた。

だが我々は、当面、彼らとこのような「いたちごっこ」を競りつゝもりはない。

その意味で、我々は、一步も二歩も、進んで後退せねばならぬ。

我々自身は、現下の階級闘争の中で、明らかに遅れているのであって、この立ち遅れは、現実の運動に追いついてゆくことではなく、我がボルシェビキが、「共産主義の内実」を練磨し、我々のマルクス・レーニン主義の復権を巨万の労働者階級の指針―綱領として、打ち鍛えることよってのみ答えられること。我々の成さねばならないことは、競わねばならないことは、この事なのである。

我々は、このよりのな、八木沢イズム―大衆運動主義を徹頭徹尾、清算し抜くことの中でしか、例えば、真の全国労政が、文字通り、逆の意味で、一切の運動の表われと結びつくことや指導し抜くこととは出来ないことを銘じて置くべきである。

我々は、このような現われ自身を、唯、唯、否定的のみに、とらえようと思わない。この現われは、八木沢(―西)―北原イズム批判の内在一環として、我々の今までも増した自発性、創造性、献身性に促がされて、暴き出されてきたからである。この自覚と、この根拠との徹底した闘争をさえ我々が決意しさえすれば、半ば克服されたも同然であろう。

我々のすべきことは、これらの一切の日常的現われを思想闘争として、貫徹し抜き、我々のマルクス・レーニン主義の学説の原則的学習に照しつつ、一つ一つ、我がボルシェビキの原則を確立することである。

編集委員会は、全ボルシェビキ同志の自己批判―決意文書に対する点検運動を、これらの思想闘争の一環として、「批八木沢批北原」運動として、継続する。

全ての各級会議の冒頭は、これらのために、当面の間、空けられるべきである。これらの八報告と共、**「女解委」**の女性解放をめぐる、独自の点検(ブルジョア社会に存在する女性差別イデオロギー支配の流入と闘う事が党内にあって重要問題である)を介在させながら、編集委員会は、全国の批判―闘争を、組織していく。

(一九七五年六月十二日 マルクス主義編集委員会)

第三節 関西プントの組合主義を根絶し 共産主義の党を建設せよ

(一)

共産主義の党であるという事は、何よりも、マルクス・レーニン主義に基づく独自の綱領(運動の当面の目標と終局の目標)、独自の戦術(闘争の方法)、独自の組織原則(統合の形式)を持つていふ事を意味する。

その意味では我がボルシェビキは、今だ完成された共産主義の党ではなく、我々にとって、党は存在しているものではなく建設するものである。現在のボルシェビキは共産主義者の集団にすぎない。この集団を党組織に転化する為には、何よりも自然発生性に委ねては失敗する。

従来全国委員会は、活動家集団でしかなく、厳格な意味で、党組織ではなかったが、八木沢イズムは不断にそれを陰蔽した。運動の指導部を創りあげる事は、党建設と同義ではない。「大衆がそれをする。」のだ。全ての同志諸君、何よりもマルクスレーニン主義で武装せよ。同盟の歴史的任務、及び我が国の革命軍が、歴史的に何を為さねばならないのかを想起するなら、ボルシェビキ党の全精力は、マルクス・レーニン主義の復権に注がねばならない。いやしくも、共産主義者たらんとする者は、その出身階

級を問わず、マルクス・レーニン主義に習熟し、現実の運動に適用できなければならぬ。

この集団を党組織に転化させる為には、だから第二に、「軍事」を「孕んだり」(何というあいまいな概念なのだ)。「党と階級の区別」を叫んだり、みせかけの「軍事組織」に似せたりする必要はなく、従って北原イズムの導入など全く必要ではない。党の規律に従うとは、党の綱領的な見解と、戦術の見解、更にその組織原則に従うことであり、それ以外ではない。革命組織の建設は、長期の作業であり、今は何よりも、その基礎を盤石のものに打ち固める事が任務である。今すぐの突撃を語る事は、大衆運動主義であり、八木沢イズムである。まず関西プントの組合主義、サークル主義を根絶せよ。

「口先だけでなしに、実際に日和見主義者(II経済主義者)の反対者でありたいと思ふものは、第一にマルクス主義についての理論活動を復活させ、第二に我々の綱領と戦術を低める、意識的無意識的安全ゆるを試みを暴露し、反駁して実践における混迷と、動搖を克服することである。」(レーニン)

我々は、党の任務と性格を百八十度転換させなければならぬ。それは我が胎内にしみ込んだ大衆運動主義、組合主義、戦闘団主義との長期の闘争を抜きに、又その闘争の為に、マルクス・レーニン主義を団結と行動の指針にする事抜きには不可能である。

「戦術・戦術の党」から「綱領の党へ」というスローガンは依然として正しい。

ボルシェビキ党は断固として武装せる革命党として、今日まで

のどのよりな革命組織よりも強固で、訓練された戦争の党として建設されねばならない。我々の北原イズムに対する批判は、決して日和見主義、サークル主義者の永井と同じ見地から為されているのではない。それは革命的なマルクス・レーニン主義の見地からする、又中央集権主義からする経済主義、サークル主義に対する批判である。

武装する第一の条件は、何よりも思想的にマルクス・レーニン主義で武装する事であり、しかもそれが、単に党内の一部グループ等によって占有されているというのではなく、全ての同盟員を含め全組織的に武装されている事が、同盟がプロレタリアートの指導部たりうる第一の条件であり、プロレタリア軍事を扱い、プロレタリアートの武装を指導しうる不可欠の条件である。なぜなら我々にとって、軍事とは政治の凝縮された表現にすぎないからである。

そして武装する為の第二の条件は、秘密の機能の集中として、党の宣伝、煽動体制が武装化されている事であり、この事を抜きにして非合法党の建設はありえない。ブルジョア階級にとって、もつとも破壊的で恐ろしいものは、プロレタリアートの不退転の闘争の決意とその大規模な組織的集団が、革命的マルクスレーニン主義と結合する事、即ち、武装蜂起とプロレタリア独裁の学説と結合することであって、「一発の爆弾」を恐れているわけでは決してない。

全ての同志の諸君、一切の総括作業を経てボルシェビキ党大会へ進軍せよ。

(二)

ボルシェビキの誕生の内に様々な未成熟さ、混乱、新たな革命的萌芽等々が、様々な色あいをもって今だ混在している。これは五・五に至る党内闘争に対する立場と闘争の質とに規定されつつ、その大半が自然成長に任かされつつ存在してきたことを示している。

この根拠は、我々が今党内闘争と糾弾闘争のまっ只中で叫び始めたことに象徴的に表われている如く「綱領的団結」「党の世界観」といったものから程遠い、運動主義的、サークル的な、党員の自然成長性を許して来た我が全国委の腐敗と墮落の結果なのである。

我々はボルシェビキ誕生をもつて、大胆に真に「反スタマルクス主義の止揚」マルクス・レーニン主義の復権」を空文句的にではなく、闘い取り、血肉化し「綱領的団結」で文字通り武装した党建設への転換をしきらねばならない。しかし我がボルシェビキは、全国委の清算と止揚の過渡の内に、その出発を画しているであり、それ故にこそ、我々自身に混在する様々な思想の色あいの違いを単一に純化することをどのように闘いかい取るのか、これが問題なのである。

この間の糾弾をめぐる党内闘争の中で、我々はマルクス主義の思想的な核を「プロレタリア解放はプロレタリア自身の事業である。」「女性解放は、このように自己解放の原則に打ちたて

られるプロレタリア解放の不可欠の一環」を明確にせんとした。この思想的核芯に導かれて、五・五は存在したし、また五・五以降の我々女性同志と男性同志との批判的団結——ポリシェビキ建設は開始された。このような思想を手にしたがゆえに、現在のポリシェビキ内部の全ての諸同志の、前にも増した(比へようのな)党建設の自発性や能動性が、未成熟さや混乱を伴わいつつも発現している。

このような諸同志の生き生きとした自己解放を内在化した党建設の気分、自発性・積極性を切り捨て、押し留めるのではなく、その内に孕まれているその未成熟さを、その混乱をますます意識的に鮮明にし、克服すると共に、その内部にある一切の可能性と力をひきだし、育成し、共産主義者として革命家に鍛えていくこと、このことこそ、我々は集中した力をさかねばならないと考える。

「ロシア社会民主党は、労働者の階級的自覚を発達させ、彼らの組織化に助力し、闘争の任務と目標を指示することによって、ロシアの労働者階級のこの闘争を援助することを自分の任務として宣言する」「この綱領の項目は、最も重要な、最も主要なものである。なぜなら、それは労働者階級の利益を守る党の活動とすべての自覚した労働者の活動が、どんなものでなければならぬかを指示しているからである。」(レーニン「社会民主党綱領草案と解説」)

我々の党内闘争におけるこのような思想的核芯は、党とは何であり、当然のことに黨員とは何かを明らかにすることを要求している。しかし現在、我々は共産主義者の集団であり、党建設の出

発点に立っているのみである。今日、レーニンのいうこのような党の綱領の原則を実践しうるためにも、我々のマルクス・レーニン主義の復権は、このような綱領として具体化されるに至るまで確固として復権せねばならぬ。

わがボルシェビキは、運動で党を育て、しかもそれぞれ個人の自然成長に一切を委ね、指導は経験的になされるといった全国委を総括して、我々の出発点と同時に、その具体的方針を明らかにせねばならない。それは、ボルシェビキにとって、幹部政策として具体化せねばならない。

① 思想闘争の徹底化

我々にとって、先述した根拠をもって、様々な色合いの違いを混在させている現実の中で、北原イズム・八木沢イズムとの闘争は、文字通り、わがボルシェビキ内部の同質性の闘争として内在化されることを抜きにはありえない。

ボルシェビキ誕生期において、何よりもこれらを文字通りの思想闘争として徹底しなければならぬ。旧中央委メンバーに対する我々の批判闘争とは、文字通り、このようなものであり、この闘争を通して全ての同志たちが、これらの古い指導部の古い思想を根底的に解体し、新しい思想をおきかえつつ、自らを指導者に高めあげていく自己教育の過程でなければならぬ。自己批判—相互批判とは、このように徹底した闘争として闘いとらねない

かぎり、このような党内の思想闘争が何よりも階級に対する教育となる労働者階級の階級的自覚を高めることに転化されようがな

わが編集委員会は、この点にたつて、徹頭徹尾、旧中央指導部の自己批判活動を先頭とする「自己批判—決意」の活動を、ボルシェビキ内思想闘争として組織し、その最先頭に起つことで、我々のマルクス・レーニン主義の復権を具体的に我々自身の手に奪還する。

それらは、まず何よりも、編集委員会内の闘争であり、強化として闘いとしていかなければならない。

② 党活動の転換——理論活動・学習活動の確立

これらの思想闘争が、相手の人格的評価や、こじつけや、批判のための批判、自己保身のための自己批判に墮落しないためには、マルクス・レーニン主義の原則に絶えず照らしだされつつ、一歩一歩打ち固めていくことによって支えられねばならない。

わがボルシェビキにとって、文字通りこれは、徹底してマルクス・レーニン主義の理論学習(一般的な文献読みでなく、階級闘争の現実の分析を綱領に具体化させるための一切の理論活動と学習活動)を、党活動の基本的活動に据えなければならぬ。

これらは、従来の××学校や××合宿の一部に、また理論家の手中におくのではなく、文字通り、わが党とわが黨員がマルクス・レーニン主義で武装し、そのことをもって、何よりも労働者階級

自身を武装させていくこと、労働者階級自身が、党の綱領を自らの武器として、指針として理解し、獲得することに我々の一切は集中されねばならぬ。

③ 正しいマルクス・レーニン主義的見地に基いた指導の確立

わがボルシェビキは、今や出発点において、三号決議批判——北原イズム批判・組織論批判を通して、「中央集権非合法党」の思想とそれに打ち固められた堅固な組織原則のいくつかを確立せんとしている。

全国委員会の官僚主義的指導と指導責任論の悪病は、多くの誠実な党の中堅幹部をつぶし、のみならず、地方主義・サークル主義をはびこらせてきた。わがボルシェビキは、これに代わって、「秘密の機能集中・運動の機能分散」を原則としつつ、「報告の義務と責任の分散化」で置きかえねばならない。

「わが党において、正しい指導というものは、大衆(階級)の中から、大衆の中へ(階級へ)でなければならぬ。……すなわち、大衆の意見(系統だてていない)を集約し、(系統だった意見にかえて)、ふたたびそれを大衆の中へもちこみ、宣伝し説明して、大衆の意見にし、大衆に固く守らせ、それを行動の中で、それらの意見が正しいかためさせる。これを繰返して、一回毎に、より正しい、より生き生きとしたより豊富なものにしていく」

「任務についての一般的な呼びかけに満足し、一般的な呼びかけを行なったならば、すぐそれに続いて、個別的・具体的な指導に従事するよう注意せず、精通もしてないため、口先だけか、紙の上だけか、会議の席上だけのものにしてしまい、官僚的な指導に変えてしまおう同志も沢山ある」(毛沢東「指導方法の若干の問題について」)

このような「大衆の中から大衆の中へ」の正しい指導原則は、何によつてもたらされるのか。それは、まさに我々の党活動の根本的転換——マルクス・レーニン主義の思想的・理論的武装と、それが日常的に展開され習熟される党の系統的・計画的教育活動の中でのみ保証される。

以上のボルシェビキ建設の出発点にあつたの我々の思想的武装——マルクス・レーニン主義の復権を確認し、党活動の基礎を転換させていかねばならぬ。

(一九七五年六月一日 マルクス主義編集委員会)

第二章

経済主義に全面戦争を布告せよ

(注記)

以下の一章は去る一月初旬に、「中央書記局総括案(B)」として、同志本田によつて執筆され、旧同盟中央書記局総会(一月十一日)に於て基本的に承認されたものに、一部修正を加えたものである。

周知の如く、同盟中央委員会は、昨年十月中央委員会において「……第一に政治的破産の宣言以外の何物でもない『プロ通』を可決し、第二にサークル主義、官僚主義、組合主義たる北原イズムを公然と同盟の政治的組織の指導理念に祭りあげ、七三年八月以降の反動に最終的に勝利の玉座を委ねることによつて、更に第三に昨年八月より開始された『T糾弾会』に敵対・圧殺策動を開始し、より一層女性差別を助長拡大させるしかない」「中央委女解議案」の提出と、その精神で武装した中央委女性解放小委の設置を断行し、更にその議案に対する批判・撤回を主張した意見書をも無視抹殺することによつて、女性解放闘争に対する反動と圧殺の位置をかちえた」我々の声明)のであるが、この十月中央委路線に対する闘争はそれ以後の同盟の死活をかけた基本的任務となつた。だが多くの人は無気力と奴隷根性に浸る中で、又北原イズム、八木沢イズムの泥沼の中で、この十月中央委の反動的位置を仲々見抜くことが出来ずにいた。生田意見書の鮮烈な提起は、十月中央委の反動の洪水の前に孤立

させられたが、だが皮肉な事に、その事によって逆に、攻撃の刃は「女解文書」のみに向けられるのではなく、十月中央委の全体、その基本精神にまで向けられねばならない事を明かすに出したのである。現在この事が、どれ程大きな転換であるかは語っても語りきれないものである。それは決して安易な道ではなかった。同盟内には様々な政治的分岐が三年間存在して来た。十月中央委に於いても十数時間の激論が交わされた。だが結果はといえば、多少の修正による「北原イズム、八木沢イズム」の全会一致の採択であった。又書記局の延々一年半にも及ぶ「総括論争」が一体何を巡っての論議であったかを今日から振り返った時、その論議の不毛性、貧弱さに只あきれるばかりである。そこで、北原や八木沢・永井・伊集院・園内等が、時々主役になって、左右の経済主義の争闘が繰り広げられ、相互の責任の追求が只、繰り広げられたにすぎなかった。だから十月中央委の基本精神に対する批判など、最も革命的な人々でさえ、思いもよらなかつたことなのである。だが九月の生田意見書を一発の引き金にして、第一に十二月十九日のT査問委における永井査問委員長ならびに政治局員・八木沢・北原の不信任の決定と、第二次査問委の発足（加納委員長）、第二に十二月十四日の中央書記局会議における永井書記長の解任決定（岡書記長代行へ）と、一月における書記局主流派責任による十月中央委を批判する「総括案」の提出、第三に兵庫県委「鉄鎮を砕け」（一月）による「T問題の総括は第二段階の総括と一体である」という提起による「T糾弾会」の思想路線争への飛躍という、三発の弾丸が発射されたことによって局面は全面転換を開始したのである。八木沢イズムの「左右の争闘」という日和見主義的局面は粉碎され、真の争闘が、即ちマルクス・レーニン主義と経済主義との全面戦争が開始されはじめたのである。

十二月十四日、永井書記長が、北原に対する日和見主義の科でその不信任が決定されて以降、労働者反対派官僚北原はその牙先が自己にむけられない為の全ゆる政治的、軍事的工作を開始した。書記局論争に「中央指導部合同会議」の名の下に手勢を率いて介入し、永井批判に賛成の屈服的態度を見せながら、その実その批判を永井の組織運営のルーズさに対する批判の枠に押し込めようと画策した。更に指導部の再編プランを提出し、書記局を解散させ、八木沢・北原のもとに全権を承継せんとする陰謀を開始した。七四年最後の合同会議（十二月二十八日）で八木沢・北原は「十月中央委を徹底して打ち鍛えよう」なる反動的な珍理論を持ち出した。（もともとこの提案は提出後五分で粉碎され、「撤回するからなかつたこととしてくれ」と泣き事を垂れ、北原は「自分は

マルクス主義を良く知らない。政治局は破産しているからもうこれ以上追及をしないでくれ」と逃亡を開始した。）更に総括案の提出される会議（一月十日深夜）の直前まで全ゆる敵対と妥協を画策し、直前には「西が加納、本田に武装抵抗するといっている。彼らは非常に追いつめられているからいつ暴発するか判らない。」などとこの内局会議を陰然と軍事的に包囲し圧力を加え続けたのである。「十月中央委に敵対してくれな」と。

だがこのような事前の全ゆる反動攻撃を一つ一つ粉碎し、書記局総括案は提出されたのである。それは北原の望んだように永井批判のみで終わってはいなかつた。それは基本的に、永井を日和見主義として批判し、真の敵八木沢・北原イズムを批判し「経済主義に全面戦争を布告せよ」と十月中央委の基本理念「経済主義に非妥協の戦闘宣言を通告した。重くるしい沈黙のあと、自己批判と北原との闘争を決意した八木沢、永井を含め、全員が承認し総会への提案を決議した。この局面変化は様々な形で波及した。八木沢は、「12・18路線の再把握、再総括」を自己の十数年間の総括の中で試みんとしたが、挫折し「自分と北原は除名されるべきである」という遺言を残して二月初旬に逃亡した。××機関においては公然と北原批判が爆発し分裂し、機能停止した。北原は遂に「自分は一から再生したい」と屈服を開始した。この崩壊寸前の北原イズム、八木沢イズムを救ったのは誰れか。北原と八木沢の運命の中に明日の我が身を見出し出した関西地方委に巣くう茶坊主共（西・松木・江夏・味岡）は、自分が何をしているのかに気づきもせず、只自己保身の為だけに「党内闘争」に顔を出し、崩壊寸前の北原と手をたずさえて、陰謀的分派活動II党の崩壊路線を走り始めたのであつた。我々はこの茶坊主共の反動的役割を絶対に忘れもしなければ許しもしないばかりか、必ずや根絶することをもって彼らの恥ずべき犯罪に鉄鎚を下すであろう。五月五日、たなき出されそりになつた松木は何を言つたか。「待ってくれ。自分は中書記総括を全面的に正しいと思つているんだ。北原とは闘かうつもりなのだ。許してくれ。」と。この厚顔無恥振りが奴らの本質なのだ。

今日この一文は、すでに我々が「ボルシェビキ」として新たな出発を開始している状態にあつては、表現上時宜に過ぎないものが多々ある。いくつかの組織上の主張が古くさくなつてきている。今日では同盟や書記局一般は存在しない。我々は書記局一般の飛躍ではなく、何よりも「五・五」を経た今日、ボルシェビキ党の建設として我々の責任を貫徹する路線を今や歩んでいる。にも拘らずこの一章は我々が真のボルシェビキ党を建設してゆく為の重要な提起を為していることを認識しなければならぬ。

はじめに

十月中央委以降、十一月十六日に再開された中央書記局総括論争は、一カ月を経て書記長永井に対する「不信任」の提出によってその一段階を終えた。我々はこのことの意味する全てを明らかにし、新たななる団結へむけて同盟を打ち固めてゆくべき義務を負っている。

この「永井書記長不信任」の提出によって確認しなければならぬ第一は、昨年八月書記局総括討論において提出された政治局の「書記局総括案」即ち、書記局の「八月路線」の破産であり、第二に最も重要な事は、八月路線をも含む全党指導における政治局の経済主義、組合主義に対する全面的な戦闘宣言であるということである。我々は後に明らかにするように、単に八月以降の指導の誤りや限界を批判し、責任追及として「不信任」を提出し全会決定したのでは決してない。八月以降の書記局の全党指導における限界や誤りは中央指導部の共同責任である。又八月以降の指導の混迷が、同盟全体が今だその旧来の全活動を総括し、飛躍を組織してゆく闘かいに於て、ジグザグを繰り返していたさ中であつて、より多くその限界に規定されたものであつたならば、指導者個人の肩にその責任を押しつけることは、何らの解決を意

味するものではない。むしろ問題は、そのような党中央の全党指導における経済主義的手工業的限界と、及びそのことによつてもたらされている全党の様々な経済主義的誤りに対し、徹底した総括を為す中で、その自己の経済主義を粉砕する闘争を組織する指導部の創出と闘かいの開始を文字通り不転の決意をこめて指導するの可否かとしてあるのである。だが十一月十六日の永井氏の指導方針の提起が一貫してその経済主義に対する戦闘性を欠いている事、永井氏の中央集権党の建設方針が、ある時には自己の悔悟として語られ、ある時には実現するべきプラン・計画として語られつつも、何よりもそれは「同盟の陥っているどのような誤り、偏向と闘うことによつて」又「指導部のどのような偏向と闘うことによつて」実現するの事かということにおける一貫した日和見主義として表われている事に対する批判であり、そして又、そのような日和見主義を乗り越えて断固とした闘争を組織する指導部を建設する事という、経済主義と日和見主義に対する「戦闘宣言」として「不信任の提出」がある事こそ重要な意義なのである。日和見主義からの自由の表明と経済主義に対する仮借ない戦闘宣言である。再度確認しよう。我々の「不信任の提出」は、「責任の一般的追及」ではなくて我々自身の歴史的な弱点に対する訣別の決意の表明であり、「戦闘の開始に対する日和見主義」と訣別し、

同盟の一切の限界を突破し、真のマルクス・レーニン主義党に打ち鍛える闘いへの出立宣言でなくてはならないのだ。それだけが現在の同盟の苦闘に対してとるべき唯一の革命的指導部の態度でなければならぬ。善意や良心、分別の道は地獄への道である。悔悟のおしゃべりや、手がかりのない空想にも似たプランは、我々を真のボルシェビキの指導部たらしめてはくれない。

全ての同志諸君。日和見主義的団結を戦闘的団結で葬り去れ。下部からの党中央への批判には、正面から受けとめ、正面から応える戦闘的指導部を建設せよ。一切の指導部批判は、「いいわけすること多くして戦かうことなき」日和見主義的自己保身的指導に向けられている。「指導責任をとること」一般は現局面では日和見主義なのである。「指導責任を賭けて」指導する事、まさに「指導すること」が、今やはっきりと死活をかけたものとして突きつけられていることを確認しなければならぬ。

第一節 同盟の「停滞」の真の根源は

何か

一ヶ月も経ないうちに我々の間には「経済主義の克服」「中央集権党の建設」という合言葉が流行するであろう。だがこのことは決してめざらぬことではないし我々の間にあつては今までも時おり思い出されたように流行したものである。だが結局の所、

そのような言葉が何回となくもてはやされるといふことは「経済主義」が今だ克服されたことではないといふことと、「中央集権党」が今だ建設されてはいないといふことを示しているだけである。

我が全国委の陥っている事態に対し、その根拠を、サークル主義だとか、組合主義、あるいは組織日和見主義だとか政治的妥協性だとか戦闘団主義だとかありとあらゆる形容と切開とそして闘争が行なわれて来た。だが実際の所それらの試みはことごとく失敗に帰しているだけである。これらの闘争は外見上、徹底的に「実践的」であつたが、本質的には徹底して「感性的」であるにすぎなかつた。

現象上の弛緩や分散に対し、応急処置以上の切開は何一つほどこされたわけではない。最初は組織規律、そして一転して諸個人のイデオロギー、属性問題。これらにはつまるところそのサークル主義や組合主義の秘密について何一つ把握出来ないところの結果にすぎないのである。そして人は往々にして、自己の姿ほど判りにくい難解なものはないのである。

「……しかししばらくは歩み出しかともどりしていったのは指導者達だけであつた。運動そのものは成長しつづけ、巨大な前進をつづけていった。プロレタリア闘争は労働者の新しい層に波及し、ロシアの全土に広がってゆき、それと同時に学生やその他の住民諸層の間の民主主義的精神の復活にも間接に影響を与えた。けれども指導者の意識性は自然発生的高揚の広さと力の前に降服してしまつた。……指導者達は理論の点でも」批

判の自由（実践の点でも（手工業性）遅れていたばかりか、あらゆる種類の大仰な議論で自分の立ち遅れを弁護しようとした。（レーニン『何を為すべきか』結論）

これはレーニンによる一九〇〇年前後の描写であるが、現在の我々の陥っている状況はまさに「この状態」に他ならないのではないだろうか。そしてこれは一人我々のみならず、すべからず革命的左翼の今日的姿でもある。「高揚する自然発生性への屈服、そしてその克服ではなくて降服の弁護、体系化」かつて七〇年前の自然発生的高揚（それは階級闘争の構造的転換の開始というべき）を前にして、真に民主主義的な人々は「七〇年代は冬の時代」（日向派）と云ってその高揚から明からさまに逃亡して行った。我々はそうではなかった。七〇年代の高揚は、確実に六〇年代の前衛闘士をすらはるか後景におしやるであろうこと。その高揚は否応なくその革命的翼たんとする部分に、真のプロレタリア前衛党を、仮借ない強制力をもって要求するであろうということを理解していた。共産同党内闘争はその「真のプロレタリア前衛党」を巡る闘争に他ならなかった。そしてこの激しい闘争の過程で我々は一つの結論にたどりついた。それは他ならぬ我々自身の時代を清算することであった。我々自身の思想我々自身の組織を徹底して清算することであった。「真のプロレタリア前衛党」を建設する闘いは、我々自身の時代への闘争としてのみ第一歩を踏み出すことが出来る事、これは我々を襲った最も強烈で仮借ない試練であった。六〇年代をもっとも戦闘的に、もっとも英雄的に闘かい抜いた我々自身への戦闘を抜きに党建設は成功しない。

赤軍として、それぞれの流儀でその破産を歴史的に鮮明にしていた。にも拘らず、我々を除いて誰もそれらの事態を他ならぬ反スタマルクス主義の破産であるとは考えてもみなかったのだ。だから、12・18路線は「地上への批判」として仮借ない進軍を続けなければならなかった。だがまさに12・18路線はその「地上への批判」に耐えることが出来なかったのである。赤報派や左派は自ら再び昇天した。

従って七一年秋以降、全国委員会の任務はこの「地上への批判」を遂行し、実際に「反スタマルクス主義の歴史的『時期』を革命的プロレタリアートの名において清算すること、まさにそれを他ならぬ「マルクス・レーニン主義党の建設」として対象化せしめることであった。

だが今日、我が全国委員会において疑いもなくこの我々の歴史的使命を果たす事業は遅れている。それが遅れているということ、は、何よりも昨十月中央委が雄弁に語っているところである。「プロ通」を見てみたまえ。三号決議を見てみたまえ。偏見のない人なら誰れでも認めるであろう明瞭な事実である。そして前述した様々なサークル主義、組合主義、経済主義的偏向は何よりも他ならぬこの「歴史的事業の遅れ」と密接に、誰よりも固く結びついているのである。そして現在ではこの「歴史的事業の遅れ」に触れずにサークル主義や組合主義を語る事は反動的である。最も無責任で恥知らずの人々だけが、この反動に魂を売り渡すことが出来るのである。なぜならそうすることだけが自己の「理論の点でも、実践の点でも」立ち遅れている事を陰蔽し、弁護しうる唯一

だが我々は貫徹したのだ。それが12・18路線であった。我々は我々自身とその一時代を反スタマルクス主義の『時期』として対象化した。反スタマルクス主義は、現代過渡期世界の中で、マルクスレーニン主義が真に再生する為の揺籠にすぎなかった。それは丁度ひな鳥が孵化する為には自分を守ってくれた「殻」を破壊しなければならぬように我々も又そうしなければならなかったのである。

「フオイエルバッバはヘーゲルの体系を破って脇へ投げ捨てた。しかしどのような哲学でも只簡単にそれをまちがっている」と宣告するだけで始末されるわけのものではない。

だが12・18路線は今だ部分の勝利でしかなかった。それはまさに「どのような小ブルマルクス主義でも只簡単にそれをまちがっている」と宣告するだけで、始末されるわけのものではなかった。その意味において12・18路線は戦闘宣言を為したにすぎなかった。それは「反マルクス主義のイデオロギー」にその第一撃を加えたにすぎない。だがイデオロギーへの批判はその存在への批判、その物質的根拠への批判として突き進まねばならなかったのである。

「あの世の真理が消え去った以上、この世の真理を打ちたてることが歴史の任務である。」（『ヘーゲル哲学批判』）

天上への批判は地上への批判に変わらねばならなかった。「反スタマルクス主義を清算せよ」我々は「革命運動の『時代』」に対し、その日和見主義的「存在」を清算せよと要求しなければならなかった。まさに青年ヘーゲル派のように「意識を変えよ」ではなくて唯物論的にそれは為されねばならなかった。すでに反スタマルクス主義は一方において革マル派として、他方において連合

の道だからである。

我々は今、この「歴史的事業の遅れ」を陰蔽したり、ましてや擁護しようとする一切の思想、一切の組織活動、一切の試みを「経済主義」として粉砕しなければならぬ。そして「マルクス・レーニン主義の革命的復権」を題目ではなく、戦闘的指針として、断固貫徹し、全国委の「歴史的使命」を果たさなければならぬ。その為には、妥協は戦闘に、自己保身は自己犠牲に、無原則は原則に、無規律は規律に、分散は密集に、不和は団結に、とってかえられなければならない。そして又、このような闘争だけが、それを為しうるであろう。そしてこの「歴史的事業」を推進する闘争だけが、我々が欲してやまぬ中央集権党を我々にもたらすであろう。

確かに思想上の経済主義は、組織上の手工業性と一卵生双生児であり、思想上のマルクスレーニン主義は中央集権組織の母親である。思想上の経済主義は、組織上の手工業性、政治上の組合主義から永遠に自由にはなれないが、思想上のマルクス・レーニン主義は、組織上の手工業性を克服し、中央集権組織を生み出すことが出来る。

「任務が正しく提起されさえすれば、この任務の実現を繰り返して試みるだけの精力がありさえすれば、一時の失敗は半ばの不辛でしかなかった。革命的練達と組織者としての手腕はおいおい獲得されるものなのだ」（レーニン）

第二節 全国委員会とその歴史的任務

我々の「歴史的事業」の遂行の遅れをたらした当のものは、何よりも、同盟（全国委）の思想上の経済主義的偏向であり、反スタルクス主義への反動的回帰の傾向であった。

その特徴の第一は何よりも、マルクス・レーニン主義の軽視であり、その卑俗化であった。マルクス・レーニン主義の学説を「それ自体では非実践的である」と卑俗化し、軽視し、この学説こそ最もその革命的実践の基礎であるとする12・18路線の到達地平を卑しめたのである。従って又それは、同盟内に理論における折衷主義と無原則性、理論に対する、従って目的意識性に対する軽視を導入し、革命的批判関係、理論闘争を封殺し、不断に妥協や日和見主義、団結の弛緩をもたらしたのである。経済主義者は、革命的批判や理論闘争に対して、「党の利益の為に全ての人々を利用しなければならぬ。」と云って「批判の狭量さ、非同志性」を非難するのである。かつてエンゲルスのデューリングゲに対する批判について「辛らつ、狭量、非同志的」云々と非難したドイツ社会民主党の経済主義者のようにである。そうしながら彼ら経済主義者は、他方で、「原則や新しい戦術の為に公然たる闘争によってではなしに、除々に、めだたないよりに、そしてこいつによってければ、罰せられることのないやり方で、（即ち伊集院一派とは別のやり方で、）組織を腐敗させ、その目的を遂げようと努めているのである。」（レーニン）

経済主義者にとっては、「団結とは妥協と取り引きのことであ

り、批判とは訣別のことである。」だが疑いもなく、組織的革命的統一、比類のない精神的闘争によってのみ堅持されるのである。そして経済主義に対する闘争こそが他でもなく党を強化し、その生命力を強めるのである。このように経済主義がびこっている今日の事態の中で「党内闘争こそ党を強化する」と北原のように百万遍となえたところで、無意味である。一般的に「党内闘争が党を強化する」のではない。「経済主義に対する闘争だけが党を強化する」のである。これこそ他ならぬこの二年有余の全国委の総括でなければならぬ。マルクス・レーニン主義に対する経済主義者（八木沢や北原の様な、あるいは又西のような）の陰然とめだたない、あの手この手の闘争は、党を弱体化させるし、又実際の所それらの諸君達によって全国委は、様々な腐敗に侵食されて来た。そのような、腐敗を持ち込む経済主義者に対する無慈悲で非妥協な闘争だけが党を強化する。経済主義者は公開の論争を恐れ、裏取り引きを望む。革命的批判に対しては「イデオロギーの過重評価」だと非難する。同盟内の一部の腐敗分子はこの公式通りに動いている。

レーニンは「口先だけでなしに、実際に日和見主義者（即ち経済主義者）の反対者でありたいと思ふものは、第一にマルクス主義についての理論活動を復活させ、第二に、我々の綱領と戦術を低める意識的、無意識的な全ゆるを試みを暴露し、反駁して、実践における混迷と、動搖を克服することである」と述べている。

又、「自分の手で科学を前進させたと真に確信している人なら、古い見解とならんでの新しい見解の自由ではなしに、古い見解を

新しい見解で置きかえることを要求するはずである」が、経済主義者は、「何か一つの理論を別の理論で置きかえるのではなしに、いつさの首尾一貫した熟考に基づく理論からの自由を主張し、折衷主義と無原則性を唱える。」と述べている。

又「ただ近視的な人々だけが、党内論争や、色あいの厳密な区別だてを時宜に適さないとか、無用なことだと考えることが出来るのである。ロシア社会主義の将来は、こんご長い年月に渡って一にどの「色あひ」が強まるかによって決定されるのだ。」とも述べている。

従って、何よりも我が同盟の中央委員会のイデオログ達は、その「組織規律」やら「組織日和見主義」（北原）とやらの批判の前に、何よりもその、思想上の経済主義への屈服こそ告発され、批判されなくてはならないのである。

マルクス・レーニン主義の革命的復権を、何よりもその党派性としてかかえて来た我が全国委にあって、他ならぬマルクス・レーニン主義の軽視をばいこらせ、その復権のみならず、反スタルクス主義の批判をも永遠の彼岸にまで追いやらんとした、あるいは又、全国委の歴史的使命を忘却させ、同盟の組織的解体につながるような「何か一つの理論を別の理論で置きかえるのではなしに、一切の首尾一貫した熟考もとづく理論からの自由」を唱える腐敗した反動を同盟内に流入せしめたその責任の大半は、そのイデオログ達の責任であり、又逆にいえば、他ならぬそのイデオログ達の中にこそ、その腐敗した経済主義が流入していたのである。誰れの病いでもなく、他ならぬ、同盟中枢こそが、そ

の経済主義からもっとも自由ではなかったのである。「前線のサークル主義、組合主義を粉砕しなければならぬ。」（八木沢氏、北原氏）だがまさに、同盟中央は、自己自身についてだけ語りたまえ」という格言にもっと思いを寄せるべきであったのである。

「我々の立脚すべき路線はマルクス・レーニン主義の学説一般ではなく云々」「学的体系一般ではなく、生きた資本主義批判としての発展云々」「資本主義批判の二つの側面は戦略に媒介されての真に実践的になる云々」（八木沢氏）、「政治的妥協性の根源は組織日和見主義である」（永井、北原氏）これらの主張が果たした実践的帰結は、何よりもマルクス・レーニン主義の、従って我が同盟の思想的団結の卑俗化以外ではなかった。スターリン主義がマルクス主義を哲学体系の中に閉じ込めた科によって批判されるならば、これらはマルクス主義を「学」一般の世界に追いやったのである。そして「革命的実践」を極めて限られたものとして狭めたのである。（もちろん、だからといって、「学的体系」とやらの中で何程のことが成されたというわけでは全くない。）

「革命的理論なくしては、革命的運動はありえない」とレーニンの言葉は、我が全国委の革命運動における歴史的任務からするならば、いくら強調されてもされすぎるといふことにはない。それはレーニンが一切の「批判の自由」を「経済主義を敵に回した時にそうであったように、我々も又そうなのである。それは何よりも、我が全国委の歴史的任務（マルクス・レーニン主義の革命的復権と反スタルクス主義の止揚、スターリン主義の打倒、単一党の建設、帝、社帝の打倒）が、今だ端緒にいたばかりであり、

その依拠すべき思想と組織は、今よりやく形づくられつつあるにすぎず、「今よりやく自分自身の個性をつくりあげつつあるところであり、運動を正しい道から引き離す恐れのある他の革命的思潮との対決を終わるにはほど遠いのである。……このような事情のもとでは、一見して『たいしたことのない』ように思える誤りがこのうえなく悲しむべき結果を引きおこさないとも限らないのである。」(レーニン)

スターリン主義、社会帝国主義と反スタルクス主義の恐ろしい程の重包囲の中であって、我が共産同の歴史的任務は本当にまだ開始されたにすぎないのであり、その第一歩を踏み出したにすぎないのである。それは我々が担うべき壮大な歴史的任務からすれば、まさにそうなのであって、「12・18の革命的指標」は我々のほんのささやかな一瞬の気のゆるみによってさえ、たちまちのうちに敵の陣営に奪い去られてしまわないとも限らないのである。神奈川左派がそうであり、赤報派がそうであり、伊集院一派がそうであったように。

マルクス・レーニン主義の革命的復権をかけた、革命的左翼の「まる一時期」に対し、清算し革命的揚棄の戦闘宣言を發した我が共産同の精神は、「寛大」であるよりは徹底して「狭量」であらねばならない。原則のいつ脱や、無原則性、折衷主義に対しては、苛酷なまでに非妥協であらねばならない。その「狭量」の精神だけが、組織の結束を強化し、組織の戦闘性、破壊力を強め、一糸乱れぬ組織活動を生み出すことが出来るのである。膨張のエネルギーの爆発力は、集中を求めるエネルギーの函数である。思

我々は文字通り、全国委の歴史的任務の成否をかけて、このよりな一切の思想上の経済主義と闘いか抜き、粉碎しなければならぬ。それだけが、12・18路線を革命的に継承発展させる道であり、全国委の三カ年の革命的諸実践の全成果を、余すところなく革命党建設に對象化させ、かつ反スタルクス主義の止揚を勝ちとるその物質的力へと発展させることの出来る道である。我が中央書記局は、まず卒先して団結し、この闘争の先頭に立たなければならぬ。

そのことが、何よりもこの間の我が同盟の分散性、日和見主義、非戦闘性に対する総括の第一の軸でなければならぬ。

何よりも同盟(全国委)の三カ年有餘に及ぶ諸活動は、階級闘争の様々な自然発生的高揚と結合し、大きな前進を勝ちとってきている。そして同盟とその周辺の活動家達は、その闘争の中でたくましく打ち鍛えられ、プロレタリアートの先進闘士として、献身的な活動を貫いている。同盟とその周辺には、最良の活動家達が結集している事は疑いようもない事実であり、我々の誇りである。だが彼らは、日々前進する階級闘争と同様に、疑いもなくもっと前進することを欲している。七三年から七四年、そして七五年に至る階級闘争は実に大きな転換と前進を勝ちとっている。国内的には、引き続き勝利的發展を続けている民族解放運動は、インドシナにおいて戦略的勝利をかちとり、又帝国主義国内に於けるプロレタリアートもヨーロッパを先頭にしながらその戦闘性を再び強めつつある。

国内的にも、増々革命と反革命の分岐が鮮明にされつつあり、

想的純化の勝利とその永続的推進を抜きに、組織の發展強化は絶対でありえない。我々が勝利することによってのみ日本プロレタリアートはその革命党を手中に収めることが出来るのであって、我々が妥協することによってそれは為されるのではない。そして我々の勝利は、飽くなき戦闘と闘争精神、非妥協で無慈悲な党内一党派闘争の徹底した推進以外には、決してどこからも与えられないものではない。関西ブントの家父長主義的ルーズスは、根絶されなければならない。

にも拘らず、我が同盟内には、革命的理論と相対的別個に、革命組織がありうるかのように考えたり、理論における折衷主義と無原則性の基礎の上に、中央集権党の建設が可能であるかのような考えが今だに残存しているのが現実である。だがせいぜいの所、北原氏に代表されるこのような右翼経済主義は、マルクス・レーニン主義における中央集権党のその形骸をのみ、せいぜいの所模倣出来る程度であり、それは単なる「事務的には多少足りべきとしたサークル」の建設の試み以上には出ることとは出来ないのである。それは砂上に楼閣を建設する類の空しい試みでしかない。そしてそのような試みの基本的な犯罪性は、中央集権党の空語的な叫びと引きかえに、増々革命的理論に対する軽視と無関心を増大させる事であり、「ちっぼけな実用主義と完全な理論的無関心の結合」(レーニン)という経済主義の沼地へ、増々同盟を引きずり込んでゆく事である。このような傾向は、政治的側面に於ても、せいぜいの所「経済闘争に政治性を付与する」類いの組合主義的政治としてしか結果しえないものとしてある。

それに伴って、革命的翼と日和見的翼との分岐も又不可避に進行しつつある。

そしてそのような中で、唯一問題なのは、だが最大の問題なのは、同盟中枢の立ち遅れだけなのである。これらの戦闘的な高揚を、目的意識的な革命闘争に転化させ、首尾一貫したマルクス・レーニン主義の革命的思想上教育し、武装させ、単に「経済闘争に政治性を付与する」だけでなく、又今すぐの突撃を呼びかけるのでもなく、「計画としての戦術」——即ち「長期にわたる強固な闘争の爲の、あらかじめ周到に考え抜いて順を追って準備して来た系統的な計画」(レーニン)の下に、厳格に指導することに於いて、そして又なによりも、その事を唯一実現出来るところの「革命党」の建設において、何よりも立ち遅れてきたのである。「大衆の自然発生的性が大きければ大きい程、運動が広まれば広まる程、社会民主主義の理論的活動においても、組織活動においても、大量の意識性を持つ必要が比喩ものにならない程急速に増大する。」(レーニン)

そして何よりも、このような「真のプロレタリア前衛党」の建設の闘争は、反スタルクス主義との徹底した死闘、スターリン主義との死闘、思想闘争抜きには不可能なのであり、我々はそれらとの断固とした、思想的、理論的、組織的分岐を徹底して押し図らねばならなかったのである。そうする事抜きに我々の發展は、もはや一歩たりともありえなかったのだ。そしてこれこそ、全国委三カ年の蓄積と前進が、不可避に突きつけていた当のものでもあったのだ。「第二段階的実践」は、戦術的変更、飛躍によって

は、即ちそれらの諸実践の小手先の修正や、又戦略的連結の「環」を探し求めたり（かつての五大課題の戦略的結合の試みなどに示されたような）することによって、実際の所、何の前進もかちとれないものとして存在していたのである。そのような試みは、悪無限的に「戦略主義」をばびこらせ、不断に第二次共産同の地平にまで、反動的回帰をもたらすことのみ結果するものでしかない。

まさに我々に問われている「第二段階の革命的飛躍」は、全国委の歴史的位置と任務を貫徹してゆくのか、それとも、清算し、民主クラブへと同盟を低め崩壊させるのかという事における結着抜きにはありえないものとして存在しているのである。そして、この点における一切の選択の自由は、もし我々が、変節漢や口先きだけの共産主義者になりたくなければ、一切ありえない。我々にとって、「第二段階的諸実践の革命的な飛躍」は全国委の歴史的使命の遂行と結合する事抜きにはありえない。

そして他ならぬ我が十月中央委員会は、この点においてその全面的な破産を宣言したものに他ならないのである。

それは第一に、全国委の歴史的位置と任務について全く不当に切りちぢめ、形骸化させ、我々を共産同の何の特色もない、平凡な一派にまで陥らし込めた。それは「12・18路線の面的地平」を単なる「宇野や主体性哲学の経済主義をあばき批判した」ことや、「反帝反スタの戦略の反動性を批判した」（プロ通）地平にまで、全くあからさまに低めてしまった。それは党的な団結の核心について、何ら明らかにすることが出来ず、従って全国委の基

本的な位置と任務についても触れることすらなしえなかった。

そして第二に、三年前「戦略の基本を指定する立場は明らかであり、そしてこの基本的任務を現実の階級闘争の中で物質化」する事が全国委の当面する任務であることを宣言したことさえも忘れて、あろうことか、その宣言をなした当の本人をして三年後の今日「戦略の欠落」を語るといふような全くもって粗雑な変節漢の手口で（まさに気の速くなるような変節漢、その乱雑さ）全国委の三ヶ年の理論的、組織的蓄積を総括不能な無に帰したことで

まさしく十月中央委は気の速くなるような粗雑なやり方で、自己の破産を大胆にさらけ出しはしたけれど、にも拘らず、その自己の大胆な破産宣告については実の所、何一つ自覚しているわけではなかったのである。この事から導き出された結論は「作業の遅延」という認識以上ではなかったし、処方箋も又その克服の作業プラン以上ではなかった。だからそれ以後、十月中央委精神の体现者達は、自分勝手なおしゃべりを始めたのである。富田は、首都圏再建委員会内の革命的批判の前に早々に沈没した。永井氏は、日向一派に対し「12・18路線を自己批判するから一緒にしろ」と語りかけるなど、全く許しがたい腐敗振り、解党主義振りを発揮し、関西地方委の一部右派の諸君達は陰然と12・18路線の全面的清算をかけた、八木沢イズムを右翼的に純化したい希望、その本音を恥も外聞もなく語りはじめ、サークル根性をまき散らし始めた。「……とりわけ指導者の義務は、全ゆる理論問題について、ますます自分の理解を深め、古い世界観につきまもの、伝来の空

文句の影響を増々脱却し、そして社会主義が科学となったからには、又科学としてとり扱われなければならない事、すなわち、学習されなければならない事を、絶えず心にためておくことである。このようにして獲得され、増々明らかになってゆく洞察を労働者大衆の間にいよいよ熱心に広め、党と労働組合の組織をいよいよしっかりと固める事が肝要である」（エンゲルス）

第三節 経済主義に全面戦争を布告せよ

以上述べたように、何よりも同盟中枢の経済主義への屈服によるマルクス・レーニン主義の卑俗化と、同盟の「歴史的任務」に対する軽視こそ、何よりも同盟全体の「ある種の停滞」（プロ通）の真の原因であり、また組織活動上の手工業性の真の「活力源」である。我々は今、この組織活動上の手工業性を粉碎し、革命的組織、即ち厳格な中央集権組織を建設するためには、何よりもこの手工業性の個々の現れに対して、やみくもの「今すぐの突撃」を呼びかけるのではなく、総体としての手工業性の「活力源」に対する闘争を経なければならぬことをその第一の結論にしなければならぬ。なるほど、やみくもの「今すぐの突撃」は、「一時期の密集性」を生みだしはするであろう。だが、全国委の三ヶ年は、他ならぬこの「一時期の密集性」は、次の段階における「一時期の分散性」の単なる生みの親にすぎないことを何度となく証

明している。何次かにおける書記長の更迭は、それぞれ「一時期の密集」から出発し、「一時期の分散」に帰結しただけであった。従って、我々は今、この「法則」の正当性のために今一度この実験を繰り返すことの代りに、そろそろこの密集は、あの分散の別の表現にすぎないこと、即ち、手工業性の別々の表現にすぎないこと、それは一度、「H₂O（水）」という「存在」が、種々の条件の中で、時には密集した個体として、時には分散した気体として、その「存在形態」を対称的にすら変化させるように、この手工業性もまた、時には密集として、時には「分散」として、その「存在表現形態」を、種々の条件の中で変化させるのであるという結論を導き出さねばならない。

従って、今、我々がなすべきことは、この手工業性を、あれやこれやの別の存在形態に変化させることではなしに、この手工業性そのものを滅ぼすことではなければならないのである。

レーニンは、経済主義について、次のように述べている。

「この傾向の基本的特徴は、……大衆の自然発生的高揚に対する意識的指導者の立ち遅れを理解せず、それどころか擁護さえすることにである。この傾向は、次のような特徴をもっている。

——原則的方面では、マルクス主義を卑俗化し、日和見主義の最新の変種である現代の「批判」に対して無力であること、政治的方面では、政治的煽動と政治闘争を狭め、またはこまごまとした事柄に消耗させようと努め……；戦術方面では、一貫性を全く欠いていること、組織的方面では、運動が大衆的な性格を帯びたということは、準備的闘争であらうと、どのような思

がけない爆発であろうと、又、ついには最後の決定的闘争であろうと、そのどれをも指導できるような強固な、中央集権化された革命家の組織をつくり出さなければならぬ我々の責任を減じなければかりか、反対に高めるといふことを理解しないこと

——これである。」（「経済主義の擁護者達との対談」）

まさに我々にとって、組織上の手工業性とは、「経済主義の組織の方面における特徴」に過ぎないといふこと、従って、組織上の手工業性を粉碎するためには、その根源たる経済主義に対して、闘争を組織しなければ決して手工業性そのものも粉碎できないこと、そして、その経済主義とは、「自然発生の高揚場に対する意識的指導者の立ち遅れを理解せず、それどころか擁護さえする」ことに、その基本的本質をおいているといふことを理解しなければならぬ。従って、組織上の手工業性に対する闘争は、同時に、政治的側面におけるそして基本的・原則的な思想的・理論的側面における闘いとして、——即ち、経済主義に対する全面戦争として闘わない限り決して勝利できないのである。組織上の手工業性に対する闘争においてもこのような闘争方法だけが、マルクス・レーニン主義的な闘争方法であって、それ以外の方法は、他ならぬ経済主義者たちのものである。経済主義者たちの闘争方法は、経済主義という途方もなく広い土台の上で、前方の経済主義者は後方を批判し、後方の経済主義者は、前方を批判し、左右の経済主義者たちも、またしかりというやり方なのである。

我々は、このような経済主義に対する全面戦争ではなく、部分的・局地的な闘争に押しとどめようとする一切の傾向（理論的側

面のみ押し込めたり、政治的側面のみ押し込めたり、組織的側面のみ押し込めたりするところの）をこそ、我々を経済主義の泥沼に突き落そうとする経済主義の「最も最新の変種」として粉碎しなければならぬのである。

まさに、このようなレーニンの闘争に対し、経済主義者たちは、「イデオロギーの過剰評価」であるとか「理論主義」、果ては「理論を実践から遊離させて死んだ教条にかえる」（ラボーテェジェロ）だとか、「レーニンは、思想の宣言に比べて、生きた日常的な闘争、実践を軽視し、生命ある現実の諸組織をあの世に追いやる」だとか、あらゆる批判をその「生き生きとした」口先から発射したのである。確かにこのような「侮辱」を感じた経済主義者達をその全面に渡って批判し、放逐し、ロシアの階級闘争の中から「合法マルクス主義」を追いつたし、中央集権組織の思想でおきかえてゆく中で、第二回大会を組織したレーニンは、全面的に正しかったのである。

さて我が同盟内においては、この経済主義的傾向は、原則的側面においては、一方で革命的実践的理論を解釈のおしゃべりに変え、他方で理論に素朴実践を対置させ、自己の理論的貧困性を陰蔽し、総じてマルクス・レーニン主義を卑俗化し、折衷主義や、理論的無関心、妥協をはびこらせた。又政治的側面においては、何よりも権力問題と首尾一貫して結合した形で、全面的政治暴露を組織することを弱め、一般的政策阻止闘争や「反抗の増大」を拡大するにとどまる傾向を有した。又そのような中で、にも拘らず、「……もし労働者が、どの階級に関係した事ならであるに

拘わりなく、ありとあらゆる専横と抑圧、暴力と不法の事例に反応することなしに、——しかも、他のどの見地からでもなく、まさに社会民主主義的な見地から反応することに慣れていないなら、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。」「住民の全ての階級、層、集団の活動と生活の全ての方面の唯物論的分析と唯物論的評価を実施に應用することを学ばないなら、労働者大衆の意識は真に階級的な意識ではありえない。」「労働者階級の注意や観察力や意識を、もっぱらでなく主として、この階級自身にむけさせるような人は、社会民主主義者ではない。なぜなら労働者階級の自己意識は、現代社会の全ての階級の相互関係についての、完全に明瞭な理解……単に理論的な理解だけでなく……さらに理論的な理解よりもむしろという方がもっと正しくらいである。……政治生活の経験に基づいてつくり出された理解——をもつことと切っても切り離せないように結びついているからである。」（レーニン）何を為すべきか（）と主張したレーニンに従って、まさにそのように闘かむとし、実践せんとして来た、我々の第二段階的実践の戦闘性、革命性に対し、八木沢、北原、永井氏などの主観的な経済主義的傾向は「この戦闘性、革命性そのものの限界を乗り越え、発展させる事」が問われていたにも拘らず、極めて反動的に「プロレタリア階級の注意や観察力、意識」を「もっぱらでなく主としてこの階級自身に向けさせよう」とすることをもって、「第二段階的実践の混迷」を清算しようとした。すなわちこの傾向は「第二段階的実践の混迷」を清算した民主主義的傾向」といわれている状態は、もっぱら我々が、

「余りに他階級、他階層の諸問題に目を向け、かつ注意を向けることが多すぎた」結果にちがいないと考え、「我が同盟にあっては労働戦線が単なる一戦線におとし込められている」のもその結果であると思ひ込み、「我々は今後なるべく労働者階級のみ目を向けなければならない」として全国委の一時期から「純プロ主義」をかかげて登場して来たのである。

まさに、我々において、「唯物論的分析と唯物論的評価を實踐に應用することを学ぶ」その度合において限界があった事や、又、「他のどの見地からでもなく、社会民主主義的な見地から反応すること」の度合において限界があったのである事、従って又、これからの限界を突破することは、更にいっそう「マルクス・レーニン主義に対し、無関心や折衷主義による卑俗化をもたらしして一切の傾向と闘わねばならない必然性だけが導き出されるのであって、「今後はもっぱら、自己の階級のみ目を向けさせる事」などという結論は全くもって反動的な代物なのである。むしろ我々の現実、また、「もっぱら我々の階級のみ目を向けさせている」傾向が圧倒的に強いのであって「住民の全ての階級、層、集団に社会民主主義的な見地から反応すること」において圧倒的に立ち遅れている事を、様々に暴露しているという事が、現実の正しい「唯物論」的な把握なのである。

まさに「自然発生的高揚場」に対する立ち遅れ」に押跪する経済主義は、自己の「社会民主主義的な見地から反応すること」における立ち遅れを弁護し、のみならず擁護の体系をつくりあげるのである。

(注)我々にとって「プロレタリア的見地」とは、「共産主義的、あるいは、マルクス・レーニン主義的見地」ということであって、それ以外ではない。又、「プロレタリアートとの結合」の意味することは「……社会主義の科学的洞察を労働者大衆の間にいよいよ熱心に広め、党と労働組合の組織をしっかりと打ち固める」(エンゲルス)ことであって、「労働組合の書記」にまで革命家の任務を引き下げることはない。「プロレタリア的転換」も又然りである。

又、経済主義の組織的側面に対するあらわれの特徴、即ち「……準備的闘争であろうと、どのような思いがけない爆発であろうと、又、遂には最後の決定的な闘争であろうと、そのどれをも指導出来るような強固な中央集権化された革命家の組織をつくり出さなければならぬ我々の責任を減じないばかりか、反対に高めるということを理解しない」ところの「結果」としての「手工業性」は、我々にあっては、第一に、その革命党の団結の基礎たるべき綱領・規約の建設によって一刻も早く不断に生起するサークル主義から自由になる為の闘いに対する軽視と日和見主義として、第二に、そのような「社会民主主義的な戦闘組織になくてはならない所の屈伸性を保証し、……最大の革命的『沈滞』の時期に党の名譽と威信と継承性を扱うことにはじまって、全人民的武装蜂起を準備し、指定し、実行するに至るまでのあらゆる事態に対して用意を持った組織」として「全国政治新聞」を武器とした「単一の規律の下に組織された均質の中央集権組織」の建設に対する日和見主義として、第三にそれらに對する日和見主義の必

問題にしなければならぬし、又そうすること抜きに一步の前進もありえないのである。我々は、中央書記局内部においてこそ、この経済主義的傾向と、徹底した、その意味では非妥協の全面的闘争—それは一方で我々の徹底した自己批判活動として為されぬ限り無意味なのだが—を組織する事が我々にとって最も主体的な、かつ現在における最も指導的な唯一の方法なのである。そして自らに對し、このような闘争を不断に貫徹していく事の中でこそ、我が書記局は真に指導的な人間を唯一形成していけるのである。従来、硬直した「指導責任論(七三年八月中央委)」による指導部建設の方法をも現実に止揚してゆく唯一の革命的な方法なのである。このような方法だけが、「理論的側面においても、又、政治的(戦術的)側面においても、又、組織的側面においても、又、断固とした意識性と指導力」をそなえた「革命的組織」と「革命的指導者達」を生み出すのである。

結局の所、「指導責任論(七三年八月中央委)」に基づく指導部建設の方法は、組織の手工業性の真の根源と、又、理論が組織的実践・変革と結合しえない真の根源を、共通の弱点として突き通せなかつた事にその限界を有している事、即ち、組織活動の全実践(理論的、政治的、組織的)を貫く指導の基準たりえなかつた事であり、従って又、その組織活動の全実践を、不断に、より意識的なものへと成長させ、高めあげてゆく所の、攻撃的・能動的な指導の基準たりえなかつた点に、その経済主義的傾向を秘めているわけであり、我が書記局の活動の過程にあっては、昨年の八月書記局総括における永井を筆頭とする政治局の「組織日和見

然的帰結としてのサークル主義的組織への解体傾向、単一の規律ある組織からの逸脱傾向として、そして第四に、このような「組織の現実的存在」に根拠をもつ不断の、そして必然的な反映としてのサークル主義的組織の発生流入等としてあったのである。

これが我々にあっても経済主義に對する闘争は、部分的局地的闘争にとどまってはならず、まさしく全面戦争として闘われ、克服されなくてはならないところの理由である。まさしく、我々は、中央集権組織を、すなわち、真のマルクス・レーニン主義的組織をこの手にかちとろうとするならば、理論を一般的なおしゃべりに低めたり、又、原則の折衷主義や理論的無関心(即ち、全国委の歴史的立場と任務を低めようとする傾向)からサークル主義的組織観に至る一切の経済主義的偏向に對して、断固とした分界線を引き、全面的な闘争を、総合的な闘争を、首尾一貫した闘争を開始しなければならぬのである。「『イスクラ』のように、その綱領といわず、戦術といわず、組織活動といわず、一切のもの」の重点を、全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見落とす危険をおかすことが最も少ないのである」(レーニン)

そして、他ならぬ、この経済主義的傾向に對する闘争は、「××地区の偏向」だとか云々、という形で語られたり、又、「全党をおおっている傾向」だなどと一般的に論じ、提起するのではなく、即ち、党一般や、又、前線の問題として語るのではなく、レーニンの言うように、他ならぬ「指導者達」の問題であり、我々にあっては、同盟中枢の問題なのである。我々でいえば他ならぬ我が中央書記局を支配しているところの、このような経済主義をこそ主義の提起の限界」として、又、この間のインナー論争の過程にあって、現時点においてはもはや何の政治的な指導基準たりえぬい事が、より鮮明にされていったものとしてあつた事として総括がなされねばならない。

我が書記局にとって、自己自身の限界と闘争し、「指導」の転換をかちとってゆくこと、この闘いを全面的に組織し、非妥協に勝利してゆくことよってのみ、逆に全党を、この経済主義との闘争に決起させることが出来るであろうという事を理解しなければならぬ。

第四節 補——中央書記局総会と今後の方向について

我々は、中央書記局総括案によって、何よりも、現在の中央書記局の分散性や手工業性、そしてそれにもとづく指導力の低下を克服するために、小手先の改良によつては、また、組織構造の手直し等によつては、決してできないこと、それらは、ただ、そのような根本的解決を不断に未来へと押しやるための延命策(行きつく先は地獄であるが)にしかすぎないことを明らかにし、「経済主義に對する全面戦争」のみが、それを解決するであろうことを確認してきた。

だが明らかに、この総括案は、経済主義そのものを批判すると

いりではなく、その経済主義を不断に隠蔽し、温存する日和見主義に対する批判に主眼点がおかれているのであって、それは、中央書記局常任委員会（インナー）論争の基本的性格によるものである。だが、まさに我々にとっては、そのことがまぎれもなく必要であった。なぜなら、「経済主義の克服」とは、過去などとはなく語られてきたからであり、そしてまた、そのたびに失敗してきたからである。

「何が経済主義なのか？」我々は何よりも、この点において思想的な一致を獲ちることが必要であった。なぜなら、この三年間のあいだに、経済主義の発生の根拠を「活動の分散性」や「手工業性」「規律の弱さ」等々に求めるといって逆転した「観念論」が同盟内に浸透しており、この観念論は、「活動を密集させ、規律を強化・組織構造を確定」しさえすれば、経済主義を克服できると考えており、確かにまた、この小手先の技術主義は、同盟指導部の「組織」に対する軽視のために一定の有効性を示したからである。だが、これらの悪無限的な繰返しは、ついに同盟の革命的翼内部における位置を不断に低下させ、結成初期に保持していた綱領的優位性、その牽引力を不断に喪失させ続け、革命的翼内部の諸論争に対しても、不断に日和見主義に陥り、その結果として、マル青同を結成させ、また今日まで赤報派を生存させ、全国委員会に対する様々の批判を許しているし、塩見に対する左派の合同や、また伊集院一派の動きへの投機主義的逃亡を許してきた。これらは、我が同盟が、不断に、防衛主義・保守主義に党派闘争において追い込まれてきたことを意味している。

すぎないものである。我々は、この自己確認に基づき、直ちに、実際の、真の戦闘を組織しなければならぬのである。だが、まされもなく、我々にとってこの自己確認が必要であった。「総括案が実践的でない？」そりいいうる人は、このかんの同盟が陥ってきた真の危機に対して、何程の理解もしていない人である。それらの人々は、自分が従来「見せかけの実践性」にどれ程深く屈服してきたかを自己暴露しているにすぎないのである。それがどのような思想に基づいているかを深く考慮することなく、ただそれが「実践的」でありさえすれば喜んで受け入れてきた自己の指導者としての無能性をただ正直に吐露しているだけである。ただそれが、「実践的」でありさえすれば、一つの思想を一つの視点を、どのようにして実践の方針にまで発展せしめていくのかという困難な創造的作業をなしえないで済むが故に、自己のそのような作業における無能さを隠蔽しうるが故に、有り難たがるというこのような請け負い主義者にとっては、確かに、「低次元の実践性」であっても有り難いのであろう。

だが、全国委員会の歴史的任務は、逆にこのような指導者は、今後必要としないであろう。この点は正直にいつておかなくてはならない。全国委員会は、革命的で、有能な、献身的な「受任者」を必要としている。だが、この「受任者」は、決して、請け負い主義者ではない。

もちろん、我々は、だからといって、我々の総括が、「自己確認」にとどまっていることの正当性を主張しようというのではない。ただその「必然性」を無視・軽視することの危険性を批判し

るし、そのような自己防衛・保守主義は、自己自身を防衛しきれないことを明らかにしてきている。これらの「組織規律」といふべき思想は、思想的・政治的分岐・分裂に対しては、見事なまでに武装解除させられ、武器を失なり。思想的・政治的分岐に対し、組織的統合しか主張しえないこの思想は、基本的には下からの発想であり、労働者反対派、総じて、せいぜいのところ良質な無党派主義であって、歴史上、この思想がどのように堅固であったとしても、「セクト主義」・「分派主義」に勝利したことは一度たりともありえない。いつでも、易々と分派主義者に敗北するのである。

我々が全国委員会の「反スタ・マルクス主義の止揚、革命的翼の統合、単一党建設」といふ、その歴史的任務の能動性・攻撃性としての「無党派組織主義」「組織保守主義」が不断に陥る政治的保守主義とは根本的に相容れないものであり、わが同盟の歴史的任務にふさわしくないとこの指導的イデオロギーたりえないものである。

我々は、最低このような「保守主義・自己防衛主義」を書記局常任委員会内部から追い出すこと、経済主義に対しては、下からではなく、上から、すなわち、全面戦争として遂行しなければならぬこと、そして、それは同時に、革命的翼総体に対する批判と統合の能動性・攻撃性を復権させるものであること、このような把え方だけが、現在の同盟の「停滞」を突破し、内向的エネルギーを全面的に外化せしめるであろうことを自己確認する必要があったのであり、総括案は、そのための常任委員会の自己確認に

ているのである。

なによりも重要なことは、書記局常任委員会が、この総括案の方向性、その基本的精神を承認したことである。そのこと自体に対しては、一つの成果、意義に対して、数十の限界や問題点、不充分性が対置されうるであろう。だが、現在の我々にとっては、なによりもこのことが極めて重要なことであった。それは、はつきりと十月中央委員会を止揚する地平であったからである。常任委員会内部の分裂の止揚を意味しているからである。

さて、当然にもこのような「自己確認」に基づいて開催された中央書記局総会は、そのような「自己確認」と現実の分離・カイ離に対する痛烈な批判として展開された。

この批判は、甘じて受けなければならぬ正当な批判であり、また中央書記局の次の実践的課題が何であるかを明瞭にさし示すものとしてあった。

中央書記局総会（一月十二日）においては、冒頭、①中央××の解体状況に対する批判、②沖繩派遣問題批判、③論争が中央書記局内諸機関を動員するものではなく、むしろ、その分散の上に展開されたことに対する批判、等々として、その批判はなされた。それは、中央書記局の現実把握から出発していないという批判であった。

だが、十一月以降の再開論争は、何よりも、中央書記局と全党の陥っている状態をどのように把握するのか、そして、どのように克服するのか、ということをもその中心の問題意識・テーマとし

て論争されたのである。

それは、第一に、昨秋闘争の中で明らかにされた中央の全党指導の弱体化に對して、第二に、首都圏委員会を中心とする地方委員会指導の問題——とりわけ、富田問題として、第三に、何よりも兵庫の「工女性差別糾弾会」を巡る党内の様々な政治的流動に對して、また糾弾会そのものに對する党的指導の限界に對して、

そして更に、沖繩派遣を巡る中央書記局××の解体というさまざまな状態等に対する問題として、——それらを直接的契機・問題として論争は推進されたのであり、だからこそ、書記長不信任の提出と共に、「沖繩即時派遣、即時召還」の提案もまた、なされたりしたのである。だが、何よりも重要なことは、それらを契機として扱いつつも、直接それらの技術的解決をのみ目指したり問題にしたのではなく、それらの背後にひそむ同盟の思想上の根本的問題の抽出と切開、論争として、その真の性格があったというのである。それらは、主として、七三年八月中央委員会以來の、「指導責任論」以降の、根本的総括として論争がなされた。それは、抽象化すれば、指導理念をめぐる論争であつたし、また路線をめぐる論争でもあつた。

だから論争は、「具体的諸問題」を根本的に解決するため、逆にそれらを背後に留保しつつ思想闘争として、とりわけ、七三年八月中央委員会以降の中央委員会活動の評価をめぐってなされたのである。

それはまた同時に、常任委員会としての自己批判的作業をなすものでなければならなかつた。そして何よりも、それは、書記局りな油断は、この事業、この絶対的な事業を日和見主義的な相対的優位性の海に溺れさせてしまふであらう。我々は、そのような愚は、断固として避けなければならない。そして、この事業に對するゆるぎなき確信——それはその限界やら、不充分性やらの口やかましい日和見主義者の叫びには動揺されないだけの——と、その実際の遂行の道程だけが、同盟に革命的指導部と革命的組織をもたらずのである。それは、同盟の強化と純化をもたらずべき上からの党内闘争である。そして、この上からの党内闘争は、極めて自己批判的に、そして更に、極めて具体的に、「指導の転換」として、すなわち、徹底した中央集権の強化、中央指導部の全面的強化としてなしていかなばならぬ。

総会においては、総括案の基本的主張・内容に關しては承認された。だが、それは、何よりもその具体的な方針と結合した総括として、再組織される必要が指摘されたように、そしてまた、総括案自体の発展がそのことを要求し、また予知せしめているように、次の第一歩は、そのようにして踏みだされなければならない。そして他ならぬ総括案は、そのようにより深化され、より具体化され、より能動化された総括・方針を生み出す確固とした「方法論」をなすものであり、またその「ガイスト」になるであらう。

内にとどまらず全党に對してなされねばならないものであつた。

何よりも、一月十二日の第一回中央書記局総会は、それらの全てに對しては、説明することができなかった。逆に、それらは、まだ常任委員会論争の限界を示して余りあるものでもあつた。それはまた、「自己確認」の域をすらすらでいて、ただ決意のみを示しかねないような、そのような危険性の中で、「常任委員会論争」は存在していた。

だが何よりも、重要なことは、この決意、この方向性を具体的な総括作業を通しながら一つ一つ物質化せしめていくことなのである。この作業を経ることなく、総括案は、能動的たりえないし、またなによりも、中央書記局自身が、そして常任委員会自身が、能動的たりえないのである。

そしてまた、なによりも重要なことは、この作業の重要性である。この事業を指導的になす者のみが、次の党的指導中枢になることができるであらう。この事業に對する外在的で、日和見主義的な部分は、ある局面においては、極めて無責任な批判者として、また別の局面においては、追隨主義者としてたち現われるであらう。またこの事業に對する（どのような理由からであれ、よしんばそれが九九%の正当性を有していたとしても）敵対は、躊躇することなく退けられなければならない。我が同盟は、様々な外在的批判やまた敵対に耐えられる程には強くはない。それに対して、おろろろであるべきそのようなゆとりを現在持つてはいない。そのような油断は、必ず、我が同盟を破滅に導くだけであらう。そのような油断は、經濟主義の延命を助けるだけであらう。そのよ

第三章

関西ブントの歴史的日和見主義を根絶せよ

党内闘争の中で花ひらいた八木沢イズムの本質

第一節 「実践」の右翼的解釈と八木沢

イズムに浸りきる日和見主義

現在の党内闘争の中で、今再び我々が築きあげてきたと称する「共産主義II革命的実践」という思想の内容が、基本的に問われている。むしろ多くの人は、この点に気づいておらず、相変わらず自己の狭い経験的理解を絶対化し、深い経験主義とその意味での経済主義の沼地に身を潜めている。

そして、この沼地から発せられる様々な叫びが、党内闘争の発展を押しとどめ、全国委員会の革命的揚棄の中で、真に現在の革

命的左翼の危機を打開する党内闘争の先頭に我々を立たせしめる事業を遅らせており、一般的に個人的批判や感性的批判、不信感の表明といった水準に引きとめようとしているのである。

だが今や、そのような一般的な善意の衣をまとって立ち現われている思想の中にこそ、恐るべき腐敗が沈澱しており、共産主義思想を全くもってとるに足らない経験的理論と個別闘争の指導理論で代位しようと思いつくせいでいるのである。現在、党内闘争において、何らかの責任ある立場をとらんと欲している人たちは、明らかに自己の共産主義的信念に基づき、同盟全体の理論的・思想的総括をなすべく義務づけられており、そのことに対する自己の責任を果たすことなく、一般的に不平、不満でおきかえんとするならば、それらは明らかに反動的立場を形成するものであり、

我々はそのような傾向ときっぱりと縁をきらねばならない。

それらの諸君は、未だ自己の反動性に気づきえず、同盟の現在の分裂状態を正視しようとせず、この分裂を一時的な対立であるかのように思い、「善意」があれば解決するかのように思い、分裂自体を批判することによってこの分裂の中にマルクス主義をめぐむ根本的対立が存在しており、同盟の危機は、この分裂が未だ本格的に、まだ真に組織されてはいないこと、その傷口にありとあらゆる日和見主義や腐敗や一般的善意がはさま込まれており、強力な接着剤の役割を果たしていることによって、未だその分裂がその矛盾の全面的発展が閉塞されているということこそあるということについて全く気づいてさえもいないのだ。

思想と闘争の全ゆる貧困は、調停主義の中に集積されている。かつて八木沢がそうであったように、調停主義者は好んでそうなるのではなく、自己の無思想性の故に、自己の腐敗と貧困を隠蔽せんとするがために、必然的に、不可避に調停主義に陥るのであり、決して豊かな「感受性」やら、党に対する「忠誠心や献身性」の反映ではないのだということに、そろそろ気づいても良い時期である。

今、同盟内の一部の諸君が全くのとこち、自己がどのような政治的立場に立っているのかについて検証できず、自己が何ものであるかについて客観的に理解できず、ただ自己の日々の「実践」にのみ感性的安楽をみだし、自己の革命性の証しを見いだそうとしている。だが、この姿こそ同盟の危機の深刻さを物語るもの

であり、同盟が十月中央委員会の「貧困」を組織しえたことが決して偶然ではなく、同盟の現状をそれこそ正確に反映したものであることを暴露するものである。

同盟における「共産主義革命の実践」とは何か。この問いに答えていくことは、同盟内において革命的理論がいやというほど卑しめられており、狭い経験主義が理論的發展も論争もまた、党派闘争すらも圧殺し、あげくの果ては共産主義のはつらつとした革命的気風と生気さえもが小ブル的な自己保身と官僚主義に変質せしめられてきたこの間の同盟の誤りの一端を語ることである。そしてそれは同時に、日和見主義と反動的翼の殺し文句「実践的総括」なるものに鉄槌を下すことになるだろう。

八木沢は、その「赤軍派批判」の中で、マルクス主義における「共産主義革命の実践」ということの意味を極めて経済主義的に歪曲し、共産主義運動とは「現実の日々プロレタリアートが実践している階級闘争のことである」と主張した。従ってここから彼は、12・18路線以降の同盟活動を「厳格な意味で党的実践を欠落」させていたと総括をなし、全国委員会の「党的実践」をこのように総括に即して組み立てていったのである。そして八木沢は、「資本主義批判の二側面」をとりあげ、一つは「実践」としての資本主義批判である「プロレタリアートの階級闘争」であり、他の側面は、「学説」としての「資本主義批判」である「マルクス主義学説」であると述べる。そして八木沢における「党的実践」とは、この二側面を結合するための「戦略問題」を確定することであると主張するためである。マルクス主義の「学習・理解」は、

「実践」ではないと12・18路線を批判して退けている。

以上から明らかのように、八木沢はまずもってマルクス主義学説と現実の階級闘争を無媒介に分離しながら、同時にこの両者と共産主義運動であり、その二側面であるとし、この「共産主義運動の二側面」は「戦略」によってこそ媒介されるといふ風に理論だてるのである。

このような理解からは、すでに一部の諸君がそうであるように、又、八木沢一派においては特にそうであるように、直ちに次のようなより矮小化された理解が生まれたとしても不思議ではない。八木沢一派は、「プロレタリアートの現実の階級闘争こそ、共産主義運動そのものである。ただその自然発生的傾向を克服するために、党はその様々な現れに対して、戦略性を与えなければならぬ。この『戦略』を確立することこそ、党の至高の任務でなければならぬのだ」と。

だが、マルクス・レーニン主義にとって明らかなのは、決して「プロレタリアートの現実の階級闘争」、即共産主義運動ではありえないし、またそれに「戦略性」を付与しえたとしても同じことである。「現実の階級闘争」は、革命的共産主義的な闘争もあれば、「労働者の境遇につきものの困苦の克服を目的とするが、まだこの境遇をそのものを廃止しない、つまり資本への労働の隷属を廃絶しないあれこれの方策を国家にせまらせて実施させよとする」(『何をなすべきか』六九頁)組合主義的な闘争もあるものであり、現実のマルクス・レーニン主義に不断に問われることは、自然発生的な労働運動が、必然的に行きつくところの広範な

組合主義的政治(即ち、自然発生的性への拝跪の政治)と闘争し、「自分たちの利害が現代の政治的・社会的制度の全体と和解除しない対立にあるという意識」をもち込み、まさにそのようにして自然発生的性を不断に解体し、目的意識性、即ち、社会主義的意識へ転化せしめていくことである。そこには我々が依拠すべき一般的な階級闘争は存在せず、あるのは組合主義的な階級闘争と共産主義的な階級闘争の赤裸々な分裂と争闘である。

八木沢のような人たちは、まさしくレーニンがいうように「労働者が『自分の運命を指導者たちの手からもぎとり』さえすれば、純労働運動は独力で独自のイデオロギーをつくりあげることができし、また現につくりあげつあると想像している」(同書六一頁)のであり、労働者階級の狭い、その意味では偏向を胎んだ経験主義を神聖視するのである。このような思想の犯罪性は、何よりも「自然発生的性への拝跪」というにとどまらず「労働者階級を革命的に教育し、打ち鍛え、その社会主義へむけた熱情をかきたて、武装させ、支配階級へと飛躍するにふさわしい革命的階級に育てあげる」任務を軽視し、プロレタリアートの隊列にブルジョアイデオロギーが流入するに任せるという点にこそあるのである。それは「労働者階級への積極的評価であり、自主性の尊重である」のではない。だからこのような「プロレタリアートの物神崇拜」が、いともたやすく「党の物神崇拜」と結合するのも根拠があるのである。それは結局のところ、どちらも「プロレタリアートを革命的階級に打ち鍛える」共産主義者の至高の任務を軽視し、放棄することにおいて全く共通である。

現在この二つのイデオロギー、即ち、八木沢イズムと北原イズムが、その外見的相違にもかかわらず、本能的に親近感を感じて結合し、反動的翼を形成して党内闘争に対しては、全く必然的な合理性があることをみなければならぬ。

八木沢はこのようにして革命的理論と実践について自己の考えを明らかにしているものであり、それは結局のところ、革命的理論に対する徹底した軽視と共に実践を変革の実践ではなく、不断に組合主義的実践に低め、経験主義・経済主義を満延させ、「自然発生性への屈服の体系」へと高めあげていくのである。現在の八木沢一派の大部分が主張している「実践」とは実に、このような「組合主義的実践」に他ならず、だからこそ「革命理論」の根本問題が問われている時に、それについて全く関心を示すこともできず、「目の前」の「大衆運動」を金科玉条のごとくに思い込み、同盟を増々「大衆的サークル」へと転落せしめることに最後の全力を投入しているのも根拠のあることなのである。

この様な傾向が同盟をおこった時、それは形式的な組織機関が存在しているようにも、「共産主義組織」としては「死」であり、「解体」である。それはもはや「革命組織」ではなく、「大衆サークル」であって、革命的部分の歴史的使命は、このような「大衆サークル」をたたくつぶすこと以外ではない。

第二節 宇野の右翼的修正としての八木沢の「実践」論

更にこの八木沢が、理論と実践を無前提に分離した時点から論を進めることによって「資本主義批判」という概念を極めて右翼的に理解し、マルクス主義の学説を「それ自体では実践的ではない」などと全くとって「宇野と同じ言辭」を宇野批判の衣の下から持ちだすに及んで、これに対してはそもそもマルクス主義における「批判とは何か」ということの抱え返しの中で、八木沢の「資本主義批判」の把握の小ブル性を批判し、「批判とは対象認識と同義であり、又、変革と同義である」ことを把える中で、マルクスの資本主義に対する根本的批判とは、「経済学がブルジョア的である限り、すなわち、資本主義的秩序を社会的生産の歴史的に過ぎ去る発展段階としてではなく、反対に社会的生産の絶対的で最終的な姿として考える限り、経済学が科学でありうるのは、ただ階級闘争がまだ潜在的であるか、または只、個別的現象としてしか現れていない間だけのことである。」（『資本論』第二版後記）とする観点からの国民経済学批判によって始めてその基礎が形成されたことを把み、故に「マルクスにおける資本主義は、その本質上批判的・革命的であり、したがってまた、実践的である」と反批判をなしたのである。

そして更にこの見地から、従来の「資本主義批判」の把握の不徹底性を再総括し、榎原の「宇野批判」における「唯物史観の否定」の誤りを暴露し、全国委員会の総括の方法・内容の限界、誤

りの切開をなす立場を築きえたのである。

この八木沢における「理論と実践」の把握は、明らかにより一層矮小化された宇野イズムであり、宇野イズムの右翼的修正・墮落であるが、同盟内には極めて無自覚な宇野派が、西一北原一派として存在している事態に対しては責任をもって打倒することによって、同盟の革命的純化をかちとらねばならない。我々がその事業に最終的に勝利するため、今一度、我々がどのようにこれらの問題を扱ってきたのかということについて総括しなければならぬ地点に達している。そして我々は、戦後の主体性論争以降、長々と「理論と実践」の問題が論議されてき、今日において、12・18路線以降の宇野・梅本批判を媒介に今日の課題として同盟に突きつけられており、我々は反スタマルクス主義を真に止揚していくために再び通らねばならない課題であると考えている。だが同盟内における論議が、そのような同盟の歴史的位置について全く一顧だに省みようとせず、その意識においても、完全に単なる大衆活動家の水準、戦闘的民主主義者の水準に墮していることである。一切が経験主義的に、かつ即自的に語られており、「生きた実践」の名の下に、「共産主義」が捨て去られているのだ。

第三節 党内闘争に対する日和見主義の本質

現在の党内・分派闘争の中で、その発展を妨げ、同盟の危機をひきのばし、その革命的エネルギーを圧殺し崩壊の泥沼に追い込まんとする元凶は、第一に反動派フランクソンの延命策動であるが、更に中間的・日和見主義的分子も又、結果的には同様の任務を行使している。

同盟の一部に巣くっている、又わが革命的隊列の中にさえまぎれ込もうとするこのような日和見主義の特徴は、同盟内の意見の対立は、単なる論争であって、「非常に長い間、実際に解決されない潜在的な状態のままにとどまることが可能であるとする感情（ルカーチ）に支配されていることである。

これらの諸君は、主観的には自分を党内闘争において「左派」であると思ひ込み、自分が最も断固とした立場をとっているかの如くに思ひ込んでいる。なるほど、それらの諸君は、全ゆる所で同盟の腐敗を批判し、根本的な問題であると主張している。だがにも拘らず、それらの諸君が、現在の局面の中で極めて日和見主義的な位置しか占めていないのは、あるいは明白には反動へと転化するであろうということを断定しうるのは、彼らが自分の「革命的立場」を「組織上の帰結」に至るまで徹底して具体化しようとはしていないことであり、反動分子を批判するその裏には、今だ彼らに対する甘えが存在しており、裏を返せば自分自身を安全な場所においておきたいという、自分の変革と飛躍だけは後まわ

してしたいという底抜けの自己欺瞞が存在しているものであり、だからこそ「根本的対立」などと言いつつそれを単なる「意見の相違」のように見せかけて、「組織の温存・維持」を希求せんとするのである。

だから彼らは、旗色鮮明な反動分子を攻撃すると同時に、革命的行動をとろうとする主張をも攻撃するのであり、更には、反動的主張を理論的には否定しながらも、それを断固として党の実践から遠ざけようとは真剣に考えないのであり、口先では対決を叫びながら実際には共存共栄を夢みる日和見主義なのである。だから彼らは、自分たちと組織の運命を他ならぬ自分たちが日和見主義であり、反動であると考えている部分にいつもたやすく委ねるのである。

これらの日和見主義は、全ゆる決議を乱発しながら、ただの一回も革命的行動を決議しなかったあの第二インターナショナルの伝統を脈々と受けついでいるのであり、徹底した「組織」に対する日和見主義である。レーニンはそうではなかった。レーニンとボルシェビキは、意見の対立は常に単なる政治論争の次元から「組織上の結論」を導く地点まで押しあげていった。社会民主党第二回大会におけるメンシェビキとの闘争がそうであり、又、第二インターナショナルの崩壊を宣言し、第三インターナショナルの結成を呼びかけた時もそうであった。レーニンとボルシェビキは、第二インターナショナルの諸党が、自己の誤りに気づき、変革をかちとることに自己と世界プロレタリアートの運命を委ねようとはしなかった。だからこれらの日和見主義は、組合主義者・

だが今や、全ての諸君は自らの足でしっかりと踏んばらねばならない。かつてあのファイテの火を吐くような戦争への告発も現実に発展する戦争に対しては無力であったように、そして又、何よりもあのシュトゥットガルトの反戦決議がそうであったように、我々の運命を当の敵の手に託すのだけはやめねばならない。

全ゆる批判的批判は、物質的批判にとつてかえられなくてはならない。

だがそうする為には、揺るぎない確信が必要である。そこではもはや、批判的批判は用を為さなくなり、能動的・攻撃的な確信と指針だけが唯一の武器になり、我々の日常の実践のことごとくは、確信に満ちてつくりかえられなければならない。我々は、六十年代から今日に至る世界的反スタ運動の歴史的任務はすでに過ぎ去ったと確信している。インドシナのまさに目をみはるような勝利は、世界のプロレタリアートに限りない展望を与えるものであるが、だが我々の運命は、我々だけが切り開くのである。帝国主義内部の革命運動は近い数年を境にして、全く新たな時代に突入するのである。過ぐる二十年間を前史とするような大激動が我々を襲うであろう。にも拘わらず、我々は今、何の準備もしていない事に、火を噴く程の恥ずかしさを覚えずにはいられないのである。今日の事態は、革命的左翼の危機というには、余りに巨大な、そして内在的な危機である。だが少なくとも我々は、自己批判を知っており、自己変革を知っている。我々の前進する道をごまかすに切り開いてゆくべきかを、たとえ現在の我々の出発が、腐敗と、汚辱にまみれた、誤りと悔悟にまみれた出発であっ

経済主義者に固有のものであり、ボルシェビキには無縁の立場である。我々は、これらの日和見主義とは根本的に無縁であり、何の団結の共通性も持ちあわせるものではない。それは、レーニンとカウツキーとの間に橋をかけようとする試みであり、きっぱりと拒否する。

同盟内の基本的な対立はどこに存在するのか。概に党内闘争は、分派闘争へと移行しており、より一層公然たる闘争へと飛躍することなしには、闘争の発展はありえない地点に達している。そして今や、分裂だけが、そして、我々の見解の公然たる発展を組織する事だけが、革命的進路である。これは、他の分派の成熟に規定されている事態ではない。他の分派は、未だおよそ何らの主張も持ち得ず、只、自己保身のみを図っている。問題は、我々自身の問題であり、もはや我々にとって、全国委内の闘争によって、我々の前進はあり得ず（なぜなら論争の当事者の八木沢は逃亡してしまっているではないか）階級闘争の全体を責任もって指導する能動的主体へと自らを高めていく闘いの中で真に我々の自己否定的、創造的事業を発展させる事だけが、問われているからである。そこでは一片の反対派的残滓も根絶されなければならないし、第二インターの日和見主義も又放逐されねばならない。

そして現在、このような日和見主義が同盟を支配しているのは、決して、偶然的な事態ではない。これらは、一方で、党に対する物神崇拜を強要され、他方でプロレタリアートに対する物神崇拜に屈服し、共産主義に対する徹底した、軽視を強制されて来た結果である。

たとしても、全世界のプロレタリア人民の闘争にどれ程深く、立ち遅れていようと、我々が革命的プロレタリアートの熱情とマルクス・レーニン主義を失う事がなければ、我々は、多くのものを手に入れることが出来るし、多くの事を為すことが出来るであろう。

我々の真の敵は、当面、我々自身である。今回の党内闘争・分派闘争は、それがどんな外化された形態をとろうとも、我々自身に対する仮借のない闘争以外ではない。八木沢イズム、北原イズムは、我々自身の外的対象形態に他ならない。この内在的緊張関係を、よしんば、忘却する諸君があるとすれば、笑うべき道化者である。我々が振りおろす刃の一振り一振りは、最も鋭く我々自身を切りさいなむであろう。我々の前進する足どりは重く、不器用で、たつた半歩の前進をなす為に、数歩の後退すらもたらされるであろう。だが考えてもみたまえ、それでも我々の苦闘は、全世界の前進するプロレタリア人民の苦闘に比すれば、何とささやかなことであろうか。「飢えの極限」に組織される共産主義運動には空想的な大言壮語もない代わり、現実を見おとすどんな怠惰もない。だが我々の共産主義はと云えば、現実を一片たりとも切り裂くことの出来ない、なまくら刀を隠蔽するために、全ゆる大言壮語と空文句がそのまわりにちりばめられているのだ。

我々は、12・18路線以降、革命的左翼の根本的転換をなすことに同盟活動の一切の基軸をおいてきた。だが、その中においてさえ、我々は多くの誤りを犯して今日に至っている。だが、くよくよすることは無いのだ。我々のなそうとして来たことは正しいし、

ただ徹底してなすことに日和見主義であった余りに現実にねじふせられ、新しい皮袋にただ古い酒を注ぐような妥協を繰り返してきたのである。「根本的転換」とは、何か急進主義路線を提起することであったり、空想をおしつけたりすることによって達成されるのではなく、「現実の確かな絶対的に確かめられた基礎」の上に、我々の実践をおき直すこと以外ではない。階級闘争の現実、諸条件の成熟がない限り、我々の決意だけによつては「根本的転換」をなすものではない。重要なことは、そして我々に決意と努力さえあればなしうることを、そして是非ともなさねばならぬことは、我々自身の「根本的転換」なのである。だからこそ、「我々とは何であるのか」「我々の時代とは何であったのか」ということを問い、切開することが重要なのである。それゆゑに「根本的転換」は空語である。

我々は、幾度となく七〇年代の階級闘争をさして、「構造的転換」を分析してきた。だがだとするならば、レーニンが、「大衆の自然発生性が高揚すればするほど、増々共産主義者の目的意識性が高められなければならない」と述べた意味において、何よりも我々自身の飛躍こそ課題とせねばならなかったし、我々が唯物論者である限り、「現実の我々の批判的認識」から出発しない限り飛躍はないことに、もっと真剣に思いを寄せるべきであったのだ。

我々にとって、認識とは「批判的認識」であり、実践とは「変革的实践である。そして、「批判的認識」と「変革的实践」とは、弁証法的関係において統一されなければならないのであり、この

経過しており、十月中央委以降においても半年の年月が経過している今日、その党の指導的カードたちの口先から、相も変らず、「党内闘争について立場をもっていない」とか、一般的な指導に對する不信しか表明されない時、我々は彼らに對して、「献身的な同盟員」であることに正直疑いの目をむけねばならないのだ。彼らはただ怠惰で、奴隸根性のしみた日和見主義者以外ではなく、党の危機的局面で常に相対的立場をとり、「局外中立」を宣言して、何とか自己の「無能」を「誠意」に映し代えようと腐心しているにすぎないのである。

だが、我が胎内に潜む日和見主義は、まさに自己が同類であるが故に、その政治的性格を見抜く事が出来ず、日和見主義の見せかけの無邪気さに幻惑され、動揺し、屈服を開始するのである。

永井一派に典型である、この指導部中枢に潜み続ける日和見主義は、常に「やじろべえの原点」を探し回り、右に左に動揺を繰り返して自己の確信と、それから導き出される指針に信を置く事なく、「中間点」に安住の地を見い出さんとするのである。この様な分子が「党の革命」を推進出来るはずもないのは、何より自明の事である。

彼らは見せかけの謙虚性にも拘わらず、「下部」に對する徹底した輕蔑の念を持っている。彼らは、「下部」からの批判を、只それだけの理由で、まともにとりあげようとせず、「突きあげ」や「お願い」であるかの如くに対応するのだ。それは、徹底した「ヒエラルヒー」意識に冒されており「下部同盟員」は、理論的能力などあるはずがないと信じ込み、従って、又、誤った主張を為してい

間には、どのような日和見主義も介在する余地はないのである。マルクス主義者にとっては、誰かの宇野批判のように、一九五九年（昭和二十四年）『哲学評論』六月号、「資本論と社会主義」七八頁）全ゆる知識は全て認識であるわけでもなく、又人間の全ゆる日常生活の行為が、「実践」であるわけではない。

我々は、このような内的緊張関係を保持して始めて、同盟の現状に對する批判的認識を我がものとし、又、同時に、批判的変革の意志と変革の理論を武器に変革的实践へと転化させんとしているのであることをはつきりと自覚しなければならぬ。我々は、この点で一切の日和見主義者の諸君と訣別しているのであり、思想的にも相違しているのである。我々は自らの革命的立場を組織上に具体化しようとせず、それらの一切を単なる「意見の対立」の心地よい「しとね」に保存しようとする日和見主義、まさに同盟内部に長い年月のあいだ潜みつづけ、同盟を不断に優柔不斷で集中力も密集力も思想的統合力もない組合主義へと落し込めてきた元凶であり、腐敗の温床でもあるこの日和見主義と思想的に訣別しない限り、我々の次になしうることは知れたものであろう。今まで誰もこの日和見主義について暴きだすことができなかった。この日和見主義は、あまつさえ「党に對する献身的性」でもあるかの如くに美化されて、今日の腐敗の基礎を形づくっているのである。この日和見主義の眞の正体は、第二インターナショナルの組合主義であり、ロシアにおけるメンシェビズムであり、閩西ブンドに巣くってきた家父長的な組合主義の亜流なのである。

党内闘争が宣せられてから今日に至るまでに一年有余の年月が

たとしても、それは「未熟さ」のせいであると小馬鹿にして、正当な批判論争として、とりあげようとはしないのである。この様な家父長的な「階層」主義こそ、一貫して、黨員の諸権利について確定することに無自覚であり、党大会を組織することによって、黨員全体の能力を集中する事について責任を果たさうとして来なかつた事等の根本的な思想的根柢なのである。

そして、何よりも、この様なブルジョア思想のみが、同盟の発展を妨害している日和見主義の存在について全く無自覚でいられるのであり、それらは「無邪気な献身的性」であると拝聴しうるのである。それは只、「下部同盟員」は半人前の革命家であると思つている事の自己暴露にすぎず、従って又、彼らが本当の意味で、マルクス主義的教育を為されてこなかつた事についても、全く当然であると居直るのである。

現在同盟は、三分派に分裂しており、八木沢一派の頭目たる八木沢は既に許すべからざる裏切りの逃亡をなしている（我々の前から逃亡したのは、二月十一日であったが、西一北原一派は、三月に於いても、その首領にいただき連絡をとつていた模様である。この分裂主義・解党主義こそ彼らの本音なのだ）。

だが、西一北原一派の中央委開催への敵対と数々の解党行為によつて、そして又、永井一派のそれへの屈服によつて、実質上、中央委員会の開催は不可能な状態にあり、實際上、同盟内闘争は、分派闘争へ移行している。

既に、三月初期において永井派はほぼ一切の機関から召還し、又、西一北原一派もその内部文書で、公然と「他分派の

打倒を大衆を巻き込んで為す」戦術を表明してあり(四月初め)、又実質上、北原の動きを通して、査問委についても否認する立場を表明しており、糾弾会についても然りである。今や問題は、「論争を組織する」事一般や「中央委員会を開催する」事一般にあるのではなく(なぜなら、まさに西一北原一派はそれに対する反動としてあるのであり、その事自体が既に闘争抜きには不可能なのだ)どの思想が勝利を占めるかという事に他ならないのである。だからこそ、我々は何度にもわたって、調停主義は後景に退ぞかねばならない事、日和見主義・中間主義は、反動に転化しつつある事を繰り返し警告を発してきたのである。局面はすでに変化している。この局面に「打倒や放逐ではなく相手の教育と変革を」なる主張の、度はずれた空想主義は論外である。教育と変革の対象とは、自己の立場が唯一正しいと思ひ込み他派を打倒せんと分派を結成しているのだ。組織的敵対を準備しつつある部分に對する最も正しい教育とは、徹頭徹尾、組織的結着まで含めて打倒しきることなのだ。

レーニンとボルシェビキは、日和見主義と反動に對する教育をどのように為したか、今一度振り返ってみる事である。反動分子の変革に自己の運命を託せりと思ひ者は、是非とも、その博愛主義を貫くべきであろう。だが、我々にも強制しないでくれたまえ。我々は、残念ながら、我々の力量の為せる事について知っている。我々は、只少しの事しか出来ないであろう。我々は只、その「革命的立場を組織的帰結に至るまで、首尾一貫、貫徹する」事以上の任務は果たせようにはない。むしろ、更に一層、正直に云えば、

日和見主義の諸君達すら我々の内に抱え込む余裕すらないのである。「革命的純化」こそ、只一つの我々に与えられた歴史的使命であり、全ゆる妥協は、明日にも我々に死をもたらすだけであろう。

レーニンは、我々に只「狭量であれ、それだけが自らを救うであろう」と教えている。革命的立場は今生まれはじめたばかりで、その基礎は脆弱である時、そして古い反動的なイデオロギーが、その広大な基礎を保有している時、我々の信条は、只「狭量」でなければならぬのだ。

だが日和見主義者は、事態を只客観的にながめ、分岐と対立の発展に恐怖し、「寛大であれ」と主張するのだ。そして、我々の全ての運命を只「反動的分子」の「自己悔悟」に委ねよと言っている。我々は断固として拒否する。

そうすることは、明日には、我々のしかばねが類々と横たわる事のみ結果する事は余りにも明白な事だ。明日には全ての対立が既に過去のものとなり、和解と妥協が、我々を心地よい眠りに誘うであろう。我々は「教育」にエネルギーを消費して、肝心の我々自身の「教育」をなおざりにするだるり。肝心の事は、我々自身の教育なのだ。そして我々の変革は、この闘争を血みどろになつても遂行する以外には為しとげる事は出来ないのだ。「相手の教育と変革」、この博愛主義に満ちた心地良い言葉は、何か我々がすぐに革命的立場を堅持し、完成された人間であるかのよう

第四節 同盟内の腐敗と反動に決戦を決意せよ

だから我が胎内の日和見主義は、こぞつてこの主張に拝跪するのだ。だが、自己の姿を鏡に映し出してみたまえ。その貧弱な姿が博愛主義を語るに充分かどうか、一目で判るであろう。そのよちよち歩きの動揺分子の姿を、その根底から粉碎する為には、断固とした戦闘的な永続闘争の大道しかないのだ。我々は今、自己の現在の姿について、何らの美化も又、卑下もいらぬ。我々が博愛主義にゆきつくのは、まだまだ先の事だ。我々にとつて大事な事は、我々自身の信念を探し出し、そして我々自身の信念にのみ立脚する事だ。そして、その信念が、マルクス・レーニン主義以外にはない事に、深く深く、思いを寄せることなのだ。それ以外に、我々自身の団結を打ち固めるといふ良薬があるというのだ。「急がば廻れ」である。

今は全ゆる種類の孤立が必要だ。この事に恐れをなす者だけが、「手みじかの」「既成」の団結を求めて、慣れ合いの古い世界へ帰ろうとするのだ。だが、それらの諸君は、正直にもとの古巣へ帰ればいいのである。なぜなら何度も云うように、我々に課されている歴史的任務は、「革命的純化」以外ではないからである。この我々の「革命的純化」の闘争だけが、我々に、より普遍的な真理を与え、より普遍的な団結の基礎を与え、巨大なプロレタリア党を建設する簡明的確かな綱領をもたらすであろう。孤立を恐れぬ確信だけが、我々をして、真に大いなる団結を呼びかけさせるであろう。下卑た政治的野心は、蜂起戦争派をみじめに崩壊させ、又八・二五共闘の破産をもたらしただけではなかつたか、良い建物は良い基礎の上のみ建てられるのだ。

我々が、今、革命的分派を結成せんとするのは、何よりもこの「革命的純化」をかちとる為であり、従来の古い団結の残滓を一滴たりとも残さないようにする為である。我々が築いて来た古い指導関係の存続について幻想を捨て去り、日和見主義への回帰と流入を阻止する為である。我々は、全く新たに出発するのであり、それが、「政治局の破産」を公言した無責任分子に對する我々の返答である。

政治局の破産の下に、書記局だけが、健全に存在しうるはずもなく、又、各級機関も然りである。にもかかわらず、全く中央指導の破産(十月中央委多数派II八木沢・北原・永井一派の破産だ)を総括しようとして、再建もしようとして無責任に逃亡し続ける十月中央委多数派の責任を我々はこれ以上分担するつもりはない。又、査問委を口先では承認しながら、実際には、査問委に敵対する北原を支持し、自らも敵対・解体策動を繰り返して、反動分派の育成に走りまわっている北原一西分派に對しても当然のことながら、我々は指導上の責任など負うつもりもなく、只我々の責任は彼らを打倒することによってのみ、果たしうるにすぎない。

全ゆる反動分派は、分派を結成しながら、「同盟全体に呼びかける」何物をも有しておらず、只一片の声明すら明らかにし得ない所に、その反動の本質が暴露されている。

全ての反动分子を打倒し、全国委の革命的純化をからとれ！
日和見主義の無自覚な反动への転化を許すな！
我がボルシェビキ分派を革命的に打ち鍛え、単一党建設への長
征をからとれ！（一九七五年・五月）

第二部 党組織論と全国政治新聞

第四章

全国政治新聞を巡る同盟組織活動の総括

—— は じ め に ——

我々がマルクス・レーニン主義者であり、そして今、本格的に中央集権組織の建設を試みようとしている時、何よりもその事業の推進は、「全国政治新聞」をめぐる論議なしに済まされることはできないであろう。

そしてまた、事実、我が同盟の手工業性は、何よりもその「全国政治新聞」の取り扱いをめぐって最も鮮かに露呈してきたといわねばならない。わが同盟内にあるは、一貫して不鮮明であつ

たのは、中央書記局の位置と同時に、「全国政治新聞」の組織性格であつた。従つて、今、我々が指導の手工業性（それは他ならぬ党活動の手工業性と同義であるが）を克服せんとする時、この「全国政治新聞」『烽火』をめぐる総括は、その集中的基軸をなすものである。だから、これらの諸点に関しては、従来、余りにも論議されることは少なかつたし、今後、様々な角度から徹底して論じ、深化されなければならないものとして存在している。これらの論議や研究、国際共産主義運動からの様々な教訓の深化の度合によつて、我々の中央集権をめぐる思想もまた豊富化され、緻密化され、確固不動のものに成長していくことができるであろう。

以下の提起は、それらへの突破口として、また何よりも、現下

の総括論議に一定の内容を付加するものとして存在している。それは、したがって、「機関紙局」の総括というよりも、むしろ「党の機関紙活動」の総括に重点をおこうとしている。だがいままでもなく、それは不十分であり、下記の作業への突破口としてのみ位置をなすものである。それは更にいつそう具体的に、更にいつそう理論的に、発展させられなければならないだろう。

従来、「機関紙」をめぐる論議は、あまりなされていない。中央集権党を語る時、「党学校」や「軍学校」は語られても、「全国政治新聞」については、触れられもしなかった。(例えば、「七二年通達第2」においてもそうであるように)。にもかかわらず、我々は、「編集局通達第1」(七二年春)、「編集委員会アピール」(七三年一月)、「機関紙局活動の中間総括と方向」(七三年九月)及び今回の中央委員会議案における「機関紙に関する提案」という一定の理論的蓄積をもっている。したがって我々は、これらの蓄積から出発しなければならぬ。あるいは、これらの蓄積を切開する作業を経なければならぬ。

これらの提起は、後述するように、一言でいえば、「理論における折衷主義と無原則性の基礎の上に中央集権党の建設が可能であるかのような考え」(中央書記局総括B案)にその限界を有している。だが、にもかかわらず、それらの提起は、唯物論的な「中央集権党建設」の試みであって、組織の分散・手工業性に対する唯物論的な分析に接近している。それらは少なくとも、「分散や手工業性」が、その「生来の小ブル的慣習」やら「個人の属性」

やら、「責任感の欠如」やら「規律の軽視」やらに帰因しているのではないかとするような(ちょうど八木が六〇年代を総括したようなやり方)観念的方法よりは、より秀れたものであろう。

第一節 総括の基本的指針について

手工業性の真の根源をめぐる総括に関しては、何よりも「中央書記局総括B案」で、その理論的・方法的骨子が展開されている。ここでは以下のように述べられている。

「現在では、この『歴史的事業の遅れ』に触れずに、サークル主義や組合主義を語ることは反動的である。……我々は今、この『歴史的事業の遅れ』を隠蔽したり、ましてや擁護しようとする一切の思想・一切の組織活動・一切の試みを『経済主義』として粉砕しなければならない。そして、『マルクス・レーニン主義の革命的復権』を御題目ではなく、戦闘的な指針として、断固貫徹し、全国委員会の歴史的使命を果たさなければならぬ。……この『歴史的事業』の闘争(≡推進)だけが、我々が欲して止まぬ中央集権党を我々にもたらすであろう。確かに思想上の経済主義は、組織上の手工業性と一卵性双生児であり、思想上のマルクス・レーニン主義は、中央集権組織の母親である。思想上の経済主義は、組織上の手工業性、政治上の組合主義から永遠に自由にはなれないが、思想上のマルクス・レーニ

ン主義は、組織上の手工業性を克服し、中央集権組織を生み出すことができる。」

我々は、このような総括に導かれてはじめて、「なぜ『烽火』が、不断に不定期化せざるをえず、スケジュール闘争のインパクトによつてのみ、発行することができるような地平に陥し込められるのか」という疑問に対しても、半ば以上の解答を見いだすことができる。それは、

「我々の『歴史的事業』の遂行の遅れをもたらした当のものは、何よりも、同盟(全国委)の思想上の経済主義的偏向であり、反スタ・マルクス主義への反動的回帰の傾向であった」(中央書記局総括B案)

ように、何よりも一般的な大衆運動主義やら、また組織軽視等ではなく、全国委の歴史的立場と任務に対する軽視—解党主義こそ、その真の根源であったのである。それはまた、

「従つてまたそれは、同盟内に理論に対する軽視・無原則・折衷主義を導入し、革命的批判関係・理論闘争を封殺し、不断に妥協や日和見主義・団結の弛緩をもたらしたのである。」(同案)

とするならば、このような誤まった基礎の上に、どのようにして、「全国政治新聞」を党派闘争の武器として扱い、組織建設の武器として扱い、そしてなによりも、党内論争・思想的統合の武器として機能させることができたであろうか。それはただ、

「……このような、真の『プロレタリアートの前衛党』の建設の闘争は、反スタ・マルクス主義との徹底した死闘、スター

リン主義との徹底した死闘、思想闘争を抜きには不可能なのであり、我々は、それらとの断固とした思想的・理論的・組織的分岐を徹底して押しはからねばならなかったのである。」(同)とする思想の上のみ、可能であったのである。このような思想のみが、『烽火』の定期化、その発行回数、紙面の増大、その内容の戦闘性、首尾一貫性、及びそれらが、プロレタリアート人民の奥深くに系統的に浸透することを火急の、死活をかけた任務として自覚することができるのであり、また、全党の「思想的統合」を何よりも重要な課題、それだけが我々の戦闘性、密集性、一糸乱れぬ規律ある活動を保障するものであることとして、認識することができるのである。

一・一二に提案された「党機関紙活動の総括案」は、従来の「新聞こそ、組織建設の武器であり、党の中央集権化の『環』である」ということについては誰も反対しないこと、にもかかわらず、実践的に、そのことに敵対していることの真の根源を克服する道は「新聞こそ、党の思想的・組織的統合の環であり、それは何よりも不断の新聞を通じた思想的団結の更新によって支えられる」ということ、これを抜きにした一切の「組織建設の武器」だとか、中央集権化の環だとかの論議は、むしろ有害である」と主張している。これは極めて一面的ではあるが、従来の論議を一步前進させており、「中央書記局総括B案」の総括方法にそくしたものである。「総括B案」におけるその核心は、レーニン「何をなすべきか」の把え方の根本的転換を主張しているということである。「何をなすべきか」は、従来あまりにもその俗流的解釈として流

布されてきたような、単なる中央集権党の建設の「型」の問題を論じているのでもなければ、「秘密の機能の集中と運動の機能の分散」、あるいは、「職業革命家の組織と労働者組織の区別」だとかを軸に論じているわけではない。それは何よりも、どのようにして一八九〇年代のロシアの思想的にも組織的にも分散化し、経済主義⇨合法マルクス主義と地方主義・サークル主義が蔓延している状態の中で、それらの革命運動を、どのようにして「マルクス・レーニン主義の思想と綱領の下に統合し」、「単一の全国党の下に統合していくのか」という点に最大の力点がおかれているのである、という認識である。

そしてレーニンは、何よりもそのような第一歩をふみだすために、「批判の自由⇨合法マルクス主義」を批判し、「地方主義・サークル主義」を批判しなければならなかったのである。なぜなら、合法マルクス主義は、「思想的統合」の必要性を認識しないばかりか、「多様な思想・批判の自由」を主張し、「……（経済主義は）……いっさいの首尾一貫した熟考に基づき理論からの自由を主張し、折衷主義と無原則性を唱え」て、それに反対したからである。

なるほど、合法マルクス主義とても「思想的統合」のためには、「全国政治新聞が必要であり」、「中央集権党が必要である」ということについて、客観主義的に認識するかも知れない。だが、彼らにとって、そのような認識⇨知識は、必要ではないのである。なぜなら、彼らは「思想的統合」よりも、「批判の自由・思想的多様性」の方が重要であると考えているからである。

だからこそ、レーニンは、「批判の自由⇨思想的多様性」ではなく、「思想的統合」こそが、ロシアの階級闘争を前進させ革命に勝利しうることを主張しなければならなかったのである。レーニンは、ここから出発したのである。レーニンは、「統合が重要であり、『集め組織する』必要があるということについては、今では全くだれもが語っている」と言っている。だが、真に、レーニンの主張していることは、「しかし、何からはじめるべきか……については大多数の場合、なにもはつきりした考えがない」ような、このような水準における「誰もが語っている、『統合が重要』である」という論者の本質こそ、実は徹底した経済主義であること、「批判の自由」の主張者に他ならないことを述べているのである。地方主義、サークル主義者であることを暴露しているのである。

だから、今、我々は、この「党機関紙活動の総括案」に対しては、一つの質問を発しなければならぬことに気がつくであろう。すなわち、「全国政治新聞こそ、思想的・組織的統合の〆環である」というテーゼは、誰にとって有効であるのか、と。それはただ、「プロレタリアートとその党にとって、思想的・組織的統合こそ生命であり死活問題である」と考える者にとってのみ、このテーゼは有効な武器たりうるであろう。「全国政治新聞こそ、思想的・組織的統合の〆環である」という百の認識・百の確認が実践と結合しない時、我々はもはやそれを「全国政治新聞」に対する軽視ではなく、その本質において「思想的・組織的統合」の思想そのものに対する軽視・敵対であることを知らなければならぬ。

だから、我々にとって重要なことは、「思想的・組織的統合」こそ重要であることの確認とその思想の勝利などである。それなくして、「新聞こそ、思想的・組織的統合の〆環である」という百の主張と百の論証、そして百の確認がどんな意味をもつであろうか。経済主義者の本音はこうなのだ。「なるほど、思想的・組織的統合にとって新聞はこのうえなく有効であろう。だが我々にとっては、思想的・組織的統合よりも、思想的自由・組織的多様性の方が重要なのだ。」

この点において、その思想が反革命であるか、宗教的であるかを問わず、その「思想的・組織的統合」を何よりも重視し、その思想の「偏狭」さに磨きをかけているところの、たとえば日本共産党や公明党が、その「機関紙活動」を重視しており、（彼ら流の）充実した発行体制を敷いており、「思想的・組織的統合」を軽視し、「思想的多様性こそが党の生命である」などと分派活動を許してきた社会党や、またそれこそ多様な（もちろんブルジョアイデオロギーの枠内で）自民党の機関紙活動が、それこそ、お粗末なものであるというところの理由についても理解しようところである。

（ところで、昨今の、社会党・自民党の「機関紙活動の重視」のかけ声は、何よりも思想的・組織的分散性の基礎の上の試みであることよって、決して成功するものではない。）

だから、「全国政治新聞の発行そのものが、思想的・組織的統合の〆環ではないし」、また「全国政治新聞の発行それ自体が、

組織建設の武器であったり、中央集権党の建設の〆環であったりする」わけではなく、何よりも、経済主義に対する闘いを意図して発行される「全国政治新聞」のみが、組織建設の武器として機能でき、中央集権党の〆環として利用でき、思想的・組織的統合の〆環として機能させうるのである。

だから我々にとって、何よりも重要なことは、「思想的・組織的統合」に対する日和見主義と徹底して闘争することである。もちろん、この日和見主義は、公然とたち現われるわけではない。それは、レーニンの主張するように、「思想的・組織的統合」の重要性を大声で主張しながら登場するかも知れない。それはまた、「調停主義」として立ち現われるかも知れない。だが、それらが、実に多様な姿をとってあらわれることについては、「中央書記局総括B案」の中で述べられている。我々は、何よりもそのような経済主義を根絶した基礎の上に、革命的全国政治新聞を創出しなければならない。そして、そのためには、すなわち我々自身の特に、特殊な「思想的・組織的統合」の重要性、そのことにまさに我々の死活がかかっているということを真に認識するためには、何よりも「総括B案」の次の一節がわが同盟の背骨に刻み込まれなくてはならない。

「革命的理論なくして、革命的運動はありえない。このレーニンの言葉は、わが全国委の革命運動における『歴史的位相と任務』からするならば、いくら強調されてもさげすむということはない。それは、レーニンが、一切の『批判の自由』⇨経済主義を敵にまわした時にそうであったように、我々もまたそ

組織活動を生みだすことができるのである。」

第二節 12・18路線における組織論の誤り

かつて我々は、12・18路線下において、全国政治新聞について次のように述べて、レーニン主義の基本的革命的原則をいともたやすく解党主義者の手に譲りわたってしまったことがあった。

「権力との関係で、非合法下におかれていた党活動は、レーニン時代のような『文書配布』ではなく、軍事活動であること、したがって、非合法活動の内実は実践的に明らかである。」（『共産主義』一四号一九頁）

「レーニン党に主要に付加すべき内容は、この党の非合法党としての組織が、全国政治新聞だけでなく、軍建設を媒介としてのみ行なわれること、以上である。」（同書一九頁）

我々は、いま再び、この論理の根底的誤り、マルクス・レーニン主義と全く縁もゆかりもないブルジョア軍事主義であるところの根本的誤り、その犯罪性について、鋭くえぐりだすことなしに、全国政治新聞について正しく語ることはできないであろう。もとより、この総括は、第一に、党組織論として、第二に、戦術論として、その両者の総括に極めて基軸的にかかわる問題である。その中でこの場においては、党組織論における領域にのみ限定して扱うことにする。すなわち、全国政治新聞にかかわるかぎりにお

うなのである。それは、何よりもわが全国委の歴史的任務（反スタ・マルクス主義の止揚とマルクス・レーニン主義の復権、スターリン主義の打倒）が、未だ端緒にいたばかりであり、その依拠すべき思想と組織は、『今ようやく形づくられつつ』あり、『今ようやく、自分自身の個性をつくりあげつつあるところであり、運動を正しい道からひき離すおそれのある他の革命的思想和の対決を終わるには程遠いのである。……このような事情のもとでは、一見して『たいしたことのないようにみえる誤りが、このうえなく悲しむべき結果を引きおこさないとは限らないのである。』

スターリン主義と反スターリン主義の恐ろしい程の重包围の中にあつて、我々の歴史的任務は、本当にまだ開始されたにすぎないのであり、その第一歩をふみ出したにすぎないのである。それは我々の壮大な歴史的任務からすれば、まさにそうなのであつて、『12・18の革命的指標』は、我々のほんのささやかな一瞬の気のゆるみによつてさえ、たちまちのうちに敵の陣営に葬り去られてしまわないとも限らないのである。左派がそうであり、赤報派がそうであり、伊集院一派がそうであつたように。マルクス・レーニン主義の復権をかかげ、革命的左翼の『まる一時期』に対し、清算＝革命的放棄の戦闘宣言を発したわが全国委の精神は、『寛大』であるよりは、徹底して狭量であらねばならない。原則の逸脱や無原則性や折衷主義に対しては、苛酷なまでに非妥協であらねばならない。その『狭量』の精神だけが、組織の結束を強化し、組織の戦闘性を強め、一糸乱れぬ

いてということである。

まず第一に、「非合法党の基本活動は軍事活動である」とする考え方は、マルクス・レーニン主義と全く無縁である。マルクス・レーニン主義は、任意の階級闘争の一時代を指して「武装闘争の時代」だとか、「武装闘争の地平」だとかの言辞でもって、階級闘争の戦術の幅を狭め、柔軟性を奪い去る発想とは全く関係がないことを鮮明にしなければならない。レーニンは、全く鮮明に次のように述べている。

「こうして我々は、共同の新聞のための協同活動を手段とする全国的新聞を中心とする組織の計画を、なぜ我々が、特に力説するのかという理由の最後のものにたどりついた。このような組織だけが、社会民主主義的な戦闘組織になくてはならない『屈伸性』を保証するであろう。すなわち、極めて多種多様な急速に変化していく闘争条件にただちに適應する能力を、一方では圧倒的な兵力をもつている敵が、その全兵力を一地点に集結した時には、この敵との野戦を避け、他方では、この敵の不政治性を利用して、敵がもつとも攻撃を予期しない場所と時期を選んで、これを攻撃する能力を保証するであろう。

爆発や市街戦だけを予定したり、あるいは『平凡な日常闘争の漸進的な歩み』だけを予定して党組織を建設することは、このうえなく誤りであろう。」

「我々は『常に』我々の日常活動を遂行しなければならないし、また常にあらゆる事態に対して用意をもつていなければならない。なぜなら、爆発の時期と沈静の時期との交代をあらか

じめ予見することは、ほとんど不可能な場合がきわめて多いしまたそれが可能な場合でも、この予見を組織のつくりかえに利用することは、とてもできないだろうからである。というのは……また、革命そのものも、決して単一の行為の形で考えるべきではなく、（ナジエシチン一派はそう考えているようだが）多少とも強力な爆発と、多少とも深い沈静とがいくたびか急速に交代するという形に考えなければいけない。」

「だから、わが党組織の活動の基本的な内容、この活動の焦点をなすものは、もつとも強力な爆発の時期にも、もつとも完全な沈静の時期にも、同様に行うことができるし、また行う必要のあるような活動でなければならぬ。すなわち、全ロシアにわたつて統合され、生活の一切の側面を解明するもつとも広範な大衆を対象とした政治的煽動の活動がそれである。」「ところで、現代のロシアでは、このような活動はごくひんぱんに発行される全国的新聞なしには考えられない。」

「このような新聞を中心としてひとりてに形づくられる組織この新聞の協力者たちの組織こそ、まさに最大の革命的『沈滞』の時期に、党の名譽と威信と継承性を救うことにはじまって、全人民的武装蜂起を準備し、指定し、実行することに至るまでの『全ゆる事態に対して』用意をもつた組織であるだろう。」（『なにをなすべきか』二六六―二六七頁）

この短文の中には、レーニンの戦術に対する思想・党組織に対する思想・「日常活動」に関する思想等々が、きわめて凝縮された形で展開されている。『なにをなすべきか』における「珠玉」

の部分であるといえる。

レーニンは、「全国政治新聞を基礎にした中央集権党」の本質について、「全ゆる事態に対して用意をもった組織である」と述べている。

レーニンは、また、その最後で「全国政治新聞」の計画は、「あらゆる方面から、いまず蜂起の準備を開始すると同時に、自分の緊切な日常活動をただの一瞬も忘れないもつとも実践的な計画である」と述べている。

レーニンは、「全国政治新聞の計画」を単に宣伝・煽動一般の武器として語っているわけではない。それは、「それだけが、唯一武装蜂起を実際に準備することが可能であるのだ」と述べている。武装蜂起は、実際のところ、「日常活動の漸進的な歩み」のみ夢想している一派や、また、「爆発や市街戦」だけを予定している一派によつては決して組織されることはないことを主張している。なぜなら、「革命そのものは決して単一の行為ではなく」「多少とも強力な爆発と多少とも深い沈静とがいくたびか急速に交代する」中で、武装蜂起が貫徹されるからであり、そのような一派は、「いくたびかの急速な交代」の中で崩壊してしまわずにはいかならないからである。以上の中で、12・18路線の最も致命的な誤り——「非合法党の基本活動は軍事活動である」の犯罪性、エセ・レーニン主義が暴露されたであろう。

ところで、この誤りに対し我が全国委員会においては、はっきりと理論的批判がなされたわけではない。とりわけ、「論争を開始するにあつたのメモ——いわゆる八木沢メモ」(七二年二月

執筆)においては、その点をとりあげているものの全くピントはずれの屈服的な批判に終わっていることが指摘されなくてはならない。「メモ」は述べている。

「レーニン全国政治新聞、現在は軍事組織、レーニンの時代政治闘争、現在武装闘争といった主張は、そもそもレーニンが、ボルシェビキを政治警察と闘い、正規の包囲軍として打ち鍛え、あるいは日常的なツァーリ政府との武装闘争を胎んでいたことへの決定的過少評価におちいるものである。」(「メモ」——「鉄鎖を砕け」に収録四七頁)

これでは、全く何を言わんとしているのか判らない。ただ、なによりもそれは、「現在の非合法党の基本活動は、軍事活動であり、また階級闘争の現段階は武装闘争である」という主張を容認したうえで、これらは、「レーニンの時代もそうであったのだ」と主張しているが如くに把握されざるをえないであろう。何をかいわんやである。まさしく、「第二段階論」は、組織論上の混乱戦争派への屈服、また戦術論上の機械的武闘三結合論を何ら止揚することなく、それらの基礎のうえに提案されたところにその致命的誤りが同時に胎んでいたのである。その点について、「機関紙局活動の中間総括と方向」は次のように述べている。

「……組織構造の転換、中央集権化、統一化を基礎にしてのみ提起されねばならなかったところのいわゆる『民主主義闘争(第二段階論)』の提起が、組織的には、二期(七二年二月—十月)の混乱の最中において、極めてアプリアリオリに政治方針としてのみ提起されたことによつて、その後、二期的混乱が、増

幅傾向を示していく中であつては、ますます当時の(七二年十一月)の組織再編の重要性が認識されなければならない。」
また、三号決議(七四年十月中央委員会決議)は、「非合法党」の規定に対して、

「大胆に現実のプロレタリアを宣伝し、煽動し、組織し、にもかかわらず、不断なる政治警察・敵对党派の包囲攻撃から党の組織と運動を防衛しきる能力」であるとして述べている。

これはレーニンの規定・すなわち、
「あらゆる事態に対して用意をもった組織」
「あらゆる方面から、今すぐ蜂起の準備を開始すると同時に、自分の緊切な日常活動を、ただの一瞬も忘れない、もつとも実践的な計画」

と比べるならば、その無党派性は、その日和見主義、その防衛主義、その隠健主義、その経験主義は、一目瞭然明らかであろう。それは、「武装したか?」「ラボーチェエロ」の思想である。それは、武装した経済主義だ。それはせいぜいのところ、六九年以降のわずかな数年間の狭い、限られた限界内から抽出した理論の極限を示すにすぎない。レーニンは、国際主義者は、他国の経験から多くの教訓を学ばねばならないと教えている。

第三節 何が手工業性なのか(そのI)

一月下旬の中央書記局「常任委員会会議」において、「今後の会議においては、必ず議案を提出すること、また指示された文書の提出は必ず果たすこと」が、ささやかな確認となされた。同時にこの確認が、完全に遂行されるためには、従来の方法を転換することが必要であることも合せて確認された。従来の方法とは、「不十分な文書を提出するよりは、完全な文書を提出することの方が、より重要である」という類の考え方であり、それを排した新しい方法とは、「完全な文書を提出しないことよりも、不十分な文書でも提出する方がより重要である」という考えである。

従来、文書の組織的提出(すなわち、限定された期限の中で、限定された目的のための、何よりも現下の組織活動が要求している期限の中で)の確認が、「新聞」をめぐるでも、また「内部通達」をめぐるでも様々になされてきた確認のこと。不断に破産してきた主要な根拠、第一のとはいわないまでも、極めて重要な根拠の一つは、上記の従来の旧い考え方の上にその確認がなされてきたからであった。それらの旧い考えは、文書活動がなによりも日々の組織活動を円滑ならしめ、合理的ならしめ、計画的ならしめることに密着していなければ、その大半の意義を失うことに

ついで、軽視しがちな、個人主義的な考え、思想のもたらすものであった。そのような個人主義的な「文書活動」の取り扱い扱いは、組織活動の発展を促進するのではなく、逆に、組織活動の発展を阻害するものであり、規程を弛緩させ、組織活動をリズムのない不定形さに追いやることにのみその意義を見いだすことになりかねないのである。また、このような個人主義は、ある一つの問題について取り扱う時に、その最初の「文書活動」によって、その文筆家の内的な自己了解が済めば、再び繰り返すことを放棄することにもなるのである。大事なことは、その問題について、「組織活動」自体が了解したかどうかが大事なのであり、またプロレタリアの先進闘士が了解したかどうかが問題なのであり、もしそうでなければ、その文筆家の内的な問題に全く関係なく、その問題について、繰り返し繰り返し、多様な判りやすい方法を考案しながら述べるのが、すなわち文筆家自身ではなく、組織全体が確認し、納得し、武器として習熟できるまで述べるのが、何よりも重要なのである。

「文筆活動」は「宣伝・煽動」活動は、けっして個人作業ではなく、それは何よりも組織活動でなければならないし、またそうであるなら当然そこには、規律・制約性がなければならない。

従来旧い方法は、清算され、新しい方法で置きかえられなければならない。旧い方法こそ、組織を不断に、手工業性の沼地に追い込んだ犯人でもあった。それは、中央集権の思想の真の意義について理解しえないが故に、個人主義が不断に生み出す手工業性の肥大化についても寛容であり、また同盟と先進的闘士に対し

て、理論指導を放棄し、理論を単なる理論家の自己了解やおしゃべりにかえてしまうのである。理論は組織的な姿をとつてのみ、破壊力・変革の力になりうるのである。このような個人主義の発生は、何よりも、組織全体の、とりわけ指導部の理論を、首尾一貫した実践の指針にまで貫徹させることの日和見主義にその根拠をもっているのである。そしてまた、理論は、組織活動の中で打ち鍛えられ、より一層発展させられるべきものであり、だからたとえ、最初の不充分性・限界の中から出発したとしても、我々が党の基本的闘争の中に、はつきりと理論闘争の重要性を指定し、意識的に組織する術に習熟しているならば、「理論」の中から、個人的・人格的残しを払いのけ、組織的に形成され発展された「理論」へと発展を待ちとることが可能であろう。

わが同盟内にあつては、このような理論に対する個人主義的な偏向の故に、すなわち、個人理論を組織が利用するといった水準から、真の意味での組織的理論にまで発展させられていないが故に、「論文」を特定する場合は、「○○機関論文」といわずに、「××氏論文」と、その「論文」の巻頭に機関名ではなく、執筆者名を冠する習性が存在する。それがたとえ純然たる「機関論文」であつた場合にもである。

はなはだしい偏向の場合、その「機関論文」の中に、ことさらに個人的色彩を探し求め、そのことによってその論文を執筆者個人の性癖やら特徴の抽出によって批評する誤り、すなわち、機関活動の総括ではなく、個人的批判・特徴づけでそれに代える解党主義の誤りを生み出しもした。さらにまた、ある問題について展開

する場合に、その問題に関する同盟全体の、組織的水準の再検討の上になすのではなく、単に執筆者個人の過去の展開との継承関係のみ考慮して展開するという、はなはだしい解党主義を生みだしている。例えば、「12・18路線の意義と限界」に関する諸論文を、すなわち「八木沢メモ」から「プロレタリア通信」（七四年十月）に至る諸論文を検討してみれば歴然たることである。ここでは、ほとんどまったくバラバラに、思い思いに語られており、旧来の到達水準をふみ固めて（組織全体の！）先へ進むという方法ではない。したがって、ほとんどの提起が、それぞれ堂々巡りであり、誰も入口から中へ入ろうとしない。（もちろんすべてというわけではないが）

あるいはまた、「プロレタリア独裁」をめぐる論議においてもそうであり、様々な例証には何らことかくものではない。したがって、執筆者の違いによって継承関係の相違が生じたり、また様々な総括が生み出されるのである。これらはすべて解党主義であり、無原則性や折衷主義の温床でもある。これらは、個人的色彩のもとに様々な雑多なイデオロギー・理論が流入し、再生産され、温存される元凶である。これらの結果、同盟内には、12・18路線とは、肯定的にしろ否定的にしろ、全く無関係な、異質の理論がまかり通っているのが現状である。時には日共の、時には日向派の、時には宇野の、時には左派の理論が、堂々と駆け巡るのである。まさにレーニンのいうように、「最初のなんでもないような小さな誤り」も、成長すればとんでもない怪物になるものである。

これらは、明らかに同盟の理論的結束を、またたくまに弱め去る解党主義であり、また同盟の思想的・理論的な発展を押しとどめる、また総括不能に陥し込める解党主義である。

わが同盟内においては、ある問題について論議する場合に、その問題に対する理論的に未熟な同志であろうと全く「平等」に論争に参加できる。単なる思いつきや、問題意識や、部分的意見や、一般的危惧すらも、立派な「意見」見識」として尊重されるからである。確かに同盟内には、「全ゆる問題」に直ちに反応がでる（それが資本主義批判の話であろうと、綱領や組織論、戦術をめぐる、またプロ独をめぐる、その他の大衆運動のあれやこれやの論議であろうと）、どのような「理論」に対しても、直ちにその不充分性やら限界やらを主張することのできる極めて立派な同志達が数多くいるにもかかわらず、にもかかわらず、それらの同志の中から、検討に値すべき「理論的成果」が提出されたためではないのは、奇妙なことではある。

だがそれは、それらの議論が、結局のところ、「首尾一貫した熟考に基づく理論からの自由の論議」であり、「思いつき」や「問題意識」の類いの「お課り」にすぎないことの結果にすぎないものである。

また、奇妙なことに、これらの人たちほど、「提出された理論論文」の「本質」をみぬくのが上手なのである。彼らは一読するやいなや、「これはだめだよ」、「××の総括がないよ」と、直ちにその評価を下すことができ、またその評価を下したあとは、もはや再吟味など考えつきもしないのである。我々が、毎日毎日

飽きもせず耳にする「××論文批判」の類いは、せいぜいのところ、この程度の代物でしかないことは、誰よりも我々自身もつともよく知るところであろう。もつとも、にもかかわらず、実践の中では、それらを断片的に利用し、恩恵に浴しているのは他ならぬそのような人たちののだが。

このような作風が、あるいは、理論に対する態度がはびこっている中で、どのようにして我々は、革命的理論を打ち鍛えることが可能であろうか。

前述したように、「文書活動が、日々の組織活動を統一し、円滑ならしめ、合理的たらしめ、計画的たらしめることに密着していなければ、その大半の意義を失うことについて軽視しがちな」旧い考えは、組織活動の規律ある展開、発展を促進するのではなく、逆に不断に断層・亀裂をもたらす、規律を弛緩させ、組織活動をリズムのない不定形さに追いやられ、組織活動の手工業性を増々倍加させる誤りをもたらすのである。

第四節 何が手工業性なのか(そのⅡ)

かつて、七三年の夏にわが東北地方委員会は、「号砲」なる地方機関紙を発刊した。それはガリ版ずりではあるが極めて立派なその意味では党活動の多大な時間を注ぎ込まずにはできないようなべきばえであり、そのべきばえは発行回数を追うことに立派に

なったのである。

しかも「全国政治新聞」は一〇の内容を宣伝することが出来たにもかかわらず、地方機関紙はどんなに頑張っても二つの内容しか宣伝することは出来ないものである。これらが「中央集権的指導」のサポータージュに対する罰の内容の一端である。これらの結果、党と労働者との「密接」な関係がどの割合で疎遠になったか計算してみることである。まさに地方主義と中央集権主義との間には、党とプロレタリアートのその結合の度合において百万里程ものへだたりがあることに気がつくであろう。ところが同盟の最高指導部は、そして、そのとりわけ文筆家グループは、このことに余りにも無自覚であった。彼等については「新聞発行が遅れる」という事態について(他ならぬ自己の原稿の遅れを唯一の理由とした)ただ「事態が静止する」事以上の理解に達することが出来ないでいた。上記に述べた基本的なこと以上に、即ちそれは地方主義によって強烈なしつべがえしを受けること、同盟の力量を余分に投入しなければならぬこと、以上にたとえばいくつかの他の原稿が既に古くさく時宜に適さなくなったために廃棄処分にしたり、また何度も遅延する度に局面変化によって書きかえたり、また重要な記事の増大によっていくつかの重要記事が廃棄されたりするような事態に対してや、また何よりもその様な蓄積が地方やその他の報告者の間に不信を育て、以前よりは熱心で、協力的・積極的でなくせしめて行くというような事態、従って情報の集中・理論作業の集中が徐々に弱められていくというような事態に対して全くのところ何程の理解もすることが出来なかつたのである。

なつていった。それは更に「仙台労政」の機関紙活動をも誘発し、兄弟紙として発行されるに至つた。

だが地方機関紙の発行は、「中央機関紙」のサポータージュに対する罰であつた。地方主義の発生は、正確に中央集権的指導のサポータージュに照応しているものである。こういうことは全く水が低きに流れる如くに論理必然の事態であるにすぎない。一定の政治的局面の中で、それに対応した統一方針が「中央機関紙」によって示されなければ、地方委員会は独自に対応し、方針を出さねばならなくなる。そして当然にもそのために、独自に政治資料を取り寄せ、研究し、執筆するエネルギーを消費しなければならなくなる。にもかかわらず、そこに提起される暴露は一面的で幾分粗雑であるだろう。また地方委員会の内部事情、そのたずさわっている諸関係によつても一定の偏向を持たざるをえないであろう。また編集、印刷、配布とかなりのエネルギーを投入しなければならぬであろう。そして、にもかかわらずそこに掲載される政治暴露や活動報告は、極めて限られた、その意味では既に誰も知つていような範囲にしか伝わらないであろう。だとするならば、まさしく同じような情勢分析を幾人も地方の指導カードルがそのエネルギーを投入しながら執筆し、つくり上げねばならぬい羽目におち入るのである。他ならぬ、同一組織の中で(注一)従来、一〇〇のプロレタリアートに政治方針を宣伝するために、一〇のエネルギーを投入して「全国政治新聞」を発行することで遂行したにもかかわらず、今そのサポータージュによつて同盟全体は五〇のエネルギーを投入することによつてしか伝達できなく

それはただ「事態が静止」しているのではなく、「そのことによつて、日々組織の解体・弱体化・分散が進行しつつあること」、従つて何よりもそれは解党主義として日々進行していることについて、何の理解をも示すことが出来なかつたのである。

中央のサポータージュは地方に全く余分の百のエネルギーを消費させるのだ。

わが機関紙局が、七二年十二月八日付けの「編集委員会」政治局に対する要求書の中で、中央委員会自身が原稿を遅らせたり、また紙代の納入を遅らせる事を生み出していることによつて、「定期発行に敵対していることを批判し、その様なメンバーに対しては『罷免』まで含む処分が当然である」と要求しているのは、全く当然すぎるくらい当然のことではなければならないのである。だが全くの所誰もそのようには考えなかつた。

これらは中央集権主義の思想についての認識が極めて不十分な結果にすぎない。

先述の「党機関紙活動の総括案」は「新聞こそ組織建設の武器であり、党の中央集権化の環であることについて我々は過去幾度となく確認した。そのことには全員が反対しない」と述べている。真実そうであるとしたら何が問われなければならないのか。それはただ次のことである。「諸君は一体、組織建設ということについてどのような理解をもっているのか、また中央集権党の思想について、実のところどのように理解しているのか」と。

従来我々の間にはまさにこのこと、この核心をめぐる論争が余りにも少なすぎたのである。中央集権主義にもまさに色々あろう

というものだ。大事なことは、マルクス・レーニン主義における中央集権主義とは何であるのかということだけではない。各人の思いつきや、貧弱な経験は混入させられるべきではない。「全員が反対しない！」「だが全員が反対している！」

さて、それではレーニンは、一体どのような手工業性を克服するために、「全国政治新聞を中心とする組織の計画」を提出したのであるか。このことを以下、簡単に振り返ってみなければならぬであろう。それは主要には『何をなすべきか』第四章の（地方的活動と全国的活動・及び第五章でレーニンが展開している内容である。

ところで前提的にレーニンが「秘密の機能の集中」ということをどのような意味において理解していたのかということが確認されなければならない。

レーニンは「十人の賢者」と「百人の愚者」とどちらが（警察にとつて）とらえつくしやすいかということ論じながら、「秘密の嚴格に訓練された少数の革命家の組織」の重要性について何度も言及している。そしてその中で、「秘密の機能の集中」という点において次のように述べている。

「一切の秘密の機能をできるだけ、少数の職業革命家の手に集中するということは、これらの革命家が万人にかわって考えるだろうということでも、民衆が運動に参加しないだろうということでも、決してないのである。……組織の秘密の機能を集中するということは、決して運動の一切の機能を集中するということではないのである。『十人』の職業革命家が非合法文書

の仕事の秘密の機能を（その手に）集中することによって、この文書へのもっとも広範な大衆の積極的参加は減らずに、かえって『十倍』も強まるであろう。

（なぜなら——筆者注）そうすることによって、そしてただそうすることが、また部分的にはそれを配布することまでが（ほとんど秘密の仕事でなくなる）状態を達成できようからである。」

（一九一頁）

「もっとも秘密な機能を革命家の組織に集中することによって、広範な公衆を目あてとした、従ってできるだけきまつた形をもたず、できるだけ秘密でない多くの組織——の活動の広さと、内容の潤沢さは弱められず、かえって豊富になるであろう」（一九一頁）

まさに、レーニンに従えば、「秘密の機能の集中」によって逆に「多くの部分が秘密でなくなる」と、そのような方法として問題が定立されていることを把握しなければならない。それは単に北原氏のように「警察から防衛する」と云う防衛的見地からのみではなく、更により一層攻撃性・能動性・その広さ・その深さを拡大強化することと結びあわされて、まさしくそのようなやり方で提出されていることが大事である。

レーニンは、もっぱら地方的政治意識と地方的活動のはびこっていたロシアの階級闘争の中に全国性を持ち込み、諸運動を統合し、単一の計画された階級闘争にまで高めあげること、その全精力を投入した。またそれは同時に、そのような全国性だけが階

級闘争の中に「権力問題」を持ち込むことが可能であること、そしてそれを持ち込まずにはロシアの階級闘争は様々な反抗の増大を持たらしこすれ、決して自己を支配階級に高め上げるといふ意識性も、その実現もなしえないことを深く理解していたからである。だからレーニンは様々の一般的政治、思想的論争に対しては、「綱領問題」をそれらの論争の中心に持ち込むことによって「権力問題」を持ち込み、「こまごまとした暴露」に陥りがちな地方政治に対してはロシアの全体的な政治状況全般を扱うこと、ロシアの「国政」を扱うことを主張することによって、それらの

細分化された諸問題の眞の根源に運動の方向が進むことを図り、また、地方的革命組織が地方的な成熟や政治流動の中で、それぞれの戦術を組み立て、行使している事に対しては、単一の集権化された全国組織だけがロシアの全体の政治的成熟度を判断することができ、「権力」に迫りえる事を説いた。「綱領」と「全国的中央集権組織」、そしてそれらを建設してゆくべき「環」としての「全国政治新聞」の計画。

まさにレーニンにあっては一切が「革命の勝利——プロレタリア権力の創出」にしばられて論じられていたのである。レーニンにあっては「権力問題」に対する態度こそ、革命的部分とそうでない部分との分岐点であった。レーニンは、このような観点から「地方主義」を批判し、「地方新聞」を批判し、全国的活動・全国的新聞の意義を論じているのである。

だからそれは、単に「地方新聞」を批判しているのではなく、それに象徴される全ゆる地方主義、経済主義、日和見主義のこと

を論じているのを忘れてはならない。レーニンは「我々が新聞の事業をとり上げるのは、はかりしれない程に一層広範で、多面的な革命的事業の全般を例解するための一例としてにすぎない」と述べている。我々もまた然りである。

レーニンは、地方新聞について（従って地方的活動について）「これらの地方的機関紙を全部集計してみると、おおよそ月に一号づつの割合で新聞が出たことになるのが分るだろう。これこそ我々の手工業性を一目瞭然に例証するものではないだろうか。」

「これこそ我々の革命的組織が、運動の自然発生的高揚に立ち遅れていることを明白に示すものではないだろうか。もしこれを同じ号数の新聞が、ばらばらの地方的諸グループによってではなく、単一の組織によって発行されたとしたら、われわれは莫大な労力を節約出来たばかりか、更に我々の活動にはかりしれない程の多くの確固さと継承性を確保出来たであろう。……この簡単な理屈が……見おとされている場合が余りにも多いのだ。」

として、その問題提起を行っている。そして「地方新聞」は「大多数の場合に、原則においてぐらついており、政治上意義を持たず、革命勢力の費消の点で法外に高価についており、技術上の点で全く不満足である。（私の言っていることは、もちろん印刷技術のことではなく、発行の回数や定期性のことである）そしてここに指摘した諸欠陥はすべて偶然のものではなく、細分状態から生れる、まぬがれえない結果なのである。」とし、更に個々の地方組

織にとつては、「自分の新聞に原則上の確固さを保障し、新聞を政治的機関紙の水準に高めるといふことはまったくその力にあまること、また我々の運動全体の一般的利益（一貫した社会主義的政治的原則による労働者の教育）のことはしばらくおくとしても、もっぱら地方的な利益でさえ、非地方的な機関紙による方がいっそうはかりうるのである」ことを主張している。

「これが、逆説の様に思えるのはうわべだけのことであつて、実際のにはこれは、さき程指摘した二年半の経験によつて反駁の余地のないまでに立証されているのである。もし三〇号の新聞を発行した地方の勢力の全部がただ一つの新聞の仕事をしたなら、その新聞は一〇〇号とはいわなくても、六〇号を発行することは容易であつたらうし、従つて純地方的な性質の運動の全ゆる特性をも、もつと充分に反映できたであらうといふことには、だれでも同意するであらう。」（二二〇頁）

「（手工業性の枠内ではせいぜいのところ二ヶ月に一度しか発行できないが——筆者注）ところが十個の地方組織が合同してそれぞれ代表を送つて共同の新聞の整備の爲の積極的機能にあたらせるだけで全ロシアにわたつて、こまごましたことがらではなしに、真にきわだつた、典型的な非行を二週間に一度づつ『つかまえる』ことができるであらう。」（二二四頁）

まさにレーニンが、活動のどの様な側面が「手工業性」と呼ぶにふさわしいものであるのかということ、このように「地方新聞」を論じながら述べている。それらは消費するエネルギーの莫大さ、投入する情熱と善意の量に全く関係なく、良いところなど

ここではそのように抽象的に規定された「手工業性」がまさしく現実的姿をとつて生き生きと暴露されていること——これが大事なことである。

ところで我々が今問題にせんとしている「手工業性」は、そのような「地方的活動」の中に潜在している傾向ではなくて、まさに我が中央自身のことであることが大事である。

我々が、これらの点で対象として論じなければならぬのは、他ならぬ「指導者」自身についてなのである。我々が全国委において共産同の革命的伝統を継承している地方委員会の革命的同志達の中には、「地方活動が全国的活動に優先すること」などを、主張している部分は当然にも存在しないであらう。なぜなら、共産同の革命的伝統は、前線における様々な他派の日和見主義や経済主義、地域主義的論調に対し、いつでも全国性・世界性を主張して立ちあらわれることを、我々の地方の最前線の活動家に植えつけてきたからである。「個別利害よりも常に全体利害を代弁し、また、一国的利害よりも国際的利害を代弁する」のが、わが共産同が結成以来継承し、その党派性として保持されている見地であり、このことは、わが全国委員会においても脈々と継承されているはずである。だから我々が陥つてゐる事態は、他ならぬ「地方機関紙の発行は、『中央機関紙』のサポーターに對する罰であつた。地方主義の発生は正確に中央集権的指導のサポーター（弱体化）に照応しているものである。」ということなのである。真に革命的見地に立つ革命家は、前線の日々の実践の中で、合理的見地がどれほど重要であるか、中央集権的指導体制がどれほど必要であるか、

何一つない事、無駄、無駄、無駄なのである。

「中央の定期刊行物より、地方の定期刊行物の方が優勢である」といふことは、乏しさの印であるか、ぜいたくの印であるかである。それが乏しさの印であるのは——運動がまだ大規模生産に必要なだけの力を作りだしておらず、まだ手工業性のうちに、その日ぐらしをしており、『工場生活のこまごましたこと』がら』の中にほとんど溺れきつてゐることである。それがぜいたくの印であるのは——運動が全面的暴露と全面的煽動の任務を既に完全に制御し、その結果、中央機関の他に沢山の地方機関紙が必要になる時のことである。現在我々の間で地方新聞が優勢であるのが何を証明するかといふことはもはや各人が自分で判定されたい。」（二二八頁）

我々はこの「手工業性」の把握において、しっかりとレーニンの見地に立脚する必要がある。レーニンは「手工業性」を抽象化して、「しかし『手工業性』という概念には訓練の不足といふことその他に、まだ別のあるものが含まれている。一般に全体としての革命的活動の範囲が狭隘なこと（即ち経済主義、地方主義——筆者）このような狭隘な活動にもとづいては、すぐれた革命家の組織などが形づくられるはずがないのを理解しないこと、最後に——そしてそれが肝心の点であるが——この狭隘さを正当化して特別の『理論』にまで高めようと試みてゐること、つまりこの領域でもやはり自然発生性の前に拝跪してゐること、これがさうである。」（一六〇頁）と述べている。だからこの「地方新聞」を巡る論議が本場に「一つの例解」にすぎないこと、にも拘らず、そ

それなくして前線や地区の活動がいかにして前進が可能であらうか、などということを知り知るほど、思い知らされてゐるのである。党派闘争の中では、それは、より一層痛切な思いをもたすものである。党派闘争の中で生じる局面的有利性は、常に全国的局面的不利によつて帳消しにされ、実を結ばないこと、前線の活動家は、そのことのために、どれほど悶えるほどに苦しみ、くやしんだことであらう。まさにレーニンが、「自分達が手工業者でしかないことを自覚して、胸が痛むまでに苦しみ悩まなければならなかつた。」ように、そしてそのことに常に「燃えるような羞恥の感情」を覚えたように、同盟の前線の活動家達もまた、そうなのである。たとえば、あの「八派統一戦線」のころを想い出すがよい。我々は、どれほど『前進』に羞恥の念をおこされたことであつたらうかといふことを、その他の全ゆることを！そして今のこの「現実」を！

地方の活動家は、そのような全国的指導の弱体さの中で、自らを防御しなければならなかつたし、自らでそれを補わなければならなかつた。まさに、それらの事を地方活動家が熱心であればある程、そうせざるをえないことを、「中央集権的全国指導部の弱体さ」は、強制したのである。そしてその結果は分権主義だ。防御が防御にならないこと、これがそれらの熱意と献身性に対する冷徹な結論であつた。全ての事態はまさに弁証法的であるにすぎなかつた。

だからいつも、「中央集権的組織」と「中央集権的指導」の重要性を認識してゐるのは、わが同盟にあつては前線の同志であつ

たし、その認識が実のところ最も不足してきたのは、他ならぬ「わが指導部」であったのである。だから今、我々は、「指導部」内部の「地方主義」を克服しなければ一步の前進もありえないのである。「中央集権」という思想は、「中央集権」だけに思いをめぐらせても、何程の理解もできないものである。レーニンがそうしたように、「階級闘争の現実の正確な把握とその飛躍」を考慮して初めて第一歩をなすことができるのである。それは常に階級闘争の現実から出発し、組み立てられなければならない。現下の階級闘争は、また党活動は、まだどれらの諸点で手工業的であるか、経済主義的であるか、どのような自然発生性が高揚しており、手工業性はそれらにどのように屈服しているか、昨日はそれらは何のようにであり、今日は何のように変化しており、明日は何のように変化してゆくのか、それらの手工業性を克服するためには何が必要なのか、それらの全てが常に分析の対象にされなくてはならない。そしてまた同時に、それらの個々の局面と同時に、一時代的な限界・成熟度合の正確な評価に常に結合されなければならない。

レーニンが「もつとも秘密な機能を、革命家の組織に集中する事によって、広範な公衆をめぐらした、従ってできるだけきまきまの活動をもち、できるだけ秘密でない多くの組織——の活動の広さと内容の潤沢さは弱められず、かえって豊富になるであろう。」(一九一頁)と述べているように、「中央集権」は、党中枢と党末端、あるいは先進的闘士との間の「関係」に関する思想のことであって、単なる「統帥権」を巡る思想ではない。「討論の徹底

平等と命令への絶対服従」などという北原氏の子供じみた、浅薄な思想とは、「中央集権思想」は全くもって「無縁」である。そのような思想ならば小学校の教師が、「民主主義の権利と義務」について日々教えている事に過ぎないし、それらは単に、「組織運営の規律」について論じているにすぎない。(それならば我々はむしろ「民主集中制」という「運営法則」について語る方がいくらかでも有益である)

中央集権の思想は、何よりも第一に自然発生性に対する目的意識性(科学的社会主義)の關係から出発するのである。(注二) 以上のように、何よりも「全国政治新聞」のその「組織的性格」について最も認識が不足してきたのは、わが指導部の一部に他ならないこと、それを常に単なる「宣伝」の観点からしか見ようとせず、その意味では「雑誌」と同じようにしか扱わず、その組織の側面を不断に軽視してきたのである。それは党に確固とした規律のある日常活動を植えつけることに對しても、先進的プロレタリア大衆との間に規則正しい意識的な關係を生み出してゆくことに對しても、プロレタリア階級内部の一切の政治的傾向を集中させることに對しても、また何よりも全党の意識と任務を均質化し、一糸乱れぬ全国単一の組織活動を形成してゆくことに對しても、それは軽視しがちであった。

だから「全国政治新聞」の発行の遅延や不定期化は、不断に中央指導の弱体化、思想的、政治的、組織的指導の弱体化をもたらすし、地方組織を不断に、その地方的特性の中に埋没させることを強制してきたこと、等についても思いが至らなかつたのである。

指導部の一日の怠慢を埋め合わせるために、全党は十日分のエネルギーを費消しなければならぬのである。「中央指導の強化」——まさにこれこそ我々が果たさなければならぬ義務であり、それは一般的に「中央」の強化ではなくて「指導の強化」なのである。そしてこの「指導の強化」は手工業的ではなく、「中央集権的」になされねばならないこと、即ち、「その結果広範な大衆の積極的参加が十倍も増えるようなやり方で」なされねばならないことが重要である。

「中央集権」と「階級闘争の発展・大衆のより積極的な参加」は、統合されなくてはならない矛盾の二側面ではなくて、まさに「同義」であるということ、兩者の間には全く何の矛盾もないこと、そればかりか、まさしく「同義」であること、この認識が重要である。

「中央集権」と「地方の利害」は、統合されなくてはならないものではなくて、まさしく「同義」であるということ——このような弁証法的な認識がレーニン主義であり、機械的唯物論者の北原氏の全く理解しえない点である。

まさに「全国政治新聞」は集合的組織者になることができるか」という問いに、「出来る」と答えるだけでは不十分である。「どのようにしたら?」「どのような新聞だけが?」ということに答えてこそ実践的たりえるのである。

(注一)

むしろ我々は、だからといって、各地区、各県委の「機関紙」が不要であり、それらの出版の試みが即地域主義であり、

地方主義であるなどということ論じているのではないこと、が理解されなければならない。

我々はただ次のことを主張しているのである。第一に、「中央機関紙」のサポーターは、それらの「機関紙」に加重的な負担を与えること、即ち「全面的政治暴露」や「党建設」などの余分の任務を与えるということ、これらのために、それらの「機関紙発行」に費される労力が、不当に莫大になつてしまふことにおける「中央機関紙」の責任について論じているのである。従って「中央機関紙」が、その発行回数において、またそのとり扱っている諸問題の多様性においても、充実すればするほど逆に、「地区機関紙」はより「地域的」な機関紙として充実されるであろうこと、「地区機関紙」の紙面から一般的な世界情勢や理論的諸問題の占める割合が減少し、純然たる「地域情勢や諸問題」が、より一層鮮明に(もちろん全体性との関連の中で)展開され、密着したものに発展されるであろうことについて論じているのである。

(注二)

更に「指導の中央集権化」に関しては、同時に「党に対する責任の地方分散化」のテーゼが、照応させられなければならない。これは十月中央委員会論争で否定され、にも拘らず、「プロ通」では論じられていたまさにそのことである。我々は「党に対する責任の地方分散化」を抜きに「中央集権的指導」を行うことは不可能である。それは一方で官僚主義を、一方で指導不信を、そして総じて分散の進行をもたらすだけ

である。我々は対象の正確な把握もなしに、斧を振りおろせるわけがない。

レーニンが次のように述べている。

「……自分のグループの声明を地方委員会や中央委員会、あるいは中央機関紙に伝達しなかつた地方委員は、党員の義務に真向から違反したことに對し、責任を負うことにならう」

「この責任の地方分散化は、革命的な中央集権化の必須条件であり、その欠く事の出来ない補正手段である」(以上「われわれの組織上の任務について一同志へあてる手紙」)まさに「討論の徹底平等と、命令への絶対服従」なる子供だましの無邪気な論議に「中央集権の思想」をすりかえることは致命的である。

まさに、一切の「党」の各級組織に對しては、上級機関のとりわけ中央への「報告義務」が極めて厳格に荷されねばならない。この点については更により一層詳しく、別の場で論じなければならぬであろう。

第五節 従来の機関紙活動をめぐる 理論的提起の総括

さて、以上の基本的基礎の上になつて、機関紙三部作ともいへば、①編集局通達NO. 1(七二年春)、②編集委員会アピー

だが、何よりも第一に、そのような「組織思想」とはちがつた「思想」によつて組織指導がなされてきたことによつて、第二に、そのような組織的獲得目標は、全中央委員的、及び全党的意志統一に基づいてはじめて可能であり、その意味では編集局の(当時の)力量にはあまつたこと、第三に、「中間総括と方向」において、「……この時期、他の諸機関においても、中央労対―労対通達―地区労対、弾対―弾対通達―地区弾対、等の活動が特徴的であるが、これはそのまま進めば、指導の多極化、統一なき分業指導へと進む危険を胎んでいた」と述べられているような状況の中で、自分の手によつてなし崩し的に「通信員」を解消してゆく政治判断を行ったこと等々によつて、不十分な結果に終らざるを得なかつた。

「手工業性の克服―中央集権党の強化」に關しては当時の通達は次のように述べている。

「3、階級闘争の自然成長的發展を克服し、全領域・全戦線での非合法党としての共産主義的政治指導力を發揮しよう。

……そのためには、党員の教育を目標とした党学校・軍学校を開設し、党員活動を發展させることが現在の党建設の礎をなしている。」(「通達NO. 2」、七二年四月三〇日)

「学校の組織化は地区細胞(LC)の強化であると同時に、手工業的政治活動の克服であり、自然、経験主義的な、各個別党員の不均等な能力と質を均質化するための闘いとして貫徹されるものである。」(通達「党建設の第二段の確立を深化前進へ向けて」七二年七月)

ル(七三年一月)、③機関紙活動の中間総括と方向(七三年九月)――(但しこの文書は機関紙局の内的確認にのみ使用され、公表されてはいない執筆途上の未完のものである)の三つの文書、及び、④中央委員会議案(七四年七月)「党機関紙誌配布網確立へ向けての提案」が再検討されなければならないし、またそれらの意義が復権されなければならない。更にまた、⑤「編集委員会に對する要求書―機関紙局」(七二年十二月)、及び、⑥「烽火」二八二号発行を媒介とする組織総括(七二年二月)を併せ読めば、どのような手工業的指導の中に我々が沈潜して来たのかということが一層良く理解できるであろう。

だが大事なことは、それが具体的に提起され様と、抽象的に提起されようと、その本質を理解することである。上記の四つの文書に關しては、そえぞえの評価を下した上で、以下再録する。

(一) 編集局通達No. 1「烽火」を組織(建設)活動の基礎にすえよう」について

「編集局通達NO. 1」は、何よりも全国委員会の党活動の中での「機関紙」の組織的位置と性格を理論的に基礎づけることを試みたこと、そしてその上になつて、全国的に「通信員」を指定し、「烽火」を媒介にして全国通信体制を建設する組織的処置を行ったこと、更には「通信員体制」を通して、各地における「定期購読者網」建設の指導を行おうとしたことに、その政治的意図がおかれている。

まさに、これらの思想にあつては、「党活動の均質的發展」や「自然成長的發展」、手工業性を克服するためには党の存在型態そのもの、手工業的で自然成長的な「党組織」そのものの転換、中央集権的な転換をかつとすることに、そしてまたその闘いによつて克服するのではなしに、極めて非日常的な「学校」で克服しようとするのである。

「日常的な手工業的活動」や、またそれらが生みだす「党組織間」の、また「黨員間」の不均等、すなわち分岐や対立に對し、日常的党活動の中に解決の場を求め、またそのような発生源そのものを根絶してゆくべく、不断の組織転換を闘うことによつてではなしに、時々の「学校」によつて「調節」し「矯正」しようというのである。なんとという「手工業主義」であろうか。まさに絵に画いたような。

「XX学校」から「帰宅」した諸同志が、「やっと解放された」ような顔をして、住みごころのよい、慣れた日常性の中により一層回帰・埋没していったことが、そのことの唯一の帰結に他ならなかつたことについて、誰が反駁しえるであろう。

また、それらに先立って提起された「第二段階論」は、まさに「全国政治新聞」について、先述したように極めて許すべからざる屈服的総括をなしたのである。

即ち、「レーニンの時代も武装闘争が軸だったのだよ」と。だがまさしく「編集局通達NO. 1」がこのような「思想的傾向」を批判し、大事なことは武装組織を保持しているとか、軍事組織を有しているとかの問題によつて、党の軍事・武装を語ることで

はなくて、「党組織の『構造』そのものが武装化し軍事組織化されていることであり、中央集権化されていることであり、秘密の機能が集中されていることを意味しているのである」と批判し、また党の基本的な日常活動をどのように定めるかが、党の死命を制することについて、それは12・18路線のようなレーニンを歪曲した「軍事行動」として定めるのではなく、「レーニンも主張している如く、『最つとも強力な爆発の時期にも、もつとも完全な沈黙の時期にも同様に行うことが出来るし、また行う必要のある活動でなければならぬ。即ち全ロシアにわたって統合され、生活の一切の側面を解明するもつとも広範な大衆を対象にした。政治的煽動の活動がそれである』として定めなければいけない。」として主張したことは、全く今日においても、全面的に正しいものである。また「政治新聞」の位置を「日本の階級闘争の現段階」との関係で不当に低めた12・18路線を批判し、「とりわけわが国の如くに社会体制そのものが、ブルジョアジーによって集権化され、『情報網』『宣伝網』『交通』が高度に発達しており、人口が密集している場合、とりわけ『全国政治新聞』の位置は重要であり、レーニンのように『極めて頻繁』ではなく『日刊』新聞として発行されるまでにその位置は強化されねばならない」として、逆にその「位置」がより重要になってきていることを主張したことは、その論証はもつと多角的になされねばならぬことを留保するならば、まさに正しい主張である。

ただ、この「通達11」の限界は、「平和共存」でありすぎること、つまり12・18路線の批判だけでなく、現実の批判(第二

具体的責任が不明確なこと)についての疑問が提出されており、また「中間総括と方向」においては、「編集委員会と機関紙局との関係は、前者がころば後者もころぶという関係であったが、編集委員会は最初からころびつばなしであった」と述べている。だが本当にこのアピールの方針にそって政治局||編集委員会が全党指導を行っていたならば、極めて多大な成果を収めていたであろうということとは想像に難くない。

このアピールにおいては、「党組織の分散性・地方性」を克服するべき基本的組織方針については「従来の党組織の分散性・地方性を克服し、中央集権党をかちとり、全国の同盟組織を、均質の有機的組織に強化して行くために、その第一歩として一切の情報を中央へ集中させ、かつ全成果を全国に拡大させる。普遍化させることを断固として追求せよ。このための具体的方針は書記局より通達する。」として主張していることが特徴であり、従来の「学校」が「中央集権党建設の礎」論なる珍理論からすれば、原則的立場の復権をもたらすものである。

この基本的立場にそって、更に「中央機関紙によつて統合されない経済闘争は、階級闘争になることは出来ない」ことを基本的認識とする様に主張した上で、「このような活動に対する怠慢・放棄・消極的態度等は全て経済主義への転落であり、プロレタリアートに対する背信行為であり、マルクス・レーニン主義に対する実践的敵対である」と結論づけたうえで、組織的方针として「以上の任務を遂行するために、中央書記局・地方・地区・各戦線の結合を目的意識的に強化してゆかねばならない。この間強化し

段階論、通達12)を回避したことである。その結果、原則一般の主張に終っており、(理論的側面で)日和見主義の温存を許したと、それが主要な限界である。即ち「烽火を組織(建設)活動の基礎にすえよう」(題名)とする限りにおいて、現実のそのような思想・指導を批判することなしに、基礎にすえられないからである。だからこれらの原則的問題について、七四年七月における「中央委員会議案」によつてはじめて「中央委員会」で論争される条件が生み出されるまで、「中央委員会」が日和見を決め込むことを許してきたのである。

(二) 編集委員会アピール(七三年一月)について

「中央集権、全国党建設へむけ『機関紙活動』の強化をかちとれ」というこの編集委員会アピールは、文書冒頭で述べられているような中央機関の再編の中で、政治局||編集委員会体制の発足の第一歩として提案されたものである。だが何よりも、「党機関紙活動の総括案」に示されている如く、この文書は直接政治局の手によつてなされたものではなく、機関紙局によつて準備されたものであったという点に象徴されている如く、決して政治局自体の革命的転換を意味しているものでもなく、またその能動性を意味しているものではないということこそをその後の「編集委員会活動」が証明していることに、何よりもこのアピールの限界があるといえる。

これらの点に関しては「要求書」においても、「編集委員会のつつある『定期通信』を断固発展させ、強固な全国通信体制を構築しよう。当面半月毎の定期通信を打ち固め、以上の任務を遂行する条件にしなければならない」としている。これらの基本的方針が指し示す諸原則の正しき——これらは決して看過してはならないものとしてある。これらは機関紙が中央集権化の武器であることを、実践に適用しようとした試みである。だが、何がこれらの方針の限界があつたのか、それはただ次のことである。それらの方針を「革命党の基本的組織原則」にまで高めえなかつたこと、まさにそれらからの逸脱が「マルクス・レーニン主義に対する、中央集権党に対する敵対」であることこの認識を「革命党の基本認識」にまで高めえなかつたことである。この文書においても、その理論的基礎づけとしてレーニンを引用している箇所にも示されているように、

「革命勢力の組織化と、それらの勢力の訓練と、革命的活動の技術の発展とは、これら全ての問題を中央機関紙で討議し、仕事の運営の一定の形態規律を集団的につくり上げ、全党に対する各党員の責任制を——中央機関紙を媒介として——確立することなしには不可能である。」

と一八九九年にレーニンは、「我々の当面の任務」で述べている。そして基本的には、「全党に対する各党員の責任制の確立」を中央集権党建設の必須条件であることを、「党に対する責任の地方分散化」という定式にまとめあげ、「この責任の地方分散化は革命的な中央集権化の必須条件であり、その欠くことの出来ない補正手段である。」として定式化しているのである。そして基本的

「第二回大会」において党組織を巡る基本原則「指導の中央集権化と全党に対する責任の地方分散化」として、確立したのであることが想いおこされねばならない。だから我々にとって重要なことは、これらの諸方針を「党に対する責任の分散化」として、党の組織理論の基本的原則に高め上げることである。

実際、これなくして一切の「中央集権化の叫び」は空語である。レーニンはこの原則を単に中央集権化の原則といわずに、「革命的な中央集権化」の必須条件であるといっている。その意味からすれば「討論の徹底平等と命令への絶対服従」なる原則も「中央集権化の一つの試みではあろう。だが、それはブルジョワ的な子供だましを試みであって決して「革命的な中央集権化」をもたらすものではない。

(三) 「機関紙活動の中間総括と方向」(七三年九月)について

この文書は未完成であり、機関紙局内部で討議されたにとどまっている。だが基本的にはこの文書は、全国委員会結成以降の書記局における組織的発展を、各書記長交代の体制にそくしながら主に「機関紙」を巡りながら分析しており、我々がどのような試行錯誤を繰り返しながら今日まで来たのかということ、我々が常にどの様な手工業性に拜跪して来たのかということについて一定明らかになるであろう。

この文書は最終的には、「七三年五月体制」における「単一の

指導部・統一的な全国指導」という方針を支持し、にも拘らず、それをどのようにして実現するのか、という点について批判を述べようとしているのである。即ち、「五月体制」においては、そのための方針として「書記局員の意義の転換、三人指導部の団結、常任体制の建設」を主張しているのであるが、基本的にはこれは書記局の内部改革であって、問題なのは、この書記局が具体的に各地方・地区との間に、どのような「指導関係」を形成するのか、従来の何を批判し、何でおきかえるのかということではないのである。

だから、この文書における問題意識は、「全国指導の分散化・非統一性・消極性は様々な形をもって、中央機関紙及び通達の中にあらわれていた」のであり、基本的な問題は「統一的な全国指導のためには、機関紙、及び通達は、どのような内実を持たねばならないのか、そして更に、ではその内実は、どのような形式によって、つくり上げることが可能なのか」ということであること「機関紙の問題に即して言えば」という但し書きの下に主張している。

「中央書記局の部局連合的な密集の質を根底的に有機的な密集性に転化するためには、中央機関紙・通達・財政の三つのメントに対する諸部局の関係を根底的に強化し、質的転換を打ちとることが極めて大きなポイントを占めるであろう。」

ということを結論としつつ、これらの課題は、現在の機関紙局の位置と任務からすれば、自らを超えた課題であり、「中央総体が、主体的問題として取り組む事」が重要であるとしている。

(四) 十月中央委議案「党機関紙誌配布網確立へむけての提案」について

この議案の基本的性格は、北原氏の政治的陰謀を込めて、組織の指導権を中央書記局の手中より奪取し、書記局を単なる運動の指導部におとし込め、自らの権力を党中央に侵入させることを図って提案されたものに他ならない。それ故、機関紙局の従来の諸々の提案、とりわけ「機関紙局通達」の内容を、支持し、今日的に再把握する方針を主張することをもって懐柔しながら、実際上の方針としては、自己の直接指導下に「特別の配布機関」を建設することを述べているのである。

むしろ我々は、それがどのような政治的陰謀の下になされたにしろ、従来中央委員会―政治局によって一貫して黙殺されて来た「編集局通達」(七二年春)をはじめ取りあげ、「編」の呼びかけに実践的に応えよう」と中央委員会に呼びかけんとしたことは、一つの意義を持つものであることを認めねばならない。

それは「通達」の意図に沿って党の日常活動の基礎をすえよう」と主張し、レーニンを引用している限りではそれは極めて正しいし、この様な論争は同盟の現状にとっては極めて重要である。それは「中央集権」をめぐる論議において、従来の「意識の転換論―指導責任論」やら、「学校論」やらのおよそ唯物論的見地からは程遠い観念論や、「統師権」とやらの、半ばブルジョアジーに、半ばスターリン主義に解体された非弁証法的・非プロレタリ

ア的「実態論」とやらの低水準を突破した革命的論争をもたらすであろう。

だがにも拘らず、この議案は、その裏に込められた政治的意図を反映して、致命的誤りに陥っているのであり、実際上解党主義的であり同盟内にますます非和解の分岐をもたらさざるを得ない。

簡略に述べるならば、第一に綱領問題の静止的取り扱いであり、その結果、党派闘争の観点、まさしく全国政治新聞は党派闘争の渦中で躍動しその生命をえるのだということを見捨て、思想的統合、スターリン主義打倒、反スタ・マルクス主義止揚の武器であることが忘れられてしまっていることである。議案においては、レーニンが「党を堅固に再興するための活動計画」として「第一に堅固な思想的結合を、党綱領により打ち固めること」として提起したことが述べられており、この点においては、わが同盟にあつては、「資本主義批判を基礎に、プロレタリア独裁の性格、プロレタリア国際主義の具体的内容として深化し、結果軸を路線的にもうち固めつつある」としている。いわば、このように静止的に語ることによって、この「配布網計画」の中から、「思想的統合・論争」や、「綱領問題」を実際には排除しようとしているのである。

何よりもレーニンに従えば、この「配布網」の計画は、革命勢力の思想的統合と密接不可分に結合して論じられなければならない。だが、全国政治新聞を媒介にして持ち込むことだけが、実際に思想的統合をなしとげるであろうということを重視しているのでは

って、「綱領を巡る闘争」を単に、理論一般として語っているわけではないのである。そうではなくむしろ、組織問題、組織建設を切っても切れないように深く結合させるように提起しているのである。レーニンは述べている。「我々が、我々の機関紙を多様な見解の単なる集合場にするつもりはないことはいうまでもない。反対に我々は厳格に特定の傾向の精神において、機関紙を運営するであろう。」（「イスクラ編集局の声明」全集四巻、三八八頁）

まさしく、「思想的統合」を中軸としない「配布網建設」の計画は、単なる「連絡会議」におわってしまおうであろう。我々に必要なのは、まさに「頭のとっぺんから、足の爪先」まで統合された革命的組織なのであって「つま先」だけの統合ではないのである。

まさに上記の機関紙三部作においても、この点に対する日和見主義が基本的誤りなのである。まさしく「全国政治新聞」をそのように位置づけられない思想は決してマルクス・レーニン主義ではありえないこと、従って「綱領問題」「思想の問題」においても、必ず誤りにおち入っていることが認識されなければならなかった。にも拘らず、「機関紙問題」における思想的誤りに限定して論じていたところに、その致命的弱点があったのである。それは日和見主義を温存させただけである。この点はこの議案においても、まさしく然りなのである。また然りであるという以上に、より一層、そのことを体系化せんとした試みの一環をなしていることによつて、それは多少とも基本的誤りに転化している。それは、八月における政治局の「中央書記局総括案」の提起において如実に

示されたように、この「特別の組織建設」（それは多分に、技術的様相を伴った）と同時に、従来の「機関紙局」の解体、中央書記局内の「全国政治闘争指導部」なる「運動指導部」の中に、「政治新聞の編集・発行業務の機能を移動する」ことが提案されていることをみれば、一層よくその誤りが理解できるであろう。

一方で、「機関紙」を「運動主義的傾向で埋め尽くすこと」を論じ、他方で技術的に「配布網」の建設を論じ、他方で、「綱領問題は深化されつつある」（一体どこで？どのような形式をとつて？）と論じているのである。これらは、決してマルクス・レーニン主義ではない。これらは、諸分野の技術的統合を語っているだけであり、それらは逆に、それらの諸分野の一面的性格を増々純化し、いつかは技術統合が不可能に至る地点までゆきつくであろう。そこにもたらされる結論はいわずもがなであろう。大事なものは、技術的・形態的統合ではなくて、「融合」「総合」「揚棄」であることだ。

第二の限界は、「編集委員会アピール」の総括が踏えられていない点であり、従って「編集委員会」政治局」体制の総括、編集委員会——機関紙局体制の総括がないことであり、従って継承関係がないという点である。

議案は、この組織は「その最高責任は政治局が担い」としている。だが、かつての編集委員会は政治局が（全員が）担ったのである。

そして「最初から、ころびつばなしであった」のだ。だから、何よりもどのような「思想によつて」、担うのかということがな

い限り、それらは空語でしかないのである。

第三の限界は、これらの任務は他ならぬ中央委員会の最も基本的な任務であるという点にまで押しあげていないことである。従つて、それは「党に対する責任の分散化」という組織原則の確立として論じられていないことである。このような「組織原則」として語られない限り、それは必ず失敗するのである。なぜなら、それは党の一部がどのように動き回っても、一部であるかぎり決して出来ない仕事なのである。この点は、「アピール」に関する総括として述べていることである。また、「配布網」という表現は多分に曖昧であつて、「アピール」における「通信体制」という表現の方が相対的に正しいであろう。

それは、「全党に対する党員の責任・義務」をも含めて表現されるからである。「配布義務」と「報告義務」、更に「論争、討論」等々を内部に含む、総合的表現としては「通信体制」の方が合っているのではないだろうか。

「上級機関、とりわけ中央委員会」に対する「定期的通信、報告の義務」を果たすことは、全ゆる各級機関の機関長にとつて、その最大の義務、機関長でありうるための何よりも必須の義務であり、これに対する怠慢は、直ちに処分の対象となるであろう。我々はこのことを抜きに、決して指導の中央集権化を図ることができない。（次節での資料としての収録は略）

資料一

新編集局アピール

—— 全同盟、全同志の諸君へ ——

(一九七二年二月)

最も困難な任務の最先端で闘い抜いている全同志諸君！同盟機関紙「烽火」新編集局より、その革命的な再建・強化にむけた力強い第一歩を踏み出す主体的な決意を込めて、全同志諸君に、共に革命の大道を進撃せんが為のアピールを贈りたい。

一、憶する事なく全課題を最先頭で闘い抜よう

全同志諸君！本格的革命闘争の激動を切り開く任務の一切はいうまでもなく我が同盟の双肩にかかっている。国際主義の鮮血の旗を高くかかげ、全世界の革命勢力との連帯を果敢に追求し、最先頭で闘ってきたのは我が同盟の結党以来の誇りである。そして日本の戦闘的労働者人民の解放を求める闘いのあるところ、必ず我が同盟の自己犠牲的・英雄的な雄姿があった。

そしてそうであったが故に、日本の戦後階級闘争の未踏の領域へ飛躍することを要求された時、その事に気づき、その課題に答えようとしたのは当然にも我が同盟のみであった。

そして一切の他党派が、全共闘運動の高揚や、六八年一〇・二一、六九年四・二八闘争の騒乱に酔い痴れている時に、一見孤独なだがはかりしれない重要性をもってその苦闘を開始された。

そしてその苦闘の中で、同盟の内的な脆弱性の故に、右翼日和見主義者は前進を恐れて現状を美化することにより後退し、又左翼日和見主義者は、階級闘争の全課題―全重圧に耐えきり、応えざることを放棄し、戦術を戦略に置きかえることにより、主観主義的に後退していった。「体系的非合法党Ⅱ勝利する党」の建設の課題は依然として我々の前にある。そして我々の前にのみある。

全同志諸君。革命党の建設をめざして、憶することなく全課題を担い抜き応えきろう。一つの小さな局面的な日和見主義は、無数の巨大で全面的な日和見主義の種子であることを確認しなければならぬ。

二、右手に銃を、左手に『烽火』を！

この日本階級闘争の勝敗を決する課題に敢然と立ちむかっている全同志諸君。諸君と共にこの革命党を獲得してゆく大長征の初步的現段階において、12・18路線が持っていた「全国政治新聞」に対する軽視を克服する為に、「全国政治新聞」こそは、この課題を遂行してゆく上で、絶対に欠くことの出来ない重要な武器で

あり、「全国政治新聞」に対するどのような軽視も全て、党活動―革命闘争に対する軽視であり、解党主義―無政府主義―経済主義の温床に他ならないことをはっきりと確認しよう。

「政治新聞」による全面的宣伝・煽動・組織化と、それを裏切ることなき組織的実践―これこそ同盟内部の、そして同盟と労働者人民の間に架けられた「信頼の絆」である。そしてこの信頼の絆こそが、同盟の生命であることを確認し、12・18路線の不充分性と、そして全国委結成以降のその残滓を、我々ははっきりと自己批判しておかねばならない。一切の「言いわけ」はこの偏向の継承を意味する。新編集局は、この様な傾向のどのような残滓とも断固として妥協する事を拒否し、闘い抜き克服してゆく決意である。「機関紙」が全人民の中へ深く広く浸透すればするほど、蜂起へと近づきつつあるのだということ深く確信し、「烽火」と「銃」による体系的・重装的武装へと進撃しよう。

(注)「銃」とは、同盟の戦闘力・同盟の組織力・同盟の武装の抽象である。

三、非公然出版体制なくして非公然組織はない

新編集局は、全面的には二月より責任をもってその任務を遂行する決意である。確かに最初は、組織的にも、内容的にも、財政的にも、つまり全面的に「不充分」から出発するしかないが、だが全同志諸君。諸君と我々の精神的努力によって骨を追うごとにそれは飛躍的に充実され、強化されていくであろう。そしてこの

事は、同盟の充実・強化の証左に他ならないであろう。

更に我々は、「非公然編集・印刷・配布体制なくしては非合法組織は維持できない」ことを深く確信し、非合法下における「烽火」発行を獲得射程として準備してゆく決意である。全同志諸君我が「烽火」を、労働者階級の最も信頼する、誇りある、そして蜂起を組織する「全国政治新聞」として成長発展させる為に、共に全組織の精力をかけて努力し、前進しよう。(文責 編集局 本田)

一九七二年一月二十七日

(注) この声明は、全国委において編集局が確立されて最初の声明である。表面上、同盟は12・18路線における組織論を、このように理論的に転換する中で、第二段階論を提起したように映じながらも、実際はそうではなかった。中央集権主義について、組織理論についてまともな考えを深めたことのない我が全国委の最高指導者達は、遂に、全国政治新聞をその組織活動にどのような位置づけるべきかについて回答を提出しなかった。彼らは、およそ組織指導を、発生する組織問題の処理以上に考えたことはなく、政治方針の提起以上に考えた事はなかった。八木沢や永井のザルで水をつくうが如き組織指導のあり様は又、遂に只の一度も、まともな思想的指導をも提起しえたことはなかった。彼らにとつては唯一、責任の追求としてのみ、思想問題の提起はありえたのみであった。

編集局通達 № 1 (抄)

— 全国政治新聞を組織 (建設) —

活動の基礎にすえよう

(一九七二年春)

(一) 12・18路線の誤りとレーニン主義

12・18路線以降の実践に孕まれた大きな誤りの一つに「軍事を政治に代行させる」傾向が指摘されなければならない。それは「権力との関係で非合法におかれている党活動はレーニン時代のよきな『文書配布』ではなく、軍事活動である事、従って非合法党の内実は実践的に明らかである。」(『イズム』十四号)と述べられているように、これは明らかに左派理論の流入であり(『左派』二号 ソビエト運動主義批判一〇〇頁) (注) マルクス・レーニン主義における「政治暴露」と「全国政治新聞」の位置を全く不当に低めるものであった。「何を為すべきか」のこのような無理解と歪曲は「レーニン読みのレーニン知らず」以外ではない。共産主義運動・革命運動は、もつと雄大であり、根底的であり、全面的であり、縦横無尽である。

レーニンも述べている如く「労働者大衆はロシアの生活の醜悪事によって、大いに興奮しているのだが、こういう言い方が出来るとすれば、人民の興奮の水滴と、細流をことごとく寄せ集め、集中する能力が我

証できるような革命家の組織」が必要なのであり、そして又、その任務を「ブルジョア政府の妨害・敵対」と闘いつつ遂行するためにこそ、「党の武装」が、即ち、党の軍事組織化(非公然化や、秘密の機能の集中等)が必要なのである。

我々は、党組織の活動の基本的内容を、レーニン主義も主張している如く「もつとも強力な爆発の時期にも、もつとも完全な沈滞の時期にも」同様に行う事が出来るし、又その必要のある活動でなければならぬ。すなわち「全ロシアにわたって統合され、生活の一切の側面を解明するもつとも広範な大衆を対象とした政治的煽動の活動がそれである」ような活動として定めなければならない。すなわち「爆発や市街戦」だけを予定したり、あるいは「平凡な日常闘争の漸時的な歩み」だけを予定して党組織を建設する事は、このうえない誤りであり、そのような誤りは「社会民主主義的な戦闘組織になくはならない柔軟性」を根底から解体し「破壊」に導くからである。

従って、ブルジョア政府と闘いながら、党の基本的任務を遂行する為に、党組織が是非とも獲得しなければならない様々の資質や諸能力が、「党の武装」の大きな内容であり、軍事力学主義的に「軍事組織」を保持しているとか、又、「武器の調達・使用能力」があるとかの単なる技術的諸側面のみを意味しているのではない。それは「党組織」の構造全体が武装化(軍事組織化)されていることなのであり、中央集権化されていることであり、秘密の機能が集中されている事を意味しているのである。「全国政治新聞」は、単なる煽動の環であるだけではない。レーニンによれば

々にならないのである。そうした水滴と細流は、我々が、想像したり、考えたりしているよりも、はかり知れない程、大量にロシアの生活からしたり落ちていくが、しかしそれらはまさに単一の巨大な流れに結合されなければならないのである。…ところが、テロルへの呼びかけも、ロシアの革命家のもつとも緊急の義務——全面的な政治的煽動の遂行を組織する事——を回避する別々の形式である。…前者は人為的な興奮剤を探しに飛び出し、後者は具体的な要求を論じた。両方とも政治的煽動を行い、政治的暴露を組織する自身の積極性を組織することには充分注意を払っていない。だがこの仕事は今日でも、又他のどのような時でも、他の何物かで代用させうるものではないのである。」「社会民主主義の理想は、労働組合の書記ではなくて、どこで行なわれたものであろうと、又どういう層、または階級に拘わるものであろうと、ありとあらゆる専横と圧制の現れに反応することが出来、これらすべての現われを、警察の暴行と資本主義的搾取とについての一つの絵図にまとめあげることが出来、一つ一つの些事を利用して、自分の社会主義的信念と、自分の民主主義的要求を万人の前で叙述し、プロレタリアートの解放闘争の世界史的意義を万人に説明する事の出来る人民の護民官でなければならないという事はどんなに力説しても力説したりない。」という事を我々が本当にはっきりと理解するならば、「人民のすべての階級の中に入ってゆく」という事は、理論家としても、宣伝家としても、煽動家としても、組織者としてもしなければならないことなのである。そして、この基本的任務を遂行する為にこそ、「政治闘争に精力と確固さと継承性を保

それは、まさに「武装蜂起を組織する」為の「環」なのである。そしてこれらの事は、党が「大衆に代わって考える」ことの為ではなく、全く逆に、更に大衆がもつと積極的に広範に参加することを可能にする為なのである。

(二) レーニン主義を復権せよ

さてレーニンは、この党の基本的任務(政治的暴露・煽動)の活動は「今日のロシアではきわめて頻繁に発行される『全国的新聞』なしには考えられない。」として「全国政治新聞」を組織活動・組織建設の中軸にすえた。

ところで、それでは我が国においては「政治的暴露・煽動」の任務は何によってもつともよく担われるか。それは決してア・プーリオルな「軍事行動」ではない。それはやはりいうまでもなく「中央集権化された職革党」によってであり、そしてその「中央集権」を強力に支えうる「全国政治新聞」の圧倒的な展開である。とりわけ我が国の如くに社会体制そのものが、ブルジョアジーによって高度に集権化され、肥大化した官僚機構によって隅々まで国家支配が貫徹しており、更に「情報・交通」が極めて高度に発達し、人口が密集化している時、「全国新聞」の位置は、何にもまして重要であり、「極めて頻繁」にはなく「日刊」新聞として発行される程度にまで、その位置は、強化されなければならない程である。たとえばプロレタリア人民の闘い——今日の三里塚や沖繩における闘争においても——それらの闘いはブルジョア政

府によって徹底して歪曲され、九・一六闘争における警官殺人
宣伝等、大規模に宣伝されるのであり、これに対して我々が、
この成果を確保しようと思えば、やはり徹底した革命陣営側の宣
伝を行使することが必須条件である。「武器の行使」や、「戦闘」
それ自身が「宣伝」であるというのは聞き直りであり、現実の手
工業性に拝聴していることだ。「戦闘」が生み落す、外部への自
然発生の宣伝は、ブルジョアジーの組織された大規模で、迅速な
反革命宣伝の前に解体されてしまふだろう。現在においては、「
圧倒的宣伝・煽動力」に裏打ちされていない、又、裏打ちしよ
うとしない闘争は、ほとんど無力化しつつかある事になぜ、多くの
人々は真剣な配慮を払おうとしないのであろうか。「爆弾闘争」の
宣伝は、ほとんどが、商業新聞によって全国的に「宣伝」されて
来たが、報道管制によって一切の報道を禁止する事も、又徹底し
て歪曲し、デッチあげる事等の全ゆる自由は、ブルジョアジーに
委ねられているのである。「一発の爆弾」から、ブルジョアジー
は、百発のナパーム弾を製造する事であろう。「戦闘」のたれ流
しは必ず、ブルジョアジーにつけ込むスキを与えるのだ。(ツパ
マロスは、テロ活動のあと、必ずその政治的意味を大衆に宣伝、
暴露する)

更に重要な今一つの事、従って12・18路線下で主張されたよ
うな「軍事活動」そのものに「宣伝・煽動・組織化」を担わせる
事はもちろん大きな誤りであるが、しかしながら又、「宣伝・煽
動・組織化」に役立たないような「全国新聞」であるならば、こ
れも又、あつて無きが如しである。「全国政治新聞」の持つ、今

一つの大きな重要性は「組織」を生み出す事にある。従つてそれ
は単に、宣伝の武器のみではない。「統合」が重要であり、集め組
織する必要があるという事については、今では全く誰れもが語つ
ている。しかし何から始めるべきか、又この統合の事業をどう進
めるべきかについては大多数の場合何もはつきりした考えがない。
『統合』に必要な事は規則的な共同行動にもとづいて実際上の結
びつきをつくり出すことである。このような実際上の結合をつく
り出す事は共通の新聞にもとづいて、はじめて開始することが
出来る。共通の新聞は、多種多様な活動の成果を総括し、…全
ての革命に通じている数多くの道に沿つて、人々を倦む事なく駆
りたておしすすめる唯一つ規則的な全国的事業だからである。と、
レーニンもいみじくも述べているように「共通の新聞」は、革命
の前進、組織の発展の「導きの糸」であり、具体的な「環」なの
である。「集め、組織」しなければならぬとは誰れも言える。
しかし百万遍言つても「集め、組織する」ことは出来ず、只「共
通の行動」を提起し、実際上の結合をつくり出すことによつての
み、実際に「集め、組織する」ことが出来る事。これが唯物論者
の、問題を解決する方法なのである。

党の「中央集権化」を主張することは誰れでも出来る。しかし
何によつて、どうやつて実際に中央集権化させるのか？ 全党・
全地域の問題意識を均質化し、活動態度を均質化し、指令・金・
パンフ等の流れを迅速、かつ正確にする為には実際何から始める
べきなのか？ こういう問題も、単に、イデオロギー上の問題と
して「説教」で済ますのではなく、具体的な「環」を設定するこ

とによつて、解決していかなければならない。(以下略)

資料三

『烽火』編集委アピール

(文責 本田)

(一)

我が同盟に結集する全国の同志諸君に編集委のアピールを送
る。我が編集委は、十月中央委において『烽火』を軸とした宣伝
煽動体制を、過去一年間の総括を経て、更に統一・系統的かつ
強力に推し進めるために、その最高指令部として設置された。従
来の政治局は、様々の行政上・闘争上の諸問題の解決の直接的波
及によつて、著しく分散化され、統一された有機体として、党の
宣伝煽動活動が阻害されてきた。この事の結果として、大衆に対
する党の主張が、充分な煮つめを経る事ができず、時には揺れ動
いたり、焦点のないものであつたりしたことは否めない事実であ
り、党活動上でも若干の混乱をもたらしてきた。現在の情勢は、
権力との関係においても従来と比較にならない程熾烈な対抗関係
を生み出さずにはおかない条件が増々成熟しつつある時であり、
今後我々は、権力の一挙手一投足にも時を失しない敏足な対応・
闘争を要求されるであらうし、又党派闘争においても、我が同盟
の位置の重要性を認識するならば、増々熾烈な党派闘争の大海に

乗り出さねばならないし、又そうする事が我々の任務である。そしてそこに於ては、革命の大衆を、我が同盟の下に強固に組織するために、あくことなく、我々の主張と、他派との分歧を大衆的に鮮明に映し出す、この事が、増々重要な課題として浮び上つてこざるをえない。従つてこれらの総括と展望の意図の下に、組織された政治局の編集委体制は、当然の事ながら中央書記局の日常の全国指導部としての確立・強化・改組と編集局の機関紙局への組み込み、という、中央機関の再編強化とは一体のものであつた。というよりも、現実的には政治局の編集委体制を物質的に保証するものが中央書記局の指導部としての強化に他ならない。十月中央委が編集委の設置と関連して、中央書記局の確立、機関紙局の発足・強化を打ち出したのは、まさにこの為である。そして又同時に、二月中旬に於ける中央書記局長の解党的行為によつて、編集委の密集体制も、同時に瓦解せざるをえなかつたのもこの為である。(この点に於ける中央委の全党に対する自己批判的総括は別途提起する。)

もちろん編集委自体の弱さがこの崩壊に拍車をかけ、『烽火』二八〇号の発行をほぼ一カ月近く遅延させてしまつた事態を招いた事は事実であり、我が編集委はこの責任を痛苦に認識している。そしてここに改めて全党に対して、自己批判するものである。我々は二月以降、一月体制の弱点を掘り下げ、その克服の作業を開始し、現在、宣伝煽動における編集委―中央書記局体制の徹底強化に努めている。そしてその事による様々な成果は、中央書記局を経て、全党に普遍化されて行くであろう。そして、編集委は

これらの基本的指針となるであろう次の二つの方針を、全国の同盟組織と同志諸君に、強く指示するものである。

① 一切の情報を中央へ集中し、同盟活動の全成果を「烽火」に反映させよ。

従来の党組織の分散性・地方性を克服し、中央集権党をもちと、全国の同盟組織を、均質な有機的組織に組織化してゆくために、その第一歩として、一切の情報を中央へ集中させ、かつ全成果を、全国に拡大させる、普遍化させる事を断固として追求せよ。このための具体的方針は、中央書記局より通達する

② 「烽火」の半月間発行を文字通り実現せよ!

「烽火」発行以来、大きな前進を刻印してきた事は、いぬめないところである。党組織の扱う販売量は倍増したし、紙代の集中も格段の前進をみせている。にもかかわらず「烽火」の宣伝力は、今だ「前進」の六〇分の一にすぎないのである。これは何としても克服しなければならぬ余りにも大きなヘダタリである。これの克服のために、全同盟の力を結集する必要がある。当面具体的には、月二回発行・五〇〇〇部の販売・回収を獲得目標にする。

方針

一、紙代は100%中央へ集中せよ!

一、販売活動を飛躍的に強し、五〇〇〇部販売体制をつくれ!

一、定購拡大運動を全国に組織し、成果を中央へ集中せよ!

これらの詳しい展開に関しては書記局通達を参照されたい。

以上二つの方針を政治局の編集委―中央書記局―全国の体制強化の中で断固として貫徹するよう、全国の同志に強く指示するもので

ある。もちろん、我が編集委は、そのさいの最先頭に立つ決意である。これらの着実な前進が、我々の優位性を物質化し、党派闘争に勝利し、単一党建設の第一歩を印すであろう。

(二)

機関紙活動の政治的・組織的位置付け、及び意義に関しては、昨夏に提出された「編集局通達第1」を再度参照されたい。(但し普遍化されていない地方があるので次号において再度集録することにする。) ここにおいては以下のレーニンの言葉をもって基本的に確認するにとどめたい。

①「プロレタリアートの階級闘争を組織することが、われわれの任務であるという点では、われわれは皆意見が一致している。だが階級闘争とは何か? 個々の工場、個々の職種の労働者が自分の一雇主もしくは自分の雇主達と闘争を始めるなら、それは階級闘争であろうか? いやそれは階級闘争の弱い萌芽に過ぎない。全国にわたる全労働者階級の全ての先進的な代表者が単一の労働者階級であることを自覚し、個々の雇主ではなく、資本家階級全体に対し、又この階級を支持する政府に対して闘争を開始する時にはじめて労働者の闘争は階級闘争になる。…: 社会民主主義派の任務は、労働者の組織化を手段とし、労働者の間での宣伝と煽動を手段として、抑圧者に対する彼らの自然発生的な闘争を、全階級の闘争に、特定の政治的理想と社会主義的理想との為の特定の政党の闘

争に転化させることである。…:」(一八九九年「我々の当面の任務」)

②「中央機関紙によつて統合されない経済闘争はロシアの全プロレタリアートの階級闘争になることは出来ない。…: 革命勢力の組織化と、それらの勢力の訓練と、革命的活動の技術の発展とはこれら全ての問題を中央機関紙で討議し、仕事の運営の一定の形態と規律を集团的につくりあげ、全党に対する各党員の責任制を―中央機関紙を媒介として―確立することなしには不可能である。全党の機関紙を創刊し、それを正しく運営することに党の全勢力、すなわち一切の、文筆家勢力、組織者の才能、物的資材その他を集中しなければならぬといつても、我々は他の種類の活動(ポイコット・ストライキ・デモ等…)を軽視しようとは少しも考えていない。反対に我々の確信するところでは、これらの種類の活動は、党活動の基礎をなすものである。しかしこれらの活動を、全党の機関紙において統合することなしには、革命闘争のこれらの形態はすべてその意義の十分の九を失い、党の共通の経験をつくり出す事もなく、党の伝統と継承性をつくり出しもしない。党機関紙はこの様な活動と競合するものでないばかりでなく、反対にこの活動の普及と確立と体系化とに非常に大きな影響を及ぼすであろう。…:」(同上)

③「自分は『縦隊を組み横隊をつくらせて』すすんでいる。自分の活動は党にとつて直接に必要である。自分は鎖の一環であり、この鎖の輪はロシアのプロレタリアートとロシアの全人

民との最悪の敵であるロシアの専制政府の息の根を止めるであらうという自覚を革命事業の「局部的働き手」の一人——に与えることが出来るのは、党の共通な機関紙を創刊することだけである。この様な専門化を厳格に実行することだけが、力を節約する可能性を与えるであらう。……」（一八九九年「緊要な問題」）

以上のレーニンの観点をはっきりと我が物とし、レーニン研や赤軍派（上野や八木）の様な、党建設における日和見主義・流氓主義と断固闘い抜き、党を建設し、階級闘争を組織し最後の勝利へ導くのが我が同盟以外にはないことをはっきりと示してゆかねばならない。

政治局―編集委アピールを踏まえ、当面の任務方針として次の事を指示する。

「中央機関紙によって統合されない経済闘争は、階級闘争になることはできない。」ことを断固確信し、全ゆる闘いを全国化し、労働者階級全体の利益・教訓・団結へと高めあげることが、党の任務である。例えば、平和台病院闘争は「烽火」による系統的宣伝により、今や、北海道から沖縄まで、即ち全労働者の共通の闘いに為っており、その成果は、プロ階級に普遍化され次の闘争を準備する栄養素となっている。第二第三の平和台を生み出し、第二第三の阿部を生み出すことは、単なる量的拡大のみを意味するのではなく、一現場の利益と団結の質から、労働者階級の利益と団結へ、一雇主に対する闘いから、資本家階級全体に対する闘い

- 二・三・四月における販売の改善―拡大に取り組んでほしい。大衆組織の中に、運動の中に全組織一丸となって計画的に持ち込んでゆくと同時に、街頭販売を積極的に組織化することを要請する。
- ② 党のシンパ層や、浮動的な読者を、計画的に定期購読者として組織してゆくこと、この事を各地方・地区・戦線の指導者は計画的かつ強力に指導すること。申し込み書は中央より配布する。申し込み金は名簿と共に必ず機関紙局へ集中すること。反帝戦線に結集する全ての同志は、日常活動において常にこの事を念頭におき最低一カ月に一件の定期購読者を組織すること。
- ③ 地方・地区組織は必ず紙代を完納すること。これは基本的な義務以外の何物でもない。

（一九七三年一月）

へと発展しつつあることをもそれは同時に意味しているのである。この様な活動に対する怠慢・放棄・消極的態度等は全て経済主義への転落であり、プロレタリアートに対する背信行為であり、マルクス・レーニン主義に対する実践的敵対である。

以上の任務を遂行する為に、中央書記局―地方・地区・各戦線の結合を目的意識的に強化してゆかねばならない。この間強化しつつある「定期通信」を断固発展させ、強固な全国通信体制を構築しよう。当面半月毎の定期通信を打ち固め、以上の任務を遂行する条件にしなければならぬ。

- (1) 今春販売拡大運動を組織せよ
- (2) 定期購読者網を拡大し集中せよ
- (3) 機関紙代を完納せよ

① 昨年三阶段に比し、販売量は二倍以上の伸びを獲得した。回収部数も二・五倍に増えた。昨年五阶段の×××の赤字は現在解消した。経営状態はかなり改善された。にもかかわらず、半月間体制への移行を射程においた場合の一月間の財政は××の赤字が推量される。党建設と運動の現状からすれば、最低月二回定期発行は是非とも為しとげねばならない課題であり、その為の経営改善をなんとしてでもかちとること。——具体的には、半月間発行・五千部回収を七三年上半期における獲得目標とし、文字通り貫徹することである。右の数字は、全党組織に一・五倍の販売量の増加を獲得することを要請している。二八六号をめどに、全地方組織は一・五倍の販売拡大をかちとることを目標にして、

資料四

機関紙活動の中間総括 と方向——編集局

（一九七三年九月）

(A) 何をどのように総括すべきなのか

① 全国委員会結成以来（七一年十月）二年を経ようとする現在、全国委員会は様々な困難と不十分な条件の中で、やはり着実な前進をかちとってきたことを確認しないわけにはゆかない。

まず第一には、赤報・左派との党派闘争に勝利する中で形づくられてきた我々の革命理論の更なる深化として、それはとりわけ綱領レベルにおける共産主義論・資本主義批判を軸として、それに導かれた戦略問題―帝国主義批判・軍事問題・諸運動論・更に組織論として深化―発足の道を歩んできた。——（理論の深化）
第二に、分裂当時の偏在化、かつ地方化した否定的な組織の現状の中で、様々な曲折を経ながらも、組織論の深化を基礎に、中央集権非合法党への前進をかちとりつつあることである。——（党組織の整備）

第三に、同盟の指導する諸大衆組織・諸運動の発展に基礎をおいたところの同盟の労働者階級内部への影響力の増大である。
：労働者運動・入管闘争・医療委員会指導下の諸闘争・部落解放

闘争等々。——(運動の発展)

②にも拘らず、これらの党総体の発展は、未だに質的には手工業的發展の域を出ていないということも、この間の同盟の達着した理論・組織問題・運動上の問題に照らしてみれば明らかなことであり、従って現在、我々に問われている問題は、マルクス・レーニン主義百有余年の伝統と、五〇年の日本共産主義運動、一〇数年の共産主義者同盟の闘争の総括の基礎において、全国委員会の二年間の経験と理論を徹底的に検証し、対象化していく中で、その手工業性を払拭し、全領域にわたるボルシェビキ的質の獲得に成功することである。

ここにおいては、以上の総体的な位置を充分確認した上で、とりわけ組織論上の深化として結実させるべき課題として、また、実際の細胞活動の強化への一助とすべく、この間の機関紙局の活動の一定の総括に接近することを目的に提起したい。

もう少し具体的に言えば、この間の総括を通じた一貫した課題は、いうまでもなく「具体的任務を可能にするためには、何よりも恒常的な統一任務を負った指導中枢の確固たる建設が必要である」——(第二議案)——ということであり、分業と統一という指導部の組織的解決である。それは、一つには「各専門部局細胞である前に、まず中央書記局常任委員会であるという位置付け」を可能にするところの主体的な思想の強化と同時に、それを位置付けや決意に陥し込めないところの、逆に言えば不断にその思想を培養せすにはおかないところの物質的な基礎——組織的実践としていかに形成するのかが必要であり、今一つはそのこと

の解決あるいは強化の中で可能になるべき「分業体制のより一層の強化」「具体的分業任務」の強化・発展の内容をいかに形成するかということである。

経験上の総括から言っても、機関紙局活動は常に指導中枢の質、あるいはそれとの関係の中で規定されてきたし、中央指導の強化の中でこそ機関紙局のなすべき分業は強化されてきたし、またその分業の中に全体性をはらむこともできた。逆に中央の弱体化の中では、分業が文字通り分業化し、そしてそのような分業は八割以上の意義を失った。

従って、いま機関紙局をより一層強化せんとする場合、機関紙局の活動が中央指導の一環を荷っているという限りにおいて、中央指導をどのように総体的に強化していくのかということと無関係に論ずることはできず、常にその一環の中で問題をたて解決していくべきである。

(B)機関紙局の活動は、中央指導の変遷に伴って、次の四つの時期に区分しうる。

第一期 71・10～72・1

戦旗停刊と烽火発刊

第二期 72・2～72・10

第三期 72・11～73・4

第四期 73・5

第一期は、いわば分裂直後の緊急措置であり、文字通り臨時期である。全国委員会結成の宣言と、一一・一九闘争の宣伝を唯一その任務とした。

『烽火』発刊と全国委員会の組織論的位置付けの中で、いわば本格的な活動と組織建設がなされたのは第二期であり、12・18路線の偏向と闘い抜く中で政治局と直結した形でもって機関紙局同志を中心に組織建設と活動の整備がなされていた。

この時期における主要な課題は分裂によって破壊された全国配布網の回復と、印刷事情の変化に基づく財政問題の解決であった。これらは、中央委員会における討論と決定、地方・地区組織との交渉等によって一定の前進を勝ちとった。

この時期が、全国委員会としての組織強化、運動の前進の中で、始めて本格的な編集局細胞として建設され、活動を開始した時期、その意味では画期的な時期であったにもかかわらず、その組織・その活動は極めて変形的であり、限界的であったが、それは当時の中央組織の限界を忠実に反映したものであった。

当時中央組織はトータルな指導上のヘゲモニーを持ちえず、運動上のヘゲモニーを関西地方委員会に委ねたところの極めて変形的なものであった。

このような変則的分裂状況を物質的基礎として、編集局は中央行政指導部(中央書記局)からも、また運動の実際上の指導部(関西地方委員会)からも相対的に分離した、政治局直轄という形で存在せざるをえなかったが、このこととの限界は様々な形をとってあらわれた。

まず第一には、紙面の特徴が、具体的な運動の指針を欠落させたところの抽象的・一般的な政治主張と、極めて地方的色彩をもった大衆運動の結果報道との折衷として表われたことであり、党

の組織構造が中央集権的に統合されていないことを露骨に映し出していた。そして、まさにその矛盾を「編集技術」によって「隠蔽」するという「統合」の任務を編集局ははたしていたのである。(歴史的制約性として)

また、組織活動上においては、「行政中枢」と相対的に分離していたことにより、独自の組織指導(全国)の必要性の中で、「通信員制度」という「独自の足」の形成が試みられた。(この時期、他の諸機関においても中央労対「労対通達」——地区労対、弾対「弾対通達」——地区弾対、cf. 編集局——編集局通達——地区通信員)等の活動が特徴的であるが、これはこのまま進めば指導の多極化・統一なき分業指導へとつき進む危険を胎んでいた。

従って、この時期、既に、中央における中央書記局・機関紙局・弾対・労対の、それぞれの相対的分離と、総体としての運動の指導性の欠如(性格上労対が若干)、そして運動ヘゲモニーの関西地方委員会への存在という、この時期における編集局の限界は、また同時に中央機関総体の矛盾と統一によって政治・組織指導を統合・統一化することであり、同時に運動のヘゲモニーをも中央に移行させることによって、政治・組織・運動指導を中央に統一集中させて、中央指導の統一性・全体性を回復させることであつた。

そして、このことの実践的解決形態として提起され、実践されたのが七二年十一月体制の提起でありその構築であった。それはまさに、政治局・中央書記局として、以上の統一性を物質化する

ことが確認されたが、この時期に顕在化した限界からして、極めて重要な意義を有していた。

とりわけ、この時期の政治主張を絡めていかならば、十一月体制的な組織構造の転換・中央集権化・統一化を基礎にのみ提起されねばならなかったところの、いわゆる「民主主義闘争」の提起が、組織内には二月の混乱の最中において、極めてアブリアリに政治方針としてのみ提起されたことによつて、その後その二期の混乱が増幅化傾向を示していく中であつては、増々当時の組織的転換の意図の重要性が認識されなければならない。

②十一月体制は以上の政治的・組織的意図の下に政治局―書記局体制として提起されたが、今一つ我々の側から言えば、政治局―編集委員会・編集局の機関紙局への転換と政治局からの分離という、重大な組織的改組をも含んでいた。これは、二期的状况に強制されて有していたところの編集局の政治指導的性格（cf. 理論主張のプラン立案・宣伝・煽動の「環」の設定等）を政治局へゲモノーを軸とした機関としての「機関紙局」に改組した上で中央書記局の構成要素とするということの表現であつた。

しかしながら、この十一月体制への移行はすんなりとかちとられたわけではなかつた。極めて無責任な事象の中で混乱をくり返した、実際上の書記局体制へ移行したのは一月であつた。

この間における書記局の状況、及び編集委と機関紙局の関係は、一二月八日付の機関紙局からの「編集委員会への要求」書を参照すれば実際に推移した事象の一端が露見しうるのである。

「従来、『烽火』の編集・発行・発送業務に加えて、中央書記局の一機関として、全国にわたる党内外の通信網をつくりあげ、情報活動の中核として、党内における諸パンフ、機関紙発行の指導中核として、政治局―中央書記局のその面における手足として断乎たる活動を組織する……」

ところでこの十一月体制が、例えば書記局の独自財政の欠落とかあるいは各分業を統制し、指導する常任ともいふべきメンバーが実際上一人であつたとかいふ物質面にも規定されて、「分業連合」という団結及び実践の質を突破することができず、また、同盟の最大の物質力であり、また諸課題の検証の場であるところの関西地方委員会との相対的な分離の中で、行政指導が弱められていく中で、七三年四・二八に至る過程において次第にその矛盾が顕在化していった。そして客観的にはこの十一月体制の全成果を継承し、その限界を克服する中で、より一層の指導の集中と中央集権党の形成を前進するという任務を帯びた形で、いわゆる五月体制が政治局の指導の下に形成されていったのである。（従つてこの十一月体制から五月体制への転換においては、さほど根底的な転換があ

しかしながら、転換の端初で挫折を引きおこすという事態の中から、Y同志を軸にしたいわば一月体制ともいふべき、本格的な書記局活動の開始は、やはり従来の限界からすれば大きな前進を我々にもたらしたものであつた。形成された書記局が有機的組織体としてよりも、むしろ連合的な会議体としての性格により支配されていたにしても、そこにおいてはじめて政治・組織・運動のヘゲモノーが集約せられ、三里塚・沖繩を巡る組織問題や、また入管・部落・労働運動等の運動上の問題が論議され、方針化（全国的）される端初を形成したことは重要であるし、また全国指導という観点からしても、二・一ベトナム闘争においては失敗したものの、三・一入管闘争においてはじめて全国一斉闘争を組織化したこと等は、指導の集中を抜きにはありえないことであつた。そして、また同時に、中央書記局通達の発行と全国への配布、及び指導という手工業性からの脱皮に実践的に一歩の前進を開始しえたこともやはり大きな意義を有していた。

また、七三年に入つて以降の「烽火」の紙面の質においてもやはり巨大な前進がcaちとられているが、具体的には、例えば「二八二号を巡る総括」を参照すれば明らかである。

この十一月体制の発足時において発行された「書記局通達第2」において示されているところの「編集委アピール」、及び「機関紙活動の強化」で述べられているところの主張が、この時期以降の機関紙局活動の基準であるが、いわば、この三期後半は人事を巡る遅れのために、また補充されたメンバーが、すぐにはフル回転しえないという事情の中で、極めて過渡的な不十分な条件に機

る訳でなく、むしろその継承と発展という位置関係を占める）従つて今また、この五月体制の限界が顕在化しているとするならば、それは当然昨年九十月以降の、実体的一月・五月体制を貫く形での総括の中から、その限界の克服への道を歩むべきであり、そのこと、全般的な総括は総括の第二議案に委ねたい。（とりわけ②五月体制の成果と限界参照）

さて、この第二議案において、五月体制の位置は次の様に述べられている。

「①全国指導の再建・統一的な全国指導

②そのための単一中央指導部形成

③そのための書記局員の意識の転換

④そして何よりも、以上のヘゲモノーとなるべき三人指導部の団結、指導性の発揮と常任委員会体制の形成」

この提起に沿つて、機関紙を軸に総括を深めていくならば、次のことが問われなければならない。提起されなければならないのはレーニンの次の言葉である。

「……革命勢力の組織化と、それらの勢力の訓練と、革命的活動の技術の発展とは、これら全ての問題を中央機関紙で討論し、仕事の運営の一定の形態と規律を集团的につくりあげ、全党に対する各党員の責任制を――中央機関紙を媒介として――確立することなしには不可能である。」

「統一的な全国指導の一定の形態と規律を集团的につくりあげるためには、中央機関紙・書記局通達はどのような役割を一体全体はたすことが可能であるか」ということ。

我々の経験からいえば、全国指導の分散性・非統一性・消極性は様々の形をもって中央機関紙、及び通達の中にあらわれている。ということは、とりもなおさず中央機関紙、及び通達の運営の形式と規律の中に分散性・非統一性・消極性が表現されているのではないか。我々は統一的な全国指導のために書記局を建設したし、そのヘゲモニー下に中央機関紙と通達を置いた。これが、断乎として正しいとするならば、問われなければならないのは「統一的な全国指導のためには、機関紙及び通達はどのような内実をもたなければならぬのか。そして更に、ではその内実はどのような形式によってつくりあげることが可能なのか」ということである。そしてこの場合、この課題が党中央総体の主体的問題として取り組まれることが重要である。なぜなら、この課題は、「機関紙局」を越える課題であるからである。

中央書記局の部局連合的な密集の質を根底的に有機的な密集性に転化するためには、中央機関紙・通達・財政の三つのモメントに対する諸部局の関係を根底的に強化し、質的転換をからとることが極めて大きなポイントを占めるであろう。

第五章

政治暴露と全国政治新聞

前章において、旧同盟全国委員会では、一貫して「全国政治新聞」の組織的性が不鮮明であり、それが思想上の経済主義に根拠があり、実践上の手工業性を生みだしてきたことを明らかにした。それを克服するためには、レーニンの経済主義との闘争の意義を復権すること、経済主義との闘争の武器として全国政治新聞を作りあげること、それを通じて思想的統一を成しとげ、我々の手工業性を克服し、鉄の中央集権党を建設することを主張した。「まさに、綱領・組織・戦術上の見解の統一こそ党の土台であり、これらの見解の統一だけが、党員を一つの中央集権化された党に統合しうるのである。」（『マルクス主義』創刊号一五二頁）からこそ全国政治新聞が、レーニンの組織建設の中に決定的な位置を占めているのである。

このことにまったく無理解の旧全国委指導部、八木沢（西）―北原一派や永井一派は論外として、今、赤報派、赤軍諸派、園内一派（M.L.派）等で、レーニンの組織論、中央集権主義と宣伝煽動、政治暴露について、再把握が試みられている。このことは、一貫して組織問題を本格的に論じることのなかった共産同の歴史を見るならば、歓迎すべきことである。だが結局のところ、どの論議も、レーニンの「政治」「政治闘争」に対する考え方、また共産主義者の恒常的な任務についての（第二次）共産同と新左翼の誤った理解を克服するに至っていない。

ここでは、全面的政治煽動と政治暴露をして全国政治新聞について述べる。だが同時に、そのことは（第二次）共産同の誤った「政治」についての理解を批判し克服することであり、また共産

主義者の恒常的な基本的な任務についての正しい理解を示すこと
であらうし、またそうでなければならぬ。

まず我々がそれについてどのような誤った理解をしてきたか、
そして今なおそうしているかを示すことから始めよう。

第一節 われわれは共産主義的政治をどの ように理解していたか

最初にこの間、最もレーニンの組織論について論じている赤報
派を取り上げよう。

赤報派の榎原は、「国際共産主義運動の歴史的教訓」(『序章』
13、14号)の中で、「組織問題は当然にもそれ独自で存在してい
るわけではない。何よりもそれは、その組織がかかっていた綱領
や戦術との関係において論じられねばならない。」(『序章』13
号一三六頁)「中央集権的な党組織は、思想的統合を前提条件と
する」(同一四一頁)と正しく述べた後、全国政治新聞の役割に
ついて、「それは、日本共産党がよく語っているような全面的政
治暴露につけるものではない。こうした考え方は、まさに全国政
治新聞の役割をせざるものでしかない。このレーニンの計画は、
実は『全人民的武装蜂起の実現』に射程がおかれている。」(同
一五八—一五九頁)と主張している。

確かに、レーニンの計画は「全人民的武装蜂起の実現」に射程
が置かれていたことは事実である。そのための組織計画であった
ことも確かである。そしてこればかりの全国政治新聞の標榜は、こ
の「新聞の役割をせざるものでしかない」こともまた正しい。だ
が、榎原がどのように主張する時、実は、榎原自身の「全面的政
治暴露」に対する理解の狭さを同時に示しているのである。レ

ーニンにとっては、この計画の中心に、全面的政治暴露とその為
の全国政治新聞こそがあったのであり、全面的政治暴露は決定な
位置を占めていたのである。全面的政治暴露の役割についてのレ
ーニンの主張は、次節で詳しく述べることにし、ここでは、榎原
が、政治暴露についてどのように考えており、それがどのように
誤っているか、その検討に移ろう。

榎原は、「外部注入」論が、レーニン『なにをなすべきか』の
中心的内容の一つであり、反日共諸派のイデオログがそれを誤
って抱え不毛な論争をしてきたが、それは「社会主義的意識を『経
済闘争の外部』から、『労働者の雇主に対する関係の圏外』から
注入することを主張しているのだから、労働者階級の闘争の外
から注入することを主張しているわけではない。」(同一四七頁)
と主張する。だがこれは、反日共諸派の全く不毛な論争に対して
は、一定の位置をもっているかもしれないが、レーニンの「外部
注入」論の核心的なことを言っているわけではない。それどころ
か、榎原が批判する反日共諸派のイデオログと同じく、どこか
ら「注入」するのかわという問題のレベルではない。「社会主義
的意識を『注入』する」ということ、「労働運動と社会主義とを
結合する」ということが、いかなることなのかということにまっ
たく気づいていない。せいぜい「一つの科学的な世界観として完
成された」社会主義的意識を労働者が理解することだぐらいにし
か考えていない。だがレーニンはそれを労働者が政治的・階級的
意識をもつことと抱えていた。

レーニンは、「もし労働者が、専横と抑圧、暴力と濫用行為の

ありとあらゆる事例——この事例がどの階級に関係するものであ
れ——に反応する習慣を、しかも、ほかのどの見地からでもなく
まさに社会民主主義的な見地から反応する習慣を得ていないなら、
労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし労働
者が、具体的な、しかも絶対焦眉の(切実な)政治的事実や事件
にもとづいて、他のそれぞれの社会階級の知的・精神的・政治的
生活のいっさいの現われを観察することをまなばないなら——ま
た住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面の
唯物論的分析と唯物論的評価を、実地に応用することをまなばな
いなら、労働者大衆の意識は真に階級的な意識ではありえない。」
(『なにをなすべきか』全集五巻四四〇頁)と考えていたのであ
り、また「労働者階級が政治闘争に参加しても、それどころか政
治革命に参加してさえ、それだけではまだ労働者階級の政治はけ
っして社会民主主義的政治にはならない。」(同四六八頁)と述
べているのである。レーニンの言う「社会主義意識」、「意識性」
の持ち込みとは、労働者階級・大衆にあらゆる事柄について、
「社会民主主義的な見地から反応する習慣を」「唯物論的分析と
唯物論的評価を、実地に応用することをまなば」せることなので
あって、単にマルクス主義を知識として学習することでもなく、
ましてや政治課題を与えることや単に政治闘争に参加させること
(これは第一歩としては非常に重要ではある)ではないのである。
榎原は、『なにをなすべきか』について、長々と述べているが、
このことについては一切何も理解していない。

「労働者階級の解放は、労働者自身によってたたかいられた

ければならない」というマルクス主義の原則からレーニンは、解放の能力を労働者階級自身に与える（引きたす）ということから、共産主義者の基本的な任務を引き出したのであり、それを「労働者階級の政治教育に、その政治的意識を発達させること」（『なにをなすべきか』全集五巻四二六頁）だと考えていた。そして「全面的な政治的暴露を組織する仕事をとりあげないかぎり、われわれは労働者の政治的意識を発達させるという自分の任務をはたしえないであろう」（同四二六頁）と全面的政治暴露の重要性を把えていたのであり、全国政治新聞をその最良の舞台と考えていたのである。先に引用した榎原の全面的政治暴露と全国政治新聞との関係についての主張が、いかにレーニンの全面的政治暴露を誤って理解しているのかが、これで明らかになったであろう。榎原は日本共産党は「全面的政治暴露」を行なっているといっている。確かに、日共は日共なりに、社会排外主義者としての「政治的暴露」は行なっているだろう。だがそれは、レーニンの言う「全面的政治暴露」とは似ても似つかないシロモノである。それを榎原が「政治暴露」だということに、彼の「政治」に対する俗流的な理解があり、それに基づくレーニン理解の誤りがある。これは単に、榎原一人の誤りではなく、新左翼全体の誤りである。

例えば、12・18ブントは次のように言う。

「外部注入一般にとどめず、ツァーリ打倒の政治闘争を提起し」とするレーニン原則（政治局論文『共産主義』一四号、一六頁）、また「(3)権力との関係で非合法下に於かれてある党活動は、レーニン時代のような『文書配布』ではなく、軍事活動であること、

従って非合法活動の内実は実践的に明らかである。

……
(5)レーニン党に付加すべき内容は、この党の非合法党としての組織が全国政治新聞だけでなく、軍建設を媒介としてのみ行なわれること以上である。」（同書一九頁）

ここには、全国政治新聞による政治暴露が、「政治闘争を提起し」なければ、「外部注入一般」であるという、またそれ自体では「権力との関係で非合法」状態を創りださないという考えがある。レーニンは、政治暴露を労働者階級の政治的意識を高め、その革命的積極性を引き出し、革命の主体として労働者階級を打ち鍛える最も重要な手段として把えていたのであり、政治暴露が充分に行われ、革命の主体として労働者階級を打ち鍛えることに成功すれば、するほど、必然的に党とプロレタリア階級は、権力との関係において非合法の状態に置かれるのである。プロレタリアートとブルジョアジーは根本的に非和解であり、徹底して対立しているのである。先の政治局論文は、レーニンのこのような政治暴露に対する提起を全く理解していないことから生まれたものである。これは政治暴露を遊撃戦と軍事組織建設の単なる手段としてしか把えない赤報派（榎原）に脈々と流れる考えである。そして彼らの目的は、「労働者の政治的意識を発達させる」ことではなく、何の準備もない労働者を今ただちに遊撃戦にかりたてることにある。これはレーニンが『なにをなすべきか』の中で、激しく批判したテロリスト等の考えと全く同じではないか。

『烽火』の発行状態を見ればそれだけで、我が旧全国委員会指

導部がこれらのごとをどのように考えていたかは、一見瞭然である。八木沢は先に引用した「12・18」の政治局論文を批判して次のように言う。

「レーニン全国政治新聞、現在は軍事組織レーニンの時代、政治闘争、現在、武装闘争といった主張は、そもそも、レーニンが、ボルシェヴィキを、政治警察と闘い、正規の包囲軍として、うちきたえ、あるいは、日常的なツァーリ政府との武装闘争をはらんでいた事への決定的過少評価におちいるものである。」（「八木沢メモ」『鉄鎖を砕け』四七頁）

これでは全く何の批判にもなっていないどころか、同じことを別の言いかたをしたにすぎない。

また次のように言う。

宇野は「共産主義運動と、プロレタリアートの現実の階級闘争との結合環を取り去り、認識者の運動へとおいこんだからである。」「我々が現在理論作業の中心環を『戦略問題』の確定においているのは、この資本主義批判の二つの側面を結合させるのが、党の綱領的立場に導かれた戦略にあるからである。」（「赤軍派の党憲建設路線批判」同書三六―三七頁）

だから八木沢は、党の役割はプロレタリアートに現実の解釈としての「戦略」を与えることにあると考えていたのであり、レーニンの政治暴露と恒常的な党の任務の考えを何らの理解も持っていないことを暴露しているのである。

永井の場合は次のように言う。

「三号決議に対する批判を『組織専一主義』とし、専ら『政治』の重要性を語る見解に対して断固として反対する。三号決議は決して『組織の重視』を語りすぎたのではなく、全く誤った見地から語ったのである。」（「全党に訴える」）

われわれは、三号決議に対して、「『組織の重視』を語りすぎた」といって批判しているのではない。組織のみを語ることに現われた「政治」思想をこそ批判しているのである。（『マルクス主義』創刊号の北原イズム批判第三章参照）。そのことを全く理解できず、われわれに對しこのような批判をするところに彼らの立場が現われている。

彼らは、第一に、政治と組織を分離して考え、政治については、三号決議と同じ空虚な「蜂起―プロレタリア共産主義」と彼の年来からの主張である同じ空虚な「プロレタリア思想」を正しいものとして前提にしたうえで、三号決議の組織論を批判しているのである。このような政治と組織を全く分離して把える考え方は、ブルジョア的な考え方である。また昨十月中央委員会の提案の責任者は、当時の議長であった永井である。そしてまた旧全国委の議長は一貫して昨十月中央委で下されるまで、永井がその席をしめていたのであり、全く八木沢と同一の考え方をしていたのである。

先のわれわれに對する批判につづいて、「それ故、我々は厳格な党建設の計画に結びつかないような政治」を承認するわけにはいかない。」と批判している。だがわれわれの三号決議批判、組織問題についての主張に對して、「厳格な党建設の計画に結びつかない」という理解しきれないところに、またわれわれのい

う「政治」がそのような「政治」だというように理解できないところに、彼ら自身の「政治」に対する俗物的な理解がよく現われている。

赤軍派の塩見や高原の主張は、基本的には、赤報派の主張と何ら変るところはなく、俗物的な政治的理解に基づく宣伝、煽動、暴露の主張を行っており、彼らの実践的な直接の目的は、世界革命戦争―遊撃戦の遂行であり、先の主張はこのための単なる手段の一つではない。

園内一派は、彼らの『マルクス・レーニン主義通信』六号で、「全面的な政治宣伝・煽動・暴露を組織することから始めよう」と主張している。彼らのこの主張は、一見、八木沢イズム批判として正しいかのように見える。だがあの極右の八木沢イズムに対してはどんな批判でも一見正しいように見えるのであって、彼らの主張は結局のところ、第二次ブント流の戦略戦術主義的な厳格な中央集権的な革命党の建設抜き主張である。

さて旧来の新左翼の政治は、共産主義的な政治といえるであろうか。否、と言わなければならない。それは組合主義的な政治の枠を大きくこえるようなものではなかった。十・八羽田闘争に象徴されるベトナム反戦闘争も、その巨大な歴史的な意義にもかかわらず、その初期にはやはり組合主義的な政治の枠を完全に脱し切ってはいなかった。二度にわたる羽田闘争のスローガンは、「ベトナム革命戦争の勝利を」「侵略反革命の元凶日米帝国主義、その加担者日日本帝国主義打倒」ではなく、「佐藤の訪ベトナム・訪米阻止」「日本政府は加担するな」のみであった。これは、

第二節 全面的政治暴露について

先に私は、レーニンが「以上、われわれは、もっとも広範な政治的煽動を行うこと、したがってまた全面的な政治的暴露を組織することがいよいよ真に社会民主主義的な活動の絶対に必要な、もつとも緊急に必要な任務であることを、見てきた。とはいえ、われわれはこの結論を、もつぱら、労働者階級が政治的知識と政治的教育をもっとも緊切に必要としているということから出発して引きだした」(全集五巻四五〇頁)ことを述べ、新左翼のイデオロギー者がそれを全く低め、政治領域の出来事についての表面的な説明と、政治課題の提起に代えてしまったことを明らかにした。レーニンの考えを詳しく見てみよう。

レーニンは、マルクスの「労働者階級の解放は労働者階級自身によって闘いとられねばならない」という考えを受けて次のように言っている。

「党の活動は、労働者の階級闘争に助力することではなければならない。党の任務は、なにかの当世流行の、労働者援助の手段を頭のなかからあみだすことではなくて、労働者の運動にくわわり、その運動の中に光明をもちこみ、労働者がすでに自分でやりはじめているこの闘争において、彼らを援助することである。党の任務は、労働者の利益を代表することである。」(「社会民主党綱

総評(民同)の戦闘的組合主義者の「アメリカのベトナム侵略反対」「政府は加担するな」とは主張するが、現実の世界の変革を要求せず、維持を要求する主張と大差はないといわなければならない。これらは結局、結果に対する闘争以外ではないのである。結果に対する闘争は、それがどのように戦術的に激しいものであつてさえ、組合主義的政治なのである。ベトナム反戦闘争は、現実のベトナム革命戦争の前進によってこそ、その革命的発展があつたのである。

われわれの俗物的な共産主義的政治に対する理解は、根底的に清算されなければならない。

領草案と解説「問題別選集「党綱領問題」上、二三頁)

周知のように、またレーニンは、次のように言っている。

「われわれはいま、労働者は社会民主主義的意識を持っているはずもなかった、と言った。この意識は外部からしかもたらさないものだった。労働者階級が、まったく自分の力だけでは、組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇主と闘争を行い、政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布をもちとるなどのことが必要だという確信しか、つくりあげえないことは、すべての国の歴史の立証するところである。」(全集五巻三九五頁)

「労働者大衆自身が彼らの運動の行程それ自体のあいだに独自のイデオロギーをつくり出すということが、考えられない以上は、問題は、こうでしかありえない、―ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーか、と。そこには中間のものはない(なぜなら、人類はどんな『第三の』イデオロギーをもつくりださなかったし、それにまた総じて、階級矛盾によってひき裂かれている社会に階級外のまた超階級的なイデオロギーなどは、けつしてありえないからである)。だから、いよいよ、社会主義的イデオロギーを軽視すること、いよいよ、それから離反すること、とりもなおさず、ブルジョア・イデオロギーをつよめることを意味するのである。自然発生的性をうんぬんする人々がいる。しかし、労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向にすすみ、ほかならぬ『クレード』の綱領にしたがつてすすむのである。なぜなら、自然発生的な労働運動とは組合主義であり、 Nur Gewerkschaftlerci で

あるが、組合主義とは、まさしくブルジョアによる労働者の思想的奴隷化を意味するからである。だから、われわれの任務、すなわち社会民主主義者の任務は、自然発生性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をそらして、革命的社會民主主義の庇護のもとに引き入れることである。」(同書四〇六頁)

「自然発生性と闘争すること」とは、運動に目的意識性を与えること、社会主義的意識を労働者階級に与えること、すなわち労働者の階級的自覚を発達させること(「社会民主党綱領草案と解説」二三頁)、「その政治的意識を発達させること」(全集五巻四二六頁)なのである。

「全面的な政治的暴露を組織する仕事をとりあげないかぎり、われわれは労働者の政治的意識を発達させるという自分の任務をはたしえないであらう。」(同四二六頁)

「政治的煽動の必要な拡大がなされるための基本条件の一つは、全面的な政治的暴露を組織することである。このような暴露による以外には、大衆の政治的意識と革命的積極性とを培養することはできない。だから、この種の活動は、全国社会民主主義派のもっとも重要な機能の一つをなすものである。というのは、政治的自由が得られてさえ、こういう暴露が必要でなくなるわけでは決してなく、ただその暴露のむけられる範囲がいくらからうつりかわるだけだからである。」(同四三九―四四〇頁)

「原則のうえで一貫した、全面的な宣伝煽動を系統的に行うということは、総じて社会民主主義派の恒常的な主要な任務であり、

政治や社会主義の諸問題にたいする関心が、もっとも広範な住民層のあいだに呼びさまされている現在の瞬間(現在の日本もそうである)ではとくに緊要な任務である」(『なにから始めるべきか』全集五巻七頁)

「われわれは、もっとも広範な政治的煽動をおこなうこと、したがってまた全面的な政治的暴露を組織することが、いやしくも真に社会民主主義的な活動の絶対に必要な、もっとも緊急に必要な任務である」(『なにをなすべきか』全集五巻四五〇頁)

「現代では、真に全人民的な暴露を組織する党だけが、革命勢力の前衛となることができよう。」(同四六二頁)

ここにレーニンを長々と引用したのは、新左翼を含む日本の全ての左翼が、レーニンの政治的煽動と政治的暴露の役割と、社会主義者の恒常的な基本的な任務を徹底して低めたために、レーニン自身の言葉でふたたび語ってもらふ必要があったからである。

このように、レーニンは、労働者階級自身の解放の事業を援助するというマルクス主義の原則から出発して、社会主義的な意識性を与えることをもって、ブルジョア・イデオロギーの庇護の下に入ろうとする自然発生的な労働者階級の闘いの傾向と闘い、労働者階級の階級的自覚と政治的意識を発達させることを提起し、それは全面的な政治的煽動によってしか行えないこと、その基本的条件の重要な一つが、全面的な政治的暴露であるとして、政治的暴露の共産主義者の任務における決定な役割を明らかにし、提起したのである。レーニンは、この観点からあらゆる問題を検討し、提起していったのである。綱領、戦術はもちろん組織問題の

提起においてさえそうであった。だからこそ、彼の組織上の見解を述べた『なにをなすべきか』の主要なテーマを「われわれの政治的煽動の性格と主要内容の問題、われわれの組織的諸任務の問題、全国的な戦闘組織を同時的に別々の末端から建設する計画の問題」(同三六五頁)としたのである。彼はこの三つの問題を最も緊密なものとして提起し、第一の政治的な任務から、最後の実践的な組織建設の計画を導き出したのである。さらに経済主義者達が、政治的煽動の任務を低め、せばめたために、またそれが大衆の自然発生性の拝跪に根拠をもった根強いものであったからこそ、彼はそれと徹底して闘う為に第一章と第二章から書かざるを得なかったのである(同三六六頁)。

われわれが、レーニンの組織上の見解を把える場合、この三つの問題を統一した一体のものとして把握しなければならないのであり、『なにをなすべきか』のどこか一部ではなく、その全体の主張を教訓化しなければならない。われわれのいままでの『なにをなすべきか』の理解は、レーニンの組織思想の魂を抜き去った、誤った理解であった。その典型は、第二次ブントや園内一派流の俗流の「一般的な」宣伝煽動を考える見解(戦術戦術の党)、赤報派のレーニンの提起した政治的任務を全く理解せず、中央集権主義、職業革命家の党、非合法党を技術的に考える見解に現れている。12・18路線の「党形成―階級形成二元論批判」II「党形成―階級形成一元論」は、第二次共産同の党形成と階級形成を分離して考える誤った見解を批判したが、こんどはそれが行き過ぎ、階級形成を党形成に代行させるといふ革マル派の誤りに陥ったの

である。それは「党派闘争II権力闘争」という完全な革マル流の定式化として全面開花したのである。また昨十月中央委三号決議は、この誤った見解を批判して(それは直感的な批判であり、根底的な批判でなかったが故に、後に八木沢イズム・北原イズムを発生させたのであるが)登場した全国委員会の到達地平を洗い流し、12・18路線の誤った見解に、再び理論的粉飾をこらして、反動的に回帰するものにはかならない。さらにわが旧同盟全国委において、政治的宣伝煽動と理論活動とその水準が、最も低められている、まさにその時に提起されたが故により反動的な役割をたした。

われわれが低めつつつけてきた、「労働者階級の政治的意識を発達させ」、「革命的積極性を養う」という共産主義者の「恒常的な主要な任務」をどのようにして行うのか、その内容はどうなものなのか。レーニンは、これについて、『なにをなすべきか』の中で、次のようにみごとに述べているので少し長くながるがその部分を全文引用する。

「実際には、『労働者大衆の積極性をたかめる』ことは、われわれが『経済的基盤のうえに立つ政治的煽動』だけに、とどまらなければいかに、はじめてなすとげられることである。だが、政治的煽動が必要な程度に拡大されるための基本的条件の一つは、全面的な政治的暴露を組織することである。このような暴露による以外には、大衆の政治的意識と革命的積極性とを培養することはできない。だから、この種の活動は、全体としての国際社会民主主義のもっとも重要な機能の一つとなっているの

だ。というのは、政治的自由が得られてさえ、こゝういふ暴露が必要でなくなるわけではけつてなく、ただその暴露のむけられる範囲がいくらつかうつかわるだけだからである。たとえば、ドイツの党がその地位をとくにつよめ、その影響を拡大しつつあるのは、まさに、党がその政治的暴露カンパニアの精力をよわめなかつたおかげである。もし労働者が、どの階級に關係した事柄であるかにかかわりなく、ありとあらゆる専横と抑圧、暴力と不法の事例に反応することに、——しかも、ほかのどの見地からでもなくまさに社会民主主義的な見地から反応することになり、なれていないなら、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし労働者が、具体的、そのうえぜひとも焦眉の（切実な）政治的事実や事件にもとづいて、他のそれ、その社会階級を、それらの階級の知的・精神的・政治的生活のいつさいの現われにわたつて、観察することをまなばないなら、——住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面の唯物論的分析と唯物論的評価を、実地に応用することをまなばないなら、労働者大衆の意識は真に階級的な意識ではありえない。労働者階級の注意や観察力や意識をもつば、でないまでも主として、この階級自身にむけさせるような人は、社会民主主義者ではない。なぜなら、労働者階級の自己認識は、現代社会のすべての階級の相互關係についての、完全に明瞭な理解——たんに理論的な理解だけでなくさらに……理論的な理解よりもむしろ、といったほうが正しくさえある……政治生活の経験にもとづいてつくりだされた理解——と切りはなせない

ようにむすびついているからである。だからこそ、経済闘争が大衆を政治運動に引きいれるためにもっとも広範に適用されるべき手段である、というわが経済主義者たちの説教は、その実践的意義からすればじつにはなほだしく有害であり、またじつにはなほだしく反動的なのである。社会民主主義者となるためには、労働者は、地主や坊主、高官や農民、学生や浮浪人の経済的本性と社会的政治的特性を明瞭に理解し、彼らの強味と弱点を知り、それぞれの階級やそれぞれの層が自分の利己的な意向やほんとうの『はら』をつつみかくすのにつかつている流行文句やありとあらゆる詭弁を見ぬくことができ、どういう制度・機関や法律があれこれの利害を反映しているか、しかもまさにどのように反映しているかを、見ぬくことができなければならぬ。ところで、こういう『明瞭な理解』は、どんな本からも借りてくることはできない。そのような理解は、現在われわれのまわりにおきていないこと、だれもおもいおもいに、かたったり、すくなくもさきさきあつていないこと、これこれの事件、これこれの数字、これこれの裁判の判決、等々に現れていることを、生き生きと描写し、時をうつきず暴露することによってだけ、あたえられうるのである。こうした全面的暴露こそ、大衆の革命的積極性を培養するに必要な、基本的な条件である。」（同四三九—四四一頁）

の側面に唯物論的分析と唯物論的評価を実地に應用できることである。これらの意識は、現在われわれのまわりで起っていること、全ての者が関心をもっている事柄を把らえての暴露だけが与えることができる。そして労働者階級の政治的・階級的意識を発達させることによってのみ、大衆の革命的積極性を養うことができる。これがレーニンの主張である。

わが旧同盟全国委は、このような観点から全面的な政治暴露を行なっていたか。否、一度もなかつたと言つても過言でないだろう。旧来、わが同盟で行なわれてきたいわゆる「情勢分析」は、情勢の特徴を主観的に抽出し、それを主観的に構成するというまったく主観的な、またせいぜいのところ素朴反映論的な分析でしかなかった。ただそれが、他党派に比して、優位性を持ちえたのは、第二次共産同の大衆運動の最先頭に立ち切るることによって、培われた政治的直観力によってのみであった。これは、塩見、八木沢に典型的に示される第二次プロト共通のものである。たとえば、塩見の一向過渡期世界論は、ベトナム革命戦争を積極的に標榜しようという正しい政治的直観から出発し、その限りで、新左翼諸派や既成左翼に対して、決定的な優位性（相対的正しさ）を形成したが、優位性は、あくまで優位性以上ではなく、彼らを解体して、単一の眞の革命党を創り出すことには至らず、逆に運動の発展によって矛盾と誤りを顕在化させ、第二次共産同を分解させたのであった（過渡期世界論の総括はあらためて別稿にて行なう）。最近の典型的な例の一つは、八木沢執筆の一昨年八月中央委直後の十月五日付の『烽火』三面情勢分析や昨七四年新年号の

情勢分析である。またわれわれは、日々、生起する政治問題や政治的事件について「組織的任務を提起しないのなら、またそれが行なえないならば、問題を提起すべきでない」、また「われわれの現在の力量からいってそのような任務を行うことはできないから、すべきでない」、「そのようなことを言うのは大衆運動主義である」等々の批判をもつて、全面的な政治的暴露を行なうことを押しとどめてきた。そして労働者階級の政治的・階級的意識を発達させ、革命的積極性を培養することを押しとどめてきたのである。これは、労働者階級の革命性・歴史的な役割を認めていないことを示している。もし口先だけでなく、実際に労働者階級の革命性・歴史的な役割を認めるならば、労働者階級の政治的・階級的意識を発達させること、革命的積極性を培養することをどうして押しとどめるようなことが、起りえようか。このような意見は、どのように強弁しようが、マルクス・レーニン主義の否定以外ではありえない。我々が、このように全面的な政治煽動と全面的な政治暴露の任務を低めてきたことが、12・18プロト・赤報派の帝国主義的経済主義を批判して、革命的マルクス・レーニン主義の復権をかかげて登場した全国委員会の革命性・歴史的な任務を崩壊させた根本的原因であり、また「第二段階」の実践の中で民主主義派的偏向を生み出した根本的原因の一つである。「第二段階」の実践が、民主主義派的偏向を生み出したのは、「わけ入ったからである」とか、「第二段階論が綱領の枠組しか提起しなかつたからだ」とか、「第二段階論にすでに民主主義的内容があつた」とか、「最

小限綱領を臨時革命政府の政治綱領であるとしたからだ」とかの意見がある。これらは事実の指摘としてあたっていることもあるが、根本的な原因の切開ではない。「第二段階」の実践の指導のやり方においてこそ、その本当の原因があった。「第二段階論」の提起とともに、われわれはいろいろな運動の組織化とその指導に入った。そして同盟は、いろいろな戦線をかかえ、またいろいろな運動にかかわることになった。そこにおいて何が起ったか。ここでは、それらの運動の指導が要求された。だがそこに行つたわが同盟の活動家達は、それらの運動を指導する内容がないことに気が付いた。そのことを指導部に要求した。しかし指導部は全く答えなかったし、答える内容も原則的立場を持ってはいなかったのである。それでも彼らは指導を止めるわけにはいかなかったし、事実やめなかった。彼らは、自分達自身で、その内容を創りだそうとした。すると当然にも次のことが起る。彼らは自分達の運動の範囲で、自分達の経験からそれらを導きだそうとし、そのようにした。それは必然的にも、大衆の自然発生性と闘うことはできず、それに拝跪することになり、時には、完全に大衆に溶解することになる。事実、そのようになった。だがその事は、何も運動を直接に組織し、指導している所でのみ起ったのではない。いや党の最高指導部においてこそ、もっとも強く起つていたのであり、その結果でもあった。それは、指導放棄として最もすぐく現われたのであり、何とか指導しようとして努力した中堅指導部では、下部と同じように戦線の指導部として立ち現われたのである。わが旧全国委指導部において、このようなことが起つたのは、

なるもので、その武器がいったいいかなるものかということについて、何も理解していなかったし、理解しようとしていなかった。彼らは、「党」という言葉を語ることに、「蜂起—プロ独—共産主義」という言葉を語ることもまたは「戦略」を語ることが意識性であるというふうにかえていたのである。何というレーニン主義の理解であろうか。ではこの武器はいったいいかなるものであるか。先に長く引用したレーニンの言葉が、あらためて言う必要もないほど明瞭に語っている。「住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面の唯物論的分析と唯物論的評価」を学ばせること、「現代社会のすべての階級の相互関係についての完全な明瞭な理解—たんに理論的な理解だけでなく……政治生活の経験にもとづいてつくりだされた理解」を持せることだと。そのことは全面的な政治的暴露以外ではできないと。われわれは、旧来、すでに述べたように、全面的政治暴露を任務・方針がなければ提起すべきでない」等々の理由でもって拒否してきた。しかし何も「任務・方針」がなくとも、唯物論的分析にもとづく政治的暴露であるならば、労働者はそれを吸収し、われわれが思いもよらない所で、思いもよらない方法で、自分達の活動をつくりだしている。たとえば、『烽火』第二八三号に載つた「国際通貨危機と変動相場制」についての記事について、ある労働者は「あの記事は、非常によく解かったし、役にたった。もっとあのような記事をふやしてほしい。」といったのである。この労働者の言葉に、いかにわれわれが政治暴露や「行動の呼びかけ」について誤った考えを持っていたか、それがいかに重要な

まず第一に先に述べたように、労働者階級の革命性・歴史的役割を信じず、認めないことにこそ原因はある。われわれは、労働者階級の革命性・歴史的役割を認め、信ずるからこそ、また大衆の自然発生性が「意識性の萌芽」ではあるが、同時に「労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向にすす」(同四〇六頁)ませるが故にこそ、自然発生性と闘い、ブルジョア・イデオロギーから労働運動を引き離し、「意識性」を与えなければならぬのである。そして「われわれが確信したところによれば、大衆が自然発生的であればこそわれわれ社会民主主義者が大量の意識性をもつ必要がある……。大衆の自然発生的な高揚が大きければ大きいほど、運動がひろまればひろまるほど、社会民主主義派の理論活動においても、政治活動においても、組織活動においても、多くの意識性をもつ必要が、くらべものにならないほどいっそう急速に増大する。」(同四二二頁)こと、「とりわけ指導者の義務は、あらゆる理論的問題についてますます自分の理解をふかめ、古い世界観につきものの従来の空文句の影響をますます脱却し、そして、社会主義が科学となったからには、また科学として取りあつかわれなければならないこと、すなわち学習されなければならないことをたえず心にとめておくことである。このようにして獲得され、ますます明らかになっていく洞察を、労働者大衆のあいだにいよいよ熱心にひろめ、党および労働組合の組織をいよいよしっかりかためることが肝要である。」(同三九二頁)ということを全く理解していなかったからである。彼らは、ましてや、自然発生性と闘うための「意識性」とはいか

ことであるかが、語りつくされているであろう。レーニンもまた、次のように言っている。「また大衆に行動を呼びかけるということについては、これは、精力的な政治的煽動がありさえすれば、いきいきとした、あざやかな暴露がありさえすれば、ひとりでに生じる事がある。」(同四四二頁)と。ではわれわれの政治的暴露の階級の性格はどこにあるのであるか。すでに述べてきていることで、多くのことがらは明らかになっているであろう。一言でいえば、唯物論的分析と唯物論的標値である。それ以外ではない。何か「プロレタリアートの立場と利害」や「プロ独の思想」を一般的に言葉のうえだけで主張することではない。プロレタリアートの利害とは、労働者階級の個々の利害にあるのではなく、全プロレタリアートの共通利害に、すなわち資本主義を打倒し、共産主義社会を樹立すること、プロレタリアートの経済的解放、人類の解放としてのプロレタリアートの解放にこそそれはある。それゆえ「プロレタリアートの立場と利害」や「プロ独の思想」を主張するとは、その必然性とその物質的諸条件をあきらかにすることなのであり、それは社会の唯物論的分析と唯物論的標値によつてこそなしうることなのである。だからこれらの言葉の上だけの主張は、無意味であるのみならず、このような分析を行うことを実際には押しとどめることになるため、反動的である。「その階級の性格は、こういう全人民的暴露を組織するものが、われわれ社会民主主義者であるということ、—煽動によつて提起されるいっさいの問題が、故意のものか故意のものでないかを

問わず、マルクス主義のすこしの歪曲をも大目に見ない、一貫した社会民主主義的精神に立って解明されるということ、——全人民の名による政府にたいする襲撃をも、プロレタリアートの政治的独自性をまもりながら行われるプロレタリアートの革命的教育をも、労働者階級の経済闘争の指導をも、すなわち、つきつぎにプロレタリアートの新しい層を立ちあげさせてわれわれの陣営に引き入れる労働者階級とその搾取者とのあいだの自然発生的な衝突の利用をも、このすべてを結びつけて渾然たる全一体とする党が、この全面的な政治的煽動を行うということ、こういうことに現れるのである。」(同四六二—四六三頁)

まさにこのように、マルクス主義のいささかの歪曲をも許さない、首尾一貫した共産主義的な見地による唯物論的な分析によってこそ、われわれの政治的暴露の階級的な性格が保証されるのである。

さてこのような「政治的暴露のためのこのような理想的な聴衆は、ほかならぬ労働者階級である。労働者階級は、全面的な、生き生きとした政治的知識を、なによりもまさに、またなによりも多く、必要としており、——この知識を積極的な闘争——たとえその闘争がなにも一つ『目に見える成果』を約束しなくとも——に転化する能力をもっとも多くもっている。また全人民的暴露のための演壇になれるのは、全国的な新聞だけである。『現代のヨーロッパでは、政治的機関紙なしには、政治運動の名に値いする運動は考えられない』。(同四六一頁)。「現代では、真に全人民的な暴露を組織する党だけが、革命勢力の前衛となることので

きよう。」(同四六二頁)

先に述べたように、現在の日本の共産主義運動の現状は、一九世紀末から二〇世紀初頭のロシアと同じように、大衆の自然発生的高揚がいろいろな形をとって広範にあらわれ、他方、運動の指導部においては動揺と混迷が支配しており、経済主義が広範に登場し、共産主義者の任務をひくめているのである。だから「現代のように社会民主主義的任務がひくめられているときには、『生きた政治的活動』はもっぱら生きた政治的煽動からはじめるほかになく、そしてこの生きた政治的煽動は、ひんぱんに発行され規則たたく配布される全国的新聞なしには不可能」(同五四二頁)なのであって、われわれもまたこのことから始めなければならぬ。それ以外にはありえない。

我々は当面の革命において、全人民的蜂起をめざしている。全人民的な蜂起は人為的にはつくりだすことはできない。また蜂起や革命的状況は、われわれの主體的な条件と無関係にしばしば起る。われわれは、どうすれば革命を見おとさないのか、また革命に立ち遅れることをなくすことができるのか。

「『イスクラ』のように、その綱領といわず、戦術といわず、組織活動といわず、いっさいのもの重点を全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見おとす恐れはもっともすくないのである。……そして、その革命がなによりも第一にわれわれに要求するのは、煽動における熟達と、あらゆる抗議を支持する(社会民主主義的なやり方で支持する)能力、自然発生的運動に方向をあたえ、それを味方の誤謬からも敵のわなからもまもる能力とで

あろう！

こうして、われわれは、共通の新聞のための協同活動によって全国的新聞を中心とした組織をつくるという計画を、なぜわれわれがとくに主張するかという理由の最後のものにたどりついた。このような組織だけが、社会民主主義的な戦闘組織になくてならない柔軟性を保証するであろう……。爆発や市街戦だけを予定したり、あるいは『平凡な日常闘争の漸進的な歩み』だけを予定して、党組織を建設するのは、このうえない誤りであろう。われわれはつねにわれわれの日常活動を遂行しなければならぬし、またたつねにあらゆる事態にたいする用意をもっていなければならぬ。なぜなら、爆発の時期と沈静の時期との交代をまえて予見することは、ほとんど不可能なばかりかきわめて多いし、またそれが可能なばかりか、この予見を組織のつくりかえに利用することは、できないからである。……この新聞を中心としてひとりで形づくられる組織、この新聞の協力者(もともと広義の協力者たち、すなわちこの新聞のために働く人々の全部)の組織こそ、まさに革命の最大の『沈静』の時機に党の名誉と威信と継承性をすくうことにはじまって、全人民の武装蜂起を準備し、指定し、実行することにはじまるまでの、あらゆる事態にたいする用意をもった組織であるだろう。」(同五五五—五五八頁)

レーニンが全面的政治煽動と政治的暴露を、全国政治新聞の計画を何故に重視したか明らかになったであろう。

旧来、われわれ新左翼は、先に述べたように、どのようにレーニンの言葉で自己をかざりたてようが、結局のところまったくの

俗物共と同じように、政治的暴露を単に「政治」のことについて述べればそれでことたれりと考え、また全国政治新聞について、新聞さえだせば、レーニンのいう全国政治新聞の役割ははたせるのだと考えてきた。だがいかにそれが、レーニン主義と無縁であり、レーニン主義をいやしめるものでしかなかった。われわれはこのような誤ったレーニン主義の理解を清算し、真に全面的な政治煽動と全面的な政治的暴露を行うレーニン主義的な全国政治新聞をつくりあげなければならない。だがこれは、全面的な政治煽動と政治的暴露、全国政治新聞の重要性を単に理解するだけでは、それらをレーニン主義的に復権させることはできない。われわれ自身の思想的転換が同時に要求されているのである。レーニン主義を復権し、中央集権的な革命党を建設しよう。

戦う労働者の新聞

プロレタリアの旗

共産主義者同盟全国委(ボルシェビキ)

政治機関紙

月二回(10・25日)発行 一部 100円

労働者通信

全国労働者政治委員会(準)機関紙

《創刊号》

定価五〇円

一、発行にあたって

一、沖縄闘争報告

電通現闘団報告

手記——現地闘争に参加して(一労働者)

一、平和台五周年にあたって

一、寄稿——太田垣君を守る会

労働者のかい殺しをゆるさないぞ!!

《第二号》

定価一〇〇円

全国労働組合活動交流集会に向けて

——報告——電通

谷川運輸

S社(民間大手電機)

第六章

北原イズム批判と組織テーゼ

(一) 革命的理論なくしては、決して革命的運動も、又、革命的組織もありえない。

(1) マルクス主義の学説は、どのようにして、生み出されたのか。
「学説としての社会主義は、プロレタリアートの階級闘争と同じく、今日の経済関係のうちに根ざしており、それと同じく、資本主義のつくり出す大衆的貧困と、大衆的悲惨とに対する闘争のうちから発生してくるものである。けれどもこの両者は、一方が他方から生まれるのではなく、並行的に成立するものであり、又、それぞれ違った前提条件のうえに成立するのである。近代の社会主義的意識は、只、深遠な科学的洞察をもととしてはじめて成立しうるも

のである。」(カウツキー、『何を為すべきか』(レーニン)より)

(2) 社会主義的イデオロギーのいかなる軽視も、いかなる離反も、ブルジョアイデオロギーを強化する。

「労働運動の自然発生性へのいかなる拝跪、『意識的要素』の役割、つまり、社会民主主義の役割のいかなる軽視も、……労働者に対するブルジョアイデオロギーの影響を強めることを意味する。」(レーニン)
「自然発生的な労働運動とは組合主義であり……組合主義とは、まさしくブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化を意味する。だから、我々の任務、社会民主主義者の任務は、自然発生性と闘争する事、ブルジョアジーの庇

護の下に入ろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から、労働運動を引き離して、革命的社会民主主義の庇護のもとに引き入れることである。」(レーニン)

(3) 指導的カースト、即ち共産主義者の義務とは、何か。

「とりわけ指導者の義務は、全ゆる理論的問題について増々自分の理解を深め、古い世界観につきまもの、従来の空文句の影響を増々脱却し、そして、社会主義が科学となつたからには、また科学としてとり扱われなければならない事、即ち、学習されなければならない事を、たえず心にとめておくことである。このようにして獲得され、増々明らかになってゆく洞察を、労働者大衆の間にいよいよ熱心に広め、党と労働組合の組織を、いよいよしつかり固める事が肝要であろう。」(エンゲルス)

(4) 我々にとつて、この見解が、特殊に重要であり、死活を握っているのは何故か。

「それは、何よりも、我が全国委の歴史的任務(マルクス・レーニン主義の革命的復権・スターリン主義の打倒)が今だ端緒にいたばかりであり、その依拠すべき思想と組織は、『今ようやく形づくられつつあり』、『今ようやく、自分自身の個性をつくりあげつつあるところであり、運動を正しい道から引き離すおそれのある他の革命的思潮との対決を終るには、ほど遠いのである。……このような事情のもとでは、見して『たいしたことはない』ようにみえる誤りが、このうえなく悲しむべき結果を引き起こさな

いとも限らないのである。」(レーニン)

「スターリン主義と反スターマルクス主義の恐しい程の重包囲の中にあつて、我々の歴史的任務は本当にまだ開始されたばかりであり、第一歩を踏み出したにすぎないのである。……マルクス、レーニン主義の復権をかけた、革命的左翼の『まる一時期』に対し、清算—革命的揚棄の戦闘宣言を発した我が全国委の精神は、『寛大』であるよりは、徹底して『狭量』であらねばならない。原則のいつ脱や、折衷主義に対しては、苛酷なまでに非妥協であらねばならない。」(「経済主義に全面戦争を布告せよ」)

(注1) 北原イズムはなぜ経済主義なのか。

北原イズムは、このテーゼを、体系的に否定し、「先進的な理論に導かれる党だけが、前進闘士の役割を果たすことが出来る」というレーニンの提言を否定する。それは、理論と組織を切断し、革命的理論に、「指揮系列」を対置し、そのすまに全ゆる経済主義、手工業性を注入する。十月中央委三号決議は北原イズムの全面発展の姿である。

□ 革命的理論(マルクス、レーニン主義)で武装された革命組織は、「全面的政治暴露」を通してのみ、労働者階級の前衛の位置を占めることが出来る。従つて、又、労働者階級を支配階級に高めあげる革命的運動を創出し発展させ指導する事が出来る。

(1) 革命組織の日常的活動の基本を為すものは、全面的政治暴露

煽動である。

プロレタリア人民は、純粹の理論的見地から、このマルクス・レーニン主義が正しいかどうかを判断することはない。彼らのマルクス・レーニン主義に対する立場は、自分達の敵や、賃金奴隷制度に対する闘争の中で、この思想が、明確な指針と成果を示す時に定められる。

「我が党組織の活動の基本的な内容、この活動の焦点をなすものは、もつとも強力な爆発の時期にも、もつとも完全な沈黙の時期にも、同様に行なうことが出来るし、又、おこなう必要があるような活動でなければならぬ。すなわち、全ロシアにわたつて統合され、生活の一切の側面を解明する、もつとも広範な大衆を対象とした政治的煽動の活動がそれである。」(レーニン)

(2) 全面的な政治暴露、煽動とは何か。

第一に、煽動・暴露が「経済的基盤のうえに立つ政治的煽動」だけに限定される事なく、国民の全ゆる政治生活を、取り扱う事であり、第二に、自己の階級に関する事だけではなく、住民の全ての階級、層、集団に加えられる、ありと全ゆる専横と抑圧、暴力と不法の事例に、共産主義者の見地(即ち唯物論的)から、反応する事であり、第三に、それらの全てを、共産主義的意識(即ち、自分達の利害が、現代の政治的、社会的制度の全体と和解しえない対立にあり、この対立は、プロレタリアートの独裁によって、決着づけられねばならないという意識)の浸透、宣伝と、固く

結びつける事である。

「労働者階級の自己意識は、現代社会の全ての階級の相互関係についての完全に明瞭な理解……をもつことと結びつき離せないように結びついている。」(レーニン)

(注2) 12・18路線は、これらの原則を、全く放棄した。

「権力との関係で、非合法下におかれている党活動はレーニン時代のような『文書配布』ではなく、軍事活動であること、……とした致命的な誤りこそ、12・18路線が政治的破産に追い込まれ、権力に敗北した、重要な根拠の一つである。戦争は政治の継続であることに對する全くの無理解。

(注3) 従来の「全国政治闘争」の概念は、我々にあつては、レーニンの言う「政治暴露」に相当するものの如くに考えられていた。だが、「全国政治闘争」は、日常的な、「全面的政治暴露・煽動」活動の成果と基礎のうえに組織されない限り、逆に低めるものになってしまうのである。動員主義の本質はこの点を巡つて存在するのだ。

(注4) 経済主義とテロリズムにおける共通性のレーニンによる指適は、重要である。「両方とも、政治的煽動を行い、政治的暴露を組織する仕事における自分自身の積極性を発展させることには、十分の注意を払つてはいない。だが、この仕事は、今日でも、又、他のどのような時でも、他の何物かによって、代用させる事は出来ないの

である。

①「全国政治新聞の計画」のみが、あらゆる方面から、ますますの蜂起の準備を開始すると同時に、自分の緊切な日常活動を、只の一瞬も忘れないもつとも実践的な計画である。

(1)「全国政治新聞」だけが、全面的政治暴露を組織することが出来る。

「こまごまとした暴露」や「経済主義的暴露」に陥りがちな地方政治、地方主義を克服して、国家の全体的な政治情況全般、即ち国政を扱い、権力問題を持ち込む事が出来るのは、全国政治新聞だけである。革命組織の手工業性、地方主義の基礎のうえに全面的政治暴露を組織することは出来ない。」(組織論を確立する為(II)第四章)

(2)全国政治新聞は、集団的宣伝者、および集団的煽動者であるだけでなく、又、集団的組織者でもある。

「この新聞は、階級闘争と人民の憤激の一つ一つの火花をふきおこして、一般的な火災にする巨大な鍛冶用ふいごの一部分となるであろう。……規則的で、……共同的なこの事業を中心にして、試練を経た、戦士の正規軍が系統的に選抜され、訓練されてゆくであろう。」(レーニン)

「我々の『計画としての戦術』は、今すぐ突撃を呼びかけることを拒否し、『敵の要塞の本格的な包囲』を整備するように要求すること、いいかえれば、正規軍を集合し、

組織し、動員することに全力をそそぐことを要求することにある。」(レーニン)

(3)全国政治新聞を中心にした組織だけが、武装蜂起を遂行することができる。

「このような組織だけが、社会民主主義的な組織になくてはならない屈伸性を保障するであろう。すなわち、きわめて多種多様な、急速に変化してゆく、闘争条件にただちに適応する能力を……保障するであろう」(レーニン)

「この新聞の協力者達の組織こそ、まさに最大の革命的『沈滞』の時期に党の名誉と威信と継承性をすくうことに始つて、全人民的武装蜂起を準備し、指定し、実行することに至るまでの、あらゆる事態に対して、用意を持った組織であるだろう。」(レーニン)

四革命組織の統一は、革命論上の統一、すなわち「綱領・戦術・組織原則上の見解」を基礎とした統一にまで高めあげられて始めて、確固とした安定したものになる。

「合法マルクス主義は、『思想的統合』の必要性を認識しないばかりか、『多様な思想、批判の自由』を主張し、『いっさいの首尾一貫した熟考に基づく理論からの自由を主張し、折衷主義と無原則性を唱えて』それに反対したからである。」(組織論II)

「我々にとって、重要な事は、『思想的、組織的統合』こそ重要である事の確認とその思想の勝利なのである。そ

れなくして『新聞こそ思想的・組織的統合の環である』と

いう百の主張と、百の論証、百の確認がどんな意味を持つであろう。経済主義者の本音はこうなのだ。『なる程、思想的組織の統合にとって新聞は、このうえなく有効であろう。だが我々にとっては、思想的組織の統合は、呪うべきものであり、思想的自由・組織的多様性の方が、重要なものだ』(ク)

五革命組織の組織原則とは、組織が、「綱領、戦術上の見解」を最も良く、体現し、遂行しうる為の組織上の原則のことであつて、この原則の基本概念を、我々は、プロレタリア中央集権主義と呼んでいる。

(1)綱領・戦術上の見解の分裂と不統一のうえに組織原則は打ちたてられず、中央集権主義も又、ありえない。

「共産主義の党にとって、綱領・戦術・組織原則上の見解の統一が党の団結の土台であつて、この見解の統一が破壊されると、党も又破壊されるのであつて、この事は共産主義運動の全歴史が示している冷徹な事実である。」(組織論I)

(注5)北原イズムとは、この冷徹な事実から、「だからより一層、見解の統一を精力的に、死活をかけて推し図らねばならない」という結論を導き出すのではなくて、全く反動的に、「見解の統一が破壊されても党を維持、防衛する思想をつくりあげることこそ、この事実に対して

為さねばならぬことだ」と総括したのである。

「だが北原イズムは、そのような根本的分岐がもたらされた時に、全党に対し、革命的分岐を推進し、革命の見解を選択することを指導するのではなく、それらの分岐は『混乱』であり、このような混乱から、『党を防衛する』こと、党の分裂に、何の立場と見解もなく、只反対せよと指導するのである。」(ク)

(2)プロレタリア中央集権主義の原則とは、従つて、単なる「指揮関係の厳格性」を指しているのでも、又、単に、組織運営の規則のみを指しているのではない。

それは、第一に、綱領・戦術上の見解の統一、発展を、団結の基礎にすえる考え方であり、それを、保持・発展させる為の全ゆる組織原則を示している。

それは、第二に、全国政治新聞によつて統合された組織の原則を示している。それは、第三に、革命組織の「革命的運営原則」を示している。

六このような革命組織の、「革命的組織運営原則」は、「民主集中制」以外ではなく、この事は、階級闘争の全ゆる教訓によつて実証されている。

民主集中制の原則は、組織内の全ゆる関係の重要な基礎である。それは、党員の権利と義務、自由と秩序の間を結ぶ原則である。

(1)民主的側面について—民主的側面とは、主として党の総意を

形成してゆく過程における、又、党員の権利の領域における原則である。

主要には、

(a) 第一に、全ての党員が、党の綱領的内容、戦術的立場、又、当面の政治的立場や主要な計画について知る権利があるという事であり、又、党の安全が許す範囲内で全ゆる問題について、全ての者が論議し、たとえ間違つた意見にせよ、まったく自由に、各自の意見を發表する権利があるということである。(全党に対する中央の、下級に対する上級の、基本的な報告の義務)

(注6) 八木沢(西) 一北原一派は、党内闘争の中で、全くこれらの原則に敵対し、暗黒政治とデマ政治で自らの延命を図つた。彼らについては、基本的諸文書を、下部におろさなかつたが、彼らは今日に至つて、そのしつべ返しを受けている。彼らの下部は、今日の分派闘争、党派闘争に全く物質力以外に役立たない。

(b) 第二に、単に知り、論議する権利だけではなくて、その最も基本的な問題(綱領上、戦術上、組織原則上の見解)の決定や変更に関しては、その決定に参加する権利を有しているということである。(党大会および、それに準ずる代議機関の設置の原則)

(c) 第三に、出身階層や又性的なあるいは肉体的な差別等によって、論議や決定の過程、又、党活動上の過程での差

別を許してはならないという事、又、単に許してはならないのみならず、党は内外で、そのような差別と闘い、解放の闘争を担うと同時に、その様な党員の革命的な活動の保障について留意しなければならない。

(d) 第四に、党員は、その指導部とその責任に対して、意見を述べる事が出来、それを信任したり、不信任したりすることが出来る。党員が、自分達の指導部を改革出来るという客観的統制によって、逆に、指導部の責任感の強化、能力の發揮が強化される。又、党員が、自己を不断に、次の新しい指導部が高めあげてゆくという積極性を養う。 (指導部の選出、信任、不信任の原則)

これらのことによつて、党活動における全党の行動力は弱まらずに、逆に強化されるのである。

(e) 集中的側面について——集中的側面とは、主として党の決定の執行過程における、又、党員の義務の領域における原則である。

主要には、

(a) 第一に、諸問題に対して、論議の結果、ある程度の成熟を示したならば、必ず論議を放置せず、当面の指針として、一定の結論、決定を導き出すことである。そうでなければ、論議は単なるおしゃべりに終り、単一の組織的行動力に転化させることができない。

(注7) 北原イズムにおける「討論の徹底平等と命令への

絶対服従」ということは、基本的には、討論はやるが、結論を導き出さなくても良い事、政治的立場や、主張について、単一の結論を下すことはしなくても良いこと、

只そのかわり、「政治的結論」ではなくて、「命令、指揮」には従つてくれということなのである。即ち北原イズムにあつては、「政治的結論」が「軍事的命令」によつて代行されることを、その特徴とするが、これは他ならぬ北原の政治的指導力の欠如を陰蔽する為の、キ弁、強弁である。だから、論破され、破綻したはずの彼の政治主張は、上級機関をたてにとつた「統帥権」とやらに基づく「組織命令」によつて、不断に組織内に侵入するのであり、彼は、このようにして、北原イズムを、侵入させたのである。「思想、政治主張の自由、行動の一致」これが、「討論の徹底平等と命令への服従」なる北原イズムにおける「中央集権主義」の本質であり、これは、「サークル」が、日常の信条にしている組織理念でなくてはなであらう。北原イズムはサークルに適用されてこそ、その真価を發揮することが出来る。

(f) 第二に、その決定の執行過程に対する、服従の義務である。組織的に決定した事項を実施するにあつて、党指導部は全責任を有し、絶対的権力を持つという事である。どのような規律違反も厳しく批判されねばならない。党は、これらの諸原則を實踐する為に、出来る限り、集中し、訓練された中央執行機関を建設しなければならぬ。

(中央執行機関の建設と決定への服従の原則)

(g) 第四に、下級の指導部は上級の指導部に従う。又、党の中央指導部は、あらゆる基本的問題に対する決定権を有しており、(但し、全党の承認を必要とする)どんな下級の指導部によつてとられた決定や主張をも、すべて批判する資格がある。(もちろん無条件ではなく、党全体、階級的利害にとつて必要であると判断した場合のみ、その権利を有するにすぎない) (下級—上級の原則)

(h) 第五に、全ての各級機関は、組織活動における基本的な報告義務を、上級機関、あるいは中央機関に対して負うということである。

この原則を抜きに、党は一日として、中央集権的たりうることは出来ない。中央集権主義の不可欠の原則である。

位置上の従属は単なるたてまえにおとしこめられるのであることを理解してはいない。「プロ本隊の前進と突撃なくして勝利することはできない」ということを、六九年の敗北の中で痛感した我々にとって、やはり、この革命的「位置付け」そのものも、学生の利害の普遍性を主張するためのみ利用されており、六七〇八年の学生運動の高揚をプロレタリアートの組織化へと転化していくための「従属」の提起ではないことは明らかである。

未だ、ここには「大学管理」「大学コミュニケーション」の勝利の展望が息づいているからである。まさに、社学同は六七〇八年の栄光と限界を一身に体理していたといわねばならない。

この文書は、七四年九十月に行われた共産主義者同盟（全国委）中央委員会へ向けて、その第二号議案（諸戦線総括・方針）の一部として、八月同志本田により執筆されたものである。即ち、この文書は伊集院一派との党内一分派闘争の只中で、伊集院一派及び自らの無定見をさらけ出した政治局（後に逃亡した政治局員富田）との闘争の一環として執筆された。だが十月中央委多数派は、経済主義とサークル主義の集大成たる一号議案・三号議案の成立に総力をあげ、この中で二号議案は、かの悪名高き北原の「女解」差別文書ともども「討議にかけない」なる「処置」のもとに、問われていた問題に一切応えることなくみけしたのである。

その結果がどうであったのかは、現状が何よりも雄弁に物語っているであろう。我々は共学同建設にあたって、この文章の地平をふまえさらに深化と飛躍をもちとつていかねばならない。

あらたな革命的學生運動の創出に向け、

共産主義學生同盟を建設せよ

スターリン主義解体・反スタ・マルクス主義止揚・革命的マルクス・レーニン主義復権の旗の下、プロレタリアートの分遣隊Ⅱ共学同を建設し、学生運動の革命的転換を推進せよ。

共産主義者同盟全国委（ボルシェビキ）

中央学生組織委員会

はじめに

ついに新しい時代の夜明けはおとづれた。旧い時代の遺骸は音をたてて崩れ落ち、そのただ中から若き革命家の群Ⅱボルシェビキが産声をあげた。旧関西ブントの業績をことごとく喰いつぶし、経済主義とサークル主義の沼地へはてしなく転落していった旧共産同（全国委）は革命的分子の手によって解体を宣告された。腐臭を放って崩壊する反スタ・マルクス主義が、真のマルクス・レーニン主義によってとつてかわられるときがついに来たのだ。

数回にわたる予備討論を経、七月六日、共産主義学生同盟（準備会）が発足した。奇しくも、社学同全国委員会が七・六の分裂をもって、その実質上の崩壊を遂げたその六年後の同日、社学同を完全に止揚しうる新たな学生同盟が、誕生したのである。結成さるべき共学同は、全共闘運動と、社学同―共青（KYM）の総括にたつて、日本学生運動の輝かしい歴史に新たなページを印す学生共産主義者を産み、育てあげるであろう。

第一章 結成さるべき共学同の基本的性格
と任務

① 共学同はプロレタリアートの「分遣隊」である。

① 建設さるべき共学同の任務は、プロレタリアートの利益に徹底して従属させられねばならない。それは、労働者階級が学生運動にどのような任務を課すのか、ということであって、労働者階級と学生との利害の共通性を見つけ出したり、それらの結合をめざすということではない。

② しかし、「プロレタリアートの利害」とは、「現にある学生運動に対する今ある労働運動の利害」ということではない。それこそ組合主義的見地であり、いわゆる「労働者反対派」の立場ではない。

③ では、「プロレタリアートの利害」とは何か。それは、自らの階級の経済的解放を通して、全人類の解放をも真になしとげることのできる唯一の階級こそプロレタリアートであること、そこからくる労働者階級の本質的な利害のことである。

④ 「この宣言をつらぬく根本思想はつぎのとおりである。すなわち、歴史上の各時代における経済的生産と、それから必然的に生まれる社会の構造とが、その時代の政治史ならびに精神史の土台となっていること、したがって（太古の土地の共有が解体して以来）、全歴史は階級闘争の歴史、すなわち、社会発展のさまざまな段階における、搾取される階級と搾取する階級、支配される階級と支配する階級の闘争の歴史であったということ、しかしこの闘争は、いまや搾取され抑圧される階級（プロ

レタリアート）が、同時に全社会を搾取と抑圧と階級闘争から永久に解放することなしには、もはや搾取し抑圧する階級（ブルジョアジー）から自己を解放できないという段階にたつたこと、これである。」（『共産党宣言』へのエンゲルスの序文）

⑤ プロレタリアートの利害を、最も首尾一貫して貫き、それを指導しうるのは、共産主義者である。

⑥ 「共産主義者は、実践的には、すべての国々の労働者政党のうち、もっとも確固たる、たえず推進してゆく部分であり、理論的には、プロレタリア運動の条件、進路、一般の結果を理解する点で、プロレタリアートの他の大衆にまさっている」「彼らは全プロレタリアートの利害と別個の利益を何ももっていない」（『共産党宣言』）

⑦ 従って、共学同の最も基本的な任務は、自己を共産主義者へと育て、鍛えあげることではない。（別項、第二節で）

⑧ 共産主義者は、プロレタリアートの解放をつうじて全人類を解放する社会主義革命の先頭に立つ。従って、その当面の目標はプロレタリア独裁権力の樹立は、「プロレタリアート総体の革命的成熟」を基礎とした、「階級としての武装蜂起」による権力奪取以外に不可能であり、また維持も不可能である。従って共産主義者の当面の任務は、プロレタリアートの革命的成熟の指導、及び武装蜂起の準備と指導、プロレタリア独裁権力の樹立であり、共産主義者の活動の一切はこの目的に合致したものでなければならず、その出身階層、活動分野の如何を問わず、その全活動の一切を、この目的に合致させ、従属させなければならない。

① そのさい、旧反帝戦線（全国委）における学生戦線の組織化の特徴、とりわけ京都地区における学生組織化の特徴を、反帝戦線の、タチマエは労学単一組織、実体は学生戦線の（組織建設の）独自利害の固守として、徹底的に総括しなければならぬ。それは、かの沖繩本部（もとぶ）現闘派遣拒否問題（今日の西一派の輩のしわざである）として最も露骨に表現されており、綱領的一致の不断の彼岸化と、当面する目の前の運動の、目に見える利益への固守の思想（思想的）一致の追求を「思想一般」

「理論一般」と蔑視する、そのような「思想」（の組織的帰結として、そして（各大学の）基本組織の建設とやらを一切に優先し、金科玉条とするものとして、対決し粉砕していかねばならぬ。経済主義との闘争は、何よりも自己自身との闘争であり、組織活動方法の転換として、共学同建設の背骨を實際にさし貫かねばならない。

② 共学同の最も基本的な任務は、「自己を共産主義者に育て、鍛え上げる」ことである。

共学同の基本的任務を、そのときどきの政治課題を追い求めることのみや、あれやこれやの諸民主主義闘争、諸組織との関わりにおくような、これまでの学生戦線の陥った誤りに墮さしめてはならない。

青年学生に任務について、レーニンは次のように言っている。「諸君は、自分を共産主義者に育てあげねばならない。青年同盟の任務は、これらの青年が学び、みずからを組織し、結束

し、闘争しながら、彼ら自身と彼らを指導者と目している全ての人々とを育てあげるように、共産主義者を育てあげるように同盟の実践活動を組織することである」（レーニン「青年同盟の任務」）

① 「学習し、自分自身を確信ある堅忍不拔で堅固な社会民主主義者に育てあげること、自分たちの組織の主要な目的とするように努力せよ。このきわめて重要で必要な準備活動を、直接の実践活動からできるだけ厳格に区別せよ」（レーニン「中等学校生徒諸君にあたる」）

② 旧共産同（全国委）——第二段階論下の学生戦線は、K地区学生戦線におけるように、「政治闘争—党派闘争」の空文句の呼号のもと、労学ダンゴ組織としての反帝戦線の動員部隊としてのみ学生を位置づけるか、または「学生の任務は学園での〇〇闘争を基本とする」（XX大学）というやり方か、いずれかであった。それは、「きわめて重要で必要な準備活動」——共産主義者へ向けた自己教育、育成、学習など、全く夢想だにしない活動であった。学生のいわゆる「消耗」は日常茶飯事であり、指導部にとっても、余り意に介さないこととなっていた。学生が——つまり組織メンバー個々が、全体が——実のところ、どのような思想であるのかについて、問題となったことはほとんどなかった。

我々は、以上のような誤りを徹底的に総括しぬき、共学同の最も基本的な任務として、「自己を共産主義者に育てあげる」ことをすえなければならない。

しかし、学習・教育は、共産主義のスローガン・結論を習い覚

えることではない。この学習、教育、陶冶の一步を歩を、資本主義社会に対するプロレタリア・人民の「たえまない闘争」に結びつけてこそ、我々はじめて共産主義を学ぶことができるのだ。

(注) また、レーニンは一九二〇年に、青年、学生の陶冶、学習、教育を「労働者・農民の労働と結びつけるべき」ことを提起し、共産主義的土曜労働への青年学生の参加の意義を説いている。このことの意義は、「権力奪取後だから」などと切り捨てられるべきものではなく、わが、建設されるべき共学同において、我々は、この精神を組織実践の中にさし貫かねばならないだろう。

「共産青年同盟は、全ての青年を自覚した、規律ある労働のなかで教育しなければならない」(レーニン「青年同盟の任務」)

③ 共学同の実践的任務の軸は、蔓延する無党派主義との間に確固とした分界線を引き、ボルシェビキ党建設と固く結合した学生運動を組織し抜くこととでなければならぬ。

旧共産同(全国委)第二段階における活動は、部落解放闘争、入管闘争などにおいて最も典型的にあらわれたが、被抑圧・被差別大衆の闘いとその組織に対して、「糾弾を」「受けとめ、応える」、あるいは、せいぜいのところ、その存在そのものを糾弾として受けとめる、ということの下に、眼前の現実に対して、その中に変革の条件と主体を見抜き変革へむけての闘いを組織するの

でなく、結局のところ、糾弾を糾弾として受けとめることを第一義とする、つまりは現実を違ったように受けとめよ||解釈せよ、ということを一義とする観念論的、小ブル的立場にもとづいていた。とりわけ、学生戦線における活動は、そのような誤った観点のもとに、諸闘争の後尾につく動員部隊の形成のための運動、組織に墮してきた。このような活動の中で、必然的に無党派主義や、あるいは社会排外主義・日和見主義との分界線をあいまいにする傾向を広範に生んできたのである。

我々は、このような誤りを総括し、共学同の実践的任務の軸を、全面的政治暴露を通して、蔓延する無党派主義と闘い、社会排外主義、日和見主義との確固たる分界線を引くことにおかねばならない。

第二章 反帝戦線(全国委)に至る共産同の学生組織建設の総括的視点

④ 第二次ブントにおける社学同の位置づけは、「労働戦線における労働者政治組織にあたるものが、学生戦線における社学同……」「先進的大衆ないしは、階級として組織されたプロレタリアートの部隊が社学同……」「(「理解戦線」) 67、日向論文) などというように、革命党の綱領におけるプロレタリアートの指定に従属させるものとしての学生運動の任務ではなく、社学同の存在そのものに階級性を見出すという小ブル的誤りと意味付与に陥つ

た。

⑤ 六九年四・二八へ向けての旧赤軍派を中心とした部分によって、またニセ「共産主義」14号日向論文によって提起された社学同の共学への改組は、「武装蜂起という全人民的政治課題は産別組織では担えない」という観点から、いづれも労働者階級(と共産主義者)の任務とそれへの従属として問題を立てるのでなく、実体としての社学同に階級の意味付与をすることから、共学への改組にそれを単に横すべりさせるといふ共通の誤りであった。(七〇年七月「共学への改組——反帝戦線(「共学の戦闘表現」) 結成) 恒常的武装闘争路線の推進の立場から階層別同盟の飛躍を提起しているのが、「戦旗」(七〇年四・六月) 高見沢論文である(「戦士」復刊7号||共学同発行に収録)。これは、言葉としては「戦略戦術の党から綱領の党へ」を提起しているが、その内容たるや、「軍事が問われる」から、(これからは) 戦略戦術の党ではやっていけない、という、またしても、階級闘争のあれやこれやの現局面の中で、そのことのみで「綱領的団結」を語っている。ここにおける「軍事を組織する党」「恒武闘争—党・軍・統一戦線」は、まさに学生組織の位置づけに貫かれているが、同時に、当時の全政治組織路線の誤まりとして総括されねばならない。

cf. 「正規軍を組織し、全人民の武装を促進してゆくところの党細胞、共学なのであり、大衆闘争の組織化のみでなく、革命戦争の基本的組織化の単位を担うものとして、党細胞、新たな共学が建設されるべきこと……」「党・軍・統一戦線の組織

論は、……共産主義運動そのものを現在の恒常的武装闘争の段階にそって展開していくものとして、二四時間の党的生活の規準から軍の規律と行動綱領、大衆闘争の宣伝、煽動の体系として、構築されていかねばならない」(「戦士」復刊7号)

第三章 全共闘運動の総括について(略)

第四章 建設されるべき共学同の組織体制について(略)

57 (略)

共産主義学生同盟規約（第一次草案）

— これは、七五年七月×日、共産主義学生同盟第一回準備会で確認されたものである。 —

前文（別途、「プロレタリアートの分遣隊」であること、革命党に指導されること、スターリン主義・反スタマルクス主義立場、単一革命党建設の一翼を担うことを明記しつつ、組織の目的と性格を明らかにする）

第一章（同盟員）

第一条 同盟の趣旨・規約を認め、同盟の一定の組織に入つて活動しようとする大学生・高校生並びにそれに準ずる者は同盟員になることができる。

第二条 同盟への加盟は、二名の同盟員の推せんにより所属支部が決定し、中央委員会の承認を得て確認する。

第三条 同盟員の義務は次のとおりである。

- ① 同盟の目的に合致した生活様式と活動
- ② 同盟の決定の実践。
- ③ 同盟員の獲得と機関紙誌の拡大。
- ④ 規定の同盟費の納入。
- ⑤ 共産主義理論の活学活用。
- ⑥ 同盟の機密の保持。
- ⑦ 同盟以外に關係している一切の組織・団体に関する詳細な報告。

第四条 同盟員の権利は次のとおりである。

- ① 同盟の各級機関に対する所定の選挙権及び被選挙権。
- ② 同盟の会議・刊行物での「自由な討論」
- ③ 同盟各級機関と組織及び個人に対する意見の提出。

第二章（同盟の組織と機関）

第五条 支部は、同盟の基礎組織であつて三名以上の同盟員で構成する。

第六条 同盟の基本的組織構成は、支部、地方ブロック、中央委員会、大会である。

第七条 大会は最高決定機関であり、年一回以上、中央委員会又は $\frac{1}{2}$ 以上の支部の要求によつて召集される。大会は中央委員及び代議員によつて構成され、次のことを行なう。

- ① 中央委員会の報告の審議と賛否の決定。
 - ② 結成趣旨と規約の決定及び改正。
 - ③ 中央委員の選出と罷免。
 - ④ その他中央委員会が請求する事項。
- 第八条 中央委員会は、大会の決定に基づき、大会から大会までの期間、同盟の指導を行なう。
- 第九条 中央委員会は、年二回以上、中央書記局又は $\frac{1}{2}$ 以上の中央委員の要求によつて召集され次のことを行なう。
- ① 中央書記局報告の審議と賛否の決定。
 - ② 委員長並びに中央書記局員の選出。
 - ③ 同盟組織と各級機関の創出、改廃の決定。
 - ④ その他規約が定め中央書記局が請求すること。

第十条 同盟の各地方組織は中央委員会の決定に基づき各地方の実情に応じて指導機関を設置することができる。
各地方組織は、中央の決定に異議がある場合は再審議を求めることができる。

第十一条 同盟の全ての会議は全体の過半数をもって成立し、出席者の過半数の賛否で議決される。

第三章（同盟の規律）

第十二条 第三条の同盟員の義務を守らず同盟員の権利を犯し、或いは大衆を裏切る行為をなす者は、最高除名に至る処分を受ける。

第十三条 正当な理由なく、三ヶ月間続けて同盟活動を放棄し、同盟費の納入を怠る者は権利停止を通告される。

第十四条 同盟の中央組織に属する同盟員の処分は、中央委員会の決定を経て、大会で承認されねばならない。

第十五条 処分を受けた同盟員は、大会に至るまで、申請を行なうことができる。

第十六条 同盟の財政は、同盟費を基礎とし、その他事業収入、寄付等によつてまかなう。

同盟費は原則として毎月三千円とする。

第四章（付則）

第十七条 この規約は、〇〇〇〇年〇月〇日をもって発効する。
第十八条 この規約に定められていない問題については、中央委員会が規約の精神に基づき処理する。中央委員会はこのために細則を作ることができる。ただし細則は大会で確認されねばならない。

共学同通信

共産主義学生同盟（準）機関紙 各号五〇円

《創刊号》

- ◎革命的學生運動の創出へ向け、共産主義學生同盟を建設せよ
- ◎共学同規約第一次草案

《二号》

- ◎海洋博粉碎・皇太子沖繩上陸阻止 現地闘争報告

《三号》

- ◎八・二 三木訪米阻止、現地羽田に決起せよ

全力を挙げて中央学対一学生細胞を組織せよ

七四年八月 共産同(全国委) J・H

① 我々はなぜ中央学対を建設しなければならないのか。

(1) それは、何よりも党をプロレタリア革命党として建設し打ち鍛えるためであり、党のプロレタリア的品格を鮮明にするためである。

① 同盟が獲得すべき「綱領―組織―戦術」は、いうまでもなくプロレタリアートの指針であって、それ以外ではない。同盟はプロレタリアートの解放を通じて全人民を解放する社会主義革命の先頭に立つのであって、従って樹立すべき権力はプロレタリア独裁権力である。

② プロレタリア独裁権力の樹立は、いうまでもなく「プロレタリアート総体の革命的成熟」を基礎とした「階級としての武装蜂起」による権力奪取以外に不可能であり、又維持も不可能である。

③ 従って、同盟の当面の任務は、プロレタリアートの革命的成熟の指導、及び武装蜂起の指導、プロレタリア独裁権力の樹立であり、同盟の活動の一切は、この目的に合致したものでなければならず、その出身階層、活動分野の如何

を問わず、全同盟員も又その活動を一切をこの目的に合致させ、従属させなければならない。

(2) にも拘らず、同盟「第二段階論」の実践は、「民主主義闘争とプロ独」の問題に対して最終的決着をつけることができず、その意図に反して實際上「プロ独」を彼岸におしやうてしまった。その結果、民主主義闘争の階級的品格が不断にあいまいになり、又従ってその闘争の担い手の階級的品格、その闘争の階級的基礎が不断にあいまいにされた。「あいまいにされた」ということはとりもなおさず非プロレタリア的品格ということであり、小ブル的ということである。この同盟の限界は、従って一般的に「党建設が政治路線の基礎になかった」ことではなく(首都圏委「反帝戦線」15号)、第二段階的・政治路線そのものの限界として徹底的に切開されねばならないものとしてある。路線が小ブル的である限り、呼号する党建設も結局は小ブル的ではないのだ。小ブルの路線に「党建設」と「党派闘争」でテコ入れしたところで、プロレタリア的に転換されるわけではなく、文字通り小ブル急進主義への純化以外ではない。今問われている事は、第二段階の実践を小ブル急進主義へ純化することではなく、「プロレタリア独裁」に引きつけて徹底して切開しめることによつて、プロレタリア革命路線へと飛躍せしめることなのだ。

(3) そして、この路線における小ブル的傾向は不断に組織内に小ブル的思想を流入させ、又他方で同盟の依拠する基礎において小ブル階層の比重を増大させた。

① とりわけ「反帝戦線」という「労学だんご組織」は、決して学生の小ブル性を解体し、プロレタリア的質で武装させることにおいて成功したわけではなかった。むしろ戦闘団としてしか機能しえない限りにおいて、不断に、プロレタリアートを小ブル思想への屈服に導きかねない危険性を有していた。これは一般的に学生出身だから小ブル的だというのではなく、むしろ、その個々の小ブル性を解体する過程を経る事なく党に結集するといった党の構造の問題である。かつて社学同の質的飛躍として提起された「共青」への再編も又、反帝戦線への組織化も逆にプロレタリアート内部に小ブル思想を流入させる水路にしかなりえなかったことであり、何よりもプロレタリアートを革命的に組織すること、プロレタリアートが諸層を指導する事の観点から提起されたのではなかったということである。

② そのことは、学生が労働者と同じ組織に結合されるという、外見上はプロ的質への飛躍の様に映じたにしても、結局はこの二年間において真に「プロレタリア階級内の活動家」として飛躍した学生活動家が何名いたかということであり、その割合は共産同史上においても最低のレベルに属するであろうと思われる。

③ 学生戦線の指導者は、何よりもプロ階級内部のオルガナイザーを輩出することに意を用いず、学生戦線の利割を軸とする傾向に屈服し、

④ また地区党指導者は、武装蜂起にむけて、地区労働者組

織を何よりも工場、拠点細胞として形成することに意を用いず、党指導部の動員主義傾向の中で安易に学生戦線に依拠する傾向に屈服しがちであった。

⑤ このような状態の中で、逆に学生戦線の革命運動に占める位置が不断に不鮮明にされ、あるいは学生反帝戦線の任務が不鮮明にされ、小ブル的傾向の温存を許してきたのである。従って「学生戦線の小ブル性」を語るとき、その四割まで指導上の総括として語られねばならない。

(2) 建設さるべき「中央学対一学生細胞」の任務は何か。

(1) 何よりも「武装蜂起―プロレタリア独裁」の同盟の革命路線の推進が利害の規準でなければならず、「学生細胞」は、プロレタリアートの利害を代表するのであって、学生の利害を代表するのではない。

① 「学生細胞」は、従ってプロレタリアートの指導者としての質で打ち鍛えられねばならず、学生運動に送り込まれた「プロレタリアートの分遣隊」である。それは何よりも、同盟がプロレタリアートの組織であるからである。

② 従って「学生細胞」は学生運動の利害をプロレタリアートの利害に従属させること、或いは、プロレタリアートの利害に合致した学生運動の発展を図る事が学生運動内における任務である。

③ 我が同盟の現状からすれば、何よりもプロレタリアート

プロレタリア独裁と女性解放(序説)

——党の綱領的基礎と女性解放——

生 田 民 生

の組織化と工場―拠点細胞の建設が大きな課題であり、「学生細胞」は先進的學生大衆の戦闘力、献身性を小ブルのそれとして利用するのではなく、プロレタリアートの組織化へと参加させる事において指導しぬかなければならない。この点に「学生細胞」の今日的任務がすえられなければならない。

(2) 「学生細胞」の組織的性格

① 「学生細胞」は、中央学対の指導下において、上記の位置づけに沿った活動を展開しなければならない。そして地区党(プロの組織化)を無条件に担わねばならない。だがそのことの「代償」としていわば地区党を学生運動の指導部におとしこめては絶対にならない。そのための「中央学対―学生細胞」の建設なのである。地区党組織の任務は、あくまで、プロの組織化、工場・拠点細胞の建設であって、「学生細胞」はその事業を協同して担うのである。

② 従って「学対―学生細胞」は、同盟内において労働者階級に対して学生の利害を対置するものでは決してない。またあってはならない。「学対―学生細胞」の活動の成果は、何よりもプロレタリアートの陣型の強化として蓄積されていかななくてはならない。

③ 従って「学生細胞」の任務は、「戦闘団」の形成一般ではないし、また学生運動のダイナミズムや先駆性を過大に意味付与することでもなく、その組織的基本性格は、何よりも「プロレタリアートの分遣隊」として定められねばな

らないのである。

(3) 中央学対―学生細胞の当面の任務方針(略)

(注一) 社会学同の位置付けの小ブル性について(略)
 (注二) ○○指導上の諸問題について(略)
 (注三) 『理論戦線』七号日向論文には、このような問題意識はほぼ欠落している。だが、同七号八・三論文は、若干、この問題にそって提起している。批判的に検討せねばならない。

① 「ソビエト建設の問題を、生産点内部での組織づくりの視点から捉え返す」という課題を、大学・学園に引きつけて「大学もまた社会的―生産過程Ⅱ生産点」であることを論証して、「学生による大学管理」を「生産過程におけるプロレタリア自己権力に等しい」という位置づけを与えているのが、八・三論文である。だが同時にここでは一歩進んで「もちろん我々は革命的プロによるプロ本隊の生産過程での組織化に従属するものとしてのみこの大学管理(イデオノの生産管理)を位置づけなければならない」、また「大学管理は小ブル自己権力思想としてではなく、プロ自己権力思想の一環として位置づけられてはじめて意味をもつ」として、学生運動の客観的位置を指定しようとしている。だがやはりここにおいても、「位置付け」の問題であり、「プロ本隊の生産過程での組織化」に最も革命的な学生を動員することの意義、それこそが「真の従属」であって、

一九四頁へつづく

目 次

はじめに

第一章 永井の自己批判にあらわれた俗流唯物論

はじめに 永井一派の政治的位置

一節 自己批判を、個人の属性批判に押しとどめる永井

二節 差別者永井の「北原批判」にみる、俗流唯物論

第二章 永井の女性解放理論にみるマルクス・レ

一節 ニン主義の日和見主義的偽造

二節 女権論に導く永井理論の概要

三節 唯物史観を導きよる糸として

四節 家族の歴史的形形成・発展と女性解放の物質的条件(基礎)

五節 資本制生産の発展と女性解放の物質的条件(基礎)

女性解放の二つの物質的条件をめぐる永井のマルクス・エンゲルスの日和見主義的偽造

第三章 「国家―暴力」論による、革命的プロレ

タリア独裁の否定と女権論への転落

一節 永井理論の「魔法のつえ」

二節 マルクス主義国家学説の核心

一節 永井の弁証法の折衷主義的偽造によるマルクス主義国家学説の日和見主義的偽造

三節 永井理論の実践的帰結

一節 プルジョア女権論への転落

第四章 階級の廃絶(による経済的・社会的平等)

とプロレタリアートの革命的独裁

一節 共産主義婦人解放の綱領的基礎

第五章 共産主義婦人解放の組織問題によせて

略

序説(上)では、主に、「生田意見書」の全面的総括を軸として展開してきた。

それは、一つには、この「意見書」が、旧全国委中央指導部の根本的対立を形成した当初における、唯一の女性解放をめぐる理論問題(一党の綱領上の基礎)を扱ったものであること、二つには、この「意見書」が、過ぐる昨秋以降の「T糾弾」全国委糾弾」の発展に呼応して、闘われた、党内闘争の全面化—中央指導部内政治的分岐の形成—全党女性会議の開催の一つの吸引力を成した事、三つには、それ故にこそ、五〇・一・二六全党女性会議の開催以降、党内闘争の最前面に躍り出た、女性同志達の「党の革命」を、更に飛躍させていくためには、その指導部(当時の中書記女性会議であり、その指導的支柱を生田意見書によっていた)自身の決定的飛躍が問われていたこと、その点における、意見書自身の「反対派的性格」、「いぜんとした理論上のあいまいさ」多くの誤り」等々の根拠を内在的に切開き抜く事を通して、女性同志達の党内闘争の全面的発展と、T糾弾闘争に真に党的に心える道を、あきらかにせんとしたものであった。

と同時に、それらの全過程こそ、一方で、「女性解放」を一課題として、旧全国委の諸民主主義闘争の一つに追加することで、

その「自己批判」をすませようとする部分と、文字通り、T糾弾に始った、「女性解放が、プロレタリア階級の解放の不可欠の一環」とする立場—旧全国委の、「綱領・組織・戦術」の(この一切を支える、マルクス・レーニン主義の根本思想に基礎づけられて、)全面的総括として、自己批判する部分との分岐を鮮明にし、我が、「12・18路線—全国委」の内在的総括—革命的清算・止揚の内に、共産主義婦人解放運動の革命理論の基礎を発見し形成する過程でもあった。

(上)では、これらは、第一に、革命党にとって、プロレタリア階級闘争の戦闘的指針としての綱領の一環として、闘い取られねばならないこと。第二には、その綱領上の基礎を築くところの、革命理論—マルクス・レーニン主義の革命的復権に支えられてであること。第三には、具体的な、女性解放をめぐる根本問題を、12・18路線・(資本主義批判を含む)の根底的総括をふまえて、「婦人の真の自由はただ、共産主義を通じてのみ可能である」(レーニン)ことを、我々の共産主義運動の一環として、闘われるための、マルクス・レーニン主義の復権を、女性解放理論の根本原則に具体化することで行なわれなければならない。

しかしながら、我々にとって、その作業は、我が同盟旧全国委の根本的誤りとさせマルクス・レーニン主義の暴露とその革命的清算を痛苦にも媒介する事なしに、女性解放を党の綱領的基礎に闘い取る、大転換を成すことが不可能であった。この点における日和見主義者との決定的分岐は、旧全国委政治局—中央委の崩壊—ボルシェビキ誕生に至る、一切の歴史的刻印となつて、我々の

内に、深く、しるされている。

そこには、いかに、12・18路線—全国委の画きとした「スターリン主義解体、反スタ・マルクス主義止揚—革命的マルクス・レーニン主義の復権」を、その半歩の前進にもかかわらず、空文句と墮さしめ、霧散させ、スターリン主義への回帰(北原イズム)を許してきたのが明々白々であった。(『マルクス主義創刊号』(上)参照)今、また、調停主義、中間主義の極みをつくしてきた永井一派は、自らを「経済主義」「経験主義」「官僚主義」と「自己規定」し、「自己批判」と称して、一応、北原との分岐を「自己批判文書」と称して画きとした。そこには、唯物史観とは程遠い、俗流唯物論、ましてやマルクスの『経済学批判』から『資本論』の地平を一切清算し、「マルクス主義国家学説」をわい曲し、マルクス・レーニン主義を卑俗化し、日和見主義的に偽造している。その帰結は、当然の事に、女性解放理論の誤りを根拠として、結果的には、「ブルジョア女権運動」の地平にまで女性解放の綱領上の立場を引きつり落している。

我々は、この永井「自己批判書」批判を媒介に、(上)に続いて、「意見書」自身の内在的切開—発展を、画さねばならない。

再び、永井批判の内に、我が胎内の旧全国委の残滓を革命的に清算しつつ、共産主義女性解放理論の原則に、一つ一つ置き換えてゆかねばならない。

(注)一 プロレタリア姉妹・兄弟にとつて、我々のこの様な、「綱領・組織・戦術」にわたる—それを支えてきたところの反スタマルクス主義—一切を、論争・批判・自己切開、と

いった形で展開することに、「回り道」と「困難さ」を感じ取るかもしれない。しかし、私達は、「共産主義運動の一環」として闘い取る女性解放理論—その指針の確立は、我々の依拠してきたところの「共産主義運動」と「理論」の一切を、否定的に(肯定の契機を掴みつつ、)とらえかえすところからしか出発しえないと考えている。この「回り道」は、その深さにおいて、その拡がりにおいて、最も確固として、我々の解放理論—指針を、築くことが出来る唯一の道と考える。

そして、このような作業を通して、我々は、女性自身の置かれてある現実の分析と課題(一我々の諸女性解放闘争の端的活動の総括といった形をとりながら、)に入っていく。

(注)二 今日、永井一派は、五・一五以降、ここで扱おうとしている、四・一三自己批判書すらかなぐり捨てて、分岐をいい立てたはずの、北原—西一派と「烽火再建」路線の下に連合し、「組織を共に出来るかどうかの非和解性」といった舌の根をぬぐって、自己矛盾の中に、政治的には、一片の主張もせぬまま、西一派に解体している。その意味で、この「自己批判書」批判は、政治的解体の対象を欠く訳であるが、歴史的に生きた一つの主張として、その周辺に与えた影響を一掃しておくことは我々の「全国委止揚」の責務であろう。そして、西一派にしても、永井以前であつて、永井の様な、日和見主義的偽造の力さえない彼らに対して、永井一派のこの内容が、「良いお手本」と教えておくためにも。

第一章 永井自己批判にあらわれた俗流 唯物論

「人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまり、かれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は、社会の経済機構を形づくっており、これが、現実の土台となつて、その上に、法律的、政治的、上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的、生活諸過程一般を制約する。人間の意識が、その存在を規定するのでなくて、逆に、人間の社会的存在が、その意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階にたつとすると、いままでそれが、そのなかで、動いてきた既存の生産諸関係、あるいは、その法的表現にすぎない所有関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展形態からその桎梏へと一変する。この時社会革命の時期が始まるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ、急激にせよ、くつがえる。」(マルクス・『経済学批判』序言、)

対の中で)引きつり出され、内的には、第二次査問委内女性同志の闘争の結果として、何とか、結集した女性大衆に、提出したものであった。

今日、我々は、この「自己批判書」を、細部にわたつて、検討する気は毛頭ない。それは、旧全国委党内闘争の内から、我々が、闘い取ってきた、様々な諸成果を我がボルシェビキの綱領獲得の基礎にすえんとする一点からである。それは(上)の末尾に触れた様に、旧全国委の誤り―弱点を、また女性解放の理論的基礎を、暴力支配論の一点で、乗り切らんとした彼らの非マルクス主義者振りを暴露し、それに置き換えるべき、我々の方向性を明確にする、その作業の一環にすぎない。しかも、五・五糾弾会―旧全国委の崩壊、ボルシェヴィキ誕生の中で、永井一派は、この自己批判書で「I(生田)に対する「除名」の威嚇をもつて、なした官僚主義的指導と意見の封殺について自己批判する」と云いつつ、その当時の生田と彼ら指導部の「対立が、根本的な意見の相違が、組織を共にできるかどうか、すが問われている根本問題がそこにあると感じ、あの段階で、(P・B主催の)査問委に参加すること自体が、意見の相違をアイマイにし、差別指導に屈服することになると感じたI(生田)同志」に、「T問題が、組織の存立そのものを問う根本問題ではないと感じ、『組織』を対置し官僚統制」した永井らの対立として、とらかえした、その地平から、更にひっくりかえつて、「組織を共に出来ない」として、訣別したはずの北原一派、西一派と共に、「烽火」再建に奔走しているのである。

はじめに

永井一派の政治的位置

「私の指導上の誤りに対する自己批判―前査問委員長、五〇、四・一三・永井武夫」(注)の自己批判書は、「私を先頭とする共產主義者同盟(全国委)の指導―最も中心的には、Tの女性差別の温存としており、同種の女性差別の拡大再生産としてあった―なかでも私を先頭とする政治局が直接に指導にあたつた日問題(四年一月)及び、第二回糾弾会に先立って行なつた第一回査問委員会における私を初めとするP・B(政治局)と、同志I(生田)との論争と、同志Iの意見の封殺に至つた指導の総括が不可欠であると考えます。なぜなら、前者は、そこで、我々の示した指導が「C・C(中央委)議案」に集大成した思想を、その骨格において、余すところなく含んでいたという点においてであり、後者は、直接に「C・C議案」を武器にして行つた指導であり、同時に、今日の党内論争に至る論争の端初が、九月C・C(七四年筆者注)をきっかけにして開始され、しかも、T問題の総括と「C・C議案(女解)」がその一中心を為した時期に、何故、指導を放棄し、そして、又私の指導について、自己批判的総括を行うに至つたか、述べざる義務があると考えています。」と始められて

(注)一、この「自己批判書」は、すでに、七四年四・一三第八回T糾弾会の席上、党内女性とT糾弾連絡会議の女性大衆の力で、同盟最高責任者の一人として、(八木沢逃亡、北原の敵

その様な日和見主義者は一夜にして、「根本的対立」とやらを「底なしの妥協」へ置きかえることが出来るという姿を暴露している。その意味で、この「自己批判書」の根本性自身が、北原・西一派との同質性を、すでに、突き出している訳であつて、この点で、この自己批判書の「自己批判」が、いかにマルクス主義者とは、縁もゆかりもないものであるか、又、北原イズムと同質であるのか、昨日までの北原の盟友は、骨のずいまでの共通性として存在することを簡単に暴露しておくことは、無益なことではないだろう。

一節 自己批判を個人の属性批判に 押しとどめる永井

「前査問委員長」として、大衆的に銘打ったこの自己批判には、旧全国委、最高政治局の一人として、ましてや、共産主義者同盟、十数年の歴史を負った一人の指導者としての思想的深さや主体的立場はどこにも見あたらない。(すでに、『プロ旗』で明らかにした如く)永井一派の「全党に訴える」と同様に、党内闘争の全面発展に、立ち遅れながら、それ以前一年の指導的位置の失墜を、「山師的」に、乗じんとした、代物であることは一目瞭然のことである。

「義務」として自己批判の出發を開始した永井は、自らの「ブルジョアの道念の水準」で、T問題を扱い、「経験的直感で指導の諸形式を埋め合せていた」又、その形式が、女性差別の本質についての原則的見解も、女性解放闘争についての当面の我々の任務をも抜いたままで、同盟員を打ち鍛える(cec議案では、より一層鮮明に、「女性同志を指導的黨員に打ち鍛える」と宣言する時、その指導とは、結局のところ、最良の場合でも、指導部の経験に基づいた人生訓であり、これが、全党の指針となった場合には、官僚主義—官僚的恫かつ)になることを自己批判しなければならぬ。」とこの人生訓—官僚主義の根拠を、一つに党指導全体の問題、二つに、T糾弾—Tの異質性規定にあっては、

前者については、何一つ、切開されずに、「Tの異質性規定」

るにしても、美辞れい句を「蜂起・プロ独・共産主義の綱領の立場の確立」云々と、つけているではないか、それは、後半のI生田(への自己批判の中にも、同様にあらわれている、(先に述べた様な)生田と、永井を筆頭とする最高指導部の対立を、「組織の存立を問う(生田の)問いかけに対して、『組織』を対置した官僚的統制」の指導(差別指導)の根拠が次のように提出されている。「特に、我が同盟の如く、その出發において、組織原則規約)の確立に失敗し、党内民主主義の確立に失敗しており、同時に綱領も又、未確立の段階では、この様な危険は、より一層大きいものとしてあった。にもかかわらず、一昨年八月cecから、昨年一〇月cecに至る我々の指導は、その様な党の現状を充分に考慮するどころか、逆に官僚的統制によって、その危機を乗り切ろうとする傾向の極めて強いものであった。我々の三号決議は誤った指導の頂点をなすものであり、中央集権党を、規約技きの規律だけで、もって建設しようとするものであり、I同志の意見を封殺することで、党の発展の道を自ら閉ざすものとしてあった。(三号批判は別文書で)。」そして、この四・一三自己批判書には、まだ落ちがそえられている。「今日に至る私の指導放棄は、一昨年来遭遇してきた、党建設の第二段階の克服をめぐる摸索の困難さと私自身の指導者としての属性が深く結びついたものであった。」

これが、永井の自己批判の結びである。「Tの異質性」規定といい、「指導者の属性」といい、何という、ごうまんなプチブル個人主義であるのか。これこそ、旧全国委—政治局で、一方の運

について、「T=異物」として、とらえた私の見解は結局のところ、自分が別ものだとすることによって、(我々もまた、女性差別の意識を共存しているのだから、自己変革を求めねばならない)と主観的に思ったところで、先の見解を強調すればする程、(自分自身の内部でも)古い経験的見地が固定され、強化されるのであって、そこに、党の根本的変革が問題になり、根本的な思想上の統合が、問題になっているまにその時に経験主義と誤びゅうの集大成というべき『cec議案』を私自身の手で提出し、温存してきた根拠がある。」と、その経験主義や、官僚主義の生れてくる根拠を、Tの異質性規定—Tと永井の個人的ちがいに(本質的には、どこも異っていないのだ)求めていた。これが共産主義者同盟の最高指導者の「自己」に対する「批判」—経験主義批判のしるものである。そして、何と奇妙なことに、それは、すぐ次の箇所で、「多くの男性黨員が、Tと同じ条件のもとで、にも拘わらず、Tと同じ行為に走ったわけではない」というTの「異質性」については、「具体的な階級闘争と党生活の中で、我々がつくりあげねばならない『規律』上の問題として、我々の根本的思想上の変革の上に、初めて問題にしうる。」と、結局のところ、根本的思想上の変革の空文句の上、(何故なら、永井は一言として、どの様な思想を、どのような思想に置きかえるのか、について、T問題との関係で、明らかにしていないではないか)、規律問題にその回答を求めようとしている。そして、自分は、「T」とは異なることを強調しているにすぎない。北原(イズム)三号決議の方が、もう少し、この規律に結論をみつけ

動主義—八木沢イズムと他方の組織主義—北原イズムの相互補完関係の内、中間派として、結局のところ、北原組織イデオロギ—に屈服する根拠と、表裏一對の「純正サークル主義」としての、永井の云う、「経済主義」を証明している以外の何ものでもないか。

「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活諸過程一般を制約する。人間の意識が、その存在を規定するのでなく、逆に、人間の社会的存在が、その意識を規定する」(マルクス、『経済学批判』)で、打ち立てられた、唯物史観の立場など、永井には、毛すじ程にも持ちあわせていないことを証明している。今日の「T」や、永井自身の女性差別行為、差別指導が、どのような「彼らの意志から独立した」歴史的、社会的、根拠にもとづく「自己」として徹底して自己を「批判」すること。それこそ、一つには、彼ら個人、男性個人の問題でなく、共産主義者として、共産主義者同盟の「綱領・組織・戦術」(それを基礎づけているところの革命理論—思想)の根底的批判—つくりかえであった。それは、女性差別の歴史的、社会的根拠との戦闘宣言でもなければならぬ。

二節 差別者永井の「北原批判」にみる 俗流唯物論

永井は、「c.c.議案—北原」を批判して、「経済主義者が、自己の体験的認識を粉飾するために利用した理論の中には、どの様に惨たんたる理論上の誤びゅうがあらわれるかである。」といている。

我々は、今やあなたが、北原に被せた冠を、そっくり、そのまま、永井の頭上におかえししよう。「おなじ穴のむじな」にも、一分の魂があることを証明しようというのか。あまりにも、厚顔無恥な、「北原批判」は、結局、同じ旧政治局の「同志」として、あなたの方の好きな「同志的批判」ではないと思うが、どうだろうか。北原イズム—八木沢イズムとの闘争を、我がボルシェヴィキ内部では、我々自身が文字通り、共有してきたものとして、鮮明にとり出し、分岐し、清算し、そのみならず、それに置きかえる、革命的マルクス・レーニン主義の復権の具体性を一つ一つ、闘い取っているというのに。

永井は、北原とのちがいを主張する。

「K（北原）同志のいつもの問題の提出の仕方—一見誰でも認める命題から出発し、（実は、階級闘争等に対する全体的で深い見地さえ、もってれば、決して、誰でも認めるものではなく、決して、認めえない事実なのだ。）前提されている経験的結論に帰結せしめる手法を見抜くことが出来なかった」。（注）

（注）「c.c.差別議案」を北原と共に中央委へ提出した当の最高

責任者の、これが差別議案提出の理由である。永井は、階級闘争に対する、「全体的、深い見地」をもっていないかった、貧困証明を憶面もなくいつている。では、この文書以降、北原一派と再びやっている現在は、「全体的、深い見地」から賛成したのか。

「その我々の第一の原因は、現在の階級闘争における女性差別の重さと、現実に対する感性の欠如、そして、第二には、我々自身の中にある、経験主義的傾向、そして、第三に、第二段階の誤びゅうと、限界の自覚にも拘わらず、それを打破して、革命的飛躍をやりとげえず、—経験主義—官僚主義に道を譲った、我々全体が、陥った一昨年八月c.c.—一〇月c.c.に至る一年余の指導の現実である。」

（注）読者諸君、もう少しまともな「北原イズム」を見抜けなかった理由を、提出してほしいものだと思わないかね。この様な、旧全国委最高指導者の泣き言を、今更、我々は、恥に入って顔を赤らめながら、あきれ果て、まな板にのせなければならぬとは、いやはやや。

しかし、それ故にこそ、腐敗をもっとひどく、まきちらす前に、我々自身の責任において、刈り取っておかねばならぬ。

この泣き言が「真実」であるが故に、あますところなく、永井のえせマルクス主義者振りがその俗流唯物論者振りが、暴露されている。

北原イズムへの屈服の原因が、「現実の階級闘争における女性

差別の重さと現実に対する感性の欠如であり、」という時。

自己批判書の冒頭の箇所、いみじくも、「それが、解決しなければならぬ現実認識の誤りを出発点とし、その上に、理論上の誤びゅうの集積、—組織理論上の誤びゅうとして、体现するものであった。」と奇妙に対応している。

これは、「現実認識の誤り」の根拠は、「『現実認識の誤り』の内容とは、△党の全現実（女性差別の）▽を出発点としていないという意味）は、「現実の階級闘争における女性差別の重さと現実に対する感性の欠如」であると同義反復しているにすぎない。何と、永井にあっては、「現実認識」と「感性」が、同義語として、しかも、あるがままの、女性差別の重さと現実をすら、感じ取ることが出来なかったことを、ひれきしている。「葬式行列を見て、運んでも、運びきれない様にというに等しいものであった」とがわかる。「何のことはない、永井自身が、共産党史の中に、旧全国委内で、自ら手を下してきた多くの女性差別の現実を指しているわけで、それは、永井、あなた自身が誰よりも、事実認識していたではないか。逃亡した八木沢はもって正直に、「永井でも、ぼくでも、たたけば何か出るよ（女性差別の現実）」と、だから、そんなことを洗い出すようなことは止めてくれと言ったし、最後には、「ぼくのマルクス主義そのものが誤りだった」と逃亡直前に云わざるをえなかったのだ。だが、永井よ、あなたの云う「感性の欠如」とは、自分の足の下に踏みしだき、血を流す者を見下して、「あなたの痛みを、私は感じられないよ、痛いかね」と、公言していることなのだ。

何という差別者！「お前達をもっともっと、打ち鍛えてやる」とむちを振りあげた北原と、一体、どこが、ちがうのか、永井君、説明してくれたまえ！更に、これらは、北原に屈服した原因が、「重さに対する、感性の欠如」、しかも、（ ）をつけて、感性一般でなく、思想と、いいかえている。とは。

「これまでのすべての唯物論—フォイエルバッハも含めて—の主要な欠陥は、対象、現実性、感性が、ただ客体、あるいは、直観の形式のもとでのみ、とらえられていて、人間の感性的活動—実践としてとらえられず、主体的にとらえられていないことにある。—直感的な唯物論、すなわち、感性を實踐的な活動として、とらえない唯物論が達成する最高の地点は、「市民社会」における、個々の個人の直観である。

「哲学者たちは、世界をさまざまに解釈したにすぎない、大切なことは、しかし、それを変えることである。」（『フォイエルバッハに関するテーゼ』マルクス、）

このマルクスのフォイエルバッハに対する批判こそ、永井の本質を鋭く突いているではないか。

「人間の感性的な活動—実践」として、又、「革命的な活動、実践による批判的な活動を理解しない」（マルクス）永井は、階級闘争における△女性差別の重さと現実▽を、あるがままの姿—同じにみえる姿のみで、認識し、（これすらできなかったとのたもものだが）「人間の本质とは、現実の社会的諸関係の総和である」ことにたち入らず、結局「感性を實踐的な活動としてとらえない」結果、「個々の個人の直観」にとどまっている。「その女性差

別の重さや現実の中に」、その本質―社会的諸関係の総和自身を、変革する主体として、その契機を含んでいることに―(もちろん、その主体が、「永井」にとつての解放の条件をも用意してくれる事はもちろんのこと)―思いもかけない彼の立場を表明している。「世界をさまざまに解釈、(後半の理論提出はそのものずばりだが) することができても、「変革する」こと等、誠におよびもつかない、マルクス主義以前の俗流唯物論の立場が。

第二章 永井の女性解放理論にみる

マルクス・レーニン主義の 日和見主義的偽造

一節 女権論に導く永井理論の概要

さて、永井の女性解放理論の内容に立ち入って、批判すると共に、「序説」(上)で成したところの「生田意見書」自身の総括の継続、深化を図らねばならない。

それは、c.c.議案批判として、概要、次の様な主張として提出されている。

(注)これは、四・一三糾弾会に提出された「自己批判書」の後半に、「c.c.議案撤回のため」と題された七五・三・四文書を扱った。これしか出ていないということ。又、これは、永井自身がつくり出したのでなく、永井とりまきの御用学者のものを永井が、とりこんだと聞いている。

① c.c.議案の誤りの第一は、女性差別の階級支配一般への解消、すなわち、イ、「男女の体力差」(c.c.議案)が決して、対立的契機でなく、「女性の隷属と、その上に立った、男性のダラクをもたらししたこの最初の支配の契機は、性(出産と育児)に結びついていた」。

口、資本制社会における男性による女性支配は、「その裏に

階級支配をみる」だけでは十分でなく、又、「女性差別は一般的に、法令、教育によって、再生産されるだけでなく、―大工場をつくり出される。」のc.c.議案の解消論的傾向に対して、「何よりも根本的問題は、個別家族が、この社会の経済的単位をなしていること、労働力の再生産が、個別家族に荷わされていることに起因している。個別家族を経済的単位とした、全社会の再編、ここでも又、「国家の暴力は本質的契機」をなす。

② 第二には、女性差別の根拠を家族制度とし、その根拠を強サク取とした誤り、すなわち、イ、家族制度の把握のあいまいさ、―家族制度一般でなく、家族制度内部の男の女への支配に立ち入らねばならないこと。
ロ、近代プロの出現と個人的性愛の発展が歴史的にその内部から、女性の解放の条件として、生れ、成長してくる。

ハ、プロレタリア女性を賃金奴隷と家内奴隷の二重のくびきにしばりつける、決定的契機―ブルジョア社会の成立の本質的契機をなす国家の暴力
ニ、これらは全て、「本源的蓄積過程を貫いたこの社会の組織化のための本質的契機たる国家の暴力」『資本論』―今日の賃金奴隷としてのプロレタリアートをつないでいる。国家の暴力を見落す点に、我々の議案の経済主義への転落があった。

③ 以上の見地から、女性解放の条件は、次のように簡単に表現できる、「女性の解放は、全女性が、公的産業に復帰す

ることを第一の前提条件とし、これは又、社会の経済単位としての個別家族の属性を除去することを必要とする」(エンゲルス)以上の基準から、はかるとき、我々の「議案」が闘う党の指針たりえないことは、もはや明さらかである。

以上の永井理論(?)の概要は、多くの短絡と混乱と誤りに満ちたものであり、その結論は、—女性解放の指針—綱領上の立場に至って、ブルジョア女権論へのエンゲルスの歪曲と日和見主義的偽造に導かれている。

最初に、これら、何の展開と内容もない、「国家—暴力支配論」を理論的支柱とした「公的産業への復帰と、個別家族の属性の除去」なる結論が、どの様な誤った根拠と、矛盾の中に、展開されているのかの、詳細な批判の前に、永井自身が、第一章でも、似た様に、決定的に欠落させているところの、「女性解放」をマルクス主義者が、扱うところの導きの糸の問題に簡単に入っておきたい。これは、序説(上)でも、その点を背景として、展開されていた訳だが、いまだ、鮮明に分岐させていたとはいえない。

二節 唯物史観を導きの糸として。

「生田意見書」が、家内奴隷制との関連で、A12・18路線—資本主義批判—を、問題にしたのは、女性差別・抑圧・解放の経済的基礎は何かということであった。それは、「人間は、その生活の社会的生産において、一定の必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまり、かれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係をとりむすぶ」(マルクス『経済学批判』)ことを、導きの糸として、「—また近代社会の経済的運動法則を暴露することが本著の最後の究極目標である—」(『資本論』序言)資本主義批判の内に、女性解放の物質的条件を明さらかにせんとした。しかし、すでに(上)で総括した様な、我々の「12・18資本主義批判」の決定的限界と多くの誤りのうちに、それはその意図を成しえたとは言えない(又、北原の土俵の中で、北原を批判する、結果的な制約をもっていたといわねばならない)。

今日、「意見書」総括の深化にあたって、又、永井批判を貫く、基本的前提として、再び、その点を整理し、再確認しておきたいと考える。

この事は、我々の創成せんとする、A共産主義女性解放理論—が、どのようなマルクス・レーニン主義の根本原則のうえに、築きあげられるか、明さらかにすることである。

我々の共産主義女性解放理論の確立にあたって、エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』の序文に鮮明にされている立場

に依拠せねばならないと考える。

「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の規定的要因は、直接的生命の生産と、再生産とである。しかし、これは、それ自体さらに二とおりに別れる、一方では、生活資料の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち、種の繁殖が、これである。ある特定の歴史的时代および、ある特定の国土の人間の生活が、いとなまれる社会的諸制度は、二種類の生産によって、すなわち、一方での労働の、他方では、家族の発展段階によって、制約される」、『起源』序)と。これは、ドイツ・イデオロギ—において、マルクスによって、確立された、「あらゆる人間の存在の、したがって、またあらゆる歴史の、第一の前提、すなわち、人間たちは、「歴史をつくり」うるためには、生きることができねばならない」から始まる「四つの契機」が、「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的・精神的的生活諸過程—般を制約する」(マルクス、『経済学批判』序)という、「ひとつの革命的発見」—唯物史観に、基礎づけられて、なされた、マルクスの「遺言の執行」であったことは、歴史的に有名なのであるが、そしてこれらの唯物史観の革命的発見は、マルクスにあっては、「経済学批判」をもって、一つの科学として高められたのだが、我々は、更に、マルクスの『経哲学草稿』の中で、予見的に煮つめあげられた点、—

—(私的所有と共産主義)の項で)—

「婦人が略奪物であり、また、共同の肉欲の下婢であるよう

な、婦人に対する関係のうちに、人間がおのれ自身にとって、現実になかに存在している無限な墮落が表わされている。なぜなら、この関係の秘密は、そのあいまいでない、決定的な、公然たる、あらゆる表現を、男の女に対する関係のうちに、そして、直接的、自然的な関係のうちに、どのように解されるかというそのしかたのうちに、もっているからである。」

「人間の人間に対する直接的・自然的・必然的な関係は、男の女に対する関係である。—こうして、人間にとって、どれほどまでに人間の本質が、自然となっており、あるいは、自然が、人間の人間の本質となっているかということが、この関係において、感性的に、すなわち、直観的、事実性まで、還元されて、現われる。—それゆえ、この関係から、人間の全文化段階を判断することができる。この関係の性質から、どの程度まで、人間が、類的存在として、人間として自分となり、また、自分を理解したかが、結論されるのである。—男性の女性に対する関係は、人間の人間に対するもつとも自然的な関係である。だから、どの程度まで、人間の自然的態度が、人間的となつたか、あるいは、どの程度まで、人間的な本質が、人間にとつて、自然の本質となつたか、どの程度まで、人間の人間的自然が、人間にとつて、自然となつたかは、男性の女性に対する関係のなかに示されている。また、どの程度まで、人間の欲求が、人間の欲求となつたか、したがって、どの程度まで、他の人間が、人間として欲求されるようになったか、どの程度まで、人間がそのもつとも個別的な現存において、同時に、共同的存在で

あるか、ということも、この関係のなかに示されているのである。

の規定が、いかなる土台の上に、発展されるのか、といった問題にも、少し立ち至っておきたい。

「私有財産の主体的である労働と、労働の排除としての客体的労働である資本とは、その発展した矛盾関係としての私有財産したがって、解消へとかかりたてるエネルギーな関係としての私有財産である」と「それにもかかわらず、労働は、私有財産の本質として、考察される。」「共産主義は止揚された私有財産の積極的表現であるがさしあたりは、普遍的な私有財産である。」

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえに、また、人間による、人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義、それ故に、社会的すなわち、人間的な人間としての人間の意識的に生れてきた、また、いままでの発展の全成果の内部に生れてきた完全な自己還帰としての共産主義、この共産主義は、完成した自然主義として人間主義であり、完成した人間主義として自然主義である。それは人間と自然とのあいだの、また、人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり、現実的存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真の解決である。それ故、歴史の全運動は、共産主義を現実的に生み出す行動―その経験的現存を産出する行動であると共に、共産主義の思考する意識にとつては、共産主義の生成を概念的に

把握し、意識する運動でもある。」(マルクス『経哲草稿』)

この様に、『経哲草稿』の「ド・イデ」に至るマルクスの深い含蓄に富んだ、示きは、歴史を規定する「四つ契機」から始つて、結局のところ、その「歴史の全運動」が「共産主義を現実的に生み出す行動」であると共に、「その生成を概念的に把握し、意識する運動」でもあることを明らかにした。更にそれは、「私有財産」の上に卓越した、「本質―労働」を見抜き、「全革命運動が、その経験的基礎をも、理論的基礎をも、私有財産の運動のなかに、まさに経済の運動のなかに、見出すということ、このことの必然性はたやすく洞察される。」こと、すなわち、「物質的な、直接に感性的なこの私有財産は、疎外された人間の生活の物質的な感性的な表現である。私有財産の運動―生産と消費―は従来すべての生産の運動についての感性的な啓示である。」宗教・家族・国家・法律・道徳・科学・芸術等々は、生産の特殊なあり方にすぎず、生産の一般的法則に服する。だから、私有財産の積極的止揚は、人間の生活の獲得として、あらゆる疎外の積極的止揚でありしたがって、人間が、宗教・家族・国家等々から、その人間的な、すなわち、社会的な現存へと還帰することである。」

この規定こそが、『経済学批判』に至ってエンゲルスの云うように、「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、および、精神的な生活過程一般を制約する」という命題の「革命的発見」となつて、つぎのような革命的帰結をもつた。「社会の物質的生産諸力はその発展のある段階で、従来それが、その内部で、運動し

てきた、現存の生産諸関係と、またその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる、これらの諸関係は生産諸力の発展形態から、その桎梏に急変する。その時に社会革命の時代がはじまる、経済的基礎の変化と共に、巨大な上部構造全体が、あるいは、徐々に、あるいは急速に変革される。しかし、発展しつつある生産諸力は、同時に、この敵対のため物質的諸条件をつくり出す(エンゲルスによる、『経済学批判』書評)、唯物史観の科学としての確立となつて、共産主義は、文字通り、抽象的、観念的なユートピアでなく、科学的に歴史の必然として、解明されるに至つたのである。

我々は、この様な、マルクス主義を、科学的マルクス主義として、唯物史観を導きの糸に、「婦人の社会的、人間的地位と(私有財産制を土台とする)生産手段の私有との不可分の結びつき」を解明し、「共産主義を通じてのみ、我々婦人の真の解放は成し遂げられる」という、レーニンの命題を、継承し、発展し、我々の戦闘の指針へ具体化する。

そこでこそ、先述した、一つには、労働の、一つには家族における歴史的、発展段階的分析を通じて女性の置かれていた歴史的現実とその解放の物質的条件を鮮明にするところから出発せねばならないのだ。

三節 家族の歴史的・発展と

女性解放の物質的条件(基礎)

さて、二節に鮮明にした我々の導きの糸の確認に照らされて、永井の主張する「女性解放理論の体系」に立ちもどつてみたい。これらは、第一に個別家族が、この社会の経済的単位をなしていることを根本問題とし、その本質的契機が国家の暴力のみに起因する、ということに結論づけることで、マルクス主義の国家学説の歪曲と、それによる女性解放の物質的条件が、家族(―個別家族)制度のどのような歴史的發展の中で準備されているのか、又、その経済的基礎を明らかにすることが不可能な地平へ空転していること。

第二には、プロレタリア女性の賃金奴隷と家内奴隷の二重にしばりつけている決定的契機―国家の暴力というアプリアリ規定によつて、結局のところ、プロレタリア女性の出現が、どのような労働の発展―資本制生産様式の発展の中で準備され、解放の条件を物質的につくり出しているのか、我々の資本主義批判の地平をすら清算することで、女性解放を、プロレタリア解放の不可欠の一環とするその根拠を、不可知なものへと導いている。

第三には、第一と第二を、内的には統一し、運動し続けるところの「私有財産の運動」を、国家の問題と分離し、自立させることによつて、超観念的国家論へと昇天し、政治的にはプロレタリア解放(その一環としての女性解放)の必然的過渡期―革命的プロレタリア独裁を否定する。

第四には、それらの結果として「国家の暴力」論の強調により、何かしら権力問題を提起したかのようにみえながら、エンゲルスの「女性の解放は全女性が公的産業に復帰することを第一の前提条件とし、これはまた、社会の経済単位としての個別家族の属性を除去することを必要とする」を卑俗化することによって、実践的には、女性解放を、ブルジョア女権論の俗流民主主義の地平へ押しこめていくことである。

第一の点について、我々は、「意見書」自身の欠落点として、序説(上)では、第二次調査問委文書の家族に及ぼす資本制生産様式—プロレタリア家族の出現の現実的性格について、継承する立場を(注)によって指摘してきた。

しかし、それは、家族の発展の歴史のうちに、その全貌をみた訳でなく(二・二一文書の総括として)今日、再び整理しておく必要があると考える。その上で、永井文書の中で述べられている、女性の世界的敗北の全過程の要訳と対象させ、その誤りを明らかにしていきたい。

これは、エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』の中で詳しく展開されている点について、簡単に要訳しておきたい。(以下「引用」家族、私有財産、国家の起源」とする)

「モルガンによれば、この無規律性交の原始状態から、おそらくごく初期の時代に、つぎのような家族が発展した。

一、血縁家族。家族の第一段階。ここでは、婚姻群が世代によって区別される。家族の範囲内のすべての祖父たちと祖母たちは、ことごとくたがいに夫婦であり、彼らの子たち、すなわち

父たちと母たちも同様であり、さらにその子たちも同じく共同配偶者の第三群をなし、さらにその子たち、すなわち第一の世代の曾孫たちは第四群をつくるであろう。だから、この家族形態では、婚姻の相互の権利義務(われわれならこう言うところであろう)から排除されているのは、祖先と子孫、親と子だけである。兄弟と姉妹、第一次、第二次およびさらに遠い序次の従兄弟と従姉妹とは、すべてたがいに兄弟姉妹であり、そしてまさに、それゆえに、すべてたがいに夫婦である。この段階では、兄弟と姉妹の關係は、おのずから、相互の性交のいとなみをふくんでいる。」

「二、パナルア家族。家族組織の第一の進歩が相互の性交關係から親と子を排除することであったとすれば、第二の進歩は、それから兄弟と姉妹を排除することであった。」

「三、対偶家族。長短まちまちの期間をかぎったある程度の対偶關係は、すでに群婚制のもとも、またそれ以前にさえ、おこなわれていた。夫は多くの妻のうちに一人の主要な妻(まだ氣にいらぬ妻とはいえない)をもっており、彼は彼女にとつて、他の夫たちのうちでもっとも主要な夫であった。」

「対偶家族は、それ自体あまりに薄弱不安定なため、独自の世帯を必要とさせたり、せめてのぞましいものにするこゝとさえないので、前時代からうけつがれた共産主義的世帯を解体させるこゝとはけつしてない。ところが、共産主義的世帯といふことは、家内における女の支配を意味する。それは、肉身の父をたしかに知ることが不可能なのに、ひとり肉身の母だけが承認される

ということが、女すなわち母にたいする高い尊敬を意味するのとと同等である。」

「女たちの大部分あるいは全部が同一の氏族に属し、男たちのほうはいくつかのちがった氏族に分属する共産主義的世帯こそ、原始時代にあまねくひろまっていたあの女の優越の物的基礎なのである。」

これらの内部の変化は、

「本質上女によってもたらされた、と終始主張しているのは、文句なしにたゞしい。経済的生活条件の発展にともなつて、したがつて古代の共産制がほりくずされ、また人口密度が増大するのにもなつて、古来の性關係がその太古のままの素朴な性質をうしなつてゆけばゆくほど、それは女にとってますます屈辱的に圧迫的に見えないうけにはゆかなかつた。彼女らは、ますます痛切に、純潔権、すなわち、ただ一人の男とだけの一時的または永続的な婚姻への権利を、一つの救いとしてのぞまないうけにはゆかなかつた。このことをべつにしても、この進歩は男の力によるものではありえなかつたことは、男は今日にいたるまでも、かつて事実上の群婚の快樂を放棄しようと考えつたことはけつしてないという一事に見てもわかる。女によつて対偶婚への移行がなされてからのちに、はじめて男は厳格な単婚を採用することができたのである、——もちろん、女にとつてだけの単婚を。」

このような対偶家族が、新しい家族形態の発生について、
「もし新しい社会的原動力がはたらきださなかつたなら、対偶

關係から新しい家族形態の発生すべき理由はまったく存在しなかつた。」

この原動力が働きました。

「旧世界では、家畜の馴致と畜群の飼育とが、それまで予想もされなかつた富の源泉を発達させ、まったく新しい社会關係をつくりだしていた。未開の低段階までは、恒久的な富といへば、ほとんど家屋、衣類、そまつな裝飾品、そして食料を獲得し調理するための道具、すなわち舟、武器、もつとも簡単な種類の什器にかぎられていた。食料は毎日あらたに獲得されなければならなかつた。ところが、いまでは、前進しゆく牧畜諸民——インドの五河地方(パンジャブ)やガンジス河流域、ならびに当時はまだはるかに水に富んでいたオクスス河やヤクサルテス河畔の草原帯に住むアリア人、ユーフラテス河とティグリス河畔のセム人——は、馬、らくだ、ろば、牛、羊、山羊、豚の畜群という形で、見張りごとく大ききつばな世話さえすればますます大量に繁殖し、乳肉食料をきわめて豊富に供給する所有を獲得していた。いまや、それまでの食料調達手段はすべて影がうすくなった。まえには必要事であつた狩猟が、いまではぜいたくとなつた。」

しかし、この新しい富はだれのものだったか? うたがひもなく、最初は、氏族のものだった。」

「このような富は、いったん家族の私有にうつつてそこで急速に増殖するやいなや、対偶婚と母権氏族とを土台とする社会に一つの力づよい打撃をあたえた。対偶婚は、一つの新しい要素

を家族中にもちこんでいた。それは、肉身の母にならべて証明された肉身の父をおいていた。そのうえ、彼は、おそらくは今日のきわめて多くの『父』よりも、よりよく証明されたであろう。

当時の家族内における分業にしたがえば、食料の調達とそれに必要な労働手段の調達とは夫の役目であり、したがって後者の所有権も夫に属していた。離婚のばあいには、夫はこの労働手段をもちさり、妻はその什器を保有した。だから当時の社会のならわしにしたがえば、夫はまた、新しい食料源たる家畜の所有者であり、のちにはまた新しい労働手段たる奴隷の所有者であった。しかし、この同じ社会のならわしにしたがえば、彼の子は、彼の財産を相続することはできなかった。なぜなら、その点では事情はつぎのようになっていたからである。

母権にしたがえば、したがって血統が女系だけによってたどられていたあいだは、また氏族の原始的な相続慣習にしたがえば、はじめは氏族上の親族がその死亡した同氏族員の財産を相続した。資産はかならず氏族のなかのこらなければならなかった。相続の対象がたいしたものではないので、実際上は以前から、氏族上のもっとも近い親族、すなわち母かたの血縁者の手に入っていたのかもしれない。しかし、死亡した夫の子は、父の氏族に属していないでその母の氏族に属していた。子は母の財産を、最初は母かたの他の血縁者たちとともに、のちにはおそらく優先的に、相続した。しかし、その父の財産を相続することはできなかった。なぜなら、子は父の氏族に属しておら

ず、父の資産は父の氏族にのこらなければならなかったからである。したがって、畜群の持主が死んだばあいには、彼の畜群は、まずもって死亡者の兄弟姉妹と彼の姉妹の子に、または彼の母の姉妹の子孫の手に入つた。しかし、彼自身の子は相続権をうばわれていた。

だから、富が増大するのに比例して、その富は、一方では、家族内で男に女よりも重要な地位をあたえ、他方では、この強化した地位を利用して子の利益のために従来の相続順位をくつがえそうとする衝動をうみだした。しかし、母権による血統がおこなわれているかぎり、これはできないことだった。だからこの母権がくつがえされなければならなかった。そして、それはくつがえされた。これは、今日われわれが思うほど困難なことではけつてなかった。なぜなら、この革命——人類の経験したもっとも深刻な革命の一つ——は、氏族の生きている成員のただ一人にも手をふれる必要がなかったからである。氏族の所属者はみな、いままでどおりに行っていたよかつた。今後は男の氏族員の子孫が氏族にとどまるが女の氏族員の子孫は排除されてその父の氏族に入ることになる、という簡単な決議で十分であつた。

「母権の転覆は女性の世界史的な敗北であつた。男は家内でも耳をとつた。女は、威厳の地位からおとされ、隷属させられ、男の情欲の奴隷、たんなる子供をうむ道具となつた。女のこのような屈辱的地位は、とくに英雄時代のギリシア人、それにもまして古典時代のギリシア人のあいだであからさまにあらわれ

たが、そののちしだいに美化され、偽善的によそおわれ、ところによつては、やや緩和された形式につつまれるようになった。」「ここに樹立された男の専制の最初の結果は、家長長制家族という、いまやおこつてきた中間形態にせめられている。そのおもな特徴は、後述する一夫多妻制ではない。」「家族」の語の起源は、奴隷をさしている。一人の家内奴隷であり、一人の男に所属する奴隷たちの総称であつた。マルクスの

「『近代の家族は、奴隷制だけでなく、農奴制をも萌芽としてふくんでいる。なぜなら、それは最初から農耕のための役務に關係があるからである。それは、のちに社会とその国家とのうちに広範に發展してゆく諸対立のすべてを、縮図として内包している。』」

この家族形態は、対偶婚から、単婚への過渡をしめしている。「男の多妻制はあからかに奴隷制の産物であつた」。

四、単婚家族。対偶婚から發生する。「単婚家族は、婚姻紐帯がいっそう固定的で、いまではもう双方の意のままに解消できなくなつた点で、対偶婚とちがつてい

る。」「その特徴は、」「正妻はこのすべてにあまんじ、しかも自身は厳格な貞潔と夫への忠実とをまもるものと期待されている。英雄時代のギリシアの女はたしかに文明期の女よりは尊敬されているけれども、結局のところ、彼女は夫にとって、彼の相続者である嫡子の母

であり、彼の家政婦長であり、そして彼が意のままに妾になしうる、また事実をさうする女奴隷たちの監督者であるにすぎない。単婚とならんで奴隷制が存在したこと、その身にもちあわせるいっさいをあげて男に所属する若く美しい女奴隷たちが存在したこと、これが単婚に最初から、女にとつてだけの単婚で、男にとつてのそれではないという、その特有の性格を刻印するものである。そして、この性格を単婚は、今日でもなおたもっている。」

「単婚は、けつして個人的性愛の果実ではなく、それとは絶対に無關係であつた。なぜなら、婚姻はいまもやはり打算婚だつたからである。それは、自然的条件ではなく経済的条件にもとづく、すなわち原始の原生的な共同所有にたいする私的所有の勝利にもとづく、最初の家族形態であつた。家庭内で男が支配すること、また自分の子以外ではありえず、自分の富の相続人となるはずの子をうませること——これだけが、ギリシア人があからさまに表明した一夫一婦制の全目的であつた。」

「一夫一婦制が歴史に登場したのは、男女の宥和としてではけつてない。ましてや、この宥和の最高の形態としてではない。その反対である。それは、一方の性による他方の性の抑圧として、つまりそれまで全先史時代を通じて知られなかつた両性間の抗争の布告として、あらわれたのである。一八四六年にマルクスと私が書いた古い未刊の原稿のなかに、つぎのような一節がある。「最初の分業は、子をうむむについての男女の分業である。」そして、いま私はこれにこうつけくわえることができる。」

歴史にあらわれる最初の階級対立は一夫一婦制における男女の敵対の発展と一致し、また最初の階級抑圧は男性による女性の抑圧と一致する、と。一夫一婦制は偉大な歴史的進歩であった。しかし、それは同時に、奴隷制および私有の富とならんで、今日までもつづくあの時代、そこではあらゆる進歩が同時に相対的な退歩であり、一方の福祉と発展が他方の苦痛と抑制を手段として達成される時代、をひらくのである。一夫一婦は文明社会の細胞形態であって、すでにこれにおいてわれわれは、文明社会のうちで完全に展開してゆく諸対立と諸矛盾との本性を研究することができるのである。」

「こうして、個別家族は——それが、その歴史的なりたちに忠実に、男の排他的支配によって言明された男女の抗争をはっきりあらわしているばあいには——、文明の開始以来諸階級へと分裂した社会が、そのうちでうごきながら解消させることも克服することもできない、あの諸対立と矛盾との縮図をなしているのである。」

「そしてそれにもまして単婚制個別家族があらわれるとともに、この事情は変化化した。家計の運営は、その公的な性格をうしなした。それは社会とはもうなんのかわりもないものになった。それは一つの私的労役となった。妻は、社会的生産への参加から排除されて女中頭となった。現代の大工業ははじめて女に——それらもただプロレタリアの女だけに——社会的生産への道をふたたびひらいた。だが、その仕方は、女が家庭での私的労役の義務をはたせば、公的生産からしめだされたままとなつて一

(奴隷制の一部である)陰然、公然の家内奴隷制に築かれた。一夫一婦制(—売娼制を補完とした)の出現と、個別家族の近代社会における位置と性格、更に、国家の発生——形成の体系的な、唯物論的見地を明らかにしている。更に、それらが、現代の大工業の発展の中で、プロレタリアの女にだけ、社会的生産の道を開き、その中で、「プロレタリア家族」の出現と、そこにおける、本来の「古典的な一夫一婦制の全ての土台が除去されている」、「男の支配を行わせる動機が、男性支配の最後の動機までが、根こそぎにされている」こと。

「いまや、われわれは、単婚のこれまでの経済的土台が、その補足物である売淫の経済的土台とともに、確実に消滅するであろう一つの社会的変革にむかつてすすんでいる。」

「きたる社会的変革は、すくなくとも、——生産手段の最大部分を社会的所有に転化することで、——女の、すべての女の地位もいぢるしく変動をこうむる。生産手段が共同所有にうつると共に、個別家族は、社会の経済単位でなくなる。」

と、資本制生産の発展が、プロレタリア家族の発展と、資本制生産自身の磨絶と共に、その家族史の全否定と止揚を、成しとげられることを、家族の発展の歴史の解明の中にあらわしている。これらの全歴史の発展は、資本制生産の発展を軸に、どの様に根底的変革の契機を物質的に準備されていくのか、その点について、詳細に検討することとした。

文もかせぐことができないし、また公的産業に参加してひとりだちでかせぐと思えば、家庭の義務をはたすことができない、というぐあいである。そして、女にとって工場であろうであるばかりか、医師や弁護士にいたるまでのいっさいの職業部門でも同じである。近代の個別家族は、妻の公然または隠然たる家内奴隷制のうえにきずかれており、そして近代社会は、ただ個別家族だけを構成分子とする集団である。」

「家族のなかでは夫がブルジョアであり、妻がプロレタリアを代表する。」

この様な個別家族の成立と発展の中で、個別家族は、一つの社会の経済単位となり始め、一方で氏族制が

「自由人と奴隷との差別にならんで、富者と貧者との差別があらわれる——新しい分業に伴って、諸階級への社会の新しい分裂があらわれるのだ。——完全な私的所有への移行は、対偶婚から単婚への移行と平行して行われる。個別家族が社会の経済単位になり始める。」

それは、

「ここに氏族制度の諸機関は——その根から漸次もぎはなされ、全氏族制度はその反対物へ逆転する」——氏族制度は、寿命を終えていた、それは、分業とその結果たる社会の諸階級への分裂とによって破砕されていた。それは国家によってとってかわられた。」——ここでは、国家は、直、また、主として、氏族社会そのものの内部に発展する階級対立のうちから発生する」。

以上、エンゲルスの卓越した解明は、私有財産制を基礎とした、

第四節 資本制生産の発展と 女性解放の物質的条件(基礎)

「現代の大工業ははじめて、女に、——それも、ただプロレタリアの女だけに、——社会的生産への道をふたたび開いた、その仕方は、女が家庭での私的労役の義務を果せば、公的生産からしめ出され、——公的産業に参加してひとりだちでかせぐと思えば、家庭の義務をはたすことができない。」このエンゲルスの指摘した現実、資本制生産の発展のうちに、投げこまれたプロレタリア女性と、プロレタリア家族に、何をもちたらしめたのか。(以下の引用は特に銘記しないものは『資本論』)

「機械が、筋力を不用にするかぎりでは、機械は、筋力のない労働者——または肉体的発達未熟だが、四肢の柔軟性の大きい労働者——を使用するための手段となる、だから、婦人——および児童労働というものが、機械の資本制的充用の最初の言葉であった。かようにして、労働および労働者のこの有力な代用物は、たちまち、性と年令の区別なく、労働者家族の全成員を、資本の直接的統治のもとに編入することによって、賃労働者の数を増加させる手段に転化した、資本家のための強制労働が、児童の遊戯のためにとって代ったばかりでなく、慣例の限度内で家族そのものために、行われる家庭内の自由労働にもとって代った。」(傍点筆者)

「機械は、労働者家族の全成員を労働市場に投ずることによって、夫の労働力の価値を、その全家族のうえに分割する。だから、

機械は、彼の労働力の価値を減少させる。」

「資本によって徴用された母親は、多かれ少かれ、代理者を雇わねばならない、家族の消費のために必要な、労働、たとえば、裁縫や、縫ぎはぎの如きは、既製品の購入によって補なわれねばならない。かくして、家庭的労働の支出が、減少するに照応して、貨幣の支出が増加する、したがって、労働者家族の生産費が増加して、剰余収入を相殺する。しかもなあ、生活手段の利用および、準備における節約と合目的性が不可能になる。」

このマルクスの大工業が、女性プロとその家族にもたらす特徴—家族の全成員が、ますます、一つの単位として、家族にしばらくつけられ、婦人の家内労働が、駆逐されていく。これらは、全くの必然として、「彼（労働者）が、形式的な自由な人格として、勝手に処分した自分自身の労働力の売買」を、「彼はいまや妻子を売る」「奴隷商人」とたらしめた。又それは、同時に、婦人、児童の肉体的・精神的荒廃をもたらし、「事実の力に、強制されて、ついに、大工業は旧来の家族制度、および、それに照応する、家族労働、の経済的基礎とともに、旧来の家族関係そのものを解体する。」のであると。

ここにこそ、「意見書」で、（直感的レベルを脱していない限界を持つとは云え）、「『家内奴隷制』と『賃金奴隷制』の内的・弁証法的関連を明らかにすることを通して、女性解放が、プロレタリア解放の不可欠の一環である」（序説・上）ことを提出しようとした、それは、「女性をしぼりつけてきた鉄鎖「家内奴隷制」がこの賃金奴隷制の確立・完成の内に崩壊していくことこ

そ、文字通り、資本主義社会が、この様なプロレタリアートを、その内部から墓掘人として、生み出すに至る「社会的生産の歴史的にすぎざる発展段階」としての歴史的社會として、それ故にこそ資本主義社会の打倒（賃金奴隷制の廢絶）—プロ独—共産主義社会の中に、女性解放の条件と道すじをみる」（序説上）ことを突き出した。しかし、それは、いぜんとして、その内的、弁証法的関連が展開されぬまま、論証されぬまま、提出されてきた。この点について、今や、先に引用した、「大工業が、旧来の家族制度、（—即ち、妻の陰然、公然たる『家内奴隷制』の上に成立している近代個別家族）、および、それに照応する家族労働の経済的基礎とともに、旧来の家族関係そのものを解体する」というマルクスの明析のうちに、これらの内的・弁証法的関連は、明快な表現で提出されているといわねばならない。

それは、どの様に具体的な姿をとってなのか、又、その中で婦人プロとプロ家族にとって、どのような変革的諸契機を、成熟させつつあるのか、簡単に、マルクスの分析にそって、みてみよう。（以下、注のないものは、全て、『資本論』より引用）

「彼が歓迎するのは、既婚婦人、殊に、家に扶養すべき家族をもつ既婚婦人である。彼女達は、未婚婦人より、遙かに注意ぶかくて温順であり、また必要な生活手段をかせぐために全力をつくすことを余儀なくさせられている、かくして、美德が、婦人独自の美德が、婦人の禍に転化される。—かくして、婦人の本性にある一切の倫理的なもの、および優雅なものが、婦人の奴隷状態および、苦惱の手段たらしめられる。」（三二二頁）

このことは、先に引用した、「機械と大工業」の章において、マルクスが、「労働者におよぼす機械経営の直接的影響」で分析した、第一の「婦人—児童労働」の「資本による追加労働力の取得」の項で、解明したことであった。それは、その(a)の末尾で、「機械は結合労働員のうえに、児童および婦人の圧倒的な追加をなすことによって、成年男子労働者がマニファクチャアにおいて、資本の専制支配におおけていた反抗を、ついに打破する」といった様な、新たな、男子労働者への資本の攻撃的支配と全く、一対のものとして、婦人・児童労働は登場したことであった、それは、その次の機械のもたらす労働者への影響の第二に、「労働日の延長」として、「だから、機械の資本制の充用は、一方では、労働日を無制限に延長する有力な新動機を生み出し、この傾向に対する抵抗を打破する様な仕方、労働様式そのものおよび、社会的労働体の性格を改革するとすれば、他方では、一部は労働者階級のうち、従来は手のとどかなかつた層を、資本の手に寄託することに、一部は、機械によって、駆逐された労働者を遊離されることによつて、資本の命ずる法則に従わねばならぬ、過剰労働人口を生み出す。機械は労働日のあらゆる道徳的および、自然的な諸制限を顛覆するという、近代産業の歴史における注目すべき現象は、ここから生ずる。また労働時間短縮のための最も強力な手段が、労働者および、その家族の全生活時間を資本増殖のため処分される労働時間に転化するための最も確実な手段に急変するという経済的逆説も又、ここから生じる」とした問題。

更にはそれらは、第三の「労働の強化」として、現象すること。

即ち、「労働日の短縮が、法律によって、強制されるや否や、資本家の手にある機械は、同じ時間内に、より多くの労働を搾りだすための、客観的な、かつ体系的充用される手段となる。そうなるのは二つの仕方、すなわち、機械の速度の増大と、同じ労働者が見張りすべき機械、または彼の作業場面の範囲の拡大によってである。機械の構造の改良は、一面では、労働者に一層大きな圧迫を加えるために必要であり、他面では、おのずから、労働の強化を伴っている」ということ。

(注) この様に、婦人労働児童労働の資本への追加—出発点—女性プロの形成は、一体的な、全男子労働者を含む、労働者階級にたいする資本の新たな攻撃として同時に、出発していることに我々は、何よりも目を据えなければならぬ、しかし、それが、子供を含む、全家族の成員が、資本の増殖のために、分断され、縛りつけられていくことを含めて、女性の解放が、プロレタリア階級の解放の不可欠の一環—プロ家族の全成員の解放としての経済的基礎をはっきりと見据えねばならない。

これらの機械体系の編制による婦人・児童労働の取得は、大工業へと発展し、更に成育してゆく中で、どの様な現実へ突きすすまざるをえなかったのか。

第一には、「婦人、または未成熟者の身体が恥しらずにも、毒物などの影響に委棄される、」—ボタン工場、ラック工場他—屠殺場」と呼ばれた工場における伝染病、その他の伝播。

第二には、労働者の野卑化、—「労働が、朝の五時から、晩の

八時まで続けられ、男女の児童が、六才また四才からさえ使用され、「一輪もゆかぬ時から聞きなれて下等な言葉、知らず識らずの粗野に成長する卑わいで、不作法で破廉恥な習慣、この類廃のおそろべき一根本は住居の様式である、自分の家族であろうとなかろうと、大人も少年も少女もその小屋でねる。これらの小屋の多くは無秩序と不潔の真の典型である、(若い娘たちを)その幼児からその後の全生涯にわたって悪らつきまゝの無頼の徒にしてしまふ。彼女たちは、自分が女であることを知る前に、粗野で、口ぎたない少年となつてしまふ。汚いぼろをまとい、脚はずつとひざの上まで露出させ、髪や顔は、あかまみれにしている、体裁とか羞恥とかいう一切の感情を軽べつするようになる。激しい一日の労働が終わると彼女たちはよい着物をつけて男たちと居酒屋にゆく。」第三には、疾病、死、無数の男女労働者の生命が、いまや、彼らの就職そのものによつて生みだされる限りない肉体的苦痛によつて、いたづらに責めさいなまれ、短縮されるのである。「レース製造女工の肺病は、八人に一人、」、「彼らの徳性は、どん底の段階にある。」多数の婦人が、私生児を生んでおり、しかも、その多くは、犯罪統計の精通者でさえ驚くほど、未熟な年令のときである。」

第四には、「彼らの一大部分は、字が読めない、」等。又、「アシユリー郷は二、三の婦人労働者の陳述をつたえている。「M・H.二〇歳、二児がある。小さいほうは乳児で、もう一人のすこし年うえの子がその守りをしている。この女は朝五時をすぎるとすぐ工場へゆき、夜八時にかえってくる。一日

まけにブランドを飲むようにさそう不^レ断^レの誘惑がある。このような状態でどこに家族生活が存在しうるだろうか? けれども、労働者は家族から逃げだすわけにはゆかない。彼は家族のなかで生活しなければならぬ。その結果は家庭内のたえざるいざこざと内輪喧嘩である。それは、夫婦にたいしても、またことに子供たちにたいしても、もっとも墮落的に作用する。あらゆる家庭的な義務をおこたり、ことに子供たちをなおざりにすることは、イギリスの労働者のあいだであまりにもしばしばおこっており、しかもそれをひきおこすものが現在の社会制度であることがあまりにも多いのである。そして、このように野ばなしにされたまま、はなはだしく人を墮落させる環境(両親そのものからしてこうした環境の一部であることがかなり多い)のうちに成長する子供たちが、それでもなお後日、道徳的にやかましい人間になるべきだとか? 自己満足したブルジョアがそうした要求を労働者に出すのは、実際あまりにも素朴すぎる!」(エンゲルス「一八四四年のイギリスにおける労働者階級の状況」)

しかし、一方では、大工業への発展は、「(近代工業は、)機械、化学的処置、その他の方法によつて生産の技術的基礎とともに、労働者の機能、および、労働過程の社会的結合を改革する、」かくして、「大工業の基礎上で自然発生的に発達したこの変革過程の一契機は、工芸学校、農学校であり、もう一つの契機は、労働者の子供の「職業学校」である。資本がらやと奪った、工場立法は、初等教育を工場的労働と結びつけるにすぎぬとすれば、

中、乳が乳房からながれるので、着物から乳がしたりおちる。—H・W.三児がある。月曜日の朝五時に家を出てその週の土曜日の夜七時にはじめて家へかえってくる。—それから子供たちのめんどうをみなければならぬことが山ほどある。朝三時まえには床につくことができない。しばしば雨で文字どおり肌までずぶぬれになるが、しかもそのままではたかなければならない。「私の乳房は私にはこのうえもないおそろしい苦痛のたねでした。そして、私は乳でしたたるほどぬれしたのでした。」

子供たちをおとなしくさせておくために麻酔薬を使用するならわしは、この恥すべき制度によっていきおい奨励されるばかりであつて、実際、工場地区ではいちじるしくひろまつている。マンチェスター地区の首席登記官ジョーンズ博士は、この風習こそ癡癡による死亡がひんばんにおこっていることのおもな原因である、という意見をもっている。婦人の工場への雇用は、必然的にまったく家族を解体させる。そして、家族に基礎をおく今日の社会状態のもとでは、この解体は、夫婦にとつても、もっとも墮落的な結果をもたらす。……

「夜のぬぐらとしてさ役だたず、るくる家具もなく、しばしば雨さえふせがず、あたためられてもない、住みごころのわるい、きたない家。人間でいっばいつまった部屋の息ぐるしい空気はくつろぎをゆるさない。夫は一日中はたらいでいる。おそらくは妻や年かきの子供たちもみなちがった場所ではたらいでいるので、朝晩だけしかたがい顔にあわさない。—お

労働者階級による不可避免的な政權獲得によつて、技術的ない理論的、実践的な教育が、労働者学校において然るべき席を獲得するであろうということは、うたがう余地がない。資本制的生産形態および、これに照応する労働者の経済的諸関係が、こうした変革の酵母および、その目的たる旧式分業の止揚と絶対的に矛盾するということも疑う余地がない。だが、一つの歴史的生産形態の諸矛盾の発展は、その生産形態の解体と新形成との唯一の歴史の通路である。」

これは、一方では、文字通り婦人・児童労働をれ自身、及ばず、プロレタリア家族の出現とその「家族の解体」状況は、その悲惨さのみとして、結果した訳でない。「だが事実の力に強制されて、ついに、大工業は、旧来の家族制度、および、それに照応する家族労働の経済的基礎とともに、旧来の家族関係そのものを解体する。」

「一般的には、児童労働、特殊的には、家内労働の無制限の搾取の制度」「親たちが、その年若くて、柔軟な子女のうえに、恣意的で有害な権力を制御も統制もなく行使することによつて、維持」される、「だが、親権の濫用が、資本による未成熟労働力の直接、又は、間接の搾取を創造したのではなく、むしろ、逆に、資本制的搾取様式こそ、親権を、それに照応する経済的基礎を止揚することによつて、一つの濫用たらしめたのである。」さて、「資本主義制度の内部での、旧来の家族制度の解体が、いかに恐しく、厭しく見えようと、大工業は、それが、家政の領域の彼方なる社会的に組織された生産過程において、婦人・青少年女

および、児童に割り当てる決定的役割をもって、家族および、両性関係のより高度な形態のための新たな経済的基礎を創造する」
「両性、および、種々様々な、年令の個人からなる結合労働員の構成は、なるほど、労働者が、生産過程のために存在して、生産過程が労働者のために存在するのではないところの、その自然発生的で野蛮な、資本制の形態においては、荒廃、および、奴隷状態の禍源であるといえ、逆に人類発展の源泉に急変するに違いない。」

この様なマルクスの鋭い分析は、資本の生産過程が、

「一方では、生産過程はたえず、質料的富を資本に、資本家のための価値増殖におよび、享楽手段に転化させる、他方では、労働者はつねに生産過程から、かれがそこにはいままの姿で、

—富の人的源泉ではあるが、この富を自己のために、実現するあらゆる手段を奪われたものとして—出てくる。彼じんの労働は、彼が、過程に入る前に彼じんから疎外され、資本家に取得され、資本に合対されているのだから、過程中で、たえず、他人の生産物に対象化される。—簡単にいえば、労働者を賃労働者として生産する、この賃労働者のたえざる再生産、永遠化は、資本的生産の不可欠な条件である。即ち、「自分の労働力以外には、何の財産も持たない人間が対象的労働条件の所有者となっている他の人々の奴隷とならなければならない」(『ゴータ綱領批判』)資本関係の生産であること。

更には、「世界市場の網へのすべての国民の編入が、したがってまた、資本制の体制の国際的性格が発展する、この転化過程の

あらゆる利益を横奪し、独占する大資本家の数のたえざる減少につれて、貧困、抑圧、隷属、頹廢、搾取の程度が、増大するが、しかし、また、たえず、膨張するところの、そして、資本制の生産過程そのものの機構によって、訓練され、結合され、組織されるところの、労働者階級の叛逆も増大する。資本独占は、それとともに—また、そのもとで、—開花した生産様式の極酷となる。生産手段の集中と、労働の社会化は、それらの資本制的外被と調和しえなくなる時点に到達する。この外被は粉砕される。資本制的私有財産の葬鐘が鳴る。収奪者たちが収奪される」(//)

といった、資本主義社会の歴史的位置とその根底的批判が、その変革主体者—プロレタリアートの世界史的位置と任務が、鮮明に、科学的に、唯物史観によって、確立された。

我々は、今や、かのエンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』で、分析された、女性の世界的敗地の決定的根拠が、この「資本制的私有財産の葬鐘」を打ち鳴らす、プロレタリアの階級闘争の発展、それを基礎づける経済的基礎の発展、それによる。

(注)一「この奴隷と共に、搾取階級と被搾取階級とへの社会の最初の大分裂がはじまった、—これにつづいて、中世には、農奴制、近代には賃労働制があらわれる。これが、それぞれ文明の三大時代の特徴をなす隷属の三大形態である、文明には、公然たる、また、最近では、粉飾された奴隷制が、つねにともなっているのだ」(エンゲルス「起源」)

(注)二「したがって、賃労働制度は一つの奴隷制度であり、し

かも、労働者のうけとる支払いがよりよくなるか、よりわるくなるかには無関係に、労働の社会的生産力の発展につれて、ますます苛酷なものになる奴隷制度である」(マルクス『ゴータ綱領批判』)

賃労働制の廃止に運動すること。それに伴って、古代「奴隷制」を前提として、特徴づけられる、陰然・公然たる「家内奴隷制」を支えてきた、その経済基礎が、文字通り、崩壊・解体され、新しい社会制度にとってかわられる物質的条件を形成しつつあることが、科学として、確認できるであろう。ここにこそ、「階級差別の廃止とともに、ここから、生じる一切の社会的・政治的不平等はおのずから消滅する」(マルクス・『ゴータ綱領批判』)ことをも又、我々は承認し、高々と我々の綱領上の立場の一環として掲げることができる。

その事の実現が、共産主義社会の実現として、その内容として、宣言される「家族の廃止」—や「婦人の単なる生産用具としての地位の廃止」—「婦人の共有もまた、すなわち、公認、および、非公認の売淫もまた消滅する」(『党宣言』)の、具体化・実践化として、発展させられなければならない。

ここで、忘れてはいけないのは、「資本主義社会と共産主義—のあいだには、前者から、後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた、政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもありえない。」(マルクス『ゴータ綱領批判』)点である。我々の当面の見地はこの点から、現実と未来の利害を明きらかにしなければ

ならない。

五節 女性解放の二つの物質的条件をめぐる永井のマルクス・エンゲルスの日和見主義的偽造

長々とエンゲルス『起源』、マルクス『資本論』等を中心に、一つは家族の、他方は労働の歴史的、発展を、その私有財産の運動・止揚のうちにとらえなおすことをしてきた。それ自身が、女性差別の歴史的根拠と発展のうち、その解放の物質的条件を、どの様に形成しつつあるのかということであった。

最早、永井の三節の冒頭に挙げた誤りの多くは、明白である。その非マルクス・レーニン主義振りも明白である。永井は女性の世界的敗北の全過程の要訳を一項／＼八項までに項目別に挙げてゐる。(これが、項目として、特に理論だつて整理されている訳でない)ので、非常に、批判の対象とはしにくいのだが)

(1)では、母権制氏族の崩壊の根拠について、「男女による性にもとづく最初の分業―富の蓄積―私的所有を生み出す」といった短絡的論理展開の決定的誤りについて、挙げておかねばならない。それは、我々が三節において、エンゲルスの『起源』についての詳細な検討によつて、明白である。それらは、(2)、(3)、(4)項を貫いて、「この三千年にわたる女性の敗北とその上に立った男性のダラクからの回復―『女性解放』の条件は、この歴史過程に対して、その内部から二つのものとして、成長してくる、第一は、近代プロの出現、第二は近代的性愛の発展」という具合に、歴史はゆがめられる。そして、女性解放の物質的条件は、偽造され、ゆがめられる。

第一の「近代プロの出現」が歴史的に、一切分析されておらず、ましてや、七項の「プロ女性を賃金奴隷と家内奴隷という二重のくびきにしばりつけている」として、その経済的基礎―どの様にプロ女性が形成され、何故「賃金奴隷と家内奴隷の二重のくびき」の下に、どのように存在するのか、一切不問にされている。そして、この「近代プロの出現」は、歴史的に登場した二つの階級のうちの近代プロの登場の歴史的事実を承認しただけであつて、「この近代プロの世界的位置と任務」について、又、女性解放にとつて、これら、近代プロの出現が、どの様な解放の条件を有しているのかまで、明きらかにしていない。

ここにこそ、永井とその一派のマルクスの資本主義批判に対する、全くの一知半解さと(それは、単なる、一知半解さでなく、その後半で展開されているように、資本主義批判を否定し―「国家の暴力」に一切の秘密を求めて昇天するわけだが)マルクス主義の日和見主義的偽造が露わになっている。

すでに、序説(上)と第二章、四節で、明きらかにしてきた、我々の資本主義批判の総括、発展の内に、我々は、次の様なマルクス自身の、マルクス主義の階級闘争の現論を掴まねばならない。「わたしについていえば、現代社会における階級の存在を発見したということも、またこれら階級のあいだの闘争を発見したということも、わたくしの功績に帰すべきではない。ブルジョア歴史家たちは、わたくしよりずっとまえにこの階級闘争の歴史的発展を記述しており、またブルジョア歴史学者は、諸階級を経済的に解剖している、わたくしのなしたげた新しいことは、すなわち、次の

一切は、「男性のダラク」という全くの属性把握(何と、冒頭の永井自身の自己批判―属性批判と一対であろうか)、女性の世界的敗北が、その歴史的過程が、文字通り、観念的に、とらえられ、唯物史観などは、はいりこむすきもない。三節・四節の展開では、「(「生田意見書」において、十分展開しきれず、又、多くの誤りと混乱をはらんでいた点の総括として、あつたわけだが)、文字通り、我々は、これらの唯物史観を導きの糸に、即ち、「物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係」の分析として、一方では、家族の、他方では、労働の発展段階を分析することとして、云いかえるならば、「私有財産の運動の中に、まさに経済の運動のなかに、」「全革命運動が、その経験的基礎をも、理論的基礎をも見出す」(マルクス)ものとして、女性解放の物質的条件を明きらかにしてきた。それは、資本主義社会―生産の発展によるプロレタリア階級の形成とこれらプロ階級による、そのみならず、賃労働制―私有財産制の廃止を基礎とした資本主義社会の廃絶―階級の廃絶―プロ独裁の政治的過渡期の必然性等、その経済的全過程で、新たなプロ家族の出現―「ブル家族」の解体を軸に、これら、近代個別家族が、その経済的基礎を解体・止揚していき、陰然たる、公然たる女性の「家内奴隷制」は賃労働制の廃止と共に、崩壊し、解体する、ことであつた。この点で、女性解放の物質的条件は、「第一に近代プロの出現、第二に近代的性愛というものは、第一は物事を半分しかいうておらず、それは永井のマルクス資本主義批判の「一知半解」さを表現しており、第二の点は全くの誤りである。

ことを証明した点にある。一、階級の存在は、生産の一定の歴史的阶段とのみ関連するものということ、二、階級闘争は、必然的にプロレタリアートの独裁に導くということ、三、この独裁そのものは、あらゆる階級の絶滅と階級のない社会とに至る過渡をなすにすぎないということ」(マルクス・「ワイデーマイヤーへの手紙」)

ここでは、資本主義を覆えて、階級のない共産主義社会を創設するための闘争を指導する能力をもっているのは、ただ唯一の革命的階級としてのプロレタリアートだけであるとした、ここにこそ、世界史の新しい時代―人類の奴隷制の最後の形態、すなわち、資本主義的奴隷制または賃金奴隷制をかなぐり捨て、自己の解放をなしうる唯一のプロレタリアの「世界的地位」と「任務」が、マルクスによつて、その『資本論』によつて、科学的になされたことであつた、それ故にこそ、この様な、資本主義社会とその内部から形成されてくる、「近代プロ」によつてのみ、私有財産の発生と古代奴隷制の出現―階級の出現と分裂の中で、果された女性の世界的敗北―「家内奴隷制」の鉄鎖も、これらのプロレタリアートをその階級闘争によつてのみ、粉砕せられるとすることが、明きらかにされるのである。

永井は、この様な、資本主義批判の地平を一切否定することによつて、「近代プロの出現」をブルジョア歴史家、ブルジョア経済学者の地平で語っているにすぎないことが、明らかになるだろう。

第二の点「女性解放の物質的条件も近代的性愛の発展」の誤り

は、エンゲルスのわい曲であり、唯物史観の立場から「家族」の問題を把握しえない結果である。確かに、エンゲルスは、永井が引用している様に、「単婚のおかげで、ある最大の道徳上の進歩が、展開されうる可能性が与えられた、この進歩とは、以前の世界がすべて知らなかった近代的な個人的性愛のことである」と述べ、「性愛について」、「それは第一に、古代のエロスとは異って、愛されるものがわにも、それに答える愛情のあることを前提とする。第二には、性愛はある程度の強度と持続性を持ち、たがいには、いっしょになるためには、(云々)」と規定はしている。しかし、これだけを取り出して、「全歴史過程の内から発展した女性解放の条件」として、扱っているのだろうか？ 否、そうではない。

エンゲルスにあっては、「個人的性愛」の問題は、人類発展の三つの主要段階におおまかに照応する。「ことを、全歴史的に解明した後で、「いま、われわれは、単婚のこれまでの経済的土台が、その補足物である売淫の経済的土台とともに、確実に消滅するであろう一つの社会的変革にむかってすすんでいる。」と云って、従来の「単婚」は、女がわの単婚であったことを云い、「きたるべき社会的変革は、すくなくとも、耐々ので相続できる富—生産手段—の最大部分を社会的所有に転化することによって、このような相続についての全配慮を最小限にまで、おしちぢめるであろう」ことを云い、では単婚は消滅するかと問い、それはかえって「完全に実現されるだろう」こと、「男の地位」が大きく変化し、女の、「すべての女の地位」も変動すること、を明きら

かにした後に、こう自問している。「そうすると、無拘束の性交や(ルーズな世論が)また、最後には、「近代世界では、単婚と売淫とは、なるほど対立物ではあるが、しかし、たがいに切りはなせない対立物、同じ社会状態の両極であることをわれわれは見はしなかったか？ 単婚をほうむりさることなしに、売淫が消滅できるであろうか？」と。

この自問に対する答えとして、「ここで新しい一つの要因が働きはじめ。すなわち個人的性愛が」として、個人的性愛が、家族の発展史の中で、プロレタリア家族の出現による、その家族の止揚の契機の一つの要因として、提出されているのである。更に、エンゲルスは、「愛にもとづく婚姻だけが、道徳的であるなら、同じく愛の存続する婚姻だけが道徳的である」と規定しつつも、後には、こうして、「資本主義的生産の(一掃後)における両性関係の秩序について、今日、我々が、推測できるのは、主として、消極的な性質のもの」として、「とりのぞかれる面」についてのみに限られるとしている。

永井は、この様なエンゲルスの強調する、資本主義的生産の一掃—や、「単婚と売淫の経済的基礎」の問題を一切、欠落させた上で、「性愛」を女性解放の条件として、とり出して、かつての自らの指導と北原への屈服を根拠づけている。

「女性解放の可能性—新たな婚姻の基準にりうる、この『性愛』のとらえ方のわい少性が、我々の思想上の基準の定立にあたってのあいまい性が、男性の支配と女性の隷属の上に立った『自由恋愛論』や、『フリーセックス論』をして『共産主義的団結

論「にみじめに敗北してきたか」

として、自らの思想的基準にまで、性愛の問題を一面化し、逆に、北原とは対極的なやり方で、その質は同根、一体として、わい小化するのである。『糾弾争等、我々の闘いは、この様な思想的規準をむしろ排除してきたことを彼は見抜いてはいないのだ。』

レーニン、クララとの会話の中で、「性問題に対する(当世流の病にかかっている)と批判して、「プロレタリア革命に照応して性と婚姻との革命が近づいています。青年に対して、坊主くさい禁慾主義やけがれたブルジョア道徳の神聖さを説教することほどまらかったことない」とい、「共産主義社会では性欲・恋愛の欲望は、一杯の水を(筆者(注)コロンタイの主張)のむように簡単に、無雑作にみだされるであろうという有名な理論があります。(この一杯の水論は、完全に非マルクス主義的でおまけに反社会的です。性生活においては、たんに自然だけでなく、高低の差はあっても文化的なものが重きをなしています。エンゲルスは、『起源』の中で、一般的性欲の個人的性愛への発展鈍化がどんなに重要であるかあきらかにした。両性間のお互いの関係は、

社会の経済状態を生理学的見地からの研究によって、頭のなかで切りはなされた肉体的欲望とのあいだの、力のせりあいの表現にすぎないものではありません。両性関係の変化をイデオロギー全体との関連から切り離して、直接に社会の経済的基礎に還元しようとすることは、合理主義であって、マルクス主義ではありません。』

又、「共産主義は禁慾主義ではなく、生きる喜びを、生きる力

を、みちたりた愛の生活から生れるそれを、あたえるでしょう。

しかし、私が見るところでは、性的な事柄において、今日ひろく見られるような異常肥大症は、生きる喜びと力をあたえるものでなく、それを逆にうばいさるものです。革命期においては、それは有害、まったく有害です。」「性生活の放縱は、ブルジョア的であり、墮落の現われです。プロレタリアートは勃興しつつある階級です、プロには、麻醉剤や刺激剤は必要ではありません、性的放らつによる中毒も、アルコールによる中毒も必要ではありません。プロは、資本主義の恥辱、不潔、野蠻をけっしてわすれないにちがいないし、わすれることはないでしょう」

この様なレーニンの批判と見地は、それらの「性論」を批判する基準が、永井のいうような、この全歴史の運動の発展と切り離されたところで「性愛」を語ることを拒否している、ましてや、我々にとって、女性解放の歴史的条件として、これをのみ第一義的に語るとは。

(注) この様な永井流の女性解放論は、現在、世界的に、拡がっているところの、先進国を中心とした、「リヴ運動」の「性差別—性解放」を基軸とした運動論に対して、すでに、その党派性をそう失していること。又、今年の「国際婦人デーメキシコ大会宣言」にみられる、第三世界の先進国婦人解放運動論への激烈な批判の根拠にも無自覚なものであるといわねばならない。

第三章

「国家―暴力論」による、革命的

プロレタリア独裁の否定と女権論への転落

一節 永井理論の「魔法のつえ」

さて、永井のこの様な理論構成の、最後の批判―に入らねばならない、それは、三節の冒頭で、明らかにした様に、一切の主張は、「国家の暴力」、あるいは、「決定的契機としての国家の暴力」なる言葉（文字通り、言葉としてしか語られていず、その論理的展開は一切なされていないのだ）が、女性解放理論の支柱とされていることである。

「プロレタリア女性を賃金奴隷と家内奴隷という二重のくびきにしばりつけている決定的契機―ブルジョア社会の成立の本質的契機をなす国家の暴力について見ておかねばならない」として、「家内奴隷制」(何の展開もなく、ふいに出てくる)の上に家族を築きあげている条件とは何か？ 永い歴史の伝統があり、ブルジョアイデオロギーの影響が依然として支配的であることもその基礎である。だが、最大のものは、近代ブルジョア社会のそもそも出発点において、労働力の再生産を個別家族に押しつけ、個別家族をして、この社会の経済的単位として組織した力―国家の暴力を見落すわけにはいかない。」

二節 マルクス主義国家学説の核心

―永井の弁証法の折衷主義的偽造による

マルクス主義国家学説の日和見主義的偽造―

序説(上)においては、主要に、「資本主義批判と女性解放」をめぐる、政治局―中央委批判と論争の中で生れた「意見書」の自己切開を、我が全国委―12・18路線の根底的総括と一対のものとして、なしてきた。そして、それは、我々の資本主義批判自身の内にはらまれていた誤りの多くの総括とそれが、いわゆる八木沢流の国家論・戦略論の接木を、「更なる展開」とか「深化」などという欺瞞に満ちた逃げ道を、必然的に用意する根拠を、12・18資本主義批判そのものが、もっていたことも、明きらかにした。

しかし、我々は、「上」の結びであえて、言い切った様に、資本主義批判の位置とそれが何を導き出すものであったのかについてまで、清算した上で、次は「国家論だ」と、いう問題の立て方を拒否すると。

そして、一章、二章と我々は、直接、国家論に入らないで、再び、歴史的、社会的な女性差別の根拠と解放の条件の形成過程を、唯物史観を導きの糸として、明きらかにしてきた。その中で永井の誤りも明らかにしてきた。

我々は、この上に立って、はじめて、マルクス主義の国家学説の基本的命題を核心としつつ、何故に、共産主義婦人解放理論が、その核心問題の中心に、「プロレタリア独裁」の一般的承認ではなくて、当面の中心のスターガンとして、それを掲げ、全プロレ

「12・18資本主義批判」において、あいまいにし、赤報派がその理論の中から、排除した『国家の暴力』の役割を我々も又、排除した」

「又、今日、賃金奴隷としてのプロレタリアートをつないでいる、国家の暴力を見落す点に、女性差別の主要な攻撃を専ら工場内にみる(北原)狭い見地がある」、と、

何という、デタラメさ！ 何という清算主義！ 歴史的伝統が基礎、とか「ブルジョアイデオロギーの支配的」とかが、根本的基礎などでは全くないこと、時すでに論証済みである。いくつか引用した、これらの「国家の暴力」なる言葉が、全く突然、空から舞い降りた神様のように我が共産同―12・18路線の資本主義批判の地平や、赤報批判の地平を洗い流しつつ、永井の女性解放理論なるデッチ上げがなされている。展開不可能な、エンゲルスや、マルクスの歪曲、卑俗化の断片の数々に、金粉をふりかけ、「かぼちゃが馬車」にかわるような魔法を試みようとしている。マルクス主義の国家学説の歪曲という「つえ」でもって。

タリア階級、人民の革命闘争と結合されねばならないのか、に入ることが出来る。

永井はいう。「今日、賃金奴隷としてプロレタリアートをつないでいる国家の暴力」と、又、「プロレタリア女性を賃金奴隷と家内奴隷の二重のくびきにしばりつけている決定的契機―ブルジョア社会の成立の本質的契機をなす国家の暴力」と。

すでに、読者の多くは、この短かいセンテンスの中に、何と多くの誤ったものが、結合させられているのか、理解できると思う。(そして、何よりも、驚いてほしいのは、これは、長い国家に対するマルクス主義的な分析のうちに、引用したものでなく、これだけが全てであり、これだけで、規定されていることである)

「国家はけっして、外から社会におしつけられた権力ではない。またそれは、ヘーゲルの主張する様な『人倫的理念が、現実化したもの』、『理性が、形象化し、現実化したもの』でもない。それはむしろ一定の発展段階における社会の産物である、それは、この社会が、自分自身との解決できない矛盾にまきこまれ、自分では、はらいのける力のない、和解できない対立物に分裂したことを告白するものである。ところで、これらの対立物が、すなわち、あいあらそう経済的利益をもつ諸階級が無益な闘争のうちに自分自身と社会をほろぼさないためには、外見的には、社会のうえに立ってこの衝突を緩和し、それを『秩序』のわく内に、たもつべき権力が必要となった。そして、社会から、生れながら、社会のうえに立ち、社会にたいして、ますま

す外的なものとなってゆく、この権力が、国家である」(エンゲルス『起源』)

レーニンは、その『国家と革命』で、冒頭にこのエンゲルスを引用して、マルクス主義の基本思想が明瞭に示されているとして、「国家の歴史的作用とその意義について」、「国家は階級対立の非和解性の産物である」と定義した。それは、直ちに、それにとどまらず、次の様な帰結として理論的・実践的にも貫徹されなければならぬことを、明示している。

「マルクス主義の『カウツキー的』歪曲は、はるかに巧妙である。国家が階級支配の機関であることも、階級対立が和解できないことも、『理論的』には、否定されていない。しかし、次の点がわすれられるか、もみけられている。すなわち、もし国家が、階級対立の非和解性の産物であるなら、また国家が社会のうえに立ち、「社会にたいして、ますます外的なものになってゆく権力」であるなら、あきらかに被抑圧階級の解放は、暴力革命なしには、不可能なばかりでなく、さらに、支配階級によってつくりだされ、この『疎外』を体現している国家権力機関を破壊することなしには不可能であるということがそれである。」

更に、有名な国家権力の特徴を叙述したあとで、

「こうして、国家は永遠の昔から、あるものでない、国家なしにすませていた社会、国家や国家権力のことを夢想さえしなかった社会が、かつてはあった。諸階級への社会の分裂を必然的に伴う経済的發展の一定の段階において、この分裂によって、

国家が一つの必要となったのである。いま、われわれは、これらの階級の存在が、必要でなくなるばかりか、かえって、断然生産の障害となるようなそういう生産の発展段階に急歩調で近づいている。階級は以前にその発生が、不可避であったように、やはり不可避的に消滅するだろう。国家も不可避的に消滅する。生産者の自由で平等な協同関係にもとづいて生産を組織しかえる社会は、国家機構全体を、その時、当然おかれるべき場所へうつすであろう—すなわち、糸車や、青銅の斧とならべて、考古博物館へ—

又、

「プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまずはじめには国有財産に転化させる。だが、そうすることで、プロレタリアートは、プロレタリアートとしての自分自身を廃絶し、そうすることであらゆる階級差別と階級対立を廃絶し、そうすることでまた国家としての国家をも廃絶する。階級対立のうちに運動してきたこれまでの社会には、国家が必要であった。すなわち、そのときどきの搾取階級が自分たちの外的な生産諸条件を維持するため、したがって、とりわけ現在の生産様式によって決められている抑圧条件(奴隸制、農奴制あるいは隷農制、賃労働)のもとに被搾取階級を暴力的におさえつけておくための組織が必要であった。国家は全社会的の公式の代表者であり、目に見える一団体に全社会をまとめあげたものであった。しかし、国家がこうしたものであったのは、それがそれぞれの時代にみずから全社会を代表していた階級の国家—古代では奴隸

所有市民の、中世では封建貴族の、現代ではブルジョアジーの国家—であったかぎりにすぎなかった。それは、ついに実際に全社会の代表者になることによって、自分自身をよけいなものにする。抑圧しておかなければならない社会階級がもはやなくなるやいなや、階級支配と、これまでの生産の無政府性にもとづく個人の生存闘争とがとりのぞかれることになって、そこから起る衝突と暴行もまたとりのぞかれるやいなや、特殊な抑圧力である国家を必要としたような、抑圧しなければならぬものもはやなくなる。国家が実際に全社会の代表者として

たちあらわれる最初の行為—社会の名において生産手段を掌握すること—は、同時に国家が国家としておこなう最後の自主的な行為である。社会関係にたいする国家権力の干渉は、一分野から他の分野へとつきつきによけいなものとなり、それからひとりでにねむりこんでしまう。人にたいする統治に代わって、物の管理と生産過程の指導とが現われる。国家は『廃止される』のではない。それは死滅するのである。『自由な人民国家』という文句は、この点にたいして評価しなければならぬ。つまり、それが一時的に扇動上の理由から是認できるという面と、最終的には科学上不十分であるという面とを、評価しなければならぬ。国家をきょうあすにも廃止せよという、いわゆる無政府主義者の要求も、同様にこの点にたいして評価しなければならぬ」(『反デューリング論』)

レーニンは、これらのエンゲルスの考察の中から、次の五つの核心的思想を整理し出発点とした。

第一には、ブルジョア国家は、「死滅」するのではなく、革命のあいだに、プロレタリアートによって、「廃絶される」、この革命のあとで、死滅するのは、プロレタリア国家、または半国家であること。

第二には、国家は「特殊な抑圧力」である、それは、即ち、ブルジョアジーがプロレタリアートを、ひとにぎりの富者が数百数千の勤労者を抑圧するための「特殊な力」はプロレタリアートが、ブルジョアジーを抑圧するための「特殊な力」(プロレタリアの独裁)とおきかえられねばならないことであること。

第三には、「国家が社会の名において、生産手段を掌握した」のちの政治形態は、完全な民主主義であり、だから、「国家」の死滅は、もともと完全な民主主義の「死滅」「眠り込み」であること。

第四に、「国家の死滅」は、日和見主義者・無政府主義者との党派闘争として提出され、もともと、民主的な、ブルジョア共和制のもとも、賃金奴隸制が人民の運命であることを忘れる権利はわれわれにない。あらゆる国家は、非自由、非人民的な国家である。こと、

第五に、暴力革命の思想が、国家の「死滅」と不可分に結びつく整然たる全一休になつていくこと、として、つき出し、まじめとして、「ブルジョア国家がプロレタリア国家(プロレタリア独裁)と「死滅」の道を通じて交代することは不可能であり、それは、原則として、暴力革命によってのみ可能である」と。これは、「大言壮語」でもなく「心酔」でもなく、論戦上の脱線で

もない」「マルクス・エンゲルスの学説全体の基礎」にあることを明らかにした。

今や、永井は「国家の暴力」と何度も何度も叫ぶことによって、この点のレーニンによるマルクス・エンゲルスの学説の思想をとり出したと悦に入っているのだから、

同じ箇所、レーニンは、(永井に)云っている。

「暴力革命に対するこの賛辞と国家『死滅』論とは、どうやって、一つの学説に結合することが、できるのだろうか？」

普通両者は、折衷主義の助けをかり？ すなわち、あるときは前者を、あるときは後者を、無思想的にあるいは、詭弁的に、勝手気ままにつかみ出すことによって結合されている。『弁証法が折衷主義にとりかえられている。』と。

このような批判—マルクス主義国家学説の日和見主義的偽造は、弁証法の折衷主義的偽造によってなされているという—批判は、永井には、もったいないというものかもしれない。

何故なら、永井にあっては、これらの箇所が、暴力革命の思想を語っているのではなく、『国家』の暴力の一面をそののみと出して、ゴジラ化し、承認しているだけであり、そののみならず、それを「破砕したり」それに何を「置かせる」のかをいうことを、一言も、語っているわけでないからだ。さて、レーニンの定式化したマルクス主義国家学説の核心的思想を、まず整理した。それは、飛躍しているようにみえたかもしれない。それ故に、一章・二章との内的関連で、この飛躍をあきらかにしておかねばならない。

この点をふりかえり、レーニンに、継承・発展されているのかを確認しておかねばならない。

「歴史にあらわれるすべての社会のおよび、国家的諸関係、すべての宗教制度、および法律制度、すべての理論的見解は、それに応じるそれぞれの時代の物質的な生活諸条件が理解され、かつ前者が、これらの物質的諸条件からみらびきだされるばあいだけに、理解される」は一つの革命的発見であり、この命題は、きわめて革命的帰結をもつ、すなわち、「社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、従来それが、その内部で運動してきた現存の生産諸関係と、またその法的表現にすぎない所有関係と矛盾する様になる、これらの諸関係は、生産諸力の発展形態からのその極端に急変する。その時に社会革命の時代が始まる、経済的基礎の変化と共に、巨大な上部構造全体があるいは徐々に、あるいは、急速に変革される。』ブルジョアの生産諸関係は社会的生産関係過程の最後の敵対形態である。ここに敵対的というのは、個人的敵対の意味ではなくて、個人的生活諸条件から生ずる敵対の意味である、しかもブルジョア社会の胎内で発展しつつある、生産諸力は、同時に、この敵対的解決のための物質的条件をもつくり出す」(エンゲルス・カール・マルクス著『経済的批判』)

更に、マルクスは、このブルジョア社会の解剖学—「経済学」を『資本論』として、「弁証法」が、ヘーゲルの手でどうむつている、「神秘化」と、「逆立ち」を、ひっくりかえし、「現存するもの肯定的理解のうち同時に、また、その否定の、その必然的

(注) その門はやはり「レーニン」から入ろう。我々は、『国家と革命』を導くレーニンの、「マルクスの真の国家学説を現状に復する」内的作業は、あの有名な「青いノート」といわれる『国家論ノート』に、豊かである。そして、最もわかりやすい形では、一九一七年(七月)の「国家について」(大学に講演)にある。

「国家がどの様にして発生し、またどの様にして発展してきたか—この問題を科学的な見地からとりあげるために、もっとも重要なことは、基本的な歴史の関連を忘れないことである。」「この基本的事実—原始的な奴隸制の形態から農奴制への、最後に資本主義への社会の移行—を諸君は、つねに念頭におかねばならない、なぜなら人類史のこれらの大きな時期—奴隸制時代—農奴制時代—資本主義時代—は、それぞれ何十、何百という世紀にわたっており、きわめて多くの政治形態、ををしめしている。この諸階級への社会のこの分裂や階級支配の形態の変化を基本的な導きの糸として、しっかりとにぎり、すべての社会問題を—この見地から解明するばあいだけに」

と、奴隸制国家—農奴制国家を分析し、資本主義国家も基本的には、私有財産制を基礎とした、資本家が貧農と労働者階級を隷属させておくのをたすける機構であると、提出する。(これ自身は、別途の形で、提出したい)。

ここでは、一章・二章で何度も明らかにしてきた様に、マルクスによる、ヘーゲル法哲学の批判的検討が、行きついた結論の地平—ブルジョア社会の解剖はこれを経済学に求めねばならない。』な崩壊の、理解をも含むどの生成する形態も運動の流れにおいてしたがってまたその無常的な側面から、何ものによっても畏伏させられず、その本質上、批判的、かつ革命的—な弁証法を武器としつつ、「近代社会の経済的運動法則を暴露」し、先述した「生産手段の集中と労働の社会化は、それらの資本制的外被と調和しえなくなる時点に到達する。この外被は粉砕される。資本制的私有財産の葬鐘になる、収奪者が収奪される」こと。この全過程で、彼ら自身の墓堀「人を生産する。今日、ブルジョアジーに對立するすべての階級のうち、プロレタリアートだけが現実に革命的な階級である」(『共産党宣言』)という、プロの世界史的位置と任務をあきらかにしたことが、はっきりと新ためて、確認されなければならぬ。

この様な、マルクスの資本主義社会から、共産主義が発生し、資本主義から生みだされた社会的諸力の抗争の結果であること、「資本主義社会から共産主義社会への過渡期」の「政治形態」の問題として、「プロレタリアの革命的独裁」が提出されること。二節冒頭にあげた、レーニンによる、これを基礎とした、マルクス主義国家学説の核心的思想は、これらの一切の思想的武装と理論的帰結を、当時の革命闘争の歴史の教訓に導かれながら確立されたこととして、踏えられねばならない。

(注) 今日、マルクス主義国家学説をこの様に原則的に確認する

時、次の点に留意する必要があると考える。

「若い人々がときおり、経済的側面を過当に重視しているのは、いくぶんは、マルクスと私自身に責任のあることである。

われわれは論敵に対抗して、彼らの否認する根本原理を強調しなければならなかったし、その場合、交互作用に参加するほかの諸要因を正当な地位において論じる時、場所、機会が、いつもあったわけではない。

「このほかに、なお一つだけ足りない点があるが、それは、マルクスや私の書いたものにもふつうは十分に強調されておらず、それについては、われわれみなが同罪であるような点である。つまり、われわれは、みなはじめは、経済的な基礎事実から政治的、法的その他のイデオロギー的観念や、これらの観念によって、媒介された行動を導き出すことに重点を置いたし、またおかねばならなかった、その場合われわれは、内容的な面をとりあられるあまり、形式的な面、これららの観念、等がうまれる仕方—をおろそかにしてきた、われわれはみな、この面を不当におろそかにしてきたように思う」という晩年のエンゲルスの自己批判等に見られる、(マルクスの『経済学批判』—『資本論』を基礎とした) 上部構造の諸要素に対する包括的な検討について、我々も又、今後の課題として、残っていることを明らかにしておかねばならない。

三節 永井理論の實踐的帰結—

ブルジョア女権論への転落

さて、永井は、この様な「ブルジョア社会の解剖学」としての経済学—資本主義批判を、一切、理解しえず、のみならず、我々の「資本主義批判」の一切を、清算することによって、近代プロレタリアートの世界的な任務と—(革命的階級としての)、位置を、切り捨て、結局のところ、「プロレタリアの革命的独裁」や、資本主義社会から、共産主義社会が「成長・転化」すること、そして、この経済的基礎の上にそびえる「国家」が「死滅」し、「階級」が「廃絶」されるなどは、全て観念的な、不可知な世界へ押しやられていることを物の美事に暴露している。

これらに対する無自覚さ故に、永井は、「労働者に前記の社会的災禍を打破する能力を与え、また打破せざるをえない様にする物質的その他の諸条件がいかにして、現在の資本主義社会の中でついにくり出されたかを、ここで、はっきり論証すべき」(マルクスのラッサール批判) ことなど、一切、念頭になく、「賃金奴隷と家内奴隷の二重のくびきにしばりつける国家の暴力」論に帰結させた。

すでに我々は、二章において、女性の家内奴隷化が、歴史的にどの様に、何を基礎に形成され、資本主義生産—大工業の発展の中で、女性プロレタリアーが形成されることによって、女性の差別支配の特徴であったところの、陰然、公然たる「家内奴隷制」が、その経済的基礎を解体させていったのか、賃労働制の確立に

伴って、それらの解体・崩壊の物質的基礎が準備されてくることを論証してきた。

国家の「強力」は、政治権力が、経済的に無力であるなら、いったいわれわれはなぜプロの政治的独裁のために闘うのか? 強力(すなわち、国家権力)もまた、一個の経済的潜在勢力である「(マルクス)といったマルクスの分析の中で、一般的に、私有財産制を基礎とした、賃労働制(—家内奴隷制)との弁証法的関連抜きに、超観念的にふってわいた様な「国家の暴力」のみが、この「鎖」をつないでいることの誤りを暴露してきた。

これらは、どの様な実践的誤りへ導かれるのか? これらの規定づけは、実践的基準が、例え、どの様な飛躍があろうと、短絡があろうと、折衷主義であろうと、「国家の暴力」—「暴力革命」、へと導かれているのだろうか、奇妙なことにそうではないのだ、これ程、この点だけを強調してきた永井女性解放理論が、婦人解放運動にとって、帰結させたものは、「全女性が公的産業に復帰することを第一の前提条件とし、これまた社会の経済単位としての個別家族の属性を除去するを必要とする」のエンゲルスの引用に闘う党の指針の基準を求めていること、これである。

エンゲルスも泣くというものだ、これが、エンゲルス死後七〇有余年後の「共産主義者」によって、闘う党の指針(綱領のことだ)の基準—共産主義婦人解放の旗印の基準に、唯一あの『起源』の中から、これだけが、とり出されようとは!

すでに「個人的性愛」のところで、同じ誤りを指摘した、今度も、全く同じ、『起源』の同じところのわい曲、卑俗化である。

エンゲルスは、「公的産業への復帰」を、どの様な脈絡のなかで、明らかにしたのか、簡単にみておかねばならない。

永井の引用した箇所は、すぐその前の様な内容の帰結である。

「家族のなかでは夫がブルジョアであり、妻がプロレタリアを、代表する。ところで、産業の世界では、資本家階級の法律上の別個の特権がいっさい除去され、両階級の完全な法律上の同権がうち立てられてのちに、はじめてプロレタリアを重んずる経済的抑圧の特性が、その完全な姿であらわれてくる。民主共和制は、両階級の対立を揚棄するものではなく、かえってこの対立がたたかぬかされる地盤をはじめて提供するのである。それとまったく同じように、近代家族における妻にたいする夫の支配の独特な性格も、さらに両者の、真に平等な社会的地位をうちたてる必要と、仕方、も、夫婦が法律上完全に同権になったときにはじめてあきらかにあらわれるであろう。そのときには、女の解放のための第一の先行条件は公的産業—」

と、いう箇所であり、それは、その前の、「単婚制個別家族」の出現によって「家計の運営」の公的品格を失わせ、一つの「私的労役」となったこと、しかし、現代の大工業が、プロレタリアの女にだけ、社会的生産の道を開いたが、それは、私的労役の義務を果せば、公的産業からしめだされたままであり、公的産業に参加してひとりだちしようとするれば、家庭の義務をはたすことができな。これは、決して、工場だけでなく、一切の職業部門でそうであること。だからこそ、「近代の個別家族は、妻の公然たる、

陰然たる家内奴隷制のうえにきずかれています」本質が、「完全な
鋭さ」で、公的産業へ進出した女性たちの上にあらわれてくる。
それは全ての女性たちの上に。

「賃金奴隷と家内奴隷」の二重のくびきとは決して、並列的な
ものでなく、私有財産制を基礎として、確立された家内奴隷制度
(奴隷制を先行条件としつつ)が、農奴制を経つつ、大工業—資
本制生産の発展の中で、確立されていく「賃労働制」(—賃金奴
隷制)の中で、その先の様な姿で、「完全な姿で」、矛盾を表現し
つつ、それが、物質的基礎から崩壊していく運動の過程をあらわ
すのであり、「二重のくびきの状態」は、決して、そこで静止す
るのでなく、その家内労働が大工業の発展の中で、徐々に、社会
化され、プロレタリア家族自身が、本来の意味の「家族」を解体
させつつ、その内に、女性プロレタリアートが、この「賃労働制
—私有財産制」を廃絶するプロレタリアの経済的解放の一環に、
自らの解放の物質的基礎を見出すことを我々は、一章・二章で
明きらかにしてきたと思う。

その意味で、エンゲルスが、あえて、「公的産業への復帰が、
第一の先行条件」としたところの、本質の意味は、この「先行」
すなわち、「女性の公的産業への復帰によって、資本主義社会の
二大階級—ブルジョア階級とプロレタリア階級—への分裂とその階級闘争の歴史
の中に、「世界的敗北」の止揚をかけて、資本主義と闘う男女プ
ロレタリアートの共通の利害と闘いのための、まったく階級的土
台を生み出すということ、であって、決して、これが、資本主義
社会の内部から形成される女性解放の物質的基礎を語っているわ

けではない。その基礎は、文字通りこの先行条件の土台の上につ
くられること、ましてや、闘う党の基準—綱領に直結するなど
は、

永井は、実践的基準をこうすることによって、一方では、国家
の暴力論なる理論との統一性において、全くの自己矛盾を示し、
「国家暴力論」が結局のところ、単なる思いつきや、単なる修飾語
にすぎなかったことを暴露している。

これは、他方で、結局のところ共産主義者の女性解放に対する
実践的立場を、ブルジョア女権論のレベルに押しとどめさせたの
である。

「ブルジョア婦人運動が、プロレタリア婦人運動のための予
備工作として、提供した最上のものは、男女同権のために職業
労働がもっている意義を強調したことであり、そのことを理由
とした政治的権利の主張であり、女は低能だという考えについ
ての古い偏見にたたかいをいんだことである。しかし、この
点についても、その功績は、ブルジョアの立場に制限されて、
限定付きのものにされた。女権論者たちは、資本主義私的経済
とブルジョア階級の階級支配の社会では、職業労働と選挙権は、
所有階級の婦人のためには、まったく根本的で決定的なもので
あるけれども、プロレタリア婦人の自由と同権を保証するため
には、あらゆる原則的意味において、不十分であるという事情
を理解しなかった。(『ドイツプロレタリア婦人運動の歴史に
よせて』クララ・ツェトキン)

このクララのブルジョア女権論への批判は、永井のエンゲルスの

卑俗化・わい曲に対する批判としての確であると思われる。

(注) これらのエンゲルスのわい曲、日和見主義的偽造は、結局
のところ、彼らの俗流民主主義の本質を政治的には、暴露し
ていることを、一言触れておかねばならない。

第四章 階級の廃絶による経済的・社会的 平等とプロレタリアートの革命的独裁

— 共産主義婦人解放の綱領的基礎 —

(1) 「婦人は男性と完全な社会的同権をうけとるべきである。それは、真正正銘の平等であって、絵に描いたもちで我慢するといふのではない、そして婦人は男性のごとく、全人類のために、与えられた自由な発展と完成の可能性を獲得すべきであるが、それには、二つの主要な条件が満たされなければならない。すなわち、生産手段の私的所有が廃止されて、社会的所
有に置き換えられ、そして一方婦人の活動が搾取や隷属のない制度のなかで、社会的制産に組織されることである。この二つの条件の実現だけが、全面的に発達したいろいろな能力と力を身につけた婦人が、ひとつの社会において、男性と同じ義務と権力を与えられて働く者、生産する者として、他の同じ義務と権利をもって働き生産する者たちに影響をおよぼすことを保証し、職業活動と母としての活動が、その完全な成果をもって終ることを保証する。」

(2) 「共産主義は、これらの諸条件をみだす。その結果、女性全体にまっただき自由と、まっただき、権利を保障する唯一の社会制度である。共産主義の基礎は社会経済を支配する、物資の生産や、分配、流通などの巨大な手段の社会的所有である。共産主義は、これらの手段の私的所有を廃止することによって、人間

による人間の抑圧と搾取の原因をとりぞき、富める者と貧しいもの、搾取するものと搾取されるもの、支配者と被支配者との社会的対立をとりぞき、かくして、男女間の経済的社会的な対立をもとりのぞくのである。

— 婦人がその性によってある男性の占有に属することはなく、家族の小さな道德的単位に属することもない、そしてまた、利潤をしぼりとする資本家や搾取する支配階級に属することもない。

(3) 「共産主義、すなわち女性の偉大な救済者は、女権論的諸要求の意味において、ブルジョア制度の改良をめざし、男性の特権的社会的地位に反対するすべての階級の婦人の共通のたたかいの成果としてもたらされたものでは、けっしてありえない。共産主義は、搾取された男女プロレタリアートの共通の階級闘争によって実現されたものである。」

(4) 「プロレタリアートによる国家権力の奪取は、確信をもった共産主義的プロレタリア婦人の事業でなければならぬ。」

(5) 「個々におけるプロレタリアートの階級闘争が国際的に連帯し、世界革命において、その絶頂に達するように、帝国主義に反対し、プロレタリアートの独裁の樹立をめざす婦人の革命的闘争も、また国際的に結集されなければならない。」

(以上、全部、共産主義インターナショナル第二回世界大会、一九二〇年七月、クララ、) (1) (5)は筆者がつけたもの。我々は、レーニンによって、創出された、第三(共産主義)インターナショナル第二回世界大会に提出されたクララ・ツェトキンのこの「共産主義婦人解放運動のテーゼ」、の内に、それまでの

全世界的なブルジョア婦人運動に置きかえられるべき闘う旗印をみることが出来る。

そして、これらの内に、エンゲルス・マルクス・レーニンに負いつつ、明らかに、マルクス主義が女性解放の武器として見事に、闘う党の旗印に高めあげられていることを見る。

(注) このクララのテーゼは、あの有名な、「クララとレーニンの会話」の中で生れたものであることが有名であり、これが、「プロ独期」「プロ独をめざしている国」「前資本主義的発展段階にある諸国」と、三つに分れたテーゼにまとめられている事、又、それが、組織問題と一対に提出されている点など、多くの創造的な特徴を有し、共産主義婦人運動としては初めての基本方針を定めている点で、歴史的な位置を我々も又、確認すると共に国際共産主義婦人運動を領導した支柱として、総括しきつていかねばならないと考えている。別途の形で提出する。

ここでは、我々は、(上)以降すすめてきた、「意見書」総括—永井批判の帰結として、何を確認しておくかに届めておきたい。

第一に、マルクスのゴータ綱領の「『あらゆる社会的・政治的不平等の除去』という、この節の漠然たる結びの句のかわりに、階級差別の廃止とともに、これから生じる一切の社会的、政治的不平等は消滅するというべきものであった」という、ラッサールへの批判的見地の継承発展の問題である。又、「平等とは、この概念が、階級の廃止ということに帰着しないかぎり、先入観または、たむごとである」エンゲルスの『反デューリング論』の思想

的見地の問題である。

第二には、この階級の廃止の目的を実現するためには、プロレタリアートの革命的独裁の道とすること。

(注) 「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者からへの革命的転化の時期がある。この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもない」

即ち、生産手段の私的所有について、沈黙するかぎり、自由と平等のスローガンが、ブルジョア社会のうそであり偽善であること、ブルジョア社会にあつては、自由と平等を形式的に承認することによって、労働者にとつての、あらゆる勤労者と資本に搾取されるあらゆる人々にとって、実質的、経済的な不自由と不平等が隠されていること、それ故にこそ、「生産手段の私的所有と自由商業が残っているあいだは資本主義の経済的基礎が残っており、プロレタリアートの独裁は、この基礎とたたかって勝利をおさめる唯一の手段である。」

即ち、我々は、第一に關して、

「社会民主主義者は、平等という言葉を用いて、政治的分野では同権という意味に、経済的分野では、すでに述べた様に、階級の廃絶という意味に解する。力と能力(肉体的・精神的)の平等という意味で人間の平等を打ち立てようなどは、社会主義者は考えていない。」

「階級を廃絶するということは、すべての市民を社会全体の生産手段に対して、同一の關係におくことを意味する。それは、すべての市民が、社会の生産手段で、社会の土地で、社

会の工場その他で同じように仕事にすることができるといえる。

平等はいつねに社会的平等であって、個々人の肉体的・精神的能力の平等ではない（レーニン「自由主義的教授の平等論」より）

女性の抑圧と隷属が、私的所有の発生とその固定化（私所有財産制）を基礎として、奴隷制の内訌、「家内奴隷」として男の所有物と化してきたこと、又、それは最初の階級対立と階級社会（階級国家）の形成と一体のものであったこと。

大工業の発展—資本制生産の発展は、（私有財産制をその運動の基礎としつつ）、歴史の最後の奴隷制—賃労働制の確立と共に、ブルジョア階級とプロ階級の分裂・抗争を公然とし、女性プロレタリアの形成、賃金奴隷、家内奴隷の二重のくびきにしばりつけたまま、一方では、「形式的な平等」と、経済的な、したがって、社会的な不平等を結合させている。しかし、資本主義社会自身が、女性の「賃金奴隷化」によって、一方では、近代個別家族の経済的基礎を解体しつつ、他方で労働の社会化の発展のうちに、「家内奴隷制」からの解放の物質的条件を、プロレタリア階級の階級闘争—「賃労働制の廃止—私有財産制の廃絶」に向っての男女プロの共通の闘いとして、準備されていることだった。

それ故に、(1)女性の完全な自由と平等は、私的所有の廃止（私有財産制の廃止）と社会的所有へ置きかえられること、と、社会的生産に組織されることを条件とする。即ち、この条件こそが、「賃労働制」と「家内奴隷制」を、その根底から廃止することが

できる。

(2) 共産主義以外にこれを実現できないこと。の確認に結果する。

しかも、それは、マルクスの「ゴータ綱領批判」で明きらかにされている点、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会の第一次の段階と共産主義社会の高度に発展した段階とのちがいが。

「それ故、平等の権利は、ここではまだやはり、原則上、ブルジョアの権利である。生産者の権利は、彼の労働給付に比例する。平等はひどい、尺度で、すなわち労働で測定される点にある。だがある者は、肉体的または、精神的にまさっているのと同じ時間内により多くの労働を給付し、あるいはより長い時間労働することができる。」

平等の権利は、不平等な労働にとつては、不平等な権利である、この権利は、なんの階級差別をもみとめない、しかしそれは、不平等な個人の天分と、不平等な給付能力を、生れながらの特権として、暗黙のうちに承認している、だからそれは、内容からいえば、すべての権利と同じように、不平等の権利である。しかし、こうした長い生みの苦しみの中から、資本主義社会から生れたばかりの共産主義社会の第一段階は避けることができる。

共産主義のより発展した段階に、個人が分業に奴隷的な従属をすることがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との

対立がなくなったのち、労働がたんに生活のための手段たるのみならず、労働そのものが第一の生活欲求となったのち、個人の全面的発展にもなって、生産力を増大し、協同社会的富のあらゆる泉がいつそうゆたかにわきでるようになったのち、

その時はじめて、ブルジョアの権利の狭い限界を完全にふみこえることができ、社会はその旗のうえにこう書くことができる。

—各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて—

ここにこそ、あの二章・冒頭にあらかした、マルクスが、提出した「人間の自然的態度が人間的となったか、どの程度まで、人間の欲求が、人間的欲求となったか、したがってどの程度まで、他の人間が、人間として欲求されるようになったかというところも—この（男性の女性に対する）関係のうちに示される—両性の関係の具体的実現も又、この共産主義社会のうちに創造されるものといわねばならない。

そして、この共産主義社会の実現に向ってのプロレタリア階級闘争の不可欠の一環として、「階級の廃絶による経済的・社会的平等をめざす」女性解放は組織されねばならないことも又、必然であった。

これは、何によって勝利するのか、それが、先に提出した、第二の問題—プロレタリアの革命的独裁の実現こそ、共産主義プロレタリア婦人運動の政治的目標でなければならぬことを要求している。

この政治的帰結は、マルクス・エンゲルス・レーニンによる、マルクス主義国家学説の理論的帰結の一つであり、マルクスの階

級闘争の核心問題であること、これは、すでに先述した通りである。

それ故に、一切の階級差別による不平等をなくす、その意味で、ブルジョア民主主義をプロレタリア民主主義で置きかえ、民主主義をも廃棄していく過渡的政治権力としての「プロレタリアートの革命的独裁」の実現は、女性解放の避けてとうることのできない道として、女性自身の事業でなければならぬ。

「独裁とは、大きな、苛烈な血なまぐさい言葉であり、二つの階級、二つの世界、二つの世界的な時代の、生死を賭けた、仮借ない闘争を表現する言葉である……」

プロレタリアート独裁を承認することは、時をえらばず、なにが何んでも、強襲や蜂起にすむということではない。そんなことはばかっている、蜂起が成功するためには、長期にわたる、巧みな、ねばり強い、そして大きな、犠牲を要する準備が必要である。

それは、幾百万の労働者とのところへ、幾千万の人々に、彼らが、全権力をにぎり、彼らの前衛、革命的プロレタリアートの党が、闘争を指導しなければならぬ。—これがプロの独裁である—（レーニン）

ここにおけるプロ独を実現する、革命闘争は、プロによる暴力革命であり、しかし、「プロ独の本質は、主として暴力にあるのではなく、主要な本質は、勤労者の先進部隊、その前衛、その唯一の指導者であるプロレタリアの組織性と規律にある。」

「資本にたいする何十年ものストライキ闘争と、政治闘争と

によって、訓練され、結合され、教育され、またえられた階級だけが、――過去と絶縁し、新しい未来に向って大胆に道を切り拓く人々に、歴史が、不可避に負わせるあらゆる重荷、試験、苦難、大きな犠牲をたえぬくことのできる階級だけが、――その最良の分子が、いっさいの素町人的なものと俗物的なことにたいた小ブルジョアや下級職員や『インテリ』のあいだに、あのようにさかえているこれらの資質にたいする憎悪と軽べつにみだされていく階級だけが、『人をきたえる労働の学校を卒業して』自分の労働能力にたいする尊敬をあらゆる勤労者、あらゆる誠実な人々にいだかせることのできる階級だけが、自己の独裁によって階級をなくすことができるのです。(レーニン、「ハンガリ労働者へのあいさつ」)

「賃労働制―私有財産制の廃止」、「家内奴隷制の廃止」は、この様な、革命的階級によって、プロ独樹立と共に開始し、指導される階級闘争の更なる発展として、慣習等々の根本的改造を伴いつつ、長期にわたる闘争が組織されねばならない。

我々は、次のクララの言葉を引用して、この節を終えることとしたい。

「婦人がマルクスに負うものは、かれが他の誰ともちがって、女性を社会的隷属から自由へ、萎縮から、調和的で、力に満ちた人間性の高みに導いていく苦痛にみちた途上に、明るい光を投げかけたということをもってしては決して、いいつくされはしない。かれは今日の社会とその根底に横たる階級対立を徹底的に、するどい目で分析することによって、異った階級に属す

る婦人を引きはなす和解しがたい利害の対立を見てとった。唯物史観という大空の中では、これみよがしに、ブルジョア婦人とプロレタリア婦人に結びのリボンをかませるあのすばらしい女性や、やがて愛のおしゃべり、虹色に輝くしゃばりん玉のように消し飛んでしまった。マルクスは、プロレタリア婦人運動とブルジョア婦人運動の結びつきをたち切る剣をつくり、その使い方を教えた。かれは、プロレタリア婦人運動を共産主義的労働運動と分ちがたく結びつなぐという考えの鎖、プロレタリアートの革命的階級闘争に組み入れるという考えの鎖をもつかった、そのようにして、かれは、われわれの闘いに、輝きと偉大さ、および目的の崇高性を与えたのである。」

資料編

資料掲載にあたって

紙面の都合で分載したが、以下に掲載する資料は、「マルクス主義」創刊号に収録した資料と合わせて参照されたい。

これらの資料は、昨年八・二五第一回工糾弾会における二名の被差別女性同盟員の血涙をもった闘争宣言を合図に開始された、同盟全国委の女性差別指導との非妥協的な闘いと、それと共にあった女性同盟員の成長の記録である。そしてこれらは、わがボルシェビキ女解委の誕生を前にした陣痛を、最も生き生きと描きだしている。

二名の被差別女性同盟員の闘争宣言と、生田意見書を封殺して成立した十月中央委―「女性解放」小委員会、成立と同時に、崩壊を開始した。

「鉄鎖を砕け」―「一・一五中書記女性闘争宣言」は、女性同盟員による反撃の開始を告げるものとなった。それは多くの未熟さを含みながらも、自然成長的に前進してきた工糾弾全国委糾弾を、根拠をえぐる目的意識的な闘いへの転化を開始するものであった。

女性同盟員一人一人の孤立した闘いが終わりを告げ、大きな闘いの流れになろうとしたとたんに、差別指導部は、反動への道をひた走りに走った。北原と西―関西地方委は、指導下の同盟員に「鉄鎖を砕け」を配布せず、一・二六全党女性会議の妨害(「査問委」主催という条件付で、しかも××機関女性の不参加)を企てた。が、もはや闘いの炎の燃えあがるのを誰もくいとめることができなかつた。

二月に入るや、一方では議長八木沢の逃亡、永井の居直りが公然化し、他方では、「鉄の規律」と「鉄の団結」を誇った××機関で反北原の烽火があがり、関西地方委下で労働者を中心とした同盟員によって指導部追及の火の手があがった。「全党の正義ある同志諸君へ」は、××機関の神話への最大の反逆であり、その最後の崩壊を宣言した。

しがし××機関内反北原派は、「官僚主義」批判にとどまり、北原イズムをはびこらせた根拠たる八木沢イズムに一指も触れぬまま、永井と野合し、彼女の闘いを封殺した。

四・一〇中央委崩壊が、四・一三糾弾会で暴露されて以降、全党女性の闘いは、さまざま日和見主義を生み出しながら、五・五糾弾会における反動指導部放逐へと前進した。とりわけ「××

機関女性の総括」は、北原の直下で苦闘した女性同盟員が、その反動性の根底的批判を貫徹し、新指導部建設への決意を表明したものである。これらの蓄積の一切は、今、ここに「プロ独と女性解放」に結晶した。

『鉄鎖を砕け』 (No. 4) 兵庫県委員会発行

(一九七五、一・六)

Ⅲ T女性差別糾弾闘争の到達地平と問われているもの

(1) 女性(糾弾主体)の成長と団結の質

以上述べた経過の一切はT糾弾闘争において、プロが闘争主体に未だ成長していない悲しむべき現実を明らかに示している。女性の主体的決起—成長のみが、T糾弾闘争の到達地平を支えており、プロがこの地平を共有することなしに一歩も前進しえない地点に既に到達している。指導部がこれまで私たちにむけていた「無政府主義」という危惧の表明は、このような現実を招来させているプロの指導部たらんとするわが同盟の質—指導内容にこそ求められねばならない。

この二年余の、A・Cの苦闘は、プロに立脚し、同盟員女性として自覚していればこそ、E・FによるT糾弾、「火群の会」によるM糾弾に対する態度を問い、T糾弾闘争を同盟にはびこる女性差別との闘争として押しあげていったのである。

「火群の会」は差別—侵略と闘う労働戦線の中核部隊へ飛躍・

成長せんとする〇〇闘争の地平から生みだされ、Eは、あらゆる差別と闘う医療戦線の確立をめざす××大のメンバーである。彼女たちに「それだけでは何の規定力にもなりえない」というのは簡単である。むしろ今、私たちに問われているのは、「なぜこれまで、同盟員女性が、彼女たちの先頭にたちまることができなかったのか」を明らかにすることである。

即ち、同盟員女性が、なぜ自らの属性を切り捨てること抜きに組織活動を維持することができなかったのか、なぜ自らに直接向けられている女性差別攻撃と真向うから闘うことができなかったのかを、女性のおかれている現実を通して明らかにすることである。

女性大衆の成長は、「革命党の内実」を問うており、自ら政治的自由を獲得してゆく決意の固さを示している。そのことは、同時に、「先進的女性」を自称していた私たち同盟員女性が、女性差別に屈服し、女性差別指導の尖兵の役割を果していた歴史を暴露している。女性の団結は、「差別した男性に対するウラム・ツラム」から「差別を生みだす根拠に対する怒り」に発展したからこそかちとられてきており、今や、プロの指導性を要求するに至っている。

女性解放は女性の決起なしにはありえず、それを牽引しぬくのは、女性プロ以外にはありえない。同盟に問われているのは、その指導部たることである。

(2) Tを居直らせ、糾弾闘争の前進を阻んでいるのはなにか

① 九・八同盟の自己批判の立場と差別性について
九・八同盟の自己批判は次の四点において誤りであり、差別文書と言わねばならない。この根底には中央委議案の差別性(別途提起)が脈々と流れており、一一・二三のTの開き直り文書(自己批判書)の基礎となっている。

第一に、Tの行為を「人格無視」と「愛情なく云々」という点のみ、女性差別と認定していることである。もちろん、Tの行為が資本主義の歴史的成果である性愛に基づく婚姻をも否定する反動的行為であることは事実である。しかし、女性差別は、一方で両性の合意という外被をまとった結婚(正妻)と、他方での娼婦の存在によって補完される一夫一婦制(女性にとってのみの)を通して行なわれていることを見がしてはならない。

九・八の糾弾会を通して明らかにされたのは、性愛関係が「歴史における窮極の規定要因は、直接的な生命の生産と再生産である」(エンゲルス)ことと離れたところに把握されている現実である。女性差別は、まさにここから導きだされるのであり、「愛情云々」では決してないのである。

人格無視は結果であり、「なぜ女性であるが故に差別されねばならないのか」が問題なのである。

第二に全国委結成の地平と、女性差別の存在とを分離させていることである。問題とされているのは、「女性差別と闘えない党とは何か—女性解放が位置付けられない綱領とはなにか」ということである。T問題の解決は全国委の総括と一体であり、諸民主主義闘争でつきあっている壁と同質の問題を孕んでいるので

ある。

第三に、T糾弾闘争と女性解放闘争を別箇のものとしていることである。我が同盟の女性解放闘争に対する態度は、T問題を頂点とした同盟内の女性差別の総括を通してはじめて基礎ができるのであり、糾弾会における同盟員の態度として実践的に検証されるのである。

第四に、事実において、Iの(1)で明らかにした重大な点を欠落させていることである。このことによって、一点目で述べた「愛情云々」の安易な見過しを許しているのである。

総じて「あつてはならない事態」の発生としてしかT問題を論じておらず、女性問題を階級闘争から切り離れて論じており、これこそが女性に対する差別的偏見からくるものであることを確認せねばならない。

それは、(5)で述べられている糾弾会に対する態度に凝縮して表われている。自己批判の基準を何の規定力も持たない信頼という言葉で言いくるめ、あとは女性解放闘争一般にスリカエようとするこの立場を、女性に対する徹底した蔑視に基づくものと言わずして何と言おうか。これはT問題の本質と普遍性を隠蔽しようとするものに他ならず、差別文書と断定せざるをえない。撤回し、自己批判すべきである。

② 一・二・三Tの自己批判という名の差別文書

九・八の同盟の「自己批判」の差別性は、このTの「自己批判書」に見事に体现されている。全部で百ヶ所余の問題点・疑義があるが、部分的に修正可能な文章とは認められず、明らかに基本

姿勢における根本的な誤りと差別があるので、それに限って批判したい。

Tは自らの犯した行為が「革命家」以前の問題であり、糾弾は女性の泣き事・グチぐらいにしか思っていない。これは、九・八「自己批判」と全く同じである。

自らの階級闘争への決起と、以降の階級闘争の真只中での成長の歴史を一切清算したところで、何かしら糾弾に応えようと考えることこそが、女性に対する重大な差別である。女性の糾弾は、自らの「差別への屈服の歴史の総括と闘争宣言」に他ならないことを確認すべきである。

確かに、女性の糾弾が必ずしも階級性に裏打ちされているとはいえない。しかし、小ブル民主主義者にとっても許されざる女性差別が現に存在している限り、それとの闘争への決起は極めて高く評価されるべきことなのである。それは必ずや糾弾に決起する女性に、自らが真に解放される道を問わずにはおかないだろうし、階級対立の非和解性を明らかに示すであろう。そして、プロにとっては、階級闘争の発展をやりやすくするに違いないであろう。

急進民主主義者に対する危機感から、糾弾を否定するのは反動に転化せざるをえないし、現に中央委議案一九・八自己批判はそれに貫かれており、一連の事態がそれを証明している。Tの「自己批判」は、それがメダルの表とするなら裏にすぎない。

(3) 問われているもの

Tの女性差別が女性に何をもたらしたかは女性の側から明らかに

にされつつあるが、それを根底的に明らかにするためには、Tの女性差別がプロの階級闘争にとってどういう役割を果たしたかを明らかにしていく必要がある。

Tの女性差別は、先に述べたように、第一に封建的家父長制から発展した資本主義の歴史的成果である性愛の自由に基づく婚姻を否定する反動的行為である。即ち、それは守るべき何もも持たない(財産のない)プロにおいてのみ成立するのであるから、Tは反動的階級であるブルの公認の娼婦制によって補完される女性にとってのみの一夫一婦制度の忠実な執行者であり、プロ内部へのブルジョア思想の持ち込みの尖兵である。そして第二に、Tの「別れた」Sさんへの「想い」(精神的愛)は、人間の本质を規定する「労働と生殖」と無縁のところであり、小ブル自由主義そのものである。

マルクスは資本論で次のように述べている。「機械はまた資本関係の形式的な媒介すなわち労働者と資本家とのあいだの契約をも根底から変革する。商品交換の基礎の上では、資本家と労働者とが、自由な人として、独立な商品所持者として、一方は貨幣と生産手段との所持者、他方は労働力の所持者として、相対するところだが、第一の前提だった。ところが、今では資本は未成年者または半成年者を買う。以前は、労働者は彼自身の労働力を売ったのであり、これを彼は形式的には自由な人として処分することができた。彼は今では妻子を売る。彼は奴隷商人になる」と。また「結合された労働人員に圧倒的な数の子供や女を加えることによって、機械は、マニファクチュアではまだ男子労働者が資本

の専制にたいして行っていた反抗を、ついに打ちひしぐのである。」と述べてまさにプロが、女性差別の下手人になり下がることによって自らの解放をますます遅らせることを述べているのである。

更に「資本主義体制の中での古い家族制度の崩壊がどんなに恐ろしくいとわしく見えようとも、大工業は、家事の領域のかなりある社会的に組織された生産過程で婦人や男女の少年や子供に決定的な役割を割り当てることによって、家族や両性関係のより高い形態のための新しい経済的基礎をつくりだすのである。」と述べて資本主義が一方でプロの精神的肉体的疲弊・磨滅をもたらしつつも、他方でプロの解放の準備をしていることを示している。

一・二・一八資本主義批判は宇野価値論批判を通して、資本の直接的生産過程における労働と所有の分離を明らかにし、階級対立の非和解性の根拠を解明した。全国委(とりわけ第二段階)はその上にたつて、資本の生産過程を階級支配の強化と貫徹の物質的条件と把握、階級闘争の生きた現実の指針を提出せんとした。

しかしながら、資本の生産過程でプロ内部に進行する精神的・肉体的疲弊・磨滅の根拠を(従って、解放の条件を)明らかにしえず、その結果、諸民主主義闘争における中核部隊たるプロの任務を遂に提出しえなかったのである。

T問題は、「資本主義批判の深化として獲得し」ながら、「階級闘争の戦術指導をもって共産主義者の基準とする傾向を残存させてきた」(九・八「自己批判」)から発生し、また解決できなかったかのように言うのは明らかに誤りである。まさに私たちの

T 女性差別糾弾闘争の到達地平と
私達の態度

中央書記局女性党員一同(文責 生田)

団結の質にこそ T 問題の根拠があるのである。T 問題は、私たちの「資本主義批判が足りない」ことをまざまざと見せつけてくれる。第二段階における諸活動の成果が基本組織に蓄積しないのを、「サークル主義であった」とか「プロの独自性がなかった」とか「党派性がなかった」と嘆くことによって解決しない。同盟の団結の質を、綱領的団結として打ち固める作業を資本主義批判の深化として、なお一層のイデオロギー的純化を遂げることによってのみ私たちは前進できるのである。

T 女性差別糾弾闘争で問われているのは私たちの団結の質そのものである。「女性の気持ち、苦しみ」を理解しようと努力することだけでは(それ自体は極めて重要だが)小手先のその場限りの対応にしかならないし、融和主義に転化しかねない。

今こそ、私たちは、一切のためらいをふり捨てて、プロの未来のためにこそ、大胆に同盟をあげた取り組みを開始しなければならぬ。糾弾会で解体されるのは、女性同盟員の階級的立場ではなく、同盟に巣くうブルジョアの汚物である。

諸同志の積極的批判を要請する。

〔註〕この文章は E・T。が執筆し、兵庫県委員会指導部会議で

討議、採択されたものである。

全国の同志の皆さん、とりわけ今日も、様々な差別の下で、苦闘を強いられている女性同志の皆さん、

私たちは、中央書記局内における「闘いの宣言」と、そして「T 査問委」への積極的参加を闘い取り、来るべき一月二六日に緊急に、党内女性会議の開催を、中央指導部に承認させ、正式に「T 査問委」主催として開くことになりました。以下の文章は、一月一二日、T 査問委で承認させ、一月一五日中央書記局総会に提案した中書記全女性党員一同の「闘争宣言」である。この立場でもって、私たちは、一、二六女性会議への結果を呼びかけ、① T 女性差別糾弾闘争以降の党内女性同志への差別指導の現実を明確にし、② 我々女性党員の T 女性差別糾弾闘争へとべき態度を明確にし、③ T 女性差別糾弾闘争を我が同盟—中央指導部の根底的自己批判—我が同盟中央の党の革命を遂行し、我々の女性解放闘争の端緒を闘い取る、その様な闘争の最先頭への決起を共に、

確認せんとするものである。そしてそれ故に、以下の「闘争宣言」は、全ての女性同志の苦闘への私達、中書記女性の自己批判である。

はじめに

八・二五第一回 T 女性差別糾弾会以降、二名の被差別党員女性の決意表明が文書でもって全党に明らかにされた。その後、糾弾会の前進は、T の悪質な女性差別が他ならぬ我が同盟中央指導部によって擁護されてきたことが突き出された。

私達、中書記内女性党員は、これら中央指導部の最も近くに位置し、日常的直接的指導下にあるという根拠をもって、これら同盟指導部の指導の名の下に、日々拡大再生産される女性差別の現実の下に、半ば自覚しつつもその闘いの芽をつまれ、屈服し続けてきた。もって私達は、中書記の一員として中書記内でそれらの具体的差別と闘い、全同盟的にその闘いを呼びかけ、その最先頭に立ち切ることが出来なかった。その結果、決起した二名の女性党員の闘いを孤立させ、一層の苦闘を強い、更には、全国各級機関内女性同志が分断のうちに互いの反目と対立を生み出し、許されざる「差別されたもの」の間で差別する」という結果させてきた。

このことは、糾弾会に結集した女性大衆を同盟(全国委)の党の革命を推進させることをもって、我々と共に党建設の事業を女性にとつて解放の事業の不可欠の一環として参加させることに、結果として女性党員が立ちふさがることになるところまで至るこ

とをはつきりとみなければならぬ。私達中書記女性は、この様な現実が、何よりもこの間の一貫とした同盟中央指導部の指導の結果であることを痛苦に踏まえ、その様な自己自身とこれらの結果を強制させてきたこの中央指導部への激しい怒りをもって、ここに自己批判とそして私達は、これらとの徹底的な闘いを宣言する。

今こそ、私達は、個々人の血の滲むような党建設の中における苦闘を個人の中に強制させてきた中央指導部への屈服をはねのけ、これをつくりかえるため、決起した二名の女性党員としっかり団結し、全国各級機関内の様々な女性同志の闘いと結合し、糾弾闘争の到達地平—全国委の党の変革—を押し上げ、その最先頭に立ち切ること女性解放を—我が綱領の中に独自の位置として獲得する—そのような決定的端緒を切り開くものとして闘い取り、先進的女性大衆、全ての婦人に答えねばならない。この事こそ、私達女性党員(とりわけ中央指導部直下の)としての我が同盟(全国委)の党建設—中央指導部建設を担う私達の態度であると確信する。

私達は、内の一名を T 査問委に半ば強制的に加えられ、他の三名の諸同志は、分断され、これらの T 査問委内女性と、どのような組織的關係も位置づけられぬまま、各々孤立した闘いの中に存在し、それは互いの不信と対立の寸前にあった。糾弾会の数度にわたる前進と到達地平と共に第一次査問委の破産(査問委総括文書参照)と査問委内女性の闘いは、女性党員の査問委内での位置と役割の転換の端緒を闘い取り、そのことを条件に、一方の解体

していた中書記の中での指導放棄や差別指導の集中下にあった各女性同志が、初めて、74年末に会し討議した。査問委員女性の指導という形を取りながらも、教度にわたる討論は、相互に置かれてきた差別の現実を確認し、不信と対立に至る諸要素を取り除きつつ、私達中書記女性党員の団結とその質を問い、更には私達の客観的中書記員という指導的立場を確認し、それをどのように、何から、表現していくべきかに集中した。

以下この文章は、私達全中書記女性党員が相互批判も含めつつ、現在の到達点で討議し、現実に応えんとした内容である。その意味は、私達は今後、すでに中央委に提出してある、I女性同志の文書も含むいくつかの党内女性の文書を討議し、立場を実践的に明らかにして行くつもりである。

△I▽ T糾弾会の開始以降、中書記女性はこの糾弾会をどの様に受け止め、又どのような差別の現実の下に置かれてきたのか？

私達の自己批判が自己批判たりえるためには、又女性大衆と異なっており、我が同盟(全国委)の党建設を何よりも中書記において担ってきた女性党員としての自己批判たりうるためには、今日まで何故「自らの女性の独自性」を切り捨て、にもかかわらず「自身の女性」党員であることの苦闘を組織建設の中に対象化しえなかったのか。とりわけT糾弾が開始されて以降、私達はどのような闘いを開始し、屈服し、そのくりかえしの中で無力であったの

か。明らかにすることから始めねばならない。その事は結局のところ、私達がどの様な党内における女性差別の現実の下に活動してきたかという中央指導部直下の組織に蓄積されている差別を切開くことを通じて、中央指導部自らにその対象化を迫ることもある。その根拠と闘うことでもある。

私達は教度にわたる討議の過程で各個人の現実を暴すことから始めた。それは、この文書を支える付属文書として、中書記女性党員の自己に対する点検、切開として表現することになった。ここでは、それらの討議過程で中央指導部内女性であるが故の過酷な又その事がこの間の中央指導部自らの差別を浮彫にする(これは「政治局差別文書」をまさに体現するものとして)私達の中に共通する姿をとってあらわれたものをいくつかとり出し、切開することとした。(敬称略)

(a) △指導的女性党員という名の差別への屈服への強制▽

私達の一人一人は、指導的党員にならなければならぬと一貫して自覚してきた。しかし機動的には、上部機関に位置しても、そこにその様な女性党員を迎え、指導者に保証する全同盟的思想(「団結の質として」)や、指導や物質的条件が欠ける時、そこには、その女性党員に倍加される苦闘を一方的に強制させることになる。

「私の場合には、第一に、糾弾的でない」という政治局の北原発言にあらわれた私の評価における差別として「即ち、「不信」と絶望と闘い続けながら、私の様々な形をとった中書記における糾弾批判に対して大衆の党に対する指導的立場を責任一般に下級機関への指導責任をのみ主張して問題をすりかえ、批判の矛先をねじまげてきたのである。何とかがして指導的党員たらんとし、それが故に積極的に提案なしえないでいるのに対し、糾弾的でない」とは何という愚弄であろうか。」

この様なIに対する「糾弾的でない」という評価による持ち上げと彼女への圧殺と屈服の強制は、一方でT糾弾会の開始以降のT査問委にWを入れる際に、Wからの「今日まで党内において、私は女性問題が提案されるとその矢面に立たされ、下からの闘いの圧殺の役割を果たしてきた。今やその様な自己を総括して、T糾弾会と連帯する。その意味でT査問委への女性のうち(中書記四名のうち)一名だけを入れる内容を明らかにしなければ、結果としては、分断になり、又もや陰蔽であり、私に対するこの様な矢面になることの強制であり、それが明らかにされない限り参加できない」に対して、何ら内容を示さず「政治局命令に違反するなら」と、「除名」によって恫喝し、自己批判を強制させたことと一対なのである。

これは一貫として、子供を抱えて革命党建設に参加したWに対して、Wの「子供への組織的保証」の要求に対して、中書記内細胞キヤップからの「自力更生以外に党は現在能力を有しない」という答えとその直後には、政治局の一人A氏よりのシンプ男性(W

に対して好意をもつ)を紹介し、「彼と結婚し、子供をみさせ、経済的に保証させ、党活動をやりやすくせよ。更に彼を利用して、いつでも足手まといになるのなら切り捨ててもよい。」との提案の中で、これを拒否すれば「自力更生」の道しかななく、結果として、子供を連れて、言葉に絶するような党建設の道を個人の中に強制させてきたのである。それは、自らを男性党員と同じ活動形態・能力を発揮することの中でしか、女性問題は口に出し党に提起することは、「大衆運動主義的である、あるいは無政府主義的である」とかの批判の中に、これに応えんと幾度とない文章をもつての中央委員会への提案を握りつぶし、圧殺と男性並みへの同化を強制し、それ以外は召還しか道が用意されていない断崖の上に置かれている現実が、指導的女性党員たらんとする者の置かれている差別の現実である。

又、党員女性の恋愛・結婚が党内において、どのようなものとしてとらえられ、それに対して差別指導がなされてきたのか。

「N同志との恋愛・結婚問題について、何名かの政治局による対応にみられる差別であり、即ちN氏との関係を、よくない関係」と把握した指導部は、一方的に私の解体としてとらえようとし、最近きれいになったがNに解体されてメロメロになって、消耗している、と言いつつ放っている。これが党の困難な局面の中で限界と誤りを多くもっていたとしても党活動を維持せんとしている同志に対する最高指導部の言葉であろうか。常に誹傍・中傷が常に女性の側にだけ一方的に浴びせられ、指導的位置にあるN氏に対する批判を直正面から提起しえないのか」として、又「細胞

と現闘に報告していた私と三里塚青行隊Aとの恋愛についての差別指導である。党员女性とそうでない男性との恋愛に対して、聞くと同時に『危機感』を感じる。二人の関係を闘争とは対立しないものとして、しかしブルジョア的に歪曲されている恋愛結婚とは緊張関係をもった上で、結婚することを考えて行く細胞にいった直後のXX機関指導者会議の私に対する『他の細胞員がA氏のオルグに出かけてもよいかどうか』というのは、私の内容を聞かずに、解体される、と頭から決めつけ、中書記員として指導責任をとりきろうと公判闘争を乗り切っている私に『青行隊Aの女』というレッテルをはりし。

又、今日中央二大機関にまたがる細胞の中で苦闘してきたT同志の問題に触れねばならない。(しかし、それに触れる前に、私達は党の二つの中央機関のうちの中書記と並ぶXX機関内の女性同志達の置かれてある現実を、一つは党のXX領域との関係で、合法主義的に扱えないという独自の位置と、二つには中央指導部の差別分断の結果、いまだ十分把握していないという理由で私達は、XX機関内論文集と「政治局文書」に反映されている姿でもってしか判断できないが、そこには、XX機関内女性の苦闘が、一つの実践的地平を切り拓きつつも、もっと熾烈なやり方でその地平が中央指導部の差別指導の結果、ねじまげられていることを読みとることができるが、更にもっと正確に評価するべきで、ここでは中央書記局に限っていることを断っておく)

「私は春以来の消耗を『指導部にとってかわる姿勢の欠如』として総括し、中央機関にありながら一方の経済的必要からの労働

と家庭を抱えて不断に政治的に立ち遅れていく矛盾の中で、指導者としての内容のみならず、指導者たらんとする姿勢まで喪失し、これから子供を抱えての更に困難な条件下で、もはや唯一の与えられた任務を果していくという破綻のとりつくり方では、党活動は維持出来ないというギリギリの地点で」と七三年秋臨戦体制の中で、中央書記局の活動の軸が、絶えず本社への二四時間密集というスタイルの中で結婚し、労働し、妊娠等々の集中は、ついに「家庭」の破壊と肉体的限界を伴いながら、遂に指導的党员たることを、客観的には、諦めざるをえないところに強制させられていったのである。

私達は、この様な互いの現実を(私達の自覚は際限のない程に、多くの現実を突きだすことができる。各自の付属文書を参照してほしい)今、あまりの私達のみじめな屈辱の姿を怒りをもって明らかにする。

私達は、この様に自己自身の姿を差別と抱える時、今中央委議案「政治局差別文書」が、その実践的生命線としている(女性党员を指導的女性党员へ打ち鍛えるための党の特別の計画と意志一致)の中に流れる(指導的女性党员への打ち鍛え)とは、まさに私達女性党员の指導者にならなければならないという自覚と献身性を逆手にとって、女性党员のおかれている困難な現実を打開し、女性を女性として自覚させて行くのでなく、女性としての独自性的一切を解体させ、男性同盟員に同化させ、又、女性党员内に指導党员とそうでないものと絶えずぶる分け、選別して行き、結果として、指導的党员をして、党内外(とりわけ、我が同盟員

の家族―妻という形で抑圧され、一方的に利用され、階級的自覚の萌芽さえ党の名の下に、革命家という美名の下に切り捨ててきた)の女性差別の尖兵として強制していくような女性差別指導の差別宣言なのである。私達は、私達中書記内において、様々な現象してきたこれらの差別思想の体系化としてあの政治局文書をみるし、それが全党を規定してきたことを今やはっきりと確信する。これらは、痛苦にもT女性差別の当時Tを温存させたことで、且問題(これこそ、中央指導部自らの直接手を下した差別指導として、且を脱落させることで問題を陰蔽している。これを中央指導部自らの手で切開してもらわねばならぬ)を発生させ、未だして且を脱落させ、被差別二名の女性を苦痛の中に押し込めてきたのである。

私達は、再びもつともつと私達を締めあげてやろう、今までのものよりもっと大きな泥靴で踏みつけてやろうという本質以外の何ものでもない「差別宣言」としてあの政治局文書を糾弾し、自己批判と撤回を要求し、この文書をいまだして放置し、この差別を黙認してきた全ての中央指導部を問う。

(b) A「糾弾の持ち込み禁止」同志的批判―相互批判」による差別の助長・拡大 V

私達は、このように中央指導部内にいるが故の過酷な差別の中に屈服してきた。しかし、この過程でもT糾弾会への団結の表明や女性解放闘争の問題提起をしてきた。しかし結局のところ、党

を変えよう力にならなかつた。とりわけ、T糾弾会が開始されて以降、私達全てがこのようにもつともつと早い時期に立ち上れなかつたのは、糾弾闘争に対する立場と例の政治局文書「同志的批判―相互批判」の思想の金しりの下に屈服していたからである。

「差別意識を社会意識としてとらえる我々は、差別糾弾を単なる報復的感情的な個人糾弾でなく、個人の糾弾を通してその根底にある社会意識の糾弾を目的としているのである。社会の中に差別があり、差別の意識があるのなら、個人を通して現象するのである。したがって我々は、(差別)した者の体内より、差別のバイ菌を取り除くと共に、社会の中のそれを取り除く糾弾を行うのである。故に我々の糾弾は、差別者個人を個人的に糾弾するのでなく、差別した者の主としての日々生活している社会の人々を糾弾するのである。さらには、この糾弾に参加した者の内なる差別をも、この糾弾を通して排除し、差別が今日なお存在し、その差別の犯罪性を自覚するのである。この差別に対する糾弾への起ち上りは、部落差別を直接受けている者のみならず、部落差別が一般労働者との分裂政策と、低賃金、低生活のしずめ石としての役割を果している時、一人解放同盟の糾弾でなくなる。差別を引き越した者も、それを許した者も、その意識において全く何ら変ることがない」(我が同盟(全国委)部落パンフ七七頁―及び傍点筆者)――、影山裕子氏糾弾要綱、部落解放同盟

私達は、全国委の第二段階の党建設の中で蓄積したまきに、この部落解放闘争の実践の中に、その答えをみるし、その深化が具

体的に、T女性差別糾弾闘争の中に体现されつつ、その質でもって我が同盟（全国委）へ根本的批判の波が押し寄せていることを確認する。「個人」を「T」に、「社会」を「共産主義者同盟（全国委）」に置きかえることで糾弾がどのように同志的な批判であるのか、差別されたものが自らへの差別と抑圧の中で闘いに決起し、自らと被差別のすべての者を決起させ、差別者とその社会を変えていく、自己変革―相互変革の過程そのものであることはもはや明らかである。しかも、これらのT糾弾闘争は、革命党そのものの革命として、そのみならず、党員女性自らの党建設者としての自己変革として最も核心をつき、その地平の高さを示している。更には、そのことを認めるだけでなく、このT糾弾―全国委糾弾は、我が同盟（全国委）第二段階の党の実践の蓄積の結果であり、それに答えるために、第二段階の地平をもっては、すでに大衆的に乗り越えられざるをえないのであり、全国委第二段階の止揚の質で実践的に応えねば真に党たりえないのである。

ここに、「糾弾闘争の党内への持ち込み禁止―同志的批判―相互批判」がいかに決起した女性同志と女性大衆、更には、党内に苦闘を強いられてきた女性党員全てに対する悪質な差別そのものであるかはや歴然としている。現在の我が同盟の「同志」がどのような「思想」の下に団結してきたのか、その中に差別は存在してきたか、そうではなかったのか、の答え返しが一切なく、一方で我が同盟は、ブルジョア社会―日帝の差別分断支配をいいつつ、他方で我が同盟がそのようなブルジョア独裁の社会にその基盤を置いていることを忘れて、あたかも同盟内にあつては「平等」

△ⅠⅡⅢⅣ T女性差別糾弾闘争の到達地平を我々女性党員はどのようなものとして、どのような深さから踏えられなければならないのか？

七一年三月―七二年十二月にかけてのTの女性差別行為については、すでに糾弾会と兵庫県委「鉄鎖を砕け」一月六日号で明らかにされているので省くことにして、私達にとって最も重要なことは、T―兵庫県委―関西政治局―（関西地方委）―中書記―政治局に至る我が同盟の全基本構造のすべてにわたって、具体的差別を成してきたことが暴露、糾弾されたことである。このことは、決して偶然のことでなく、すでに△ⅠⅡⅢⅣ章で私達が直接受けてきた多くの女性差別の現実の中に明らかにされたように、同盟員女性の誰れもが一度とならず差別を受けずにはいなかったこと。そのことは七一年三月以降の（それ以前からであるが）我が同盟の党の一切の「革命的实践」そのものがT女性差別の拡大再生産であり、そこに私達女性党員が自らとプロレタリア階級の解放の事業のために結集して、党の実践を成していったというまぎれのない歴史である。

私達にとって、痛苦にもT女性差別糾弾闘争の到達地平とは結集した先進的女性大衆が、意識していたと否にかかわらず、まさに、我が同盟（全国委）第二段階の闘いの成果とその蓄積をもって、この歴史の総括を根底性として、現在（全国委）を止揚する端緒を突き出したということである。私達は、小手先の全国委

が成立し、女性同盟員となった途端に差別から自由の存在として「相互批判」が保証されているかのような幻想をまき散らしている。このような日共まがいの差別思想（―融和主義）は、結局のところ党内に存在する資本主義社会のイデオロギーと徹底的に闘い、資本主義社会を打倒し、止揚する思想（―共産主義）を党の世界観（―綱領の獲得へ）として深化させて行き、このような党自らの闘いを実践することを通して、プロレタリア階級内部でのプロの打ち鍛えを指導し、牽引し、プロ独の指導階級へと高めて上げて行く、その条件を自ら閉じて行き、そのことは革命党にとっては、自らに対立する物―敵対物へと転化して行くことに結果する。更には「批判」の位置を不当に低めている。すなわち、マルクス主義の資本主義に対する批判とは、資本主義社会を根底から破壊しつつし、新たなプロレタリア権力によって共産主義を建設して行く力―闘いそのものであった。そのような破壊力と建設力を備えた闘いこそ、真に「批判」たりえるとするならば、私達は、「糾弾」は現実の差別に満ち満ちた我が同盟にとって、そのような同盟の質―思想をつくりかえ、そのみならず、それにかわる思想でとってかわることを要求する最も同志的な批判といわねばならない。

このように考える時、これら糾弾が解党的であるとかの理由は、むしろこれらの同志的批判を拒否し、自らを変えようとするしない防衛であり、差別であり、ひいてはプロレタリアートの解放の不可欠の一環としての女性解放への敵対となる。

の第二段階の限界一般やその枠組の中で総括するということを許さない性格として突き出されているのである。そして更に重要な事は、女性同志が差別に屈服しつつも、それをはねのけ、その根拠と闘い、それを変革して行く主体的力もこの間の全国委の実践の中でつくってきたのだということ、今ははっきりと確信しなければならぬ。

七一年三月―今日に至る我々の党の「革命的实践」とは、どのような位置としてあったのかを簡単に振り返ってみなければならぬ。我が同盟は、七〇年一月一八日、七一年一月第十回中央委員会の「八派共闘解体、蜂起をめざす単一党」宣言、日向解党主義分子放逐宣言と共に、それ以前のブント史十三年を真に止揚し、もって日本新左翼の革命運動を唯一止揚する主体―党の道を宣言したのである。

それは政治局論文「我々の党建設の道」（『共産主義』一四号一六頁）の即ち「一年にわたって持続した共産主義論争は、いまようやくその決着をむかえんとしている『我々は共産主義Ⅱ革命的实践』という立場からその実践の対象化は、革命党の綱領である」と設定し、その論争を綱領制定に対する目的意識的努力によって集約することを決定し、その内容を(1)共産主義運動の総括(2)資本主義に対する原則的批判と到達目標(3)戦略として、(2)に形成される原則的立場を(3)における権力論を軸とした政治的立場として首尾一貫した革命論。第二に戦略の基準をそのように設定することでイデオロギー論争は、実践と結合した内容をもつマルクス、

レーニン主義の立場からスターリン主義の根底的批判からスターリン主義の根底的批判（それは同時に『反スタ』マルクス主義の批判でもある）を独自の課題と設定して、マルクス・レーニン主義の革命的眞髓を復活せねばならない。第三に、レーニン主義の継承・発展として党はブルジョア権力を打倒し、プロレタリア権力を打ち立て、共産主義社会を切開いて行くプロレタリアートの革命的性格の一切を代表する革命家の組織であり、プロ内部の党派闘争を通じて、革命家の組織をその深部に建設し、その党のもとにプロレタリアートの自然発生性の一切を体係づけることこそ、プロレタリアートを支配階級として形成する道である。そのような党は非法法党である」（具体的到達地平には、きちんと触れねばならない別稿）。

そして、我同盟の単一党としての、眞の出発点を形成したのみならず、この政治局論文の末尾に触れているように「これまで同盟の数々の弱点のために、同盟から離れざるをえなかった多くの同志に対して、相互の総括を通して、再結集できる秋を迎えている」（『共産主義』一四号一四頁）と。何という党としての「確信」に満ちた出発点ではないか。しかし、私たちは平板な道を歩んだのではない。七一年十月赤報派との党派一分派闘争を経て、全国委を結成した私たちは、これら「12・18路線の革命的地平」の「発展・継承」を歴史的任務として、その限界を「資本主義批判の一面性、政治路線におけるコスモポリタニズム、換言すれば資本主義批判の不徹底性と権力問題に対する抽象性」として、「又「立脚点主義」「政治的には帝国主義的経済主義」として「党

内日和見主義」（序・上・中・下論文より）との闘争を経て、更には「12・18路線の反スタ・マルクス主義のイデオロギーの基礎の解明の段階から、我々の位置の解明↓国際党派闘争の規程の確定と綱領・戦略の立場の確立をもって↓党組織の全面的改組の段階を確定した。そして、中央委員会が綱領・戦略の立場を△反スタ・トロツキズムの実践的克服▽の問題として整理し、共産主義運動の到達目標は、共産主義社会の建設（↓最大限綱領）であるが、現実の階級闘争は、ブルジョア独裁が不断に生む搾取、収奪、抑圧、差別、分断支配に対する『民主主義闘争』という形で、表現されること。他方、帝国主義の他民族抑圧・侵略に対しては、民族解放闘争という形で表現されることを、我々は共産主義者としての立場を最小限綱領にまとめあげ、『民主主義闘争と共産主義運動の結合』を現実のブルジョアジーの打つ政治内容を媒介しすすめていかねばならない。」（『烽火』二七五号）

そして今日、これらの結果が、同盟の政治局発行「プロ通」で言われている「同盟の決定的危機と停滞」といわれ（どの程度の深さで問い直しているのか、プロ通では物事の事面だけでとらえている様に見えるが）ている同盟の現状である。そしてすでに、痛苦にも全ての同盟員が、認識しているように、それはあまりにも無残な「指導部の崩壊」として事態はある。

以上、簡単な我が同盟のこの数年間の歴史「革命的実践」は、「離れた同志を相互の総括を通じて再結集する規程を提起できる秋」を迎えるどころか、献身的な多くの労働者カードルを離れさせ、伊集院一派を解体できずに生み出し、そしてこの「12・18」

の地平を共に切り開いて来た女性同志を離脱させ、党内にあっては、幾度となく党内・党派闘争をその最先頭で担い闘って来た多くの女性同志の様々な批判問題提起を「組織原則」の美名の下に、党建設の闘いとして組織するどころか、圧殺し、屈服させ、同化させ、苦闘を強要し、その上に同盟指導部が自らを築いて来た歴史である。

それ故にこそ、このT糾弾闘争の突き出している事態こそ腐敗と墮落の沼地にどっぷりとつかりこんだ我が同盟（全国委）中央指導部の姿こそ、一方の「プロ通」での「停滞、危機」と根本的には同じ姿、同根のものとして、とらえられなければならない。その根本的切開と克服の道は、12・18ブントから全国委に至る、党の一切の「革命的実践」と、それを規定した「革命理論」を切開する。その「深さ」からとらえかえすところの「全国委自身の革命的止揚」として把握されなければならない。それ以外に、私たちの根底的前進はありえない。

私たちは、そのような「深さ」から、このT女性糾弾—全国委糾弾を受け止め、T女性差別を温存、助長させてきた、我が同盟の全思想的立脚点—（資本主義批判、主体性哲学批判、ゴータ綱領批判その他）—をとらえかえし、限界一般や継承一般でなく、それらの「12・18」で獲得された革命的地平—マルクス・レーニン主義の復権—を、どの様なものとして発展させることで、我々の武器になるのか、をしつかりと党の思想の基礎にすえなおさねばならない。その様な中で、「12・18の地平—全国委」の発展させるべき、決定的地平を武器として、これらの女性差別の階級支配

における独自の位置を明らかにし、我々の綱領（「革命的実践」の構成の中で、不可欠の独自の位置をもつものとしてとらえ切り、明らかにし、何よりもT糾弾闘争—全国委糾弾をその獲得の端緒として闘い取らねばならない）

▲▼ 12・18路線の革命的地平と女性解放（その一）

今や、私たちは、T女性差別糾弾—全国委糾弾が、「第二段階—反スタ・トロツキズムの実践の克服」「綱領と民主主義闘争」に規定された、党の第二段階がかちとった最も積極的（断固として）こういふべきである）成果の一つとして、党の革命を要求するものであり、それには「第二段階をもっては答えることのできないう党（—中央指導部）の飛躍」を、しかし、「12・18」に逆のほった革命的飛躍でしか、まさに同盟として、答える道がない位置をはっきりさせた。

そのことは、「反スタ・トロツキズムの実践」の「克服」を、忠実にも、共産主義者として、誰が最もやり遂げたのかを示し、これらの「実践の克服」の結着は、その「反スタ・トロツキズムの実践」を支えた「反スタマルクス主義」の「革命理論」そのものの克服—マルクス・レーニン主義の革命的復権の深化として—不斷に結実させることを要求していたのである。

この意味でも、「12・18の革命的地平」の発展・継承を「神棚」にまつりあげ、一度として、とりだし、全プロレタリアの階級闘争のつばの中でみがきあげ、それをもって、先進的大衆の次の

方向を「党建設の道」として成し遂げえず、階級闘争の最先頭と切り結ぶことによって（この事自体は誤りといっているのではない）、その自然発生性を流入させ、それを容認してきたのは誰か、この事を白日の下に示している。その意味で「第二段階」を反動的に清算し、あるいは当初からその苦闘を共にしなかった者は、私達の同伴者ではない。

そのような意味で、私達はこの武器を「神棚」からおろし、新たな破壊力と建設力をもった批判の武器にみぎあげ、それを私達共産主義者の玩具にするのではなく先進的大衆の自然発生性の中に、その武器を示し切ることで彼女達が思ってもいなかった遠くまで行けることを明らかにせねばならない。

ここで私達は、全ての女性党員の苦闘が、この「12・18」全国委」建設の中で全くどのようなものも「女性の解放」に向けて、共産主義者同盟として築き上げえなかったのかどうか、それは清算でなく「革命的止揚」だと確信をもって私達はいえるのか、そのような根底的切開をしなければならぬ。その点について、私達は、「12・18プロト—全国委」の過程で自覚と確信をもって結集してきた到達地平の思想的立脚点の一つ一つと再び向いあってみなければならぬ。今日、この段階でその内容の全てに答えることができないが、その思想的立脚点のうち我々の資本主義批判は近代プロレタリアの位置を指定し、プロレタリア階級闘争の資本主義社会における位置をあきらかにするものとして、資本金階級の階級支配の経済的基礎—賃金奴隷制度としてとらえたことであった。ここには具体的に女性解放の位置を明確にする内容は、

れが同盟（全国委）の歴史にとって、どの様に踏えられ、総括されねばならないのかについて、総括されねばならないのかについて、私達は（いまだ不十分であるけれども）明らかにしてきた。そしてそれは、私達の自己批判であり、闘いの宣言であり、何よりも同盟中央指導部への根底的批判とそのつくりかえを獲得せんとするものである。それ故に、私達は、全ての同盟内男性党員に対しては、その様な中央指導部の姿こそ、あなた方自身の姿であり、女性差別によって女性を「奴隷」の位置に強制していることは、同時に、あなた方の「奴隷の姿」そのものであることをはっきりと見なければならぬ。そして女性に対するこの様なあなた方の「主人」思想は、「これまで秘密のうちに復しゅうをしています。婦人の立ち遅れ、男子の革命的理想に対する女性の無理解は男子の闘争の喜びと決意を減殺します。彼女たちは、目に見えない形で、除々にではあるが、確実に腐らせむしばんでゆく」（レーニン）ことをあなた方自身が許容していることそのものである。

そして同盟内の全ての女性同志に対しては、私達の自己批判と共に、互いの孤立した闘いの一切の成果を集中し、決起した二女性同志としっかりと団結し、彼女達の示した実践的地平「①女性解放は、お願ひではなく、女性自ら闘い取るもの ②女性は自ら女性としての自覚をもちとること抜きに共産主義者たりえない ③同盟の政治的思想的変革をかけて闘う」を個人的決意に押しとどめず、私たちの手で、まさに組織的に、更に高い地平へ押し上げていく闘い—何より、中央指導部の自己批判と自己変革を

何んら触れられていず、我が同盟の「女解」を党活動の基礎たらしめる思想を生み出す根拠そのものをすでに、12・18立脚点の中に決定的限界として欠落していることを見い出さざるをえない。その意味でも、我々の資本主義批判一つをとっても決して完成されたものでなく、その一步を形成し始めたにすぎなかったのだ。しかしこのような資本主義批判の第一歩はその継承、発展の中で女性解放の位置を明らかにする第一歩たりえないのか。その点について深い切開が必要となる。

先に七四年九月、中央委員会にて「政治局文書「女解」を批判する」（本誌創刊号所収）の中書記女性の一人である生田同志の意見書の第二章—我が同盟の資本主義批判の到達地平と女性解放闘争の理論的基礎—をここに全面的にとりあげ、これをたたき台にして新たな深化を闘い取っていかねばならない。その意味でこの第二章は中書記女性の相互討論は、この文書の位置を確立したのみで、更にやらねばならない。

（生田意見書第二章の引用は省略—本誌創刊号参照）

△▽ 我が党内の女性党員は、T女性差別糾弾闘争に決起し、この闘いを前進させ、もって党建設の事業を自ら—女性大衆の解放の為の最高の闘いとして獲得しよう！

以上のように、私達は、自己自身の中央指導部への屈辱の姿と、それがどのような中央指導部の指導の結果であったのか、またそ

闘い取り、つくりかえ、同盟（全国委）の止揚の闘いの最先頭に起つことを呼びかけます。

私たちは、T査問会における私たちの参加と位置を獲得することで、その闘いの最先頭に立つ物質的条件をつくりつつあります。この闘いは、あまりにも根深く、あまりにも絶望的とみえる程、蓄積されたものである故に、個人的能力等々をのみ問題にするなら、それはあまりにも困難に見えます。

しかし私達は個人として出発するのではなく、私達のそれぞれの各級機関内女性同志が団結し、その力を集中すれば、更に、この闘いを準備してきたT糾弾会のすべての先進的女性大衆の力に依拠し、結合していくことで必ずや、新たな地平を切り拓けることと確信する。

私たち女性は、幾度とない死ぬような想いと困難の中に、この同盟（全国委）を支えてきたその力そのものであり、この同盟（全国委）を変革せぬ限り、私たちの過去と現在は無であるから。そしてその闘い方は、かつて、今日の中央指導部が「除名」でもって、恫喝し、排除していくやり方でなく、何よりも非妥協の闘いであり、忍耐強い「つくりかえ」の闘いである。

当面、私たちに問われていることは何か？

第一に、二月初旬における次回糾弾会にどのような立場で、何を獲得するために出席するかを意志統一することである。このことは、一二月末におけるT査問会—関西地方委指導部の決定的な指導の誤りと差別の拡大は、一方で二名の党員女性と、京都府委指導部女性への苦闘を強制してきた。それは「なぜ、どのよう

である。

b 「昨春A提起、家族問題」文書全面撤回、並びに「XX機関討論集」作り、参加拒否について

「家族問題」文書提出には、二つの理由があった。その一つは昨〇月〇日「事件」といった、Aのミスから〇〇地に於て「指導者」達を、若干混乱させたことから、原則的には間違った考え方であると自覚しながらも、悲痛な決意主義の下で書かれたものであり、二つには、限定された分野で、更には立場上、二重に限定された狭い活動領域を、細胞キャップの家族に妨げられている、といった同時平行線上に起った事柄からであった。その文書は、結論的には、Aがこうするから細胞キャップもそうせよ、といった、自らの置かれている立場上の自己犠牲を他者にも強制するといった形の内容であった。

「活動費、生活費をもらい」「部屋を与えてもらい」「言われた事だけを、ただ黙念としている」といった、自らの立場を曖昧に放置したままで、「事なかれに〇〇活動」を続けられないといった、追いつめられた状態の中で書かざるをえなかった「A家族問題」に対して、XX機関指導部は、いかなる対応をしたか。Aの間違いを原則に照らし合わせて批判し、正しく教育しようとしたか。否。「急進主義である、連赤の陥った傾向と同じである。エンゲルスの本を読め」といった解りきった指摘のみにとどまった。

Aの最後の行の質問である「長期〇〇中の活動家が、長年連絡のとれていない家族に、どうしても連絡をとりたい、会いたい

い、ということを自覚せねばならないであろう。それは、何も、身と言葉（理論）なき哀しさだけではないのであるから。

c 「地下水道」一時休止について

「水道」発行を、委員長といった立場を官僚的に用い、独断で発行休止した。理由は、一つには「烽火」がでていない。二つには、全党問題について、XX機関は、何一つ答えていない、であったが、主には、中書記、地方、地区委が壊滅している現在において、XX機関のみが生きて何とする、であった。「水道」を発行することによって（主にXX機関指導下）XX機関の存在を誇示せんとしても無駄であろう。

(三) 北原執筆、一連の「XX機関総括」のレジюме一号〜四号、主に二月一九日付レジюмеについて

政治的人間は、自らも又、他者からも政治的に破壊させられねばならないであろう。政治局として書かれた一連のレジюмеは、XX機関路線が、党路線とはおおよそかけ離れた動きを、独自に展開していったことを露見させ、又、決定打とも言える二月一九日付レジюмеは、その内容が、ブルジョア軍事思想に基いていたことも、自ら露見させたのである。

Aを清算主義者と言うなら言うが良からう。Aは北原こそが清算主義者であると言おう。二・一九付はどの墮落文書は、他に見ない。

二・一九付では、終始一貫して「指導の誤り」であったとしている。北原指導下にあつて、一貫して、もの考え方の誤りであると批判し続けてきたにもかかわらず、である。これでは最早批判の

と熱望した時、党としていかに答えるのか」に対して、XX機関指導部はいかに答えたか、ついに一言も答えなかった。何一つもしなかった。

それどころか、不可思議にも「A家族問題文書」を「急進主義、連赤」と叫びた指導者が、「A家族問題」から「決意と自己犠牲」そのみを取りあげて「優秀な決意」だとし、しかも、これを「最も高い規準」であるとして、全XX機関に強制したのである。この強制が、XX機関指導者にとっての団結の質だったのである。

この「A文書」の一部は、更には「XX機関、家族問題討論集」に組み入れられ、結論的には、歪められた形で「女性問題、北原文書」として、対伊集院一派との闘争に政治的に利用されたのみで終わったのである。

従つて、現在、党の混乱期——組織の壊滅期、なかんづく、XX機関対中書記といった中央機関内の党総括と指針の視点と主張が相違する現在にあつて、「A〇年間総括」を書きまいとした二つ目の理由は、ここにもある。

下部党员の問題提起を根源にまで掘り下げて、真シに答えきるのではなく、表面的、行政的のみにみ処理し、それで事足りりとし、あたかも家族問題について、女性問題について答えきったという姿勢を取り繕う、この指導者の思想的誤り。「XX機関討論集」とは、その意味で犯罪的な意味を持つ。

XX機関には、何と沈黙家の多いことか。北原、XX機関指導部よ、沈黙しているのは、何も思い悩み、考えていないのではな

対家ではないであろう。

北原XX機関路線には、思想もなく、組織もなく、政治もない。プロレタリア革命が、プロレタリアートを、全ての人民大衆を組織し、包含しながら成り立つものであれば、その主体者であるプロレタリアートを、被差別人民を、そして、資本主義社会で抑圧され、更には党员でありながら男子党员から抑圧、という二重三重と抑圧されている「天の半分を支える」女性を蔑視している思想からは、プロレタリア革命遂行は不可能である。又、そうした思想からでは、正しい組織観など出てくる筈もなく、北原XX機関路線の組織とは、強制した規律だけの組織なのであり、そして政治といったものが、本来、陰謀という性格を持つものであれば、それをたくみに繰るのが北原政治と言えよう。

ここに北原XX機関路線とは、思想の相違から生じる具体的な相違の表われとして、組織観、軍事観等としてあるのである。

(補足) 全国、全党問題となつている「女性問題」等の、党内に配布されている一切の文書類を、XX機関は、そのメンバーに配布するのを卑劣にも、意識的にストップをかけ、党内には「何も起こっていない」かのように「党の安泰」を演じてみせた。北原は、自ら政治局としての立場を放棄したに等しかろう。

(四) つい最近、XX機関内、反北原派（編集委註、今日、永井一派に属している）なるものが起ち上つたと聞く。しかし、Aは、その下への組みするつもりはない。何故なら、Aにとっては「権力者」同士が交代しただけにすぎず、Aの態勢には、何ら変りは

ないからである。まして昨日迄、敵であった者が、今日突然Aの味方だと言われても、不信の念が強くなることはあっても、決して消え去るものではない。

全××機関に庄殺の森よ、焼け野原と化せよ

第三回全党女性会議へむけて S. T.

(一九七五、五・四)

(一) ××機関女性の組織化の総括

中書記女性会議は、私たちが中央機関員であり、党内における指導的位置にあることから、その決起と同時に、指導的任務を要請されてきた。

その全党指導は、中書記と並んで二大中央機関を構成し、あの政治局差別文書に体系化された女性差別を、直接的に、露骨に体现してきた指導の下で、最もひどい状況に追い込まれてきた××機関女性の決起を不可決の課題としていた。

それは、中書記と××機関の二つの中央機関にまたがる細胞として活動してきた、私たち弾対細胞の二名の中書記女性が、中書記女性会議—全党女性会議の到達地平を踏まえて、自らの主体的総括をもって××機関女性を組織し、それを中書記女性会議—全党女性会議に蓄積していくことを要請していた。

にも拘らず、この闘いの立ち遅れは、A同志が糾弾と同時に組織を離れていくのを許し、二名の女性同志—一人は、出産・育児問題をめぐって女性差別につき出しながら、××機関指導部に

よる女性解放の核心を骨抜きにする差別指導を受け、他の一人は、出産の直前まで「産むべきでない」(Hおろせということである)と恫喝されつづけたにも拘らず、その露骨な差別指導をなしてきた当の指導者の下に包摂されることを許してきた。

このように、××機関女性を困難な状況に追い込むことを許してきた私たちの決定的限界が何であったのかを、××機関女性の組織化の過程を総括することによって明らかにし、その限界の克服をもって、××機関女性及び、全党女性に応え切っていないかねばならない。

私たちが、××機関女性の組織化の第一歩として開始せんとした一・二六全党女性会議に向けての呼びかけは、××機関の最高責任者である政治局の停止命令の前に頓挫し、一・二六が、その前段での査問委内中央委員と政治局との会議で、「中書記女性主催ではなく、査問委主催の条件つきで、一・二六は認めるが、××機関女性は参加させない」という妥協を許したのである。

この政治局の恫喝の屈辱として、一・二六をめぐる私たち××機関女性の組織化の総括をはっきりさせねばならない。

(中 略)

(二) この限界を突破するために

① 一・一五中書記女性闘争宣言中の私の闘争宣言の総括

一・一五宣言で、私は、××機関で提起された「託児所」建設が、女性党員が党活動上ぶつかる最も大きな困難のひとつである家事・育児問題に込めるかのように見せながら、その実、女性差別を更に強化、体系化するものでしかないことを糾弾せんとした。しかし、その批判は、直観の域を出ず、その根拠を切開しえず、従って、このような女性差別を必然化させてきた我が同盟の誤まった基盤を解体する物質力を持ちえない決定的限界として総括せねばならない。

宣言を発する当初から、この限界を、中央機関員でありながら、ここからしか出発しえない痛苦さとして感じながら、それでもなお自身のその現実につき出すことからしかありえないこととして出発した。

それ以後の闘いは、これを克服する闘いとしてありながら、未だこれを突破していないことが、××機関女性を今日に至る困難な状況に追いこめることを許してきた。一方で政治局—中央委員の崩壊が公然化し、女性党員のみならず、全党員の飛躍が迫られている今、この限界を突破すべく、以下の内容を明らかにしてきた。

② 「託児所」建設問題の××機関—全党における位置

「託児所」建設は、B同志の出産をめぐり、出産・育児によって党活動から一歩も後退しないことを組織的にかちとろうとしたB同志の闘いと、三人目の子供の出産を控えたC同志が組織復帰にあたり、子供を、かつて党活動を共に担ってきた自分の妻だけに押しつけて、一人自分だけが復帰することにはならないとして、復帰の条件として、「託児所」建設を要求したという二つの具体的な契機を持っていた。

この二同志の提起は、女性差別を温存してきた我が同盟に対する鋭い提起であったにも拘らず、××機関指導部は、それを歪曲し、更に女性差別を強化、体系化するものとしての政治局差別文書と、あのような「託児所」建設に帰結せしめた。

B同志の提起に対して、これまで多くの女性党員が、出産を契機に党活動から召還せざるを得なかったのは、個人問題として、一人の問題にされてきたからで、子供に対する責任を細胞の責任を保障する為に他の細胞員が党任務として子供をみることを実践化した。具体的に、××機関文章で整理されている実践とは、「出産する女性党員の約一ヶ月を組織的休暇として明確にしたこと。出産時の援助は当該男性党員の基本任務を変えずに、他の党員が代行したこと。細胞員が、育児技術について、組織的に講習を受けたこと。一ヶ月の休暇後は、出産した女性が乳児をつれて党会

議に参加することを細胞が実質的に保障し抜いたこと。当女性党員が党任務中は、細胞から育児の係りが派遣され、党活動を保障し抜いたこと」である。

当初、××機関指導部は、即、保育所をつくらしたりして、便宜主義的に解決することを抑え、むしろ、細胞全体が、子供を抱えながら党活動をするシンドサを共有し、そのような細胞の団結の質の実践的「到達地平」(先に引用したような)を以って、はじめて、「託児所」建設の提起をなすという意識的指導があった。

その間の論争を、「××機関第二討論集」としてまとめ、××機関での女解の「実践的到達地平」であるとして、南雲文書—伊集院一派との闘争の過程で、××機関内指導文書としてまとめたのが、後に八月中央委二号議案を構成した、あの「女解」という名の政治局差別文書である。「託児所」建設は、その××機関内指導文書(政治局差別文書)の中で、「子を持つ女性同志を、資本主義的家族制へと転落させず、指導的女性党員へ打ちきたえる為の一つの闘いの団結として、機関施設としての託児所の建設を」として提起されたものである。

××機関指導部が強調する「女解の実践的到達地平」なるものが、実は、女性を解放するものでなかった根本は、多くの女性党員が(恋愛結婚)出産を契機に党から召還することを許してきたのは、それが個人問題に帰せられ、組織問題として解決されなかったからであるとして、あたかも細胞の中で組織的に保障すれば、女性差別はなくなるかのように考え、また、そのように実践して

きたことである。(B同志は、文章の中で、女性活動家の召還は、子供に対する責任が一方的に女性活動家におしつけられたからだと正しく指摘、批判しているのに、指導部は、それをこのように歪曲したのである)

歴史的、社会的に存在する女性差別が、男性と女性との関係の中で、具体的、日常的に表われるにもかかわらず、自らの女性差別を一度として捉え返そうとしなかった指導部は、このような指導を以って、全て細胞に流し込むことによって、女性党員の夫たる男性党員の位置を相対化させてきた。

その最たる例は、D同志の出産をめぐって、××機関指導部は、その出産の直前まで「産むべきでない」と指導し、彼女は産むことを主張し、出産するという闘いの中で、彼女の問題は細胞の問題であるとして、彼女の夫であり、子供の父であり、しかも××指導部の一員である男性党員に最も問われるべきであるにもかかわらず、彼のあいまいな態度を許してきたのである。

女性党員の子供のオムツを変え、ミルクをのませる男性細胞員が、一方で女性差別をし、彼の妻を差別しつけていて、何が「女解の実践的到達地平」であろうか!

このような根底的な思想闘争を抜いて、女性解放などありえよう筈がない。

このように、二同志の提起に対して、女性解放の核心を骨抜きにした上で、これを利用して、××機関指導部が意図したものは、××機関の「組織的団結の質」の総仕上げであった。「××機関では一定の地平の到達した」として、それを以って全党に普遍化

せんとして、体系化されたのが、まさしく八月中央委三号議案↓十月中央委三号決議(基礎)であった。

③ マルクス・レーニン主義とは無縁の「組織的団結の質」

ところで、このように女性差別と闘いえなかった××機関の組織的団結の質」とは何だったのか?

××機関指導部が、××組織建設の要として、その指導を集中してきたA同志が、「庄殺の森、××機関よ、焼け野原と化せ」と全面否定すると共に、「どの同志も信用できない」として組織を離れざるを得なかったという事実は、××機関の誇る「団結の質」が、どんなに歪んだ非階級的な団結であり、それ故に、何ともいものであったかを、彼女の痛苦な自己切開をもって、余すところなく示すと共に、彼女の困難な闘いに連帯せず、そのような苦境に彼女を追いやることを許し、手を貸してきた我々の共産主義者としての腐敗を痛烈に批判している。

その「団結の質」は、我々がプロレタリア階級に依拠し、その闘いを、権力奪取に至らしめる為の、それ故に自然発生性にも一分も解体されることのない目的意識性に貫かれた共産主義者の綱領的一致を、その結集軸とし、それを打ち鍛えつつ、組織建設していくのではなく、「綱領の確定」を呼号しながら、その綱領は、神棚にまつておく聖典として、それとは全く別のところから組織建設が語られ、組織的団結の質の強化が語られ、実践されてきたのである。

それは、具体的、現実的課題を重視しながら、それを階級的普遍性として政治化、目的意識化していく、マルクス・レーニン主義的な方法ではなく、常に、実体的、経験主義的に解決されていく、全き経済主義として、結局、現実を把握しきり、現実に応え切れないこととしてあると同時に、一方で非合法時代に向けての先行的準備として、非合法の質、団結の質を意識的に追求しようとしながら、現実と来るべき非合法の時代を貫く、確固とした科学的分析をもって提起されるのではなく、予想される時代を想定し、それに応え得る質の強化としてアプリアリに問題が立てられる結果、結局、現実を打ち鍛えるものにならないこととして、その意識的追求が、レーニンの言う目的意識性とは似て非なるものであり、経済主義の裏返し表現でしかなかった。

このように、××機関の築いてきた「団結の質」が、マルクス・レーニン主義とは無縁の体系であり、全くプロレタリア階級の利害に根ざさないものであり、その中で我々自身が、エセマルクス・レーニン主義を実践してきたことの根底性を把握し返し、プロレタリア階級に対する自己批判を、怒りをもって、この体系を解体しつくり、マルクス・レーニン主義で置きかえることをもってなし切らねばならない。

④ 「託児所」建設問題と××機関路線

それでは、このような根底的誤まりは、「託児所」建設問題をめぐって、どのようにあらわれたのだろうか。

せることになるのである」と。

「革命的教育、保育」を提起したC同志は、何も今すぐのプロ人民に対する党の政策的方針を要求したのではなく、女性党員の苦闘が、ブルジョア社会の中で全女性がおかれている差別的現実として貫かれていく時、少なくとも、党の中に建設せんとする「託児所」が、どのような階級的現実をもって建設されるべきかとして、その質を問うたものであったと思う。

このように、プロ人民に対して、党として応えるべき現実を、今すぐは応えられないからと、永遠の彼岸に追いやって上で、それと全く切り離して、党の中で苦闘する女性党員の現実に応える為の「託児所」建設が、その内実と無関係に「限定」されるこの方法の決定的誤りである。

このように、××機関の中にあつては、常に「政治」を前提として、組織問題が立てられる結果、第二段階の政治的諸実践の結果が、我々に蓄積されず、組織建設に反映されないで来たのである。

この誤った方法は、十月中央委での組織路線としての、三号決議が、一号決議を前提として、綱領・思想問題と全く切り離して組織建設を語ることにして、最も完結された形で貫かれている。

第二は「純プロ主義」である。

政治局差別文書で、我が同盟が党的に女性解放を闘う為の実践的規程として、「I、政治過程主義、急進主義と闘い、工場における資本の女性差別支配に我々の労政を立ち向かわせよ」「II、運動主義と闘い、女性労働活動家を我々の労政に組織しつづける

その一つは、「政治と組織の分離」である。それはB同志出産育兒問題→託児所建設問題の過程での、××機関指導部の「革命的教育論、保育論」批判の中に明らかである。××機関内文書で××機関指導部は、ひとつの克服した論争として次のように整理している。

「人民に対する方針、政策として、プロ人民の教育と、プロ人民の子の教育内容を明らかにせよ」「プロ人民への政策として、革命的保育所建設を方針化せよ」との要求は、「これを全くの課題として無視するものではない。それは結局、プロ人民一般に対する民主主義闘争として、我々の指導下の労組、あるいは大衆戦線一方で行政闘争として、一方で地域生協運動として、いづれ方針化すべきことは事実である。しかしながら、我々の中心的党課題は、そのようなあらゆる階級闘争総体を、共産主義にむかって指導する為の端緒的段階にあるのであって、その中心課題は、第二段階を総括し、本格的な綱領の決定と、戦略的決定へと収縮させることにあること。

更に、プロ人民への基本的指導の軸として、この問題をとらえるならば、女性解放闘争指導として、むしろ、その位置を与えるべきなのであって、我が党の陣型の構築の中でとらえることから、一般的民主主義路線への転落を阻止すべきなのである。

従って我々が今たてようとしている。施設としての託児所建設は、あくまでその目的を限定し切つてとらえるべきであり、その限定された明確な位置を、一般的に、党のプロ人民への政策問題へと切りかえるのは、結局、急進民主主義的に、これを解体さ

ための闘いを」「III、女性党員を指導的女性党員へ打ちきたえる為の党の特別の意志一致と、その具体的計画を」として、結局、女性解放を党と労政の狭い枠におしこめた根拠は、××機関路線が一貫して基盤としてきた、いわば純プロ主義とでも言うべきものである。

党によるプロ階級の支配、党における官僚主義の裏返しとしての党とプロレタリアートに対する物神崇拜は、プロレタリア階級を工場労働者の中だけ見ようとし、ブルジョア階級のプロレタリア階級に対する支配が、プロレタリア人民に対するものとして、総体的に貫徹していることを把握し切れず、そのブルジョア支配下での中小未組織労働者の闘いや、被差別部落大衆の闘いを、中枢プロの排外主義との闘争に利用していくだけのものになつてしまふ。

あの政治局差別文書が、直接、それを課題としてとり上げなかつたからという意味ではなく、あの内容では、部落女性や、沖縄の女性の解放には、決して応ええないものとしてある。

この傾向は、組織建設上においては、労働者出身の党員を核として、その献身性や、階級闘争—党建設に対するゆるぎない確信を、小ブル主義との闘争に利用しながら、彼らを、全面的な政治、組織指導者に打ち鍛え得ず、労働者を大事にしているようで、その実利用していくものでしかなかったことと一体である。我々労働者が、その献身性と裏腹に、まさに革命に至る階級闘争の中で、克服していくべき奴隷根性を逆手にとって、我々自身を、このように利用してきたことに対する怒りをもって、我々自身の奴隷根

性を克服する中で、この誤りを、徹底的に解体していかなければならない。

第三に、基本組織—指導責任論である。

これは、「託児所」に収容する子供を、××機関内女性の子供と、「一定の基準を獲得したものとして」の永井同志の子供に限定するあやまりとしてあらわれた。

「一つの獲得された条件」とは、「我々は、もしこの託児所を実現したとしても、現段階では、我々よりも、もっと困窮している他の機関の同志の子供を収容しようとは思わない。それは託児所建設を課題にのぼらせる以前に、獲得してきた細胞の基本的団結の質を、我々が、まだ全党に普遍化しておらず、その団結の質なくしては、この託児所は、文字どおり、利用施設、一般へと転落してしまうからである。」と言っている。

これは、「託児所」建設が、何よりも女性解放の為にではなく、××機関指導部の言うところの「細胞の基本的団結の質」を強化する為の手段でしかなかったことを、正直に言っていると同時に、どんな問題であっても、基本組織の中で解決していくことの誤りを示している。

本当に、子供を抱えた女性同志の苦痛がわかり、それに応えようとするならば、××機関女性に対してだけではなく、なぜ他の機関のものとシンドイ女性同志達に応えようとしなかったのかノ百歩ゆずって「団結の質の到達地平がないから」と言うのなら、同盟の最高責任者としての政治局として、(何も××機関の利害の代表者ではなく、彼は政治局なのだ)このような不均等性を

生み出した我が同盟の根拠そのものを切開し、それを克服することをもって、全党女性に応えようとしなかったのかノ

また、この基本組織(中央委—細胞)論は、一・二六をめぐる政治局の態度に典型的なように、我々女性党員の闘いの前に立ち上がり、一貫して我々の闘いを妨害しつづけてきた元凶である。

「基本組織」論は、細胞の中で、何事も解決することを要求し、細胞キャップは、中央委として、或いは関西地方委として、これに責任をもって基本組織を建設していくのではなく、常に細胞内での問題を、それぞれの指導者の質で解決していくことを必然化させ、従って、中央委や関西地方委を、各基本組織の利害の代表者の連合へと陥し込め、各級機関での不均等性、党の分散性を結果させてきたのである。

そして、「指導責任」論とは、これを更に促進させるものでしかなかった。この「基本組織—指導責任」論においては、各級機関の問題が、党中央に集中されず、従って、プロ人民を直接的に組織する任務にあたっている下級機関の同盟員に全ての責任が押しつけられていく、下部への責任の転化の体系でしかなかったのである。

これこそ、まさに中央集権とは、逆の下からの党建設であり、サークル主義であり、経済主義そのものであるにもかかわらず、この様なレーニンの「中央集権」とは、全く相容れぬ組織路線を全面開花させ、十月中央委三号決議として結実させたのである。

⑤ ××機関路線と全党路線

では、このように誤まった組織路線は、政治路線とどのような関係にあったのか?政治を前提化する××機関路線が、全党の組織路線として存在しえたのは、一方の政治路線が、組織建設とは全く無縁なものであり、両者が、同じ経済主義として、相互を補充し合う関係として、全党路線としてあったということである。

この××機関路線を、革命的に解体しつくす為には、これと補充関係にあった政治路線の解体なくしてはありえないし、我々は、それを更に深化させねばならない。

十月中央委は、この二つを「トロツキー過渡的綱領主義批判、綱領を最大—最小とたてることをもって帝国主義的経済主義の克服を為そうとする立場から、実践的には、部落、入管、被差別人民の闘争の指導」と「一二・一八路線の克服を戦争戦術、戦闘団主義批判、合法主義批判を基礎に、中央集権非合法党の組織建設、中央委×学校を中心とする軍事組織、軍事組織者建設」として、「それ自体としては、共産同志を貫く最高の到達地平」であるが、それが二元化したことが問題であるから、それを何とか折衷せんとするものである。

それが二元化のようにあらわれた根拠の切開をしようせず、両者をつぎ合わせるという全く非弁証法的な誤った方法論の上に、全国委第二段階の止揚—一二・一八路線の革命的継承、発展など、あり得ようはずがない。

そもそも××機関路線が、「それとしては最高の到達地平」な

その評価出来るものではなかったことは、今まで述べてきた通りである。

我々の女性解放の闘いの前進は、女性差別を温存してきた我が同盟の総路線の根底的な転換なくしてありえないにもかかわらず、これまでの誤った路線を更に体系化し、我が同盟を更なる泥沼に追いやらんとする十月中央委を革命的に清算し、我々の力で革命的に転換させることをもってしかあり得ない。

この十月中央委を共有した中央委自らが、この誤りを清算し、新たな転換を画しうる指導者としては、誰一人として応えられないことを、前回糾弾会は明らかにした。

我々××機関女性、全党女性は、自らの主体的総括をかけて、この女性解放に敵対する誤った十月中央委を革命的に清算し、新たな党建設の主体として、覆敗しきった中央委にゲタをあづけることなく、我々の力で自己の延命を策してフラク化をおしすめるフラクションを許さず、逃亡した議長八木沢をはつきりと「除名」処分を付し、日和見主義的なフラクションを解体し、十月中央委を反動的に固定化せんとして、今や、階級闘争の前に立ち上がる反動的なフラク頭目どもが、これ以上居直りつづけるならば、我々の手で、彼らを我が同盟から放逐せねばならない。

このような闘いの中で、××機関女性、全党女性の団結を更に打ち鍛えていかなければならない。

五・五 T糾弾会へむけて

(一九七五・五・四 兵庫県委 E・T)

(はじめに)

四・一三第八回 T糾弾会において、我が同盟中央指導部は政治局—中央委の破産が宣告された。まさに中央指導部は議長が逃亡し、政治局が崩壊し、更に中央委は自ら中央委を開催して、「政治局女性差別議案」を撤回する能力と機能を喪失したことを明らかにした。それは、政治局としても、中央委としても、「同盟の単一の自己批判」を自力で貫徹しえなくなったと同時に、いわば「誰でも」言う「同盟の単一の自己批判」の内容をいかなるものとして提出し、いかに同盟中央指導部の再建をしてゆくのかを、全同盟員に問うたのである。

中央委は、四・一〇、北原(差別議案執筆)の政治局としての何らの自己批判もないままのフラクとしての登場によって開催能力を失った。更に関西政治局は、自ら中央委員でありながら、関西地方委にしがみついていたが、前回確認事項(京都府委員長、田村の出席)の破産によって、その破産を遂げざるをえなかった。関西政治局が、四・一三以降も、同盟中央指導部の崩壊と全く無

関係に、政治闘争をプロレタリアート人民に提起しているのは、彼らの T糾弾闘争に対するこれまでの態度の延長上にあるのである。四・一三糾弾会の地平を踏みこむものなのである。

既に崩壊した政治局—中央委に、「同盟の単一の自己批判」はもとより、全同盟—プロレタリアート人民に対する、責任ある指導が望めようか? もはや、誰かが「同盟の単一の自己批判」を貫徹し、指導してくれるなどという雇人根性は、無力どころか、反動的ですらあることを全同盟員は知るべきである。

「T糾弾闘争を支持する」ことは、「政治局女性差別文書撤回」を叫ぶことと同様、それこそ「誰でも」言う御時勢にはなってきたが(もともと関西地方委の加藤のように「糾弾は同志的批判ではない」と今なお言っている反動もいるには違いないが) T糾弾闘争の到達地平についての評価など、とんと耳にしたことがないのはなぜか? 「T糾弾闘争は根底的なものを提起している」と言っている、何が根底的なのか語れないのはなぜか? — T糾弾闘争は、それこそをつきつけているのである。そういう雇人根性—奴隷根性を自らの胎内から、ひとつひとつふるいおとしていくところが階級闘争であり、根本的な解決を、崩壊した指導部に委ねてしまおうとする、腐れきった私たち自身への宣戦布告が T糾弾闘争であったのである。この八ヶ月余の闘いの中で、T糾弾闘争は、Tの女性差別に対する被差別三女性のウラムミラミを越えて普遍性をかちとってきており、参加する全同盟員、女性大衆に、内的な総括を要求し、雇人根性を断つよう要求しているのである。自らの奴隷的過去に憎悪した時、はじめてプロレタリアート

はブルジョアジーと闘って勝利しうる確信を持てるのであり、T糾弾闘争がさまざまなマルクス主義的言辞を装った恫喝や妨害を受けながらも前進をかちとってきた力こそここにあるのである。中央指導部の腐敗をあげ、それを闘うことを解党主義とののしる諸君は、自らの腐敗と奴隷根性を鏡に映し出して、もっともと恥じるべきである。

解党主義なのは、フラク間の利害調整と人事的な妥協のためのみ、中央委開催がありうるとする北原(「政治局」)ではないか。それを擁護し、私たちを解党主義とののしる諸君ではないのか。私たちは、プロレタリアートの利害と対立させるフラクの利害を主張する人々が「党的」だとするなら喜んで「解党主義」という汚名を受けよう。そのような党は、もはや階級闘争を敗北に導く以外に何ももたらさないのであり、解体させ、同盟中央指導部を革命的に再建してゆくのが同盟員の任務なのである。

五・五第九回糾弾会に、全同盟員が結集し、「同盟の単一の自己批判」を闘いとり、女性解放闘争をプロレタリアートの解放闘争の不可欠の一環として指導しうる同盟中央指導部の革命的再建の第一歩としなければならぬ。

T糾弾闘争の総括上の視点

(はじめに)で述べた我が同盟中央指導部の危機は、当然にも私たち自身の内部に同様の弱点が存在していることの表現である。「中央なしに地区、戦線はなし」という言い古された言葉が、T

糾弾闘争にあっては、どのように現出し、それは私自身のどのような弱点に根ざしているのだろうか。

四・一三糾弾会において暴露された同盟の危機は、一方における中央指導部の崩壊と、他方における糾弾主体に対する指導の危機としてある。後者は、具体的には T糾弾闘争を最前線に担ってきた「火群の会」、〇さんの欠席と、Xさん(尼崎)の中途退席として表われた。とりわけ、差別—侵略と闘う労働戦線の任務として T糾弾を闘ってきた〇〇労組女子労組員と、「障害者」解放闘争を闘う中で、T糾弾に決起したXさんは、この間の T糾弾闘争の到達地平に最も敏感であるが故に、そのつきつける「党の革命」に対する自己自身の任務を鮮明にするための欠席—中途退席であることを表明しており、彼女たちがそのようなやり方をとらざるをえなくさせた私たちの指導に対する鋭い批判である。彼女たちは、そのことによって私たち自身が指導部の腐敗を共有していることに對して、警鐘乱打しているのである。

それは、とりもなおさず、私自身の四・一二全党女性会議—四・一三糾弾会にむけた文書(以下四・一二文書とする)の弱点としてある。

四・一二文書は、一月「鉄鎖を砕け」の総括を次のように提出している。

「『鉄鎖を砕け』は、T糾弾闘争の地平を『党の革命』(資本主義批判の深化—綱領的団結の打ち固め)として全同盟に明らかにした。それは①女性差別の現実から出発しなければならぬこと、と同時に②女性差別を階級支配の中に位置付け、資本主義批

判の深みから把えなければならぬとした点において、「政治局女性差別議案—九・八自己批判」に貫かれるプログマチズムに對して圧倒的な優位性を示した。

にもかかわらず、「政治局女性差別議案—九・八自己批判」が提出された主体的根拠の切開の不徹底性は、「(九・八自己批判は)全国委結成の地平と、女性差別の存在とを分離させていることである。問題とされているのは、『女性差別と闘いえない党とは何か—女性解放が位置付けられない綱領とはなにか』ということである。T問題の解決は、全国委の総括と一体であり、諸民主主義闘争でつきあっている壁と同質の問題を孕んでいるのである。」として、自己(同盟員女性)の任務を問題の指摘におしちぢめ、その解決を、崩壊している政治局と解体している中央委に委ねることを結論付けているのである。その結果、一・二五—二・九関西政治局差別文書、二・五京都R文書(差別への屈服宣言)に見られる「指導」と称して、女性大衆に女性差別への屈服を強要し、プロレタリアートを賃金奴隷に釘付けせんとするのを許す根拠を与えてしまったのである。」

これは四・一二文書が未だ直観的にはあれ、彼女たちの私自身への批判の内容と一致する総括を開始していることを表わしている。しかしながら、同時に、それが直観にとどまる限り、同盟の転換を自己自身の転換を通してかちとってゆくことへの日和見主義を孕まざるをえないことを、四・一三糾弾会が明らかにしたのである。

即ち、私たちが、今日の同盟中央指導部の姿を鏡に映し出した

うか。

中央集権党と「基本組織—基本指導」とは似て非なるものである。まず各機関、地区指導部の総括をして、それを全国へ、中央へ、という彼らの発想こそが、中央集権主義と相容れないサークル主義であることを自覚すべきである。

私たちが兵庫県委におけるT糾弾闘争の指導上の総括と言う場合、その質をこそ問題にせねばならない。組織問題の発生の根拠を「基本組織—基本指導」で掌握できないことに求めるのは誤りであり、同盟(全国委)の限界を固定化した上で、解党主義批判をすることは当を得ていないばかりか反動的ですらある。

私たちが一方で、三年もの間、T問題を放置させた(即ち、私たちが屈服し続けた)根拠は、同盟(全国委)の決定的限界に根ざしていることは、これまでも触れた通りである。にもかかわらず、他方でM糾弾、T糾弾をバネにしうる条件を、三年の間につちかってきたことも見落としてはならない。

「女性大衆の力を借りて決起した」ことを、それ自体、否定的現実としてのみ把える、二・五京都R文書—二・九関西政治局文書の誤りは、内的には、「鉄鎖を砕け」でM糾弾、T糾弾の地平に触れないまま、それへの私たちの指導責任としてT糾弾闘争を開始した事実を是認したことに規定されている。

M糾弾、T糾弾は、何よりも現下の日本階級闘争の実践的到達点を示しているのであり、その力をバネに開始したT糾弾闘争が、今日の同盟(全国委)の根本的転換にゆきつかざるをえないのは、必然である。したがって、否定的現実だというなら、日本階級闘

自己の奴隷状態を表現していることを、真に把え返すならば、私たちが自身「お願ひ」ではなく、指導に体现していくことで、根本的な転換をかちとっていかねばならないことを提起しているのである。その限りで、私自身の転換の、同盟中央指導部—〇〇県委指導部の女性差別指導の補完物だったことの総括の不徹底性としてあり、〇〇県委総括を、中央指導部変革の質でなしとげていくことによって克服されねばならないのである。

それは、決して十月中央委三号決議—二・五京都R文書—二・九関西政治局文書で述べられている、内容抜きの「基本組織—基本指導」を骨子とする中央集権非合法党建設という浅薄なものであってはならない。「中央集権主義」を何かしら大発見のように騒ぎだてたところで、「基本組織—基本指導」と言ったとたん、彼らは自己矛盾に陥るのである。

中央集権主義は、資本主義的生産様式が不可避に「封建的な障害をとりのぞき、貨幣や度量衡の統一、営業の自由を創設し、任意移住権によって労働力を資本の無制限な自由使用にゆだねることを要求した結果成立した近代ブルジョア国家によって生みだされたものであること—即ち、今日私たちが何故、民主集中制をこととする単一党を建設せねばならないかは、プロレタリアートが、自然発生的な反抗にとどまっている限り、勝利しえないからであり、地方分散的な組織にとどまっている限り、国家権力を掌握しえないからである。

とするなら、それを要求する日本階級闘争の地平を(全国委の総括)何ら提示することのない中央集権党とは、一体なんである

争の到達地平にそぐわない、古くさいものになっているというべきなのであり、階級闘争の発展を指導しうる同盟(全国委)への根本的転換をしなければならぬという意味で、極めて積極的なのである。

それを克服する力こそ、六九年秋期安保決戦敗北以降の、入管闘争、部落解放闘争、沖繩闘争、「障害者」解放闘争などの日本労働者階級の闘争経験の中でつちかわれてきており、いわば階級的労働運動の最前線を担う〇〇闘争、「障害者」解放闘争を階級的見地から担う人々の中から、その萌芽が形成された根拠があるのである。

したがって、同盟(全国委)の否定的現実とは、革命的左翼総体の分裂と混乱を止揚しうるものではなく克服しえないのである。「サークル主義の克服」をそれ自体として呼号すれば、中央集権非合法党を建設しうるなどゆめゆめ考えてはならない。

六九年敗北以降の分裂と混乱の中から、日本労働者階級がたくましく成長している姿をこそ、T糾弾闘争の中に見るべきであり、その中にわが党建設の新たな萌芽を感じとらねばならない。一二・一八資本主義批判が、新左翼運動の限界をはじめ指摘したが、今日、それ以降の実践によって、反スタマルクス主義の最後の終焉を私たち自身がしえるのかどうかをこそ、T糾弾闘争は提起しているのである。

四・一三で崩壊を明らかにした同盟中央指導部は、五・五糾弾会で、自らその解体を宣言することによって最後の使命を果たさねばならない。そして「同盟の単一の自己批判」を真に貫徹しう

る力によって新たな同盟中央指導部を建設していかねばならない。それは「糾弾会」においてではなく、党大会の開催によって決定されるべきだと考える。

(補) なお、四・一三に前査問委員長Nの「自己批判書」が提出された。これについては、後日批判したいと思うが、基本的には「九・八自己批判」を擁護する差別文書であることを明らかにしておく。

世界革命の勝利の時代の序章

インドシナ革命の勝利万歳

(一) インドシナ革命戦争の勝利万歳

四月一七日のカンプチア解放勢力によるプノンベンの解放とロン・ノル政権の打倒、カンボジア全土解放の大勝利に続き、四月三〇日、午前十一時三〇分、ベトナムにおいても、サイゴンかいらい大統領官邸に解放旗が翻えり、ここに、ベトナム全土が解放され、三〇年間の解放戦争は、歴史的な大勝利を告げた。サイゴンは、三〇年前に自己に冠された栄光の解放名「ホー・チ・ミン」を再び、その頭上に取り返した。ベトナム革命戦争勝利、インド

シナ革命戦争勝利というこのスローガンは、この十数年間、世界の戦う人民の合い言葉であり、その共通の目標であり、自らを励ますムチであった。そして今、全世界の革命的プロレタリア人民は、ついにその喜びをインドシナ人民、ベトナム人民と共に祝す機会を得たのだ。我々は声を大にして叫ばねばならない。ベトナム革命戦争の勝利、インドシナ革命戦争の勝利万歳！プロレタリア人民の国際主義万歳！と。この歴史的な大勝利は、世界史が、増々、プロレタリア人民の革命的独裁へ前進しつつある事を証明した。むろん、我々は、ベトナム・インドシナ人民にとって、この歴史的勝利も、勝利の第一歩であり、更に困難な闘争がその行手に横たわっており、ベトナム・インドシナ人民は、勝利の明くる日から更なる闘争を開始した事を知っている。全世界人民が、

かかげなければならぬ共通の目標は、世界革命の勝利であり、世界プロレタリア独裁の樹立である。だがまちがいなくベトナム・インドシナ人民の勝利は、全世界のプロレタリア人民が必ずや、全世界の帝国主義を打倒し、この共通の勝利をその手中にするであろう事について、力強い確信を与えたのである。立ち遅れているのは誰か。武装が要求されている時に武装を解除し、戦闘宣言が必要な時に降伏を発し、前進が必要な時に後退を強要する排外主義的、日和見主義的指導部日共、社会党をその指導部の座からたたき出し、日本プロレタリア人民は、戦闘的指令部をその中核にすえねばならない。国際主義だけが、我々の前進を保証する。

我々は、今日の世界情勢を疑いもなく次の様に把えている。「全世界は革命的激動の淵にある。反動の嵐と革命の嵐が、時にゆるく、時に激しく渦巻きながらも、変動の羅針盤は、『革命の嵐』を指し続けている。」（『烽火』二九七号冒頭）と。

（一）完膚なきまでに敗北した米帝国主義

「前進せよ！完全な勝利は我々のものである。」南ベトナム解放民族戦線のこの総蜂起へのアピールにもとづき、南ベトナムの全解放勢力は総蜂起し、それは、「完全な勝利のうちに終了した。」カンボジア・プノンペン解放からわずかに二週間後のサイゴン解放を一体誰が予測しえたであろうか。反スタ主義者共は、プノン

ペン解放は、米帝とスターリンストの取り引きであり、ベトナムはズオン・バン・ミンで妥協するのだとか主張した。あるいは、フォードは「今少しの武器と財政援助さえあれば」と、アメリカ議会に要請し（四月一〇日外交演説）「七億ドル」がベトナムを救うだろうと主張した。チューは、その辞任演説（四月二一日）で、「アメリカがなすべき介入をしていたなら、我々は省都も失なわなかったろうし、首都陥落に直面する事もなかっただろう」と述べた。だがこれらの主張は、全世界の歴史的动力について、全く理解する事の出来ない遅れた観念論である。フォードも述べる如く、米帝国主義は「五人の大統領と七期にわたる議会のもとで」「数十万の軍隊」と「千五百億ドル」を投入して、インドシナ侵略・反革命戦争を遂行してきた。そして更には、自己に従属する全ゆるる帝国主義諸国とアジアのいろいろな政権を利用して、その総力を注入して今日に至った。そうして今日に至った三〇年戦争の最後のエピソードを、わずか、わずか「七億ドル」で書き換えられるはずもない事は、フォード自身、またチュー自身の最も良く知る所ではないのか。彼らが最後まで、このような欺瞞的の口を行使したのは、彼らを打ち破った真の力、彼らに全ゆるる武器、全ゆるる兵力・財力を投入しても、なおかつ絶望しか与ええなかった巨大な力について、全世界の前に陰蔽したいが為である。米帝国主義が「七億ドルと再介入」を留保した事が、勝敗の岐路であり、帝国主義の「慈悲」が、ベトナム人民に勝利を与えたという、彼らなりの「いちじくの葉」を得たいが為の芝居である。だが真実は、ただ米帝の再介入は、更に致命的な打撃を米帝に与えるに

すぎない事、サイゴンの解放が少しばかり遅れるにすぎない事であり、それは米帝の戦略的大敗北を更に赤裸々に示すにすぎないということである。

（二）全面暴露された左右の排外主義

ところで今日では、一昨年一月二七日に調印された「ベトナム停戦協定—パリ協定」が、戦略的勝利の第一歩であった事について、余りにも明白であろう。六〇年代後半から七〇年代初期において、米帝国主義は、必死の策動にも拘らず自己の世界支配体制を再編することに失敗し、「天下動乱」の時代が否応なく、現実を支配しはじめた。もとよりそれは、六〇年代の国際共産主義運動の公然たる分裂と闘争を背景とし、民族解放闘争の前進を、その活力として切り開かれた新たな世界的な一時代に他ならない。このような時代背景をもって初めて、「ベトナム停戦協定」の戦略的位置が明らかになるのである。

この「協定」を巡って、全世界のベトナム支援勢力は主に三分解した。社会帝国主義、社会民主主義、小ブル平和主義の諸潮流は、「協定」から「平和賛歌」を聞き、反スタ主義者、小ブル急進主義者の潮流は、「革命の葬送曲」を聞き、そしてベトナム人民と世界の闘うプロレタリアート人民は、「更なる突撃のアピール」をのみ聞いた。「協定」を巡るこの三分解は決して偶然の

ものではなく、今日の運動の分裂の投影であり、世界革命の勝敗を決定する大きな分裂である。

我が国においても、「協定」に対する日和見主義潮流の歪曲攻撃（武装解除を迫る）に左から呼応し、革共同潮流や、仏派、日向派の陣営から露骨な攻撃が加えられ、左右の排外主義的宣伝が横行した。そしてその中において、我々は、「協定」直後に直ちに、同盟の声明を発表し、「協定は勝利への第一歩である」事を訴え、「勝利への橋頭堡を踏み固め、日本帝の侵略反革命の新展開を挫折せしめよ」という鮮明な追撃の方針を日本プロレタリア人民の前に提示した。（『烽火』二八二号）。

更に三ヶ月後、我々はより一層確信に満ちて、左右の排外主義に打撃を加えた。我々は主張した。「果して、停戦協定の正確な翻訳は、多くの誠実な人々が主張した様に『暴力に対する人類の理性の勝利』であったか、それとも少数の傲慢者のいうように『帝国主義への身売り証文』であったか。それとも確信ある者のみが、いいえた『勝利への橋頭堡』か、三ヶ月の事実こそが正確な翻訳ではあるか」と。そして「この橋頭堡を支えているのは、疑いもなく、解放戦線とベトナム人民の武装と不屈の魂であるように、『協定』を支えているものは、高尚な倫理や平和ではなく、まさに赤裸々な二つの武器、帝国主義の侵略の黒い武器と解放の赤い武器の対峙なのである。従って勝利への第二歩もまた、間違いないく、解放勢力の武装の一層の強化の中でこの『啓』からの出撃によって踏み出されるであろう」（『烽火』二八五号）と。我

々の揺るぎなき確信と正しさは、ただ全世界の革命運動の正確な（従って弁証法的な）理解に基づくものであった。ベトナム解放勢力は、正確な世界情勢の分析と揺るぎない自己の確信に基づいて、解放戦争を遂行し、攻撃し、後退し、対峙し、最後の総蜂起を「前進せよ、完全な勝利は我々のものである」という、完全な政治的勝利と確信の下に準備し勝利した。

(四) インドシナの勝利に続き 更に世界革命の勝利へ

ベトナム革命戦争の勝利は、ロシア革命、中国革命の勝利に比肩しうる、今世紀プロレタリア人民が獲得した最も偉大な勝利の一つである。それは、史上最大の帝国主義に対し、全ゆる領域において勝利したにとどまらず、帝国主義の世界支配体制をその理念もろとも粉砕した。六〇年代、その不屈の戦闘は、全世界に急進民主主義運動の大爆発をもたらし、「国際主義と暴力革命」の理念を復権した。そして今日、ベトナム革命戦争の勝利は、今日に至る十数年間の総括であり、エピローグであるが、だがこのエピローグは、ただ次の世界革命の勝利の時代の序章—プロローグである事こそ全世界のプロレタリアと帝国主義者を真の恐怖に陥しいている、ただ一つの真実なのである。

ベトナム革命戦争の勝利万歳！
インドシナ革命戦争の勝利万歳！

ベトナム「停戦協定」と

われわれの任務

(一) ベトナム「停戦協定」は 勝利の第一歩である。

米帝国主義は、ベトナム人民の闘争におかれ、米軍の撤退を強いられ、昨年十月二〇日、大統領選挙を前にして停戦協定に合意した。だが、それをひるがえし、のみならず、とりわけ十二月十八日以降、ハノイ、ハイフォンを中心として激しい北爆を加えた。いったんは合意した「協定」に対して、チューカイらいと共に北ベトナム軍隊の南ベトナムからの撤退、「非武装地帯の復活」また、サイゴンかいらい政権を唯一の合法政府と強弁することによ

って調印することを引き延ばしてきたのである。

また同時に、この引き延ばした間、「アメリカは、数万トンの近代戦争手段と武器を大量に南ベトナムにつきこみ、同時に本来なら廃棄すべき南ベトナムにあるアメリカの軍事基地網のすべてをサイゴンかいらい軍に大いそぎで譲り渡している。さらに重大なことは、アメリカが南ベトナムに大きな軍事機構を必死になつてつくりおとしており、一万数千の擬装した軍事顧問をおくりこみ；」（二・一六の臨時革命政府の声明）協定調印後の体制を固め、また、協定での妥協を強しようとしたのである。

このように「明らかにアメリカ帝国主義は、依然として頑迷に『戦争のベトナム化』計画を継続し、南ベトナムにおいて新植民地主義を維持しようとしている」（同上）のである。

だが、このような陰謀にもかかわらず、米帝国主義は、停戦に合意し、撤退せざるを得なかったのであり、停戦後の事態が示しているように、この撤退は、ベトナム人民の最終的勝利ではなく、引き続き解放闘争の一段階にすぎないといえ、ベトナム人民の英雄的闘争によってもたらされた巨大な勝利であり、巨大な闘争の前進を意味している。

「和平協定調印は、十三年間にわたる米軍との戦いの勝利を意味する。しかし、それは勝利の第一歩にすぎない、」(レドクト特別顧問の記者会見での発言)のである。

事実、停戦後においても、南ベトナムでは部分的戦闘は継続しているし、また、戦争という形態ではなくして、別の形で、闘争は持続し、対立は激化している。

現に、合同軍事委員会での対立、更に、必ずや、民族和解一致全国評議会及び総選挙をめぐって対立は熾烈なものとなるであろう。

五四年ジュネーブ協定においても、十七度線は政治的、領土的境界ではなく、暫定的な軍事的境界線にすぎず、総戦争による解決がうたわれていた。だが、それは米帝の介入によってホゴにされた。今度の協定は、二つの政府と三つの政治勢力の存在を前提としており、しかも、それは、何らかの境界線が引かれているわけでもない。ということは、不断に緊張をはらんだ対峙関係が形成される事を意味している。

だが、このような「協定」の性格と、それ以降のベトナム情勢からして、「協定はベトナムにもインドシナにもアジアにも平和

の到来をもたらさず……」(『前進』六九号)という情勢と、その見通しを言いたるることによって、我々の任務をかえるのは、度しがたい客観主義以外のものではない。現に十三年間の血と汗と泥の中で戦い取ってきた「協定」という勝利への一大橋頭堡をしっかりと握り、ふみかため、現にあり、また対立の激化の中で必ずやあるであろう、米帝の再介入(先に引用した臨時革命政府の声明にもあるように、擬装した形での介入は続いているのだが)や、チューカイライによる評議会の空洞化、独裁体制の一層の強化に反対し、断固としてベトナム民主共和国と臨時革命政府の正当な要求を支持し、その側に立つこと、その事なしに、日米帝の侵略の強化とそれへの闘争を呼びかけたとしても、それは、まったく空しい没主体的態度と言わねばならない。

同種の態度は、一人中核派にとどまらず、社青同解放派から、第四インターから、また日向一派においても見られる態度であり、このような、どこに立場をおいて米帝国主義の侵略反革命の強化に對して戦うかを抜きにした態度は、実践的には、まったく客観主義であり、反動的であり、また、路線的根拠を反スタ論にもっている事は言うまでもない。「帝国主義の『和平』策動が一定の展開をみせたのは、いうまでもなく、中ソをはじめとする国際スターリン主義の裏切りと帝国主義への加担・協力のためである」(『前進』六一九号)としながら、にもかかわらず、これに對して(？)臨時革命政府・解放戦線の前進は続いているというのである。

中核派に典型的にみられる、民族解放闘争の運動と勢力と、そ

(一) 反スタ諸派の客観主義的「停戦批判」を粉碎し、中一朝ーインドシナ人民と結合して闘う

れを指導する党あるいは党的勢力とを区別し、後者は、常に裏切り続けるが、戦いは前進するというまったくの矛盾は、反スタ派の一貫した特徴である。だが、言うまでもなく、解放闘争の前進が、それを指導する党なしにあって事など一度もなく、常に「裏切る」党が、どうして人民の支持を受け前進することができようか。我々が、くりかえし述べてきたように、現在の民族解放闘争の前進の開始は、すでに、ロシア革命以降、レーニンとそのコミンテルンが「民族革命的」として評価した所であった。だが、スターリン主義の成立によって例えば、一九二七年国共合作と蔣介石による反革命を許す如きメンシエヴィキ的方针となり、中国共産党は、それに妥協し屈服しながらも現実の解放闘争の前進に依拠して毛沢東路線として、民族解放闘争の基本的方向を指導する路線を確立した。(その限界については『烽火』二七九号一面論文参照)

また、現にあるベトナム人民の解放闘争も、この中国革命の前進と結合し、朝鮮人民と共に、五十年前半、一定の勝利を獲得した第一次ベトナム戦争の継承であることは明白である。だからこそ、ベトナム労働党も次のように主張しているのである。

「各国の革命は世界革命の不可欠の構成部分であり、全ての国の革命はたがい促進し援助しあう効果をもつ。一国の革命の勝利は終点ではなく、世界的規模での共産主義の勝利の長い旅程のはじまりにすぎない。……資本主義的民族主義と民族利己主義に比べるとプロレタリア国際主義は光とやみのちがいである。」

(「革命的潮流の勝利」『ニヤンサン』)

だが、中核派を先頭とする部分は、まだしも、民族解放闘争そのものの革命的意義については主観的には是認する。これに對して、革マル派は、民族解放闘争そのものを承認せず、それを小ブル的な反戦闘争の範疇に入れようとする悪らつな反革命的本性を暴露している。彼らによれば、「協定」とそれをめぐる動きは帝とスタの欺瞞劇」(『解放』二五六号)であり、それも、この二五六号の論文には、ただの一度も民族解放闘争に關しても、またベトナム人民についてもふれられず、ただ、米帝とソ・中・北ベトナム等の諸關係が、まるでどこかの三文週刊誌にのるような観測記事が大森実以下の水準で、書かれているにすぎない。とりわけ犯罪的なのは、この「和平」をめぐる動きや協定が、一方的に、米帝の経済的危機解決のためのドル危機突破のための合目的経済活動として説明されていることである。「さらに新国際ラウンドをとおして通商拡大を西欧そしてとくに日本に要求し、もって七六年をメドとしたドル危機の強引な打開をめざしている米帝としては、……」(『解放』二五六号)かかる主張の反革命的本質は明らかである。

第一にベトナム人民の闘争は一切なく、それは、あたかも、米帝のドル危機收拾のためのダシ、取引材料の如くにいう(かかる

主張は、黒田のスコラの革命論、『日本の反スタ運動II』の、マルクス、レーニンに関する反動的解釈学に根拠を持ち、そこから帰結する民族解放闘争でのプロレタリア的要素欠落論や、自決権の反動的理解による)。第二に、かかる事から、南ベトナムにおける闘争の持続、また、「停戦」以降の帝国主義の侵略反革命を陰蔽する役割をはたすのである。

更に、革マルとやらんで反動的なのは、日共社帝である。彼らは、あたかも、ニクソンの訪中、訪ソに反対することによって、ベトナム労働党と共通の立場にあり、中ソの不団結へのホー・チ・ミンの遺訓に忠実であり、そのようなものとして、国際反米統一戦線を提唱してきたかのように主張している。だが、先に引用したベトナム労働党と、日共の統一戦線はまったく異なる敵と味方の線でしかれてる事を知らねばならない。日共のそれは「平和と民族独立」をめざすものとして平和共存体制の確立を目標とする以外のものではなく、ベトナム労働党は、「プロレタリア世界革命の一環として民族解放闘争」を徹底して推進する立場にあるのである。だからこそ、日共は、現実には、若干の物質支援に闘争を解消し、現にある米帝や、日帝の侵略行為に対しては、ただかか議会で声明を発するだけなのである。この間の基地闘争等は、その事を端的に表現している。

我々は、「協定」を前進への橋頭堡として評価し、その橋頭堡をふまえて前進するであろうベトナム人民の闘いと固く結合し、また臨時革命政府の要求を支持し、一切の米帝国主義、また日帝の侵略反革命に対して断固たる闘争を組織するであろう。

引いた上でなされない時、しばしば反動的なものにならざるを得ない。

中国共産党のこの間の政策は、文化大革命の成果の上に、社会帝国主義との闘争を前面におしだし、帝と社帝にならぶものとして民族解放闘争の立場に「小国」の立場をおしだしたものであった。かかる見地と政策が、誰が敵であるかを明確にした上で立てられたものである事、だが、依然として、中間地帯論と周辺革命論の延長上に立てられているという限界を有している。

だが、このような限界が、ニクソンが期待し、また、反スタ諸派が言っている如き、中共の平和共存路線の社帝的変革を意味しないことは明らかである。

我々は「停戦」後の米帝の策謀と、日帝の侵略への乗り出しに對し、中・朝・インドシナ人民と結合して戦い抜かねばならない。

(三) 安保粉砕―日帝打倒、臨時革命政府樹立の旗幟鮮明に強大な党建設に邁進する

「停戦」以降の情勢は、言うまでもなく、米帝の侵略、反革命政策が弱まるとか等々を意味しない。現に、南ベトナムがいらいへのテコ入れを徹底して行い、また、タイその他の近隣諸国への兵力の温存をはかり、侵略反革命の持続と拡大につとめている事は明らかである。とすれば、我々にとって重大なのは日本帝国主義のアジアへの侵略反革命乗り出しである。

「協定」が、ベトナム人民の偉大なる前進である事と、だが、米帝が、かかる強いられた後退の中で次の策動を準備し、この協定」を利用せんとすることは矛盾しない。

ニクソンは、六八年ジョンソンの北爆「停止」パリ会談の開始を受けて、新たな侵略反革命政策の展開を開始した。それが、いわゆるニクソン・ドクトリンであった。「ベトナム化」を一つの軸としつつ、安保・NATOの再編（とりわけ、アジアでの日帝の役割の強化）更に、それを裏打ちする軍事戦略の再編強化としてであった。

これは、ベトナム人民の英雄的闘争による米帝国主義の敗北の結果であるが、ころんでもただで済まない帝国主義の新たな陰謀であった。

だが、ベトナム化政策は、闘争の全インドシナへの拡大、その中でジャール平原を中心とする米帝及びいかいらいの大敗北によって一端挫折し、このような中で、米帝は、ニクソンの中国訪問―国連加盟等によって、いわゆる中国の社帝化をたくらみ、その条件のもとで、ベトナム「和平」をあらためて推進する策を打出した。またこの「和平」実現のために、かつてない規模での北爆を昨五月以降展開した。

この一連の過程―即ち、ニクソン訪中受け入れ―国連加盟―そしてベトナム「停戦」における中国共産党の立場に對して、日共から、反スタ諸派にいたるまで非難の大合唱がなされている。

だが、我が同盟がかさねて明らかにしてきたように、かかる批判や、非難は誰が味方であり、敵であるかという決定的な一線を

日本帝国主義は、文字通り、金融寡頭支配の確立を土台として、そして急速にアジアへの経済的進出をやりとげ、また、それを七〇年安保―五・一五沖繩「返還」によって、政治的軍事的に集約した。それは、沖繩への自衛隊派兵を軸とし、韓国―台湾との実質上の軍事同盟の結成をはかってきた。また、その他の諸国でのカライイ政権と結託した新植民地主義を實行してきた。そして、今またアジアで高まった日帝への反感を、日中国交回復さえも利用し、更に、ベトナムに対する復興援助の名によって侵略反革命を推進している。我々は、このような侵略反革命と他民族抑圧、一切の排外主義政策に非妥協的に戦いをいどまねばならない。また、かかる侵略反革命と他民族抑圧の政治は、国内においては、社会排外主義潮流―帝国主義的労働運動、日共社帝、革マル―の育成を不可欠の条件とした官僚的警察的独裁体制（「組織」破防法体制）と、そのもとの反動的・侵略的・排外主義的諸政策として展開されつつある。

自衛隊沖繩派兵、四次防、基地の再編強化、また司法・行政の徹底した反動化、更にプロレタリアに對する搾取と収奪の強化を、排外主義的政策の貫徹とともに行ない、更に、入管体制の強化や、狭山差別裁判として、プロレタリア人民、在日朝中人民への排外主義と差別的政策を展開している。だが、これらに對する闘争は、不断に昂まり、持続している。このような、とりわけ六〇年代後半から持続し拡大し、日和見主義的・排外主義的潮流との闘争を通して成長し、また七〇年安保―五・一五「返還」による日本帝国主義の確立と、またその構造的矛盾によって、一層強まり拡大

せざるをえないこれらの闘争に、排外主義との闘争、組織建設を通して結合し、学び、また指導し、この七〇年安保一五・一五返還」によって全面確立した日帝の転覆をめざして戦わねばならない。

当面、ベトナム闘争をはじめ、基地闘争・学園闘争、そして、春闘を契機とする労働運動を推進していかねばならないだろう。

（『烽火』二八二号 一九七三年二月五日 掲載）

「停戦協定」と

三ヶ月後のインドシナ

（一）ベトナム「停戦協定」以後の情勢

ベトナム「停戦協定」以後の情勢は、インドシナ解放勢力の、戦略的正しさと優位性、及び我が同盟の「協定」に対する態度の正当性を示している。

解放戦線を妥協と屈服の沼地へ引きつり込もうとする社会帝国主義、とつばをはきかけるのみの度しがたい日和見主義者、反スタ主義との党派闘争の勝利の中で、増々激化する帝国主義との根底的対決の布陣を固めてゆく事が極めて重大であり、我々は全力

を注いでこの闘争に勝利してゆかねばならない。

去る一月二七日のバリに於ける「ベトナム停戦協定」の調印以来、三ヶ月近くが経過した。

そしてこの間の情勢の転変は、色々な人々の勝手な幻想や期待をあざ笑い、払いのけながら、生命を終えた者を、歴史の博物館に送り込んだり、あるいは亡霊として戦場を巡らせたり、同時に新しい役者を舞台にのぼしたりしたが、それらは「停戦協定」の本質的内実を万人の前にくっきりと浮びあがらせるに充分であった。

はたして「停戦協定」の正確な翻訳は、多くの誠実な人々が主張した様に「暴力と階級闘争に対する人類の理性の勝利」であったか、それとも、少数の傲慢者のいうように「帝国主義への身売

り証文」であったか、それとも、確信ある者のみがいえた「勝利への橋頭堡」か。三ヶ月の事実こそが正確な翻訳ではある。平和と人類愛と理性の旗手を自認し、「停戦協定」を平和と愛の女神の勝利であると信じ込ませ、この「平和のバイブル」の前にひざまづいて、戦争を憎み平和を愛する「懺悔と祈り」を世界の労働者人民に強要せんとする平和のエビゴーン達と、マルクス・レーニン主義と共産主義運動を裏切り、敵の陣営に逃亡し、これもまた、「平和革命」という聖典の下に、世界の革命運動に敵対する社会帝国主義者共がなである。「ベトナムに平和がやってくるまで、それは世界を包む」という「平和賛歌」の二部合唱は、ベトナム「停戦協定」に続くラオス「停戦協定」(二月二六日)の成立という伴奏に一時勇気づけられながらも、解放戦線とチュウとの鈍い肉弾戦の響き、米空軍の依然変らぬ爆撃と焦土戦術の響きに毎日かき消されてゆき、今やインドシナ三国人民の進撃のトキの声と、チュウ、プーマ、ロン・ノル一派の助けを求めて叫ぶ声に完全にとって代わられてしまった。

なぜなら、前者は、ひからびた幻想から発していたただけだが、後者は、疑いもなくベトナムとインドシナの大地から発しているからである。侵略、拷問、殺戮、奴隷化及び屈服の同義語、米帝国主義とニクソンは、政治的、経済的、軍事的に追い詰められたその敗北的窮地を「停戦協定」という形で公然と表明することを余儀なくされたにも拘らず、たちまちその戦略高地を利用した解放戦線とベトナム人民の攻勢の前に耐えきれなくなり、そのあくむの日からチュウを操って協定違反のこそ泥的戦術に奔走しはじめ

た。彼らは一ヶ月の間に合同軍事委員会、国際監視委員会への妨害を手始めに、テロや侵入、略奪、爆撃等約一万二千回の攻撃と、侵蝕活動を行った。銃火は鳴り続け、血は流され続けた。だがこれこそ彼らが、救い様のない敗北の奈落へ一路転落しつつある姿に他ならなかった。

この協定違反と悪あがきの三ヶ月に対して、ベトナム・インドシナ人民の回答は、簡潔にして自信にあふれたものだった。すなわちパリ協定の調印が示したものは、「正義が不正を圧倒した事、不屈の精神が横暴で残虐な行為を打ち破ったことをも雄弁に示した」(七三年三月二二―二四日、ローマ世界集会、ベトナム民主共和国代表ホアン・ミン・ジャム団長)という「過去の総括」の確認であった。のみならず、実はそれは「今後打ち破ってゆくであろう」という、帝国主義へむけた「戦闘宣言」でもあったことを、事実をもって明らかにした。

ベトナム解放区は増々強固に打ち固められ、拡大され、日々、人民は解放戦線の戦列に参加しつつある。「政府」軍といえば、日々、自分達がやせ細り、志気が鈍ってゆくのを、ただ傍観するのみしかなく、今やサイゴンの数十キロ北方の最精鋭のレンジャ―部隊を集集させたトンレチャン基地にさえ、空路補給するしかない有様である。

またチュウは自分達の余りの窮地に動転して、はるばるサンク・レメンテにまで物乞いに出かけ、「北が協定を侵犯する時は断固たる対抗措置をとる」(共同声明)というニクソンの約束を取りつけたものの、それでも安心出来ず、ヨーロッパのローマ法王の

下へ巡礼して救いを乞うた末に、ついに、「韓」国、台湾の朴、蔣の「兄弟達」を訪れることのでわずかに心のなぐさめを見出す有様である。

ラオスにおいても、二月二一日パテト・ラオとプーマとの間で和平協定が調印されたにもかかわらず、その調印のインキも乾かぬうちにプーマは米軍に救援の要請をせざるを得なかった。

そしてカンボジアにおいては、ベトナム停戦協定以降、急激に戦闘が拡大し、カンプチア民族統一戦線の前進は、一挙にロン・ノルを窮地にたたき込んだ。カンボジア人民の攻勢の前に、プノンペンとその周囲の幾つかの都市に籠城を決め込んだロン・ノルは、ただ米軍に、カンボジアの国土と人民の頭上に砲弾の雨を降らしてくることを哀願するばかりである。だが、そのプノンペンすら、今や完全に孤立し、かつ、治安の乱れという内情の下に、崩壊寸前であり、米軍の空からの輸血でかろうじて生き延びているのみである。

以上が、協定調印以降のインドシナの情勢の進展であるが、他ならぬこの情勢の前進こそが協定の真の内実を証明してみせている。

戦争屋ニクソンの別動隊「平和賛歌」の合唱隊が夢想し、宣伝した如く、果してそれは、「いまわしい戦争から輝かしい平和」への架橋だったか？「武装解除の宣言」であったか？否である。それは、ベトナムの解放勢力の主張する如く、「勝利への第一歩」であったし、また我が同盟が繰り返し主張した様に「勝利への橋頭堡」を支えているのは疑いもなく解放戦線とベトナム人

民の武装の不屈の魂である様に、「協定」を支えているものは、高尚な倫理や平和でなく、まさに赤裸々な二つの武器、帝国主義の侵略の黒い武器と、解放の赤い武器の対峙なのである。

従って勝利への第二步も、また間違いなく、解放勢力の武装の一層の強化の中で、この「皆」からの出撃によって踏みだされるであろう。

二 反スタ主義の超歴史主義的誤り

そしてまたこの事は同時に、「停戦協定」に投げかけられた見当はずれの「平和賛歌」に対して表面上は対極の、だが本質は同根の「革命の葬送曲」をかなでた部分の誤りをも同時に一層鮮明にした。彼らは、周知の様に「スターリニストの裏切り」を絶叫し、停戦協定をもって、「帝国主義への屈服と解放戦争の挫折」と結論した。

この見地がどれだけ、帝国主義を美化し、革命戦争に敵対し、つばきをはきかける主張であるかは、我が同盟が繰り返し暴露してきた通りである。

革マル派、中核派を筆頭とするこれら「落日の反スタ派」が、単なる自己意識の中での革命派にすぎず、現実には常に最も重大な局面において、世界の革命戦争に敵対せざるを得ない根拠は第一は、「反スタ」主義の観念論の中に潜んでいるのであるが、と

りわけ、現実の国際共産主義運動と革命運動を大きく規定づけているところの、中ソ論争―中国文革を軸にした社帝との分解に対して評価出来ないところに存するのである。インドシナ革命戦争をはじめとするアジアの解放闘争は、この国際共産主義運動の歴史性と不可分の関係にあること、とりわけ常にアジアの解放闘争を抑圧してきたソ連社帝に対する公然たる闘いを組織した中国共産党の闘いのインパクトの中で、成長・発展してきたことを認めながらも彼らにあっては、アジアの解放闘争は、突如として「桃」の中から生みだされたものとして写るのである。

そして自らの誤りを肥大化して、公然と解放闘争に敵対する道を選択したのが革マル派であり、「一片の小ブルの良心」故の不断の動揺分子が中核派に他ならない。

中核派は「停戦協定」を「和平協定をテコとする侵略と侵略戦争の新たな策動のはじまり」であるという。彼らは、物事を帝国主義者と同じ視角からしかみることが出来ない。侵略と解放戦争のドラスタチックな角逐の中の「協定」の位置を、一切見抜く事の出来ない彼らの視野には「解放勢力」が存在しないのである。彼らがかつての「抑圧民族としての自己批判」なるものが、本質

においては、被抑圧人民への小ブル的憐憫と蔑視、自己の優位性の確認の裏返し以外の何ものでもなかったことを思い起すならば、これとて何の不思議もないことではある。

一九三五年コミンテルン七回大会における「反ファッシュ統一戦線政策」の第二次大戦への適用により、戦後のアジアにおいてソ連派共産党によって、米占領軍解放軍規定が、まん延してゆ

く中であって、それと闘う事によってはじめて勝利を保障していた中国革命の波及の中でインドシナのベトミン、ビルマの「赤旗」共産主義者、インドネシアのダン・マラカのグループ、フィリピンの中部ルソンのフク団等の独自の反植民地闘争の展開こそが、四七年コミンフォルム設立による路線転換―反米路線をアジアにおいては、単に「冷戦」にとどめずに根底的な武装対決として押し出す事を可能にした。またソ共二〇回大会の平和共存路線に対しても、中ソ論争―文革展開という公然たる対決軸の存在と波及が、五四年ジュネーブ協定の敗北を乗り越えて、再度のインドシナの解放闘争、更には、マラヤ共産党―民族解放軍、ビルマ共産党、フィリピン共産党―新人民軍等の党―軍建設と武装闘争の展開をはじめて可能にしたのである。以上の事をはっきりと踏えておかねばならない。

三 矛盾の煮つまりと革命派の任務

ところで、この間の国際的諸条件、事情の変化―転換は、あきらかに、アジアにおいても、闘争の構造的転換を要請しているといえる。とりわけ、停戦協定以後三ヶ月の推移は、深くその事を暗示している。すなわち十一日から東京で開催された「エカフェ」第二〇回総会の中で、この間の通貨危機が、アジア諸国に極めて深刻な打撃を与えたこと、またアジア諸国の「全般的貧困」は増

大し、人口、食糧危機は増々深刻化しつつあることが暴露された。また十日、ニクソンによる新通商法案の提出のもたらす帝国主義間矛盾は、より一層、増幅された形で被抑圧諸国に転嫁されるであろう、「エカフェ」等を通じた日帝の新植民地主義的乗り出しは、新たな敵の姿を、アジア人民の中に鮮明に刻印してゆくであろう。マレーシアのASPPAC（アジア太平洋閣僚会議）脱退、及び空洞化、ASEAN（東南アジア諸国連合）パタヤ会議における集団安保構想の一定の挫折、等がアジアの構造的転換の過程がもたらす混頓さや模索を反映しているとするならば、ニクソンの新通商法案、日本の「エカフェ」への積極的発言、日米安保運用協定、防衛学会の発足、朴、チュ、スハルト、マルコス政権の独裁強化、ロン・ノル、プーマ、チュ、政権の危機、及び解放勢力の前進、等は、その構造転換の一端を先取りに指し示しているといえる。いうまでもなくアジアの未来は、より一層の侵略反革命戦争の激化の時代である。そしてこの革命と侵略反革命の激突の一時代を、被抑圧人民の勝利として終らせる為には、その断固たる前衛分子たる共産主義勢力が、その戦闘性にも拘らず宿しているところの思想的あいまい性を、マルクス・レーニン主義の革命的復権の中で解体し、社会帝国主義潮流に対し、現在の直観的対決から非妥協の意識的な対峙線を組織することが、不可欠の課題である。

「停戦協定」を勝利への第一歩として踏み固め、更なる前進の橋頭堡とせよ、米、日帝の巻き返し策動、侵略反革命と闘い抜け、ASEANの再編を許すな、ソ連社帝のアジア集団安保構想と

闘い抜け、インドシナ革命戦争の勝利万歳！

（一九七三年四月二〇日）

『マルクス主義』『プロレタリアの旗』取扱い書店

《東京》

ウニタ書舗 神田神保町1-52
 文献堂 新宿区戸塚1-480
 模索舎 新宿2-81
 高軒書店 池袋2-1113
 コマバ書店 駒場2-4-5
 雄文堂 目黒駅前
 書房かんたんむ 高円寺南4-4
 吉祥寺ウニタ 吉祥寺本町2-20
 アヴェン書房 国分寺市南町2-18-3国分寺マンション

《神奈川》

ルビコン書房 横浜市神奈川区鶴屋町1-8
 川崎ルビコン書房 川崎区東田町4-19

関東学院大生協

《埼玉》

荒井書店 浦和市仲町1-2-9

《群馬》

天華堂書店 高崎市寄合町31

《北海道》

ルビコン書房 札幌市東区北16東10

《秋田》

無明社 秋田市手形住吉町

《宮城》

八重洲書房 仙台駅前ビル

《愛知》

名古屋ウニタ 新今池ビル

《京都》

三月書房 寺町二条上ル

梁山泊 寺町上立売

セイレイ社 烏丸今出川下ル

《大阪》

會根崎書店 梅田
 大阪ウニタ 灘波球場前
 三栄書房 大阪経済大前
 西日本書店 南森町
 大阪大生協
 関大生協
 大阪市大生協

《兵庫》

イカロス書房 元町商店街
 春風堂本店 中央公民館前
 春風堂出屋敷店 出屋敷駅前

《広島》

広大生協

《福岡》

九大教養生協

《長崎》

長崎大生協

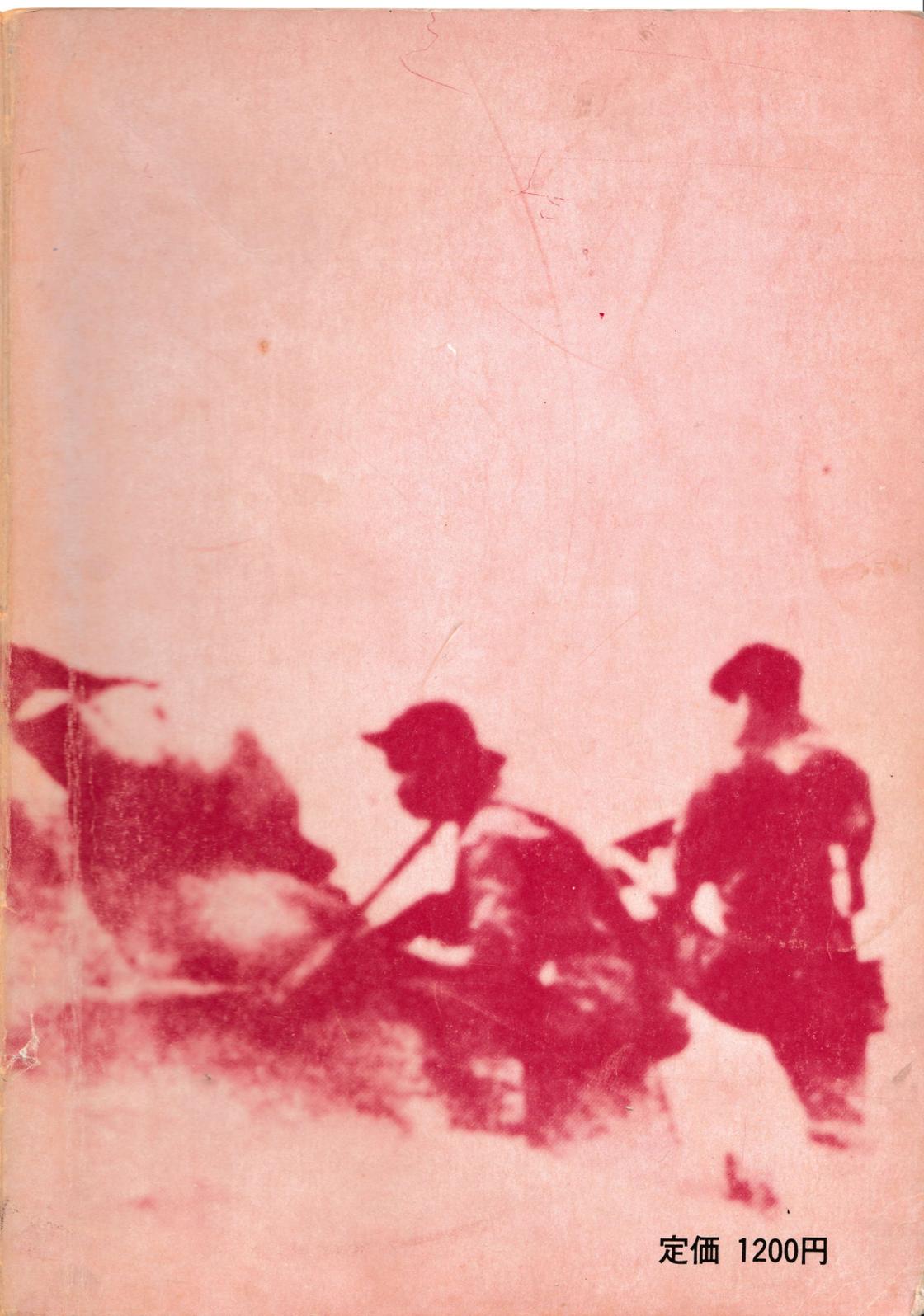
《沖縄》

高良書店 牧志市街バス停前
 沖縄舎 開南十字路下ル仲村ビル三階
 みつや書店 開南新栄通
 球陽堂
 稲嶺書店 コザ十字路
 宮城書店 普天間市場ウラ
 登竜館
 千原書店

マルクス主義 第二号
 (通巻17号)

発行日 九七五年九月二〇日
 編集 マルクス主義編集委
 発行 戦旗社

連絡先 東京中央郵便局
 私書箱一三一一号
 定価 一三〇〇円



定価 1200円